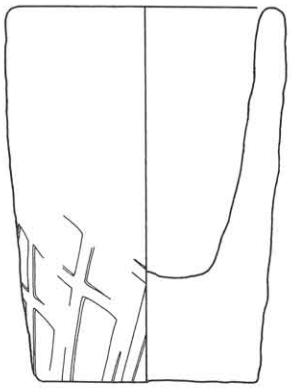
東北大学埋蔵文化財調査年報7



東北大学埋蔵文化財調査委員会
1994

東北大学埋蔵文化財調査年報7

東北大学埋蔵文化財調査委員会
1994

1．二の丸跡第５地点　元禄年間の整地層・遺構出土遺物

2．二の丸跡第５地点　３号土坑出土遺物

3．二の丸跡第５地点　１区3A層出土遺物

4．二の丸跡第5地点　２号土坑出土遺物

序

遠見塚の道路脇に石棺が放置され、子供が蓋の石材でシーソー遊びをしていたのが極く最近のこととして思い出される。当時、損逸した文化財は大変な数になるだろうと考える。測定装置の進歩が大変画期的なもので、バイオなどと共に考古学も最も目覚しく進歩しつつある学問分野である。

その結果か否かは別として、本学名誉教授であられる芹沢長介先生の長年に亘る御努力と、従来の学術に拘らない観察が、効を奏して、東北大学近辺に最も大きいと云って差し支えのない大変革を喚び起こしつつある。高森遺跡が50万年前とか、是川遺跡がトップ級の縄文文化を示すとか、東北人の心を振い立たせるような学問的発見が相次いでいるのは本当に喜しいことである。

本学の位置する所にも多くの発見があり、遠く数十万年昔から、数百年前、百年足らずのところまで、歴史は散逸してしまっていて、発掘がすべて発見につながるのではないかとさえ思わせる。

ほんの数十年前のことすら散逸して分からなくなっていることを考えると、何か矛盾をさえ感ずる昨今であるが、出来れば、我々が日々経過している社会自体を、歴史として記述し一部を保存することを併用しながら考古学を発展させることが、歴史をより効果的に記述することになるのではないだろうか。

云い換えると、考古学の方から逆に歴史の意味を教えられていることになるし、顧ることによってこれからを予測する、見通すということになるのが歴史学の根底だと考えている。

兎に角、近年の東北大学の考古学研究室を中心とした埋蔵文化財の発掘が東北人の心を揺るがせ、勇気を振い立たせたことは、東北地方の人達にも極めて大きな効果を与えたものと大いに自慢し、喜びとしているところである。

東北大学埋蔵文化財調査委員会委員長
東北大学長 西澤潤一

例　　言

1．本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査委員会が1989年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、発掘調査期間は以下の通りである。

仙台城二の丸跡第５次調査地点（ＮＭ５）付帯施設部分の調査　1989年３月９日～４月28日

仙台城二の丸北方武家屋敷跡第５次調査地点（ＢＫ５）　1989年６月12日～６月15日

川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）　1989年５月８日～５月25日

仙台城二の丸跡第５次調査地点については、1985年度に実施した試掘調査の内、付帯施設部分に重なる区域の調査成果も、合わせて報告する。また、仙台城二の丸跡第５次調査地点全体の、調査成果の検討を掲載した。

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査委員会の委嘱を受け、埋蔵文化財調査室が行った。

4．本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、藤沢敦・関根達人・菊池佳子が担当した。

5．本文は、藤沢敦・関根達人・菊池佳子が分担執筆した他、第Ⅱ章５．自然科学的分析については、以下の方々に分析を依頼し、原稿をいただいた。

(1)　花粉分析：守田益宗（東北生活文化大学）

(2)　プラント・オパール分析：古環境研究所

(3)　動物遺存体：富岡直人・氷見淳哉・赤木進二（東北大学文学部考古学研究室）

(4)　植物遺存体：内藤俊彦（東北大学理学部附属植物園）

(5)　昆虫：保谷忠良（仙台市立図南萩陵高等学校）

これ以外の本文執筆の分担は、以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章１・２、第Ⅱ章４(2)、第Ⅲ章１・３・５、第Ⅳ章、第Ⅴ章：藤沢敦

第Ⅱ章３、第Ⅱ章４(3)、第Ⅲ章４：菊池佳子

第Ⅱ章４(1)・(4)～(6)、第Ⅲ章２、第Ⅵ章：関根達人

6．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

阿子島香（東北大学文学部）飯淵康一（東北大学工学部）佐藤洋（仙台市教育委員会）

中川学（東北大学記念資料室）檜山泰貴（東北陶磁文化館）

宮城県教育委員会・仙台市教育委員会・宮城県立図書館・東北大学考古学研究室

7．出土遺物は、東北大学埋蔵文化財調査委員会が保管・管理している。

凡　　例

1．遺物の実測図および写真の縮尺は、各々に記した。

2．方位は、川渡農場町西遺跡については磁北であるが、その他は真北に統一してある。

3．川内地区の仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷跡にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。

4．引用・参考文献は、各項目の末尾に掲載した。また、本文中で、東北大学埋蔵文化財調査年報を引用する場合は、年報１という形で略記した。

5．挿図中のスクリーン・トーンの表現は、特に記した以外は、下記のとおりである。

遺構平面図　柱痕跡：　杭：

遺構断面図　柱痕跡：　礫：

遺物実測図　青磁釉：　付着物：

6．遺物観察表の法量の単位は、特に記載がないものは、cmである。

1989年度調査遺跡（本報告収録）の概要

仙台城二の丸跡第５次調査地点（ＮＭ５）付帯施設部分の調査

江戸時代：礎石建物跡・溝・堀・池・ピット

：陶磁器・瓦・木製品・金属製品

仙台城二の丸北方武家屋敷跡第５次調査地点（ＢＫ５）

江戸時代：溝

川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）

弥生時代：溝・ピット

：弥生土器

整理作業参加者

青山博樹　岩井利佳　大井義夫　大谷基　小川徳子　小関満知子　熊谷宏靖　黒須靖之
斎藤健　佐藤剛　澤田純明　高橋朋子　千田祐美恵　独古史恵　中野恵　成田和歌子
橋本幸枝　樋口優子

発掘調査参加者

阿部喜美　阿部志う　阿部友衛　市村賢則　伊藤千穂　歌川喜恵子　梅沢みえ　遠藤りつ子
大竹ひとみ　太田君子　太田すゑ子　太田はるよ　菅野とみ子　菅野春枝　菊池スミ子
菊池とよゑ　佐伯晴子　佐々木寅男　庄子一夫　庄司正　菅原よしの　高橋いく子
高橋和子　高橋かよ子　高橋健寿　高橋典子　催熙柱　中鉢司　中鉢恒子　新沼よしえ
長谷川チエ子　菱沼孝二　松川弘子　山岸清江　遊佐典子　横山東市

東北大学埋蔵文化財調査委員会規程

施行　昭和58年11月15日
改正　昭和63年１月19日

（設置）

第一条　東北大学に、東北大学の施設の整備にともなう埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議するため、東北大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組織）

第二条　委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備委員会地区協議会委員長

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干人

三　発掘調査地に関連のある部局の長で、その都度委員長が指名するもの

四　事務局長

（委員長）

第三条　委員長は、学長をもって充てる。

（調査室）

第四条　委員会に、委員会が定める基本方針に基づき、発掘調査に関する実施計画、実施の細目及び調査報告書に係る事項を処理させるため、調査室を置く。

2　調査室に、室長及び調査員を置く。

3　室長は、調査室の業務を掌理し、調査員は、調査室の業務に従事する。

（委嘱等）

第五条　第二条第二号に掲げる委員及び調査員は、学長が委嘱する。

2　室長は、委員のうちから委員長が指名する。

（調査員の出席）

第六条　委員長は、調査員を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（幹事）

第七条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（庶務）

第八条　委員会の庶務は、事務局施設部において行う。

（雑則）

第九条　この規定に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附則

この規定は、昭和六三年一月十九日から施行する。

埋蔵文化財調査室運営方針

東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という）の運営は、東北大学埋蔵文化財調査委員会規程によるもののほか、次の運営方針に基づき行うものとする。

1　調査室の運営及び発掘調査の実施方針等に関して審議するため、運営会議を置く。

2　運営会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

　(1)　調査室長及び調査員

　(2)　庶務課長、主計課長及び企画課長

　(3)　発掘調査地を所管する部局の事務長

　(4)　専門委員若干名

3　調査室は、東北大学構内遺跡の調査及び保護にあたる。

4　調査室は、発掘調査による出土文化財の整理と調査報告書の作成にあたり、公開、活用をはかる。

5　調査室は、出土文化財・資料（図面、写真等）の保存、管理にあたる。

6　調査室は、文化庁長官、教育委員会等への発掘調査に関わる届け出業務(発掘届けを除く)を担当する。

東北大学埋蔵文化財調査委員会（1989年度）

委員長	学　　長		大谷茂盛
委員	川内地区協議会委員長	（教育学部長）	細谷　純
	青葉山地区協議会委員長	（薬学部長）	南原利夫
	星陵地区協議会委員長	（医学部長）	吉永　馨
	片平地区協議会委員長	（科研所長）	藤村忠雄
	文学部　教授	（調査室室長）	渡辺信夫
	文学部　教授		羽下徳彦
	文学部　教授		須藤　隆
	文学部　助教授		今泉隆雄
	理学部　教授		中川久夫
	工学部　教授		坂田　泉
	文学部長		菊田茂男
	法学部長		太田知行
	理学部長		黒田　正
	工学部長		尾坂芳夫
	事務局長		垂木祐三
調査員	文学部　助手		佐久間光平
	文学部　助手		山田しょう
幹事	施設部長		原山明宗
	庶務部長		堀　道博
	経理部長		三橋正夫

東北大学埋蔵文化財調査委員会（1994年１月現在）

委員長	学　　長		西澤潤一
委員	川内地区協議会委員長	（法学部長）	小山貞夫
	青葉山地区協議会委員長	（工学部長）	阿部博之
	星陵地区協議会委員長	（医学部長）	平則夫
	片平地区協議会委員長	（金研所長）	増本健
	文学部　教授		渡辺信夫
	文学部　教授		羽下徳彦
	文学部　教授	（調査室室長）	須藤隆
	文学部　助教授		今泉隆雄
	文学部　助教授		阿子島香
	工学部　助教授		飯淵康一
	事務局長		廣田史郎
調査員	文学部　助手		藤沢敦
	文学部　助手		関根達人
	文学部　助手		菊池佳子
幹事	施設部長		山本努
	庶務部長		賀須井昭平
	経理部長		山田清

埋蔵文化財発掘調査及び委員会審議の手順

1　計画立案　→　整備に伴う調査の立案（対象遺跡地・面積・調査期間・人員・資材・経費等の検討）

2　審議・決定　委員会での審議・決定

3　調査　具体的な実施計画の作成・発掘届業務 → 文化庁

予備調査

調　査
- (1)　予備作業
- (2)　粗掘り（表土の排土など）
- (3)　精査（遺構・遺物の検出）
- (4)　記録・測量・写真撮影
- (5)　埋め戻し

4　委員会における検討・評価　委員会検討資料の作成・発掘に関わる届出業務 → 文化庁

検出遺構の検討・評価　記録・出土遺物の確認、あるいは検討

保存処置 → 整備工事の実施

5　整理作業

遺物の整理作業
- (1)　整理手順の決定
- (2)　洗浄・乾燥などの準備作業
- (3)　分類・観察・分析・計測など資料化
- (4)　図化（実測図面の作成）・写真撮影
- (5)　遺物保存処理
- (6)　収納・登録作業

記録の整理

6　報告書の作成・配布

写真・図面のレイアウト
原稿作成など

印刷　（業者への発注）

文化庁など関係機関へ配布

7　遺物・記録（写真類、図面、調査日誌など）の保管及び公開（企画展示・資料貸出）

8　委員会への調査終了報告

目　　次

巻頭カラー図版

序

例言・凡例

東北大学埋蔵文化財調査委員会規程

東北大学埋蔵文化財調査室運営方針

東北大学埋蔵文化財調査委員会組織

埋蔵文化財発掘調査及び委員会審議の手順

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章　1989年度調査の概要……1

1．　はじめに……1

2．　発掘調査の概要……1

(1)　川内地区の調査……1

(2)　青葉山地区の調査……9

(3)　富沢地区の調査……9

(4)　川渡地区の調査……13

3．　そのほかの調査室の活動……13

第Ⅱ章　二の丸跡第５次調査地点（ＮＭ５）付帯施設区域の調査……14

1．　調査経緯……14

(1)　川内地区の立地と歴史および1988年度までの調査……14

(2)　調査地点の位置……15

(3)　調査方法と経過……16

2．　層序と時期区分……20

3．　検出遺構……20

(1)　10区……20

(2)　12区……27

(3)　1・2・11区……29
(4)　5区……34
4.　出土遺物……36
(1)　陶磁器……36
(2)　土器・土製品……36
(3)　瓦……43
(4)　木製品……49
(5)　金属製品……49
(6)　その他の遺物……49
5.　自然科学的分析……61
(1)　花粉分析……61
(2)　プラント・オパール分析……64
(3)　動物遺存体……66
(4)　植物遺存体……71
(5)　昆虫……76
第Ⅲ章　仙台城二の丸跡第5地点調査成果の検討……77
1.　遺構の変遷……77
2.　陶磁器……112
3.　土器・土製品……131
4.　瓦……138
5.　まとめ……145
第Ⅳ章　二の丸北方武家屋敷跡第5地点（ＢＫ５）の調査……147
1.　調査経緯……147
2.　層序……147
3.　検出遺構……147
4.　まとめ……148
第Ⅴ章　川渡農場町西遺跡第1地点（ＫＷ１）の調査……150
1.　調査経緯……150
2.　層序……151
3.　検出遺構……151
4.　出土遺物……156
5.　まとめ……157

第VI章　研究編
塩引・御子篭考―仙台城二の丸跡出土木簡の検討―　関根達人 ……158
英文要旨
写真図版

図　目　次

図１　東北大学と周辺の遺跡…… 2
図２　仙台城と二の丸の位置…… 3
図３　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡
調査地点…… 5
図４　青葉山地区調査地点…… 7
図５　理学部数理科学記念館地点
平面図・断面図……10
図６　工学部生物化学工学科地点
平面図・断面図……11
図７　三神峯地区調査地点……12
図８　二の丸跡第５次調査地点
調査区の位置……17
図９　二の丸跡第５地点
基本層序模式図……19
図10　二の丸跡第５地点10区
平面図(1)・断面図……21
図11　二の丸跡第５地点10区
平面図(2)……23
図12　二の丸跡第５地点10区
33・34号溝断面図……26
図13　二の丸跡第５地点12区
平面図・断面図……28
図14　二の丸跡第５地点１・２・11区
平面図(1)……31
図15　二の丸跡第５地点１・２・11区
平面図(2)……32
図16　二の丸跡第５地点１区断面図……33
図17　二の丸跡第５地点５区
平面図・断面図……35
図18　二の丸跡第５地点出土磁器(1)……37
図19　二の丸跡第５地点出土磁器(2)……38
図20　二の丸跡第５地点出土陶器(1)……39
図21　二の丸跡第５地点出土陶器(2)……40
図22　二の丸跡第５地点出土陶器(3)……41
図23　二の丸跡第５地点出土
土器・土製品……42
図24　二の丸跡第５地点出土瓦(1)……45
図25　二の丸跡第５地点出土瓦(2)……46
図26　二の丸跡第５地点出土瓦(3)……47
図27　二の丸跡第５地点出土瓦(4)……48
図28　二の丸跡第５地点出土
古銭・煙管……49
図29　花粉分析結果……62
図30　切痕とネズミの噛み痕の見られる
ニワトリ大腿骨……67
図31　Ⅰａ期の遺構出土遺物……77
図32　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（Ⅰａ期）……79
図33　正保二・三年仙台城下絵図……80
図34　二の丸跡第４地点下層検出遺構……81

図35　二の丸築造以前の遺構配置と
西屋敷の復元……83
図36　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（Ｉｂ期）……86
図37　天麟院様元御屋敷図……87
図38　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（IIａ期）……90
図39　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（IIｂ期）……91
図40　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（IIIａ期）……93
図41　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（IIIｂ期）……94
図42　享和二年御家作御絵図写……96
図43　調査区周辺の絵図（享和二年図）…97
図44　中奥と屏風蔵付近の絵図
（享和二年図）……98
図45　御二丸御屏風蔵　御貸長屋絵図……99
図46　詰之門周辺の絵図 ……100
図47　門跡東側の遺構 ……101
図48　調査区周辺の絵図（文化元年図）…102
図49　第５地点出土墨書陶器 ……103
図50　第２・第３地点遺構配置図 ……104
図51　第２・第３地点と絵図との対比 …105
図52　二の丸跡第５地点
全体遺構配置図（IV期）　……108
図53　二の丸跡第５地点
出土陶磁器(1) ……113
図54　二の丸跡第５地点
出土陶磁器(2) ……114
図55　二の丸跡第５地点
出土陶磁器(3) ……115
図56　二の丸跡第５地点
出土陶磁器(4) ……116
図57　二の丸跡第５地点
出土磁器器種組成(1) ……118
図58　二の丸跡第５地点
出土陶器器種組成(1) ……118
図59　二の丸跡第５地点出土
陶磁器（碗類）の口径・器高分布 118
図60　二の丸跡第５地点
出土磁器器種組成(2) ……118
図61　二の丸跡第５地点
出土陶器器種組成(2) ……118
図62　二の丸跡第５地点
出土陶器産地別組成 ……118
図63　福島県浪江町小丸地区
渡辺氏宅窯跡採集資料 ……121
図64　浪江町小丸地区諸窯と周辺遺跡 …121
図65　消費地遺跡一括資料に基づく
大堀相馬系陶器の編年 ……125
図66　二の丸跡第５地点一括資料に伴う
土師質・瓦質土器 ……132
図67　土師質土器皿の法量分布 ……133
図68　二の丸跡第４地点出土焼塩壷 ……134
図69　仙台藩領内出土の焼塩壷 ……135
図70　二の丸跡第５地点出土土製品 ……137
図71　瓦の計測部位 ……139
図72　二の丸跡第５地点出土軒丸瓦類・
軒桟瓦小巴の瓦当文様 ……139
図73　二の丸跡第５地点出土軒平瓦類・
軒桟瓦垂れの瓦当文様 ……142
図74　武家屋敷跡第５地点
調査区の位置 ……148

図75　武家屋敷跡第５地点
平面図・断面図 ……149
図76　町西遺跡の位置と周辺の遺跡 ……150
図77　町西遺跡第１地点調査区の位置 …152
図78　町西遺跡第１地点調査区
全体図・基本層序断面図 ……153
図79　町西遺跡第１地点
１号溝・ピット１実測図 ……154
図80　町西遺跡第１地点
ピット２～10実測図 ……155
図81　町西遺跡第１地点出土遺物 ……156
図82　仙台城二の丸跡第５地点出土の
鮭に関する木簡 ……159
図83　元禄四年『伊達治家記録』に
みられる鮭製品の贈収頻度 ……167
図84　元禄四年『伊達治家記録』にみら
れる贈収水産物の種類別割合 ……167
図85　桃生郡和淵の鮭子篭仕方
御役人衆居所 ……169

表　目　次

表１　1989年度調査概要表……１
表２　二の丸跡第５地点出土磁器集計表…50
表３　二の丸跡第５地点出土陶器集計表…51
表４　二の丸跡第５地点出土
土器・土製品集計表……52
表５　二の丸跡第５地点出土瓦集計表……53
表６　二の丸跡第５地点出土
木製品・漆塗製品集計表……54
表７　二の丸跡第５地点出土
その他の遺物集計表……55
表８　二の丸跡第５地点出土磁器観察表…56
表９　二の丸跡第５地点出土
土師質土器皿観察表……56
表10　二の丸跡第５地点出土
土製品観察表……56
表11　二の丸跡第５地点出土陶器観察表…57
表12　二の丸跡第５地点出土その他の
土師質土器・瓦質土器観察表……57
表13　二の丸跡第５地点出土
軒丸瓦類観察表……58
表14　二の丸跡第５地点出土
軒平瓦類観察表……58
表15　二の丸跡第５地点出土
軒桟瓦観察表……58
表16　二の丸跡第５地点出土桟瓦観察表…58
表17　二の丸跡第５地点出土
板塀瓦観察表……59
表18　二の丸跡第５地点出土
熨斗瓦観察表……59
表19　二の丸跡第５地点出土
輪違い観察表……59
表20　二の丸跡第５地点出土
その他の瓦観察表……59
表21　二の丸跡第５地点出土古銭観察表…59
表22　二の丸跡第５地点出土
煙管（吸口）観察表……60
表23　二の丸跡第５地点出土
煙管（雁首）観察表……60
表24　二の丸跡第５地点検出
花粉・胞子一覧表……63

表25　プラント・オパール分析結果……65
表26　二の丸跡第５地点出土
動物遺存体種名表……66
表27　二の丸跡第５地点貝類出土表……68
表28　二の丸跡第５地点魚類出土表……69
表29　二の丸跡第５地点
鳥類・哺乳類出土表……70
表30　二の丸跡第５地点出土種子一覧表…72
表31　二の丸跡第５地点出土昆虫一覧表…76
表32　仙台城二の丸跡第５地点出土磁器
器種別出土点数（江戸時代中期）…117
表33　仙台城二の丸跡第５地点出土陶器
器種別出土点数（江戸時代中期）…117
表34　仙台城二の丸跡第５地点
出土磁器器種別出土点数
（幕末から明治初頭）……117
表35　仙台城二の丸跡第５地点
出土陶器器種別出土点数
（幕末から明治初頭）……117
表36　仙台城二の丸跡第５地点
出土木簡……159
表37　『伊達治家記録』にみられる
鮭に関する記述（元禄４年）……166

図　版　目　次

図版１　二の丸跡第５地点10区遺構……179
図版２　二の丸跡第５地点10区・12区・
11区遺構……180
図版３　二の丸跡第５地点１区・２区・
５区遺構……181
図版４　二の丸跡第５地点
出土磁器(1)……182
図版５　二の丸跡第５地点
出土磁器(2)・陶器(1)……183
図版６　二の丸跡第５地点
出土陶器(2)……184
図版７　二の丸跡第５地点
出土陶器(3)・土器(1)……185
図版８　二の丸跡第５地点
出土土器(2)・金属製品……186
図版９　二の丸跡第５地点出土瓦(1)……187
図版10　二の丸跡第５地点出土瓦(2)……188
図版11　二の丸跡第５地点出土瓦(3)……189
図版12　二の丸跡第５地点出土瓦(4)……190
図版13　二の丸跡第５地点
Ⅴ層検出プラント・オパール…191
図版14　二の丸跡第５地点
出土動物遺存体(1)……192
図版15　二の丸跡第５地点
出土動物遺存体(2)……193
図版16　武家屋敷跡第５地点遺構……194
図版17　町西遺跡第１地点全景・遺構…195
図版18　町西遺跡第１地点遺構・遺物…196

第Ⅰ章　1989年度調査の概要

1.　はじめに

東北大学は、明治40年（1907年）の創設以来、順次拡充・発展を遂げ、10学部の他、多くの研究所・研究施設を有する。そのため、川内・青葉山・片平・星陵・雨宮の各キャンパスに加えて、他に多くの研究施設があり、その敷地は10県にわたる広大なものとなっている。これらの各地区の構内には、多くの埋蔵文化財があり、特に川内地区は、近世の仙台城二の丸跡と武家屋敷にあたり、青葉山地区には旧石器時代から古代の遺跡が存在する（図１）。

これらの大学構内の埋蔵文化財の調査・保護を組織的に行うために、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置され、その実務機関として埋蔵文化財調査室が置かれた。以来、大学構内の埋蔵文化財調査を実施するとともに、調査成果を『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～６において報告してきた。

1989年度においても、仙台城二の丸跡を中心に調査が行われ、新たな資料を提供することになった。本報告書は、これらの調査成果についてとりまとめたものである。

2.　発掘調査の概要

1989年度は、本調査３件、試掘調査４件、立会調査３件の、合計10件の調査を実施した（表１）。

(1)　川内地区の調査

川内地区においては、本調査２件、試掘調査１件と立会調査１件を実施した（図２・３）。

附属図書館増築に伴う本調査（仙台城二の丸跡第５次調査地点、ＮＭ５）は、1985年度の１次調査、1987年度の２次調査、1988年度の３次調査に続く、４次調査にあたる。これは、附属

表１　1989年度調査概要表

Tab. 1　Excavations on the campus in the fiscal year 1989

種　類	調　査　地　点	原　　因	調査期間	面積	時期
本 調 査	仙台城二の丸跡第５地点（ＮＭ５）第４次調査	附属図書館本館増築（排水管設置）	3／9～4／28	110㎡	近世
	仙台城北方武家屋敷地区第５地点（ＢＫ５）	教養部学生実験棟昇降機取設	6／12～6／15	40㎡	近世
	町西遺跡第１地点（ＫＷ１）	農学部附属川渡農場宿泊施設新営	5／8～5／25	300㎡	弥生
試掘調査	仙台城二の丸跡第９地点（ＮＭ９）	文・法学部研究棟新営	6／29～7／26	260㎡	近世
	理学部数理科学記念館地点	理学部数理科学記念館新営	8／8～8／31	51㎡	—
	工学部生物化学工学科地点	工学部生物化学工学科新営	9／20～10／4	41㎡	—
	芦の口遺跡第２地点（ＴＭ２）	電子ライナック施設新設計画	10/23～11/22	300㎡	縄文
立会調査	仙台城二の丸跡中善通り地点	道路擁壁取設	9／30	15㎡	—
	工学部情報工学科テニスコート地点	テニスコート擁壁取設	4／3	50㎡	—
	理学部超高圧発生実験室地点	理学部超高圧発生実験室新営	2／17	—	—

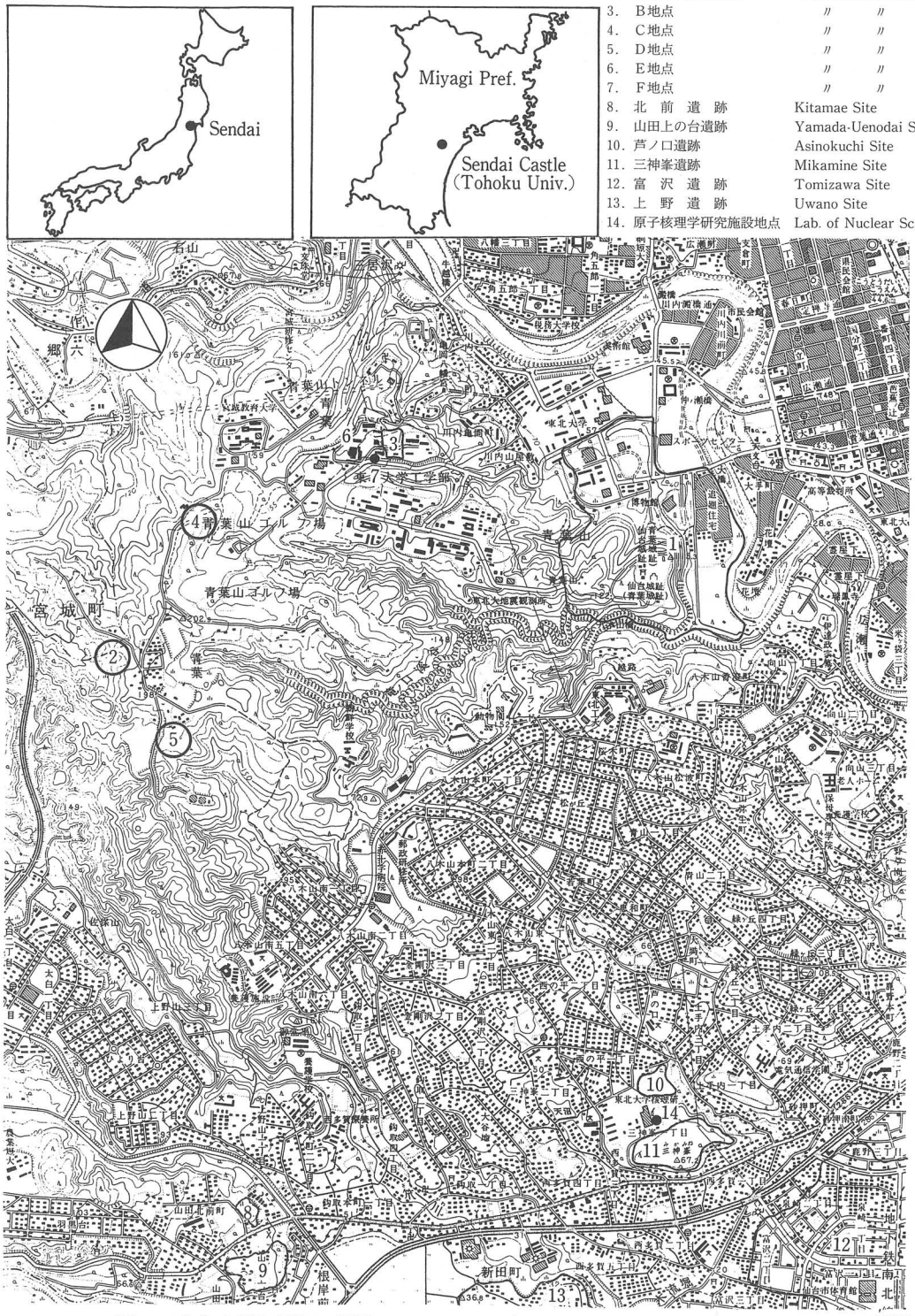


図1　東北大学と周辺の遺跡

Fig. 1　Archaeological sites and Tohoku University

図書館の増築部分に伴う、付帯施設（排水管）部分の調査である。1988年度までに実施した、建物本体部分の調査に引き続いて実施したものである。試掘調査として実施した、1985年度の１次調査、および1987年度の２次調査の内、この排水管部分にあたる区域の調査成果も、本年報であわせて報告する。また、１次から４次にわたる、第５地点の調査成果について、まとめて検討し、本年報において報告する。

川内地区のもう１件の本調査は、教養部の学生実験棟に昇降機を設置するのに伴って実施したものである（武家屋敷跡第５地点、ＢＫ５）。この場所は、二の丸の北側を区画する堀の外側

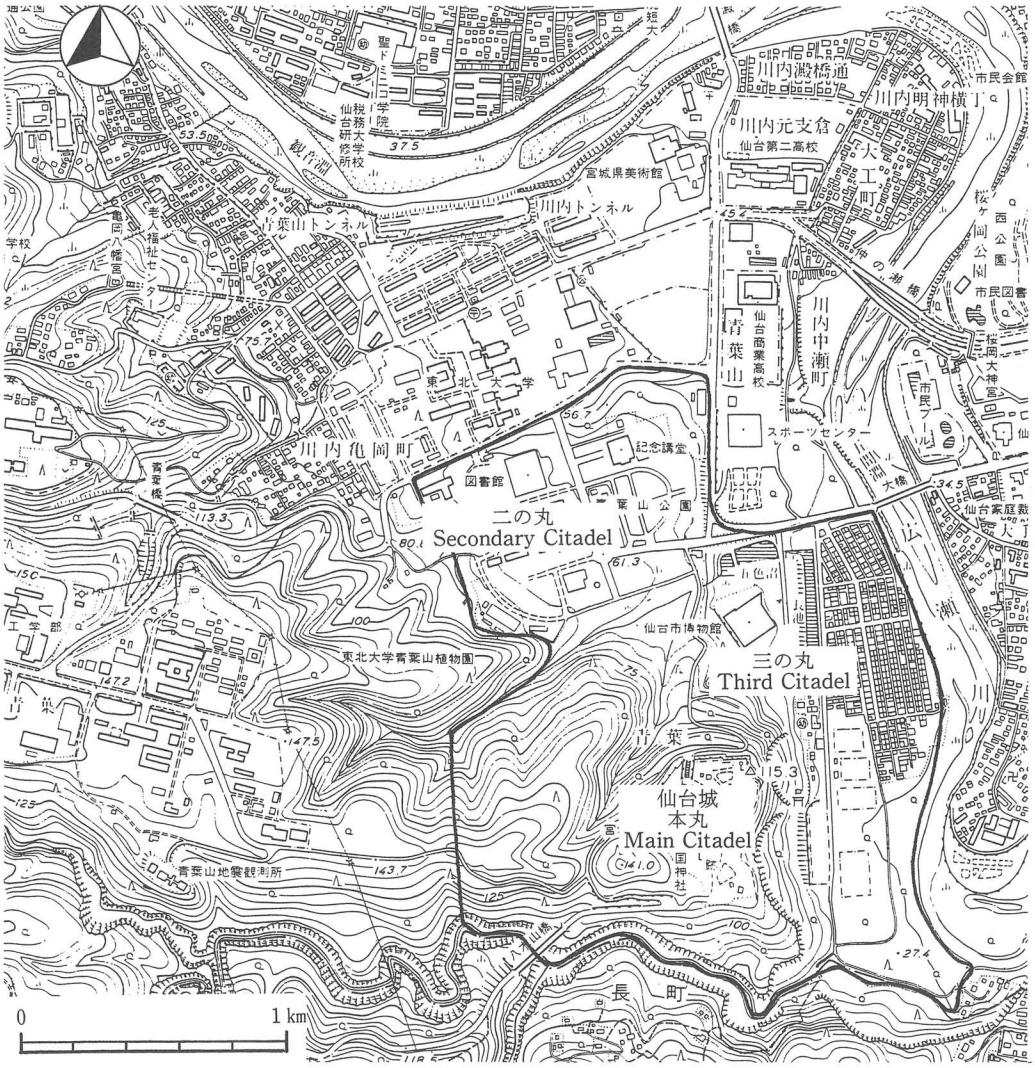


図２　仙台城と二の丸の位置
Fig. 2　Distribution of Sendai Castle

で、江戸時代には一貫して武家屋敷が置かれていた区域にあたる。仙台城の範囲の外側ではあるが、一連の遺構面が続いていることが想定され、仙台城と密接に関連する周囲の武家屋敷地区であることから、調査を行ったもので、これについては本年報において報告する。

試掘調査を実施したのは文・法学部研究棟新営計画に伴うもので（仙台城二の丸跡第９次調査地点、ＮＭ９）、法学部棟の東側にあたる場所である。ここは、仙台城二の丸では、裏門である「台所門」の内側にあたる場所である。また、二の丸造営以前の17世紀初頭には、初代藩主伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていた場所にあたる。図書館造営に伴う第５地点の調査において、試掘調査段階での計画が、本調査を開始すると大幅な変更を余儀なくされたことの反省に立ち、建築計画区域の全域を対象として、精査が必要な遺構面の数、遺構の残存状況、遺物の包含状況を把握し、本調査の計画を詳細にたてることを目的とした。立木などの支障物の移転が完了していなかったので、これらの支障物を除いた、可能な限り広い範囲において、重機によって明治以降の盛土を排除し、幕末から明治初頭にあたる遺構面を露出した。その結果、多少の撹乱による破壊はあるものの、ほぼ全域で遺構面が良好に残存していることが判明した。また、撹乱を利用して下層の状態を確認したところ、二の丸造成に伴う大規模な整地層の下層において、江戸時代初頭の遺構面が残存していることが判明し、伊達宗泰の屋敷に関わる遺構である可能性が高くなった。この遺構面に伴う遺物包含層には、木製品・漆塗製品や動物遺存体などの有機質遺物が良好に残存している部分があることも明らかになった。この結果を踏まえて本調査計画をたて、本調査は翌年の1990年度に実施することとなった。そのため、この調査結果については、1990年度の年報（年報８）においてまとめて報告する予定である。

立会調査としたのは、文系４学部を南北に走る道路（通称中善道路）の北端付近の、沢を渡る部分である。豪雨のため道路の一部が損壊し、その補修をかねて擁壁を造るのに伴う調査である。この場所は、江戸時代にも沢を渡る土橋となっていた所であるが、新しく盛土がなされ、また排水管が設置されており、その際に破壊されていると判断されたので、工事施工時の立会調査とした。調査の結果、排水管などの埋設によって、大きく掘削されてしまっており、遺構面は残っていないことが確認されたため、それ以上の調査は行っていない。

図3　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点

Fig.3　Location of excavations until 1989 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

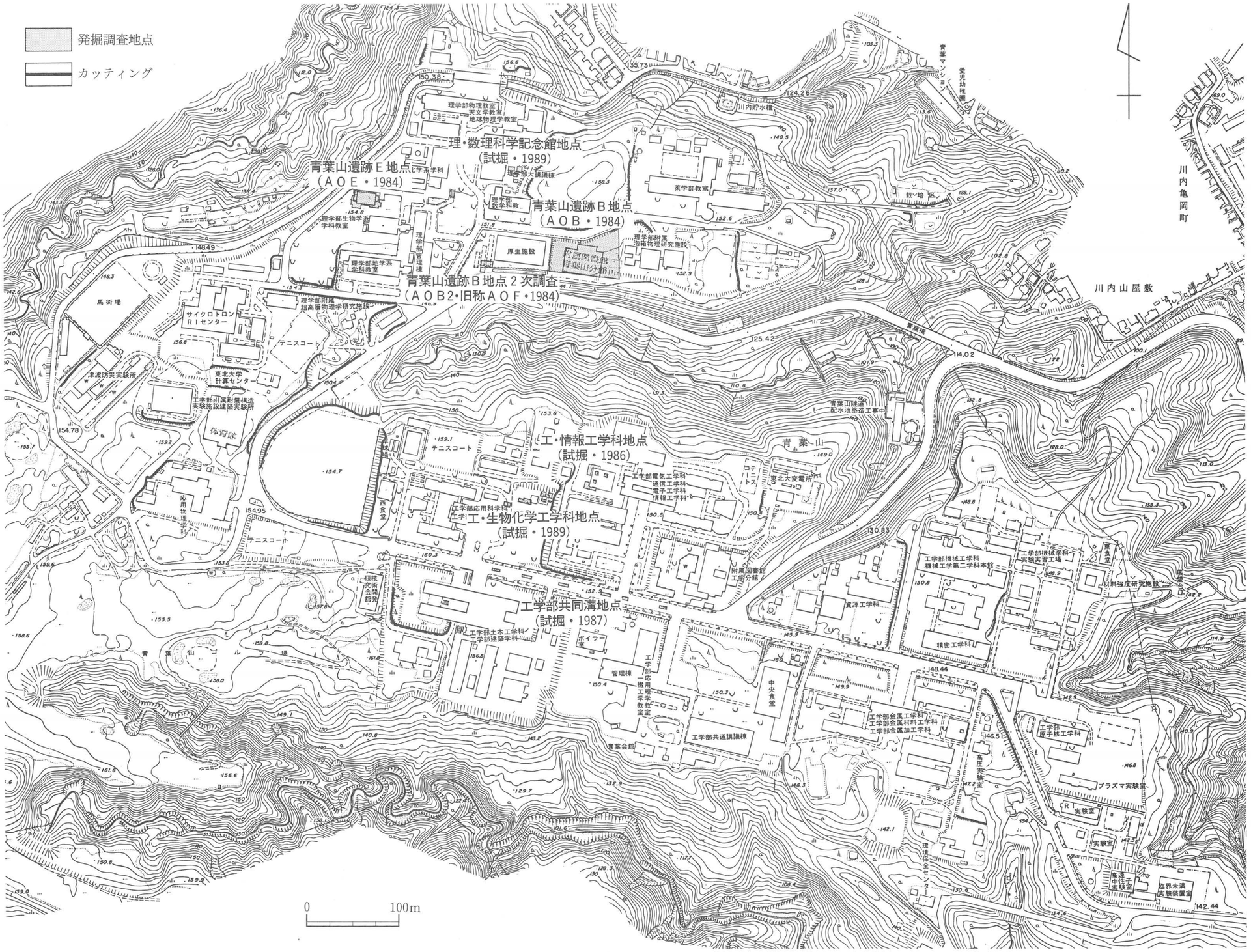


図４　青葉山地区調査地点

Fig. 4　Location of excavations at Aobayama campus

⑵　青葉山地区の調査

青葉山地区では試掘調査２件と立会調査２件を実施した（図４）。

理学部数理科学記念館地点は、前期および後期旧石器時代の遺物が発見されている青葉山遺跡Ｂ地点（年報２）の北西縁にあたる場所である（図５）。建設予定地東側の露頭では、後期旧石器時代の地層はかなり削平されていたものの、前期旧石器時代の地層は良く残っていることが観察されたので、遺跡の広がりを確認するために、試掘調査を実施した。５ケ所に調査区を設けて調査したが、西側の１区・３区では谷地形の上に大学造成時に２ｍ近い盛土がなされていたため、東側の３ケ所に集中して調査した。Ｂ地点で石器が発見されている７層（Ｂ地点では11層と呼称）を掘り抜くまで調査した。愛島軽石層直下の６層上面と８層上面で浅い落ち込みが、７層上面で谷状の大きな落ち込みが発見されたが、いずれも自然に形成されたものと考えられ、遺構・遺物は発見されなかった。

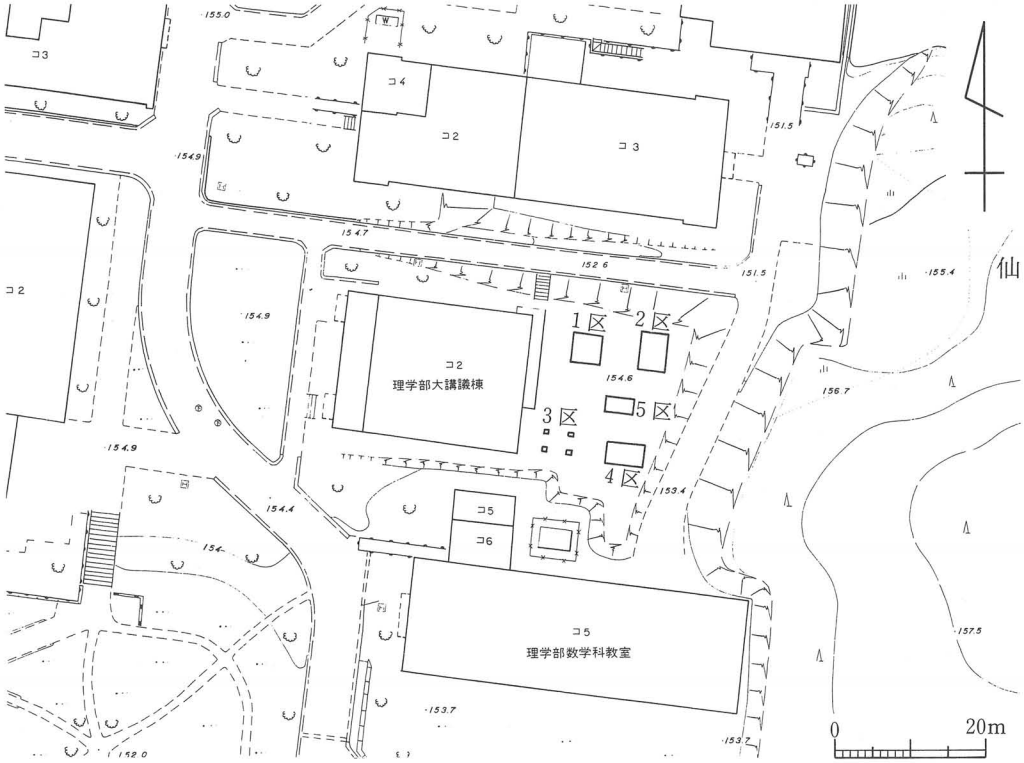
工学部生物化学工学科地点は、青葉山遺跡Ｂ地点から南側の谷をはさんだ場所にあたり、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施した（図６）。東側の建物本体部分では、４ケ所に調査区を設定し、重機で盛土を排除したが、いずれにおいても大学造成時の盛土が３～４ｍにもおよぶため調査を断念し、西側の共同溝予定地の２ケ所の調査区で調査を行った（１・２区）。共同溝の予定の深さである現地表から2.5mまで調査したところで（８層途中）終了した。調査の結果、火山灰層の上面で、円形の地下式遺構が陥没したもの２基・溝・柱穴などが検出されたが、針金などの鉄製品が出土し、埋土が非常に軟質であることから、明治以降にこの場所に置かれていた陸軍演習場にかかわるものと判断される。旧石器時代の地層からは、遺構・遺物は発見されなかった。

工学部情報工学科テニスコート地点は、擁壁取設に伴うもので、斜面で火山灰の堆積状況が良くなく、盛土もなされているため立会調査としたもので、遺構・遺物は発見されなかった。

理学部超高圧発生実験室地点は、旧石器時代の遺構・遺物が発見された青葉山遺跡Ｅ地点（年報２）の南側にあたる場所である。予定地南側の道路の露頭の観察では、旧石器時代の地層は、大きく削平されていることが想定されたため、立会調査としたものである。調査の結果、遺構・遺物は発見されなかった。

⑶　富沢地区の調査

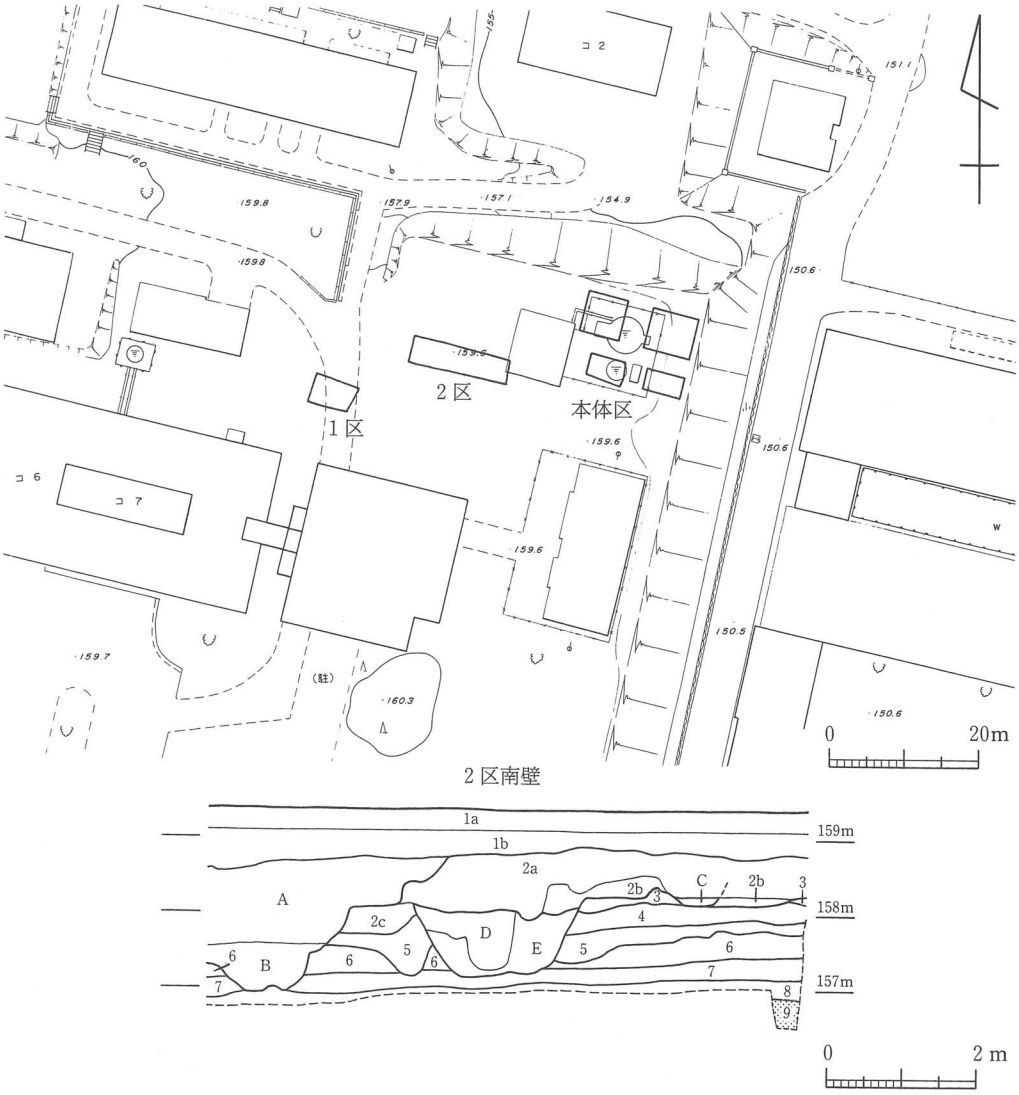
三神峯丘陵の北側にある富沢地区の原子核理学研究施設では、試掘調査１件を実施した（芦の口遺跡第２次調査、ＴＭ２）。原子核理学研究施設では、従来より、放射光リングを初めとした、大規模な施設拡充の計画を有している。原子核理学研究施設は、南側に縄文時代前期の三神峯遺跡、北側を古代の遺跡である芦の口遺跡にはさまれた場所にあたる。そのため、遺跡の



1　大学による盛土層
2　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中
3　10YR6/6　明黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　5㎜以下の岩片をわずかに含む
4　7.5YR5/6　明褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　1cm以下の岩片をわずかに含む　愛島軽石の風化層
5　10YR7/6　橙色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　1cm以下の岩片を多量含む　やや風化した愛島軽石層
6　10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　1cm以下の岩片をわずかに含む
7 a　5 YR4/8　赤褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり強　2㎜以下のマンガン粒を多量含む　赤色風化層
7 b　7.5YR5/8　明褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　2㎜以下のマンガン粒を多量含む　わずかに赤色風化
7 c　10YR6/6　明黄褐色　粘土　粘性強　しまり中　5㎜以下のマンガン粒を多量含む　全体として白色粘土化
8 a　10YR5/6　黄褐色　シルト質粘土　粘性強　しまり中　2㎜以下のマンガン粒を多量含む
8 b　7.5YR5/6　明褐色　粘土　粘性強　しまり中　1㎜以下のマンガン粒をやや多く含む
9 a　5 YR7/8　橙色　シルト質粘土　粘性強　しまり強　2～3cmの白色の網状斑が多く入る
9 b　5 YR5/6　明赤褐色　粘土　粘性強　しまり強　網状斑が入るが発達が少ない
A　10YR7/6　橙色　粘土質シルト　愛島軽石層が一部粘土化　落ち込み埋土
B　10YR6/8　明黄褐色　シルト質粘土　粘性強　しまり強　下部にマンガン沈殿　落ち込み埋土
C　10YR5/8　黄褐色　シルト質粘土　粘性強　しまり強　1㎜以下のマンガン粒を多量含む　谷埋土
D　10YR6/8　明赤褐色　シルト質粘土　粘性強　しまり中　やや粘土化　2cm以下のマンガン粒を多量含む　谷埋土
E　10YR7/6　明黄褐色　粘土　粘性強　しまり中　1㎜以下のマンガン粒を多量含む　落ち込み埋土
F　10YR8/6　明黄褐色　シルト質粘土　粘性中　しまり中　5㎜以下のマンガン粒を多量含む　落ち込み埋土

図5　理学部数理科学記念館地点平面図・断面図

Fig. 5　Plans and cross sections of test trenches at the campus of faculty of science



1 a　アスファルト・砕石
1 b　10YR3/4　暗褐色　シルト　盛土　炭化物が葉理状に入る
2 a　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを含む
2 b　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを含む
2 c　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり無　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを含む
3　10YR4/6　褐色　粘土質シルト　粘性弱　しまり弱　川崎スコリアの5cm程のブロックを含む
4　10YR6/6　明黄褐色　シルト質粘土　粘性中　しまり弱　1mm以下のマンガン粒を多量含む
5　10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性弱　しまり弱　2mm以下のマンガン粒をやや多く含む
6　7.5YR5/7　明褐色　粘土質シルト　粘性弱　しまり弱　2mm以下のマンガン粒をやや多く含む
7　7.5YR5/6　明褐色　シルト質粘土　粘性中　しまり弱　2mm以下のマンガン粒を少量含む
8　5 Y6/4　オリーブ黄色　砂　粘性無　しまり弱　10YR6/6　明黄褐色粘土質シルトのブロックが混じる
9　10YR7/8　黄橙色　軽石層　粘性弱　しまり中　粒径1cm以下　風化して粘土質シルトに近くなる　愛島軽石層
A　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを含む　溝埋土
B　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを多量含む　溝埋土
C　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを含む　溝埋土
D　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり無　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを多量含む　溝埋土
E　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり弱　10YR6/6　明黄褐色のローム層起源のブロックを含む　溝埋土

図6　工学部生物化学工学科地点平面図・断面図

Fig. 6　Plans and cross sections of test trenches at the campus of faculty of engineering

範囲を確認する目的で、1985年度に試掘調査を実施した(年報３)。その結果、平安時代の遺構・遺物が発見され、遺跡の範囲が、研究施設のほぼ全域に広がることが判明した。遺跡地図登載の周知の遺跡の範囲も、芦の口遺跡の範囲を変更する形で、研究施設全域にまで拡大されている。そのため、施設整備計画との調整のためのデータを得る目的で、1985年度の調査の際に調査を行っていない区域の遺構・遺物の有無と、その分布状況を把握することが必要となり、２ケ年にわたって、さらに試掘調査を実施することとなった。本年度はその１ケ年目として、調査予定地の西側を中心に調査を実施した（図７)。調査の結果、縄文時代と古代の遺構・遺物が若干検出された。また、水性堆積の火山灰層を下げた、現地表下１～1.5m程のところから、約３万年前の泥炭層が検出され、樹根・種子などの自然遺物が大量に検出されたが、人工遺物は発見されなかった。２ケ年目の調査は、1991年度に実施しており、これら２ケ年の調査結果を

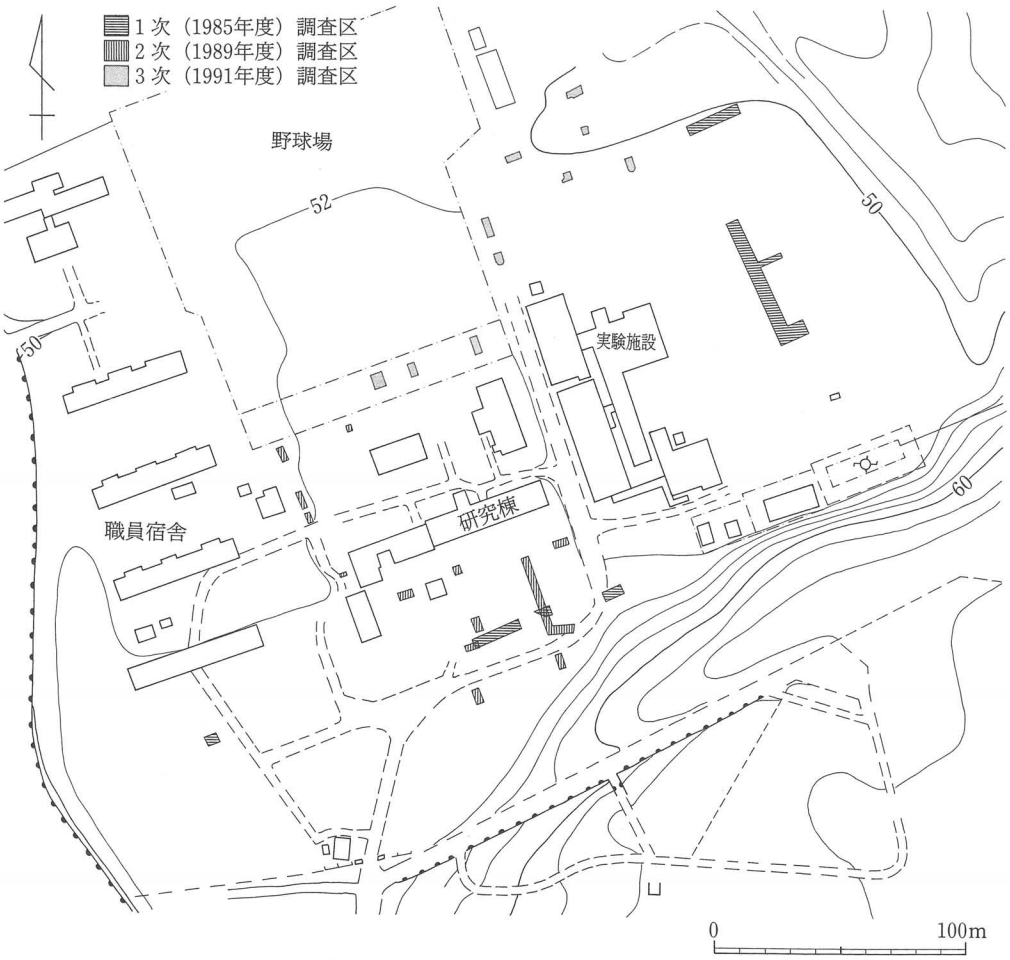


図７　富沢地区調査地点

Fig. 7　Location of excavations at Tomizawa campus

まとめて、1991年度の年報において報告する予定である。

⑷　川渡地区の調査

川渡地区では本調査１件を実施した(町西遺跡第１地点、ＫＷ１)。農学部附属農場の宿泊施設新営に伴う調査で、町Ａ遺跡などに隣接する地点であったため、1988年度に試掘調査を行ったところ、弥生時代後期と見られる土器が出土したため、本年度に本調査を行うこととなったものである。本年報では、試掘調査の結果もあわせて、まとめて報告する。なお、この地点は、新たに発見された遺跡であるため、町西遺跡（宮城県遺跡登録番号36106）として、新たに登録されている。

３．　その他の調査室の活動

1989年度は、1988年度から継続して実施した二の丸跡第５地点の調査が完了し、多くの成果が得られた。それを学内に紹介するため、第５地点の調査成果を「仙台城二の丸跡の調査（その５）」として、『東北大学学報』第1252号に寄稿した。また、これまでの仙台城二の丸跡の調査成果と、古絵図との対比について「学内の埋蔵文化財―３―」として『広報』№136に寄稿した。また、第５地点からは、元禄年間の紀年を持つものなど、多くの木簡が出土した。その速報のため、『木簡研究』第11号に「1988年度出土の木簡　仙台城二の丸跡（第５地点）」として投稿した。

第II章　二の丸跡第５地点（ＮＭ５）付帯施設区域の調査

１．調査経緯

⑴　川内地区の立地と歴史および1988年度までの調査

東北大学の附属図書館、および文系４学部、記念講堂、教養部などが置かれている現在の川内地区は、江戸時代の仙台城二の丸跡、周辺の武家屋敷跡などに相当する。

仙台城は、仙台市街地の西方、広瀬川を渡った、通称青葉山の東端に位置している（図１）。本丸は、三方（北・東・南）を広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた海抜115～140mの急崖上に立地しており、また北側の二の丸、北東の三の丸も、それぞれ海抜61～78m、40mの階段状の河岸段丘面上にある(奥津春生1967)。この中で東北大学構内の二の丸は、東方を蛇行する広瀬川に向かって緩やかに傾斜する上町段丘上（武蔵野面相当）に位置する（図２）。

仙台城は、慶長５年（1600年）伊達政宗によって本丸の築城が開始される。しかし幕藩体制の安定とともにその山城的な立地は不便となり、二代藩主忠宗は、寛永15年(1638年)、その麓において二の丸の造営を始める。これ以前、当地には政宗の四男宗泰（岩出山領主）の屋敷が置かれていた。二の丸の北隣には、政宗の長女五郎八姫の居住する西屋敷が元和６年(1620年)以降存続している。

二の丸が完成して後、仙台藩の政治・諸儀式の中心はここに移され、二代藩主以降はその居館ともなる。さらに元禄年間には、四代藩主綱村によって二の丸は大改造され、もとの西屋敷の敷地を取り込んで拡大される。その後いくたびかの災害や火災を被るが、その度に再建され、二の丸は幕末まで、事実上仙台城の中枢として機能していく（仙台市教育委員会1967)。

版籍奉還の明治２年（1869年）には、二の丸に勤政庁が置かれ、明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府･兵部省の管轄下に移るとともに東北鎮台（後に仙台鎮台と改む）が置かれる。この頃に本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸建物群は依然として残っている。しかし、この二の丸建物群も、明治15年（1882年）の火災によって、ほとんどが焼失してしまう。その後、当地には陸軍第二師団が置かれ、敗戦まで続くこととなる。敗戦間近の昭和20年（1945年）７月、仙台空襲の際、大手門などわずかに残った建物も焼失し、仙台城の建物は全て失われてしまう。戦後は米軍の駐留地となり、昭和32年(1957年)、米軍より返還されてのち東北大学がこの川内地区に移転し、現在に至るのである。

仙台城二の丸・武家屋敷である川内地区の発掘調査は、仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室によって小規模な調査が行われたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大学に埋蔵文化財調査委員会が置かれる1983年度以降のことである。委員会による川内地区の発掘調査は、これまでに８地点を数える。この中で特に第２地点では、二の丸の中心である小

広間の周辺の建物と推定される礎石建物跡が発見されている。第３地点・第４地点・第６地点では、それぞれ二の丸の南・北東・西の外郭にかかわる遺構が発見されている。第７地点では二の丸東方の蔵にかかわる遺構が発見されており、第８地点では二の丸北側の堀（池）が発見されている。また、第４地点の調査では、二の丸造成時の大規模な整地層の下層から、宗泰の屋敷に関連すると考えられる遺構も検出されている（年報１、３、４・５）。

⑵　調査地点の位置

第５地点は、附属図書館の西側で、グランドとして使用されていた場所である。当地点は、江戸時代初頭には伊達政宗の娘である五郎八姫の居館「西屋敷」が置かれていた場所にあたる。

五郎八姫は文禄３年(1594年)、伊達政宗と正室愛姫の長女として生まれ、慶長４年(1599年)６才の時、徳川家康の七男松平忠輝と婚約し、慶長11年（1606年）松平家に嫁いだ。しかし忠輝は、元和元年（1615年）の大阪夏の陣の際の遅参・怠戦と、家臣による旗本殺害の不謝罪とによって改易処分とされ、越後および信濃の領地を没収され、元和２年には伊勢朝熊に配流される。五郎八姫はこの時、越後高田城から江戸の伊達家下屋敷に帰される。さらに元和６年(1620年)、五郎八姫27才の時、仙台に帰ることとなった。

この元和６年に帰仙した五郎八姫のために造営されたのが、西屋敷である。西屋敷を記した絵図面は、正保２・３年（1645・46年）の「奥州仙台城絵図」が唯一のものである（阿刀田令造1936)。これは城下全体を記した絵図であり、屋敷内の建物などの配置は描かれていない。これによると西屋敷は、二の丸の北側に位置し、東西百二間、南北六十間とされている。この絵図で二の丸とされている区域には、二の丸造営以前には、伊達政宗の四男である宗泰（後の岩出山領主）の屋敷が置かれていた。宗泰の屋敷と西屋敷を区画すると考えられる溝跡が、第４次調査地点の調査において検出されている(年報５)。西屋敷が造営される以前については、「御西様被成御座候ニ付。竹被切払御作事御座候」(東奥老士夜話)との記録があり、竹林であったことが伺える（土生慶子1987)。

寛永13年（1636年）に伊達政宗が死去すると、もとの仙台藩奉行茂庭綱元（了庵）が、それまで住んでいた愛子村栗生の屋敷を五郎八姫に差し上げ、自分は栗原郡文字村（現、栗駒町文字）に引き篭った。この愛子村栗生の屋敷（西館）とは、現在の仙台市青葉区下愛子栗生にある西館跡と考えられる。この寛永13年に愛子栗生のもとの茂庭綱元の屋敷を五郎八姫が譲り受けて以降、川内の西屋敷がどのように使われたかについては、伊達治家記録の寛文元年（1661年）５月12日に、五郎八姫の死去について「天麟院殿去ル八日仙臺城西館ニ於テ卒去セラル」とあることから、姫の死去まで存続しており、愛子栗生の西館は仮御殿として別荘的な性格をもっていたものと考えられている（佐藤宏一1987)。天麟院とは五郎八姫の法号である。

一方、西屋敷の南隣にあった伊達宗泰の屋敷の跡には、寛永15年（1638年）に、二代藩主伊達忠宗によって、二の丸が造営される。四代藩主伊達綱村の元禄年間に、二の丸はもとの西屋敷の敷地を取り込んで、北側に拡張され、もとの西屋敷の敷地には中奥が置かれる。当地点は、この拡大後の中奥のもっとも北よりの部分から、中奥の北側に置かれた「中奥馬場」にかけての地点にあたると考えられる。

中奥の建物群はたびたび建て替えられ、また文化元年（1804年）の雷火による二の丸の全焼など、いくたびかの災害で被害を被り、その度に再建されている。絵図においても、中奥の建物群は細部では複雑な変遷を示している。しかし、今回の調査地点にあたると考えられる中奥の北辺部分は、その外郭の位置はほとんど変化がないことが、各時期の絵図から見て取れる。

明治２年（1869年）の版籍奉還に伴い、藩務と家務が区分され、元の藩主伊達慶邦の家族は中奥に移され、二の丸の表の建物は勤政庁となった。さらに明治４年（1871年）の廃藩置県によって、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台が置かれ、同15年（1882年）の火災による焼失に至る。この版籍奉還以降の当地点の変遷については、明確ではないが、廃藩置県以降、軍隊が利用するようになって、土地利用が大きく変わったものと推定される。

⑶　調査方法と経過

附属図書館の新館を増築することになり、まず1985年度に試掘調査を実施することとなった。調査は、既存の附属図書館の建物の西側に合わせて基準線を設定し、４ｍのグリッドを組んで行った。以後、４次にいたる調査は、すべてこのグリッドに基づいて調査を行っている。グリッド設定の際の基準点の国土座標値は下記のとおりで、基準線は北から18°10′50″西偏している（図４）。

原点ＮＭ５―①　Ｘ＝－193 612.285　　原点ＮＭ５―②　Ｘ＝－193 610.729
　　Ｙ＝　　1 876.546　　Ｙ＝　　1 881.283

当初の建物計画は、既存の図書館の西側全面に予定されていたため、1985年度の１次調査では、予定地にあわせて１～７区の調査区を設定した試掘調査を実施した。この１次調査の結果を受けて、建物は既存図書館西側の南よりの位置に建設されることになり、1987年度にこの区域の調査を実施することとなった。この1987年度の２次調査では、８区・９区を設定して調査を行ったが、調査が進行するにしたがって、当初の見通しとは異なり、後世の破壊を受けていないことが明らかになり、調査計画は全面的に見直さざるを得なくなってしまった。結局、既存図書館に附属するサンク・ガーデン部分を除いた建設予定地のほぼ全域で調査が必要となったため、1988年度に再度調査を行うこととなった。この1988年度の３次調査が、建物本体区域の本調査である。なお、1987年度に、既設ガス管の迂回工事に伴う調査も行っている。

1989年度の４次調査では、建物本体に伴う付帯施設区域の調査を行った。建物本体から北側に、２本の排水管を設置することに伴う調査である。一部は、1988年度に既に表土を排除し、調査を開始していたが、本体区域の調査が予定より大幅な延長を余儀なくされたため、この区域の調査を進めることができなかった。本格的に調査に着手したのは、本体区域の調査が終了した後の、３月９日からであった。

西側の10区は、Ｌ―17区から北に延び、Ｌ・Ｍ―４区にいたる調査区で、排水管設置に必要な深さまで調査することとし、それより深い部分については調査は行っていない。東側の11区は、Ｄ―16区より北側に延びる調査区であるが、調査中に既設の排水枡が存在することが判明したため、途中からルートを東側に曲げ、既設枡に接続させることで、破壊される範囲が少なくなるようにした。これも排水管設置に必要な深さまで調査を行った。

18列より南側の本体区については、前年度の年報６において既に報告した。本年報では、４次調査の成果に合わせて、試掘調査などを含めて、17列以北の区域の調査結果を報告する。

今回報告するのは、１区・２区・５区・10区・11区・12区である。１区・２区・５区は１次調査で実施した試掘調査の区域である。10区は、４次調査で実施した、西側の排水管に伴う調査区で、11区は同じく東側の排水管設置に伴う調査区である。11区は１区・２区と一部調査区が重なるため、この区域は、１区・２区・11区を合わせて報告する。12区は、1987年度の２次調査の際に実施した、既設ガス管の迂回工事に伴う調査区で、この部分にガス管の接続部分が置かれ、掘削が深く遺構面に達するため、調査を行ったものである。

≪引用・参考文献≫

阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』　斉藤報恩会博物館図書部研究報告第四

奥津春生　1967　「仙台城の地形・地質」『仙台城』pp.123～165　仙台市教育委員会

佐藤宏一ほか　1990　『宮城町西館跡、利府町郷楽・天神台遺跡』
宮城県文化財調査報告書第123集

仙台市教育委員会　1967　『仙台城』

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報』１

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報』２

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報』３

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報』４・５

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報』６

土生慶子　1987　『伊達政宗娘　いろは姫』　東光出版

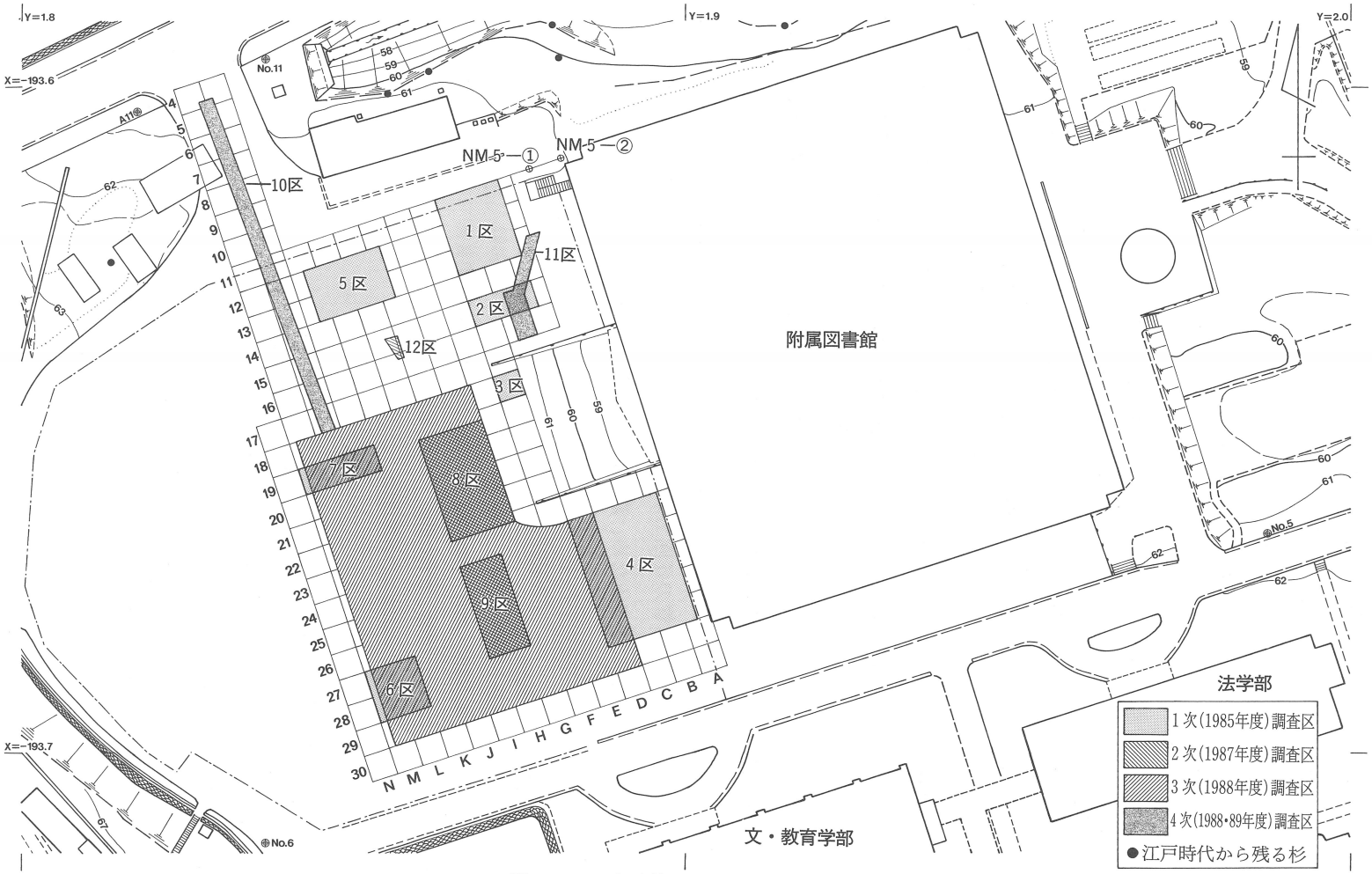
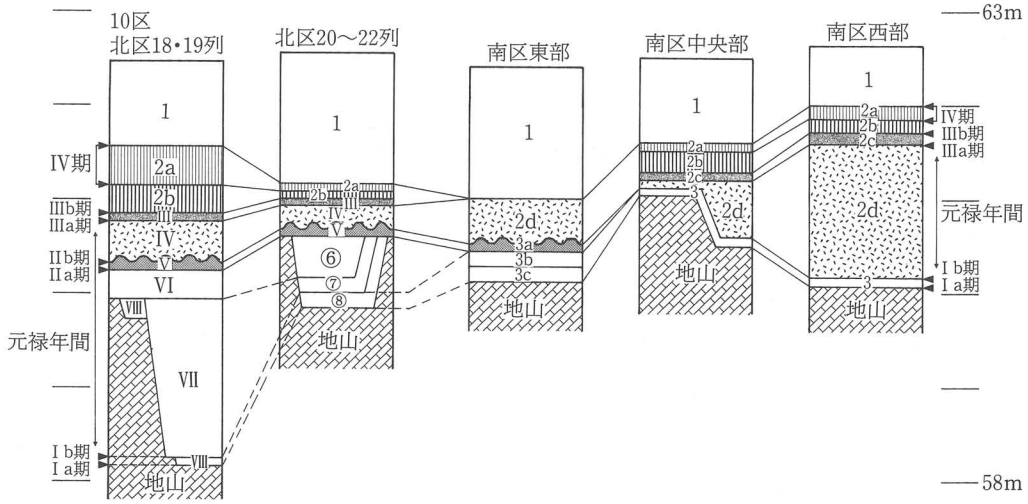


図8　二の丸跡第5次調査地点調査区の位置

Fig. 8　Location of NM5

NM5 i. e. Location 5 of *Ninomaru* (Seconndary Citadel)



＝北区・南区共通＝

1層　米軍・大学による盛土

2a層　10YR3/2黒褐色シルト。場所により礫の多い部分や粘土質シルトの部分がある。炭化物多く含む。黄褐色シルトなどの不均質に混ざる部分があり、細分される。

2b層　10YR4/6にぶい黄褐色砂。10YR5/2灰黄褐色シルトが縞状に入る。

地山　7.5YR5/1緑灰色シルト質粘土。一部砂礫が混ざる部分有り。

＝北区＝

III層　10YR5/1褐灰色シルト砂。上面に鉄分沈着、炭化物多く含む。

IV層　10YR5/3にぶい黄褐色砂。2.5YR5/2暗灰黄色粘土質シルト・2.5YR5/3黄褐色シルトが不均質に混じる。小礫含む（下部に多い）。炭化物含む。

V層　7.5GY4/1暗緑灰色砂質シルト。上面に鉄分沈着。炭化物多く含む。褐灰色・黒褐色を呈する部分があり細分される。

＝北区18・19列＝

VI層　10YR7/6明黄褐色シルト・5GY6/1オリーブ灰色シルト・10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルトが不均質に混じる。上面に鉄分沈着。小礫を多く含む。

VII層　細かく細分されるが、7.5GY4/1暗緑灰色粘土質シルトを主体とし黒褐色粘土質シルトが不均質に混ざる層と、有機物層が互層になる。人頭大の礫が多く含まれる部分や、黄褐色シルトを含む部分もある。

VIII層　10GY6/1緑灰色シルト質粘土と5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土が不均質に混じる。

＝北区20～22列＝

⑥層　細かく細分される。年報6図12参照。炭化物・礫・瓦・木片を多量に含む。

⑦層　細かく細分される。年報6図12参照。礫・炭化物などを含む。

⑧層　細かく細分される。年報6図12参照。部分的に植物の堆積層が入る。

＝南区＝

2c層　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭化物・小礫多く混じる。

図9　二の丸跡第5地点基本層序模式図

Fig. 9　Schematic profiles of NM5

2. 層序と時期区分

本体区の調査では、場所によって基本層序の様相が異なり、厳密に対比できていない部分も残しているが、大きく4期に区分された。Ⅰ期は元和6年（1620年）から元禄年間の二の丸改造までの西屋敷の時期、Ⅱ期は元禄年間の二の丸改造の時期、Ⅲ期は元禄年間の改造によって拡張された後の二の丸の時期、Ⅳ期が明治以降に相当すると考えられる。Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期はそれぞれ新古の2段階に細分される（図9）。

今回報告する17列以北の区域は、本体調査区から大きく離れる部分もあり、基本層序の様相も異なる部分がある。しかし、時期区分については、本体調査区での区分を変える必要が認められる部分はないため、本体調査区での時期区分を適用することとした。

10区は隣接する本体北区18･19列と基本的に同じ層序であるため、同じ層名を使用している。その他の調査区については、それぞれ独自に層名を付けた。そのため以下の記述では、これらの地区については、それぞれの遺構や層序が、本体区の何期に相当すると考えられるのかを、記述する方法をとることとする。

3. 検出遺構

(1) 10区（図10～12、図版1・2）

① 層序

L～M列で本体北区に連続する調査区であり、Ⅵ層までは同様の層が認められ、Ⅱ～Ⅳ期の各段階に対応できる。より下層については一部の調査なので確実ではないが、Ⅰa・b期に対応するものとして矛盾はないため、同じ層名を用いている。

② 各期の遺構

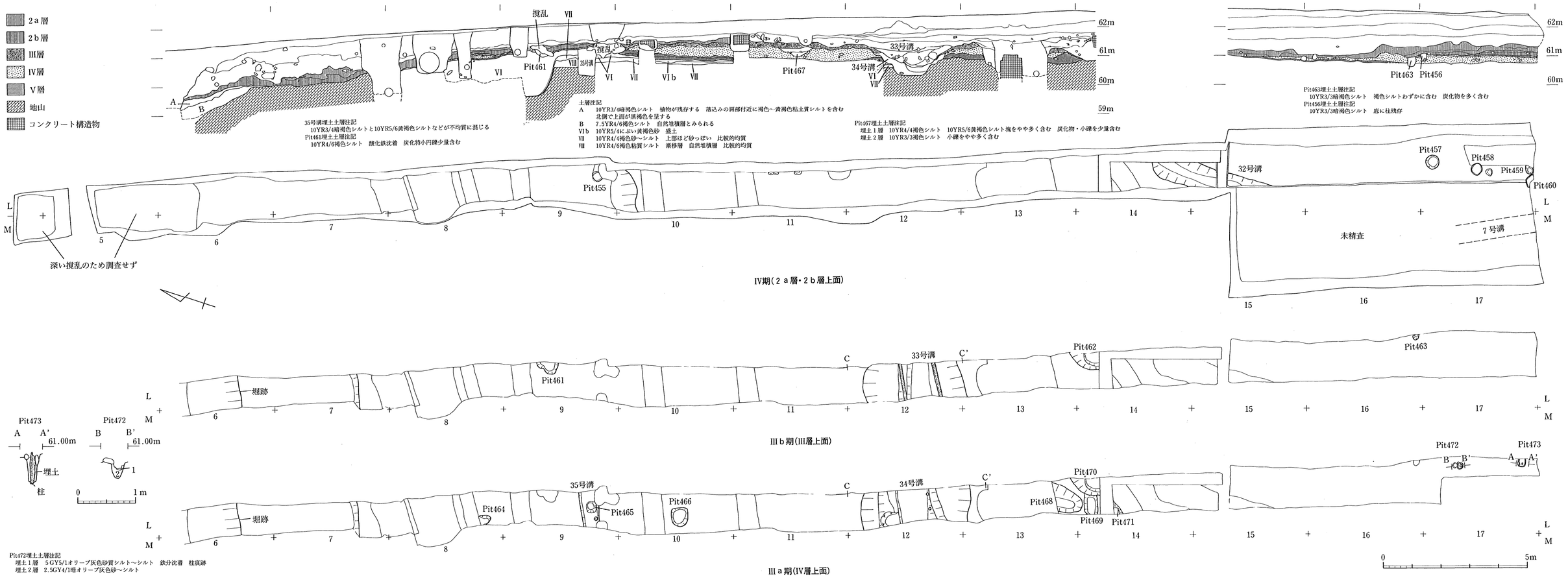
幅1.2～1.5mの狭い調査区のためかもしれないが、各期とも遺構の密度は高いとはいえない。柱穴はあっても、建物や塀列として組み合うものは認められなかった。

L･M－6区では地山上で、北に落ちていく斜面があり、北側の堀の岸であると考えられる。これは最終的に2層で埋め立てられるが、堀が機能していた段階に堆積したとみられるA・B層には時期を推定する手がかりがなく、これがいつ形成されたものか明らかにできない。

A．Ⅰ期（図11）

Ⅰ期の遺構を検出したのは一部深く調査を行ったL－9・10区のみである。L－9区ではⅠ期を通じて北側に向けて急に傾斜する大きな段差が存在しており、西屋敷の北の区画に関連するものではないかと考えられる。

Ⅰb期にはL－9～10区にかけてピットが3基検出されている。陶器鉢、平瓦類が出土しているが、いずれも浅く性格は明らかでない。



Pit472埋土土層注記
埋土1層　5GY5/1オリーブ灰色砂質シルト～シルト　鉄分沈着　柱痕跡
埋土2層　2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂～シルト

Pit473埋土土層注記
7.5Y4/1灰色シルト　灰オリーブ色の粘土小塊をわずかに含む

図10　二の丸跡第5地点10区平面図(1)・断面図
Fig. 10　Plans and cross sections of Loc. 10 at NM5

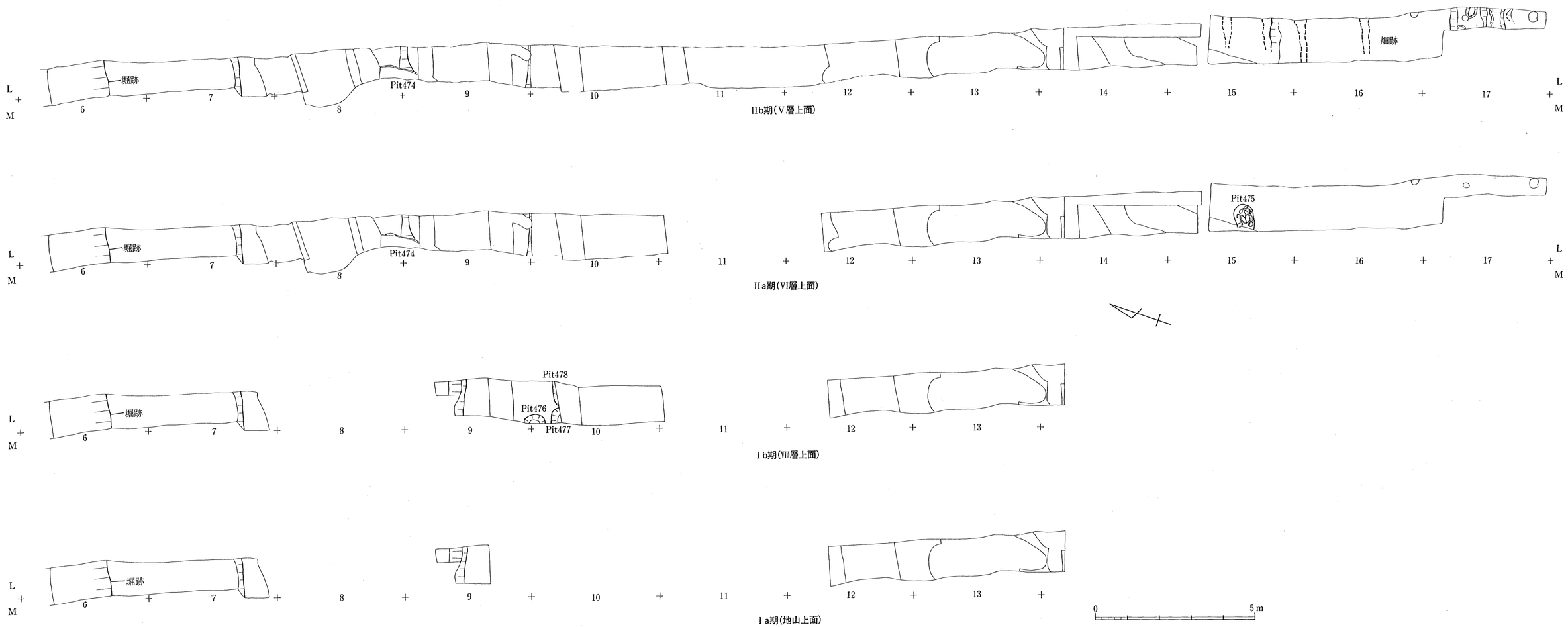


図11　二の丸跡第５地点10区平面図(2)
Fig. 11　Plans of Loc. 10 at NM5

B．II期（図11）

IIａ期はピット２基が検出されたのみである。

IIｂ期には本体北区と同様の畑がＬ―15区まで延びている。本体区のＬ―18区の様相では以北の畝方向が南北に変化するのではないかとみられたが、15～17区でまた東西方向になって変化はないことが今回明らかになった。

IIａ期

ピット474と475がこの時期のものとみたが、474はIIｂ期、475はＩ期の可能性もある。ともに完掘しておらず、474は性格不明である。

【ピット475】

Ｌ―15区、地山上での検出でＶ層に覆われている。西端が32号溝に切られており、全形・規模は不明であるが、長径90cm程度の楕円形の掘り方に、拳大～人頭大の礫を詰め込んだもので、礎石の根固めとみられる。内部は完掘していない。

IIｂ期

この時期であることが確実なのは畑跡のみである。

【畑跡】

Ｌ―15・16区ではＶ層の下で小溝状のものを検出したのみであるが、17区ではＶ層上面で畝を検出しており、並びからみて15・16区の溝もＶ層上面段階の畝が削平された痕跡と考える。東西方向で畝の間隔は50cm程度である。

C．III期（図10・12）

Ｌ―12区に大規模な東西溝が掘られ、その南北に数基のピット・溝が認められる。東西溝はIIIｂ期に同位置で作り替えられる。IIIａ期にはこの溝の北にあった布掘溝がIIIｂ期にはなくなっており、基本的な土地利用に変化はないものの、建物の位置は変化しているとみられる。

IIIａ期

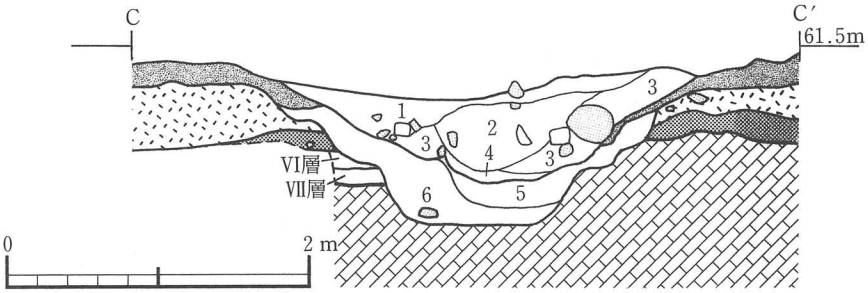
溝２条、ピット10基が確認でき、当区としては最も遺構の多い時期である。ピットでは472・473以外は性格の明らかなものはない。

【34号溝】（図10・12）

Ｌ―12区でIV層上面に掘りこまれた幅広い溝である。東西方向で調査区外にのびているため、正確な方向と全長は不明。断面は逆台形に近く、検出面での上端幅は3.8m前後、下端幅1m前後、深さは90cmを測る。埋土は2層に分けられ、陶磁器、瓦片が出土している。底面には南岸にそって打ち込まれた杭が２本検出されている。

【35号溝】（図10）

Ｌ―９区で検出された素掘りの溝である。この部分にはIV・Ｖ層がなく、VI層上面での検出



土層注記
33号溝
1　埋土１層　10YR6/6明黄褐色粘土　小礫少量含む
2　埋土２層　10YR6/6明黄褐色粘土と10YR3/2黒褐色シルトのブロックが混ざり合う　小礫含む
3　埋土３層　10YR3/4暗褐色シルト　黄褐色粘土塊を少量含む　この上に護岸の角材がのる
4　埋土４層　10YR3/1黒褐色粘土質シルト　植物遺体を多く含む　上面に褐鉄鉱層あり
34号溝
5　埋土１層　10YR5/2灰黄褐色粘土　褐鉄鉱の細かい斑を多く含む　小礫少量含む
6　埋土２層　10YR3/3暗褐色シルト　下部やや粘土化　小礫を少量含む

図12　二の丸跡第５地点10区33・34号溝断面図

Fig. 12　Cross section of ditch no. 33 and no. 34 (Loc. 10 at NM5)

であるが、Ⅲ層に覆われていることとレベルから、この段階のものと判断した。方向はＥ－25°－Ｎで調査区外にのびている。断面は箱形で、上端・下端とも幅60cmである。深さは90cmを測る。底面に１基のみであるがピットが認められることから、柱を据えた布掘溝と考えられる。土師質土器皿、瓦が出土している。

【ピット472・473】

Ｌ－17区で検出された。いずれも柱穴であるが、組み合うものではないと考えられる。

Ⅲｂ期

溝１条、ピット３基が検出された。

【33号溝】（図10・12）

34号溝を同位置で改修したものである。検出長そのものが短いので、両溝が全体にわたって同位置であったかどうかは明らかでない。断面は舟底形に近くなり、上端幅3.2m前後、深さ70cm前後である。34号溝に比べると全体にやや小規模になっている。埋土３層が堆積したのち、両岸の中～下位に８～12cm角の角材を用いた護岸施設らしきものが新たに作られる。34号溝の底面で検出された杭はこの角材を固定するためのものであった可能性がある。埋土からは陶磁器、土師質土器、瓦が比較的多く出土している。

Ｄ．Ⅳ期（図10）

当初M—15～17区を排水管埋設予定地として掘削したところ、７号溝の延長が検出されたため、これを避けて東にずらしたという経緯がある。最終的な精査範囲では、南北溝１条と６基のピットが認められる。このうちピット457には砲弾が投棄されていた。ピット456と460には柱が残存しており柱穴であることがわかるが、その他のピットは性格不明である。

本体区７号溝の延長は少なくとも17列まで延びていたことが明らかである。これに平行していた１号柱列の続きについては、方向の一致するものがなく、精査範囲にかからなかったとみられる。１号建物跡につながるものは確認されなかったことから、同建物は本体区内におさまる規模のものとなる。

【32号溝】

Ｌ—14～15区にかけて3.8m分が検出された。上端幅92cm、下端幅25～30cmであり、断面は緩やかな逆台形である。北端で東に屈曲するようであるが、直線的な部分はほぼ真南北方向であり、調査区外へのびている。残存する深さは28～34cmである。地山上の検出であるが、遺物からIV期と判断した。陶磁器、土師質土器、瓦、ガラス瓶が出土している。

⑵　12区（図13、図版２）

①　層序

この区では地山まで調査を行っている。１層が米軍～大学による盛土、２～３層が板ガラス等の遺物から第二師団期と考えられる。４層が堆積したのち、南半が大きく削平され、低くなった部分に２～３層が埋め立てられている。４層の時期については断定はできないが、これまでIV期以降の出土例の多い唐草１類の軒桟瓦を含むことから第二師団期に比定しておきたい。４層の下が地山となる。

②　各期の遺構

遺構は４層上面と地山上面で検出されている。４層上のものはIV期相当、地山上の遺構は本体北区との関連から池跡についてはＩ期に相当し、その新旧がＩａ・ｂの各小期に対応するものと推定した。それ以外のピットはＩ～III期のいずれの可能性もある。

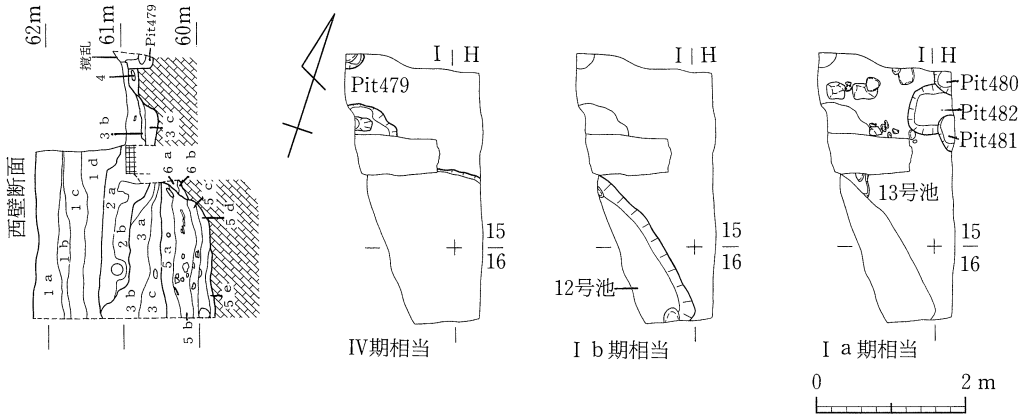
Ａ．Ｉ期

Ｉａ期には調査区中央西寄りに13号池が作られ、Ｉｂ期にはそれを南東方向に拡張する形で12号池に作り直している。Ｉ期を通じて土地利用に変化はなく、本体区の２時期の庭園がこの地区まで広がっていたものと考えられる。

Ｉａ期

【13号池】

Ｉ—16区で12号池に切られてごくわずか検出された。残存する深さは深いところで約30cmあ



12区土層注記
1a～1d　米軍および大学による盛土
2a　10YR4/6褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じる整地層　土管・瓦など含む
2b　10YR3/3暗褐色シルト　小礫・炭化物を多く含む整地層
3a　5Y4/2灰オリーブ色シルト　礫・瓦を多く含む整地層
3b　5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルトと10Y3/2オリーブ黒色シルトが混ざる　植物遺体・炭化物多く含む
3c　7.5GY4/1暗緑灰色シルト　7.5GY3/1オリーブ黒色シルトが混ざる
4　10YR4/6褐色シルト　砂礫・炭化物少量含む
} 本体区 2a・2b層相当
5a　7.54/2灰オリーブ色シルトと5Y4/2灰オリーブ色シルトが混ざる　礫少量含む　12号池埋土1
5b　10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト　礫・植物遺体・炭化物・遺物を多く含む　12号池埋土2
5c　10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト　礫・植物遺体・炭化物・遺物を多く含む　12号池埋土3
5d　10GY5/1緑灰色粘土　2.5Y2/2黒褐色粘土質シルトがブロック状に混じる　人頭大の礫入る　12号池埋土4
5e　10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト　植物・木製品・炭化物多く含む　12号池埋土5
} 本体区 Ⅵ・Ⅶ層相当
6a　2.5Y5/4黄褐色粘土質シルトと10YR4/1褐灰色粘土質シルトが不均質に混じる　炭化物含む　13号池埋土1
6b　10YR4/4褐色粘土質シルトと2.5Y5/3黄褐色粘土質シルトが不均質に混じる　炭化物少量含む　13号池埋土2
Pit479埋土　10YR3/4暗褐色シルト　10YR5/6黄褐色シルトが混じる　炭化物少量含む

図13　二の丸跡第5地点12区平面図・断面図
Fig. 13　Plans and cross section of Loc. 12 at NM5

り、埋土は2層に分けられる。遺物は出土していない。

Ⅰb期

【12号池】

調査区の南西側、Ⅰ—15・16区にかけて検出された落込みが、堆積土の状況から池跡と考えられる。残存する深さは約70cmである。埋土は5層に分けられ、陶磁器、土器、瓦のほか、箸・加工木等の有機質遺物も多量に含んでいた。

B．Ⅰ～Ⅲ期

【ピット480～482】

調査区北東隅の地山上で検出されている。いずれも東壁にかかっており、全形は明らかでない。482は他の2基に切られているが、検出面で60cm以上の規模のものである。

C．Ⅳ期

南半部は大きく削平され、調査区中央に比高40cmの段差が形成される。調査区の外にのびており、これがどのような性格のものかは不明である。北西隅にはピット479がある。

【ピット479】

北西隅、Ⅰ―15区で検出。壁面にかかっていて4分の1しか検出されていないが、深さ34cmで、底面近くに平たい礫がみられることから柱穴かもしれない。

⑶　1区・2区・11区（図14～16、図版2・3）

①　層序

1区では、1層が大学～米軍の盛土、2層が遺物から第二師団期以降と考えられる。3～5層は一定の時期差をもつ盛土とみられ、出土遺物からも明治には下らないと考えられる。4層が5層上の緩斜面を埋め、さらに3層が4層上面の緩斜面を平坦に埋め立てているものである。3A・B層は細かい単位が認められるもので、4c層は黄褐色土と暗褐色土を斜面に沿って版築のように積んだものである。

3A～C層上面、4a～c層上面に各々遺構が認められ、いずれも東西棟の礎石建物跡の北側に溝を配するという構成をとっている。これらの遺構は大規模な盛土上にあることとその構造から二の丸期のもので、各面がⅢa、Ⅲb期に相当するとみられる。3A層には18世紀後半の陶磁器がまとまって含まれており、それに近い時期に盛られたものとみなせる。4層は上限を示す遺物を含んでいないが、規模と土層の特徴からみて元禄期の二の丸拡張時の盛土であると考えられる。4～5層は一連の盛土である可能性もあるが、現時点では確証がない。上記の想定から、6層は西屋敷以前の旧表土の可能性が高い。

なお調査区東側では2層下4層上の位置に、3A～C層とは異なる層が存在しており、これらから出土した遺物については3層として集計している。

2区では基本的に1区と同様の層が連続するとみられるが、調査時の層の認定に不明確なところがある。

11区は1区・2区と一部重複している。基本的に本体区との層序の対応を検討しながら調査を進めた。南半ではⅢ層までは本体区と同様の層がみられ、その上面まで掘り下げたが、撹乱が多く分断されたため、北半については対比しきれず、遺物から相当する段階を推定した。

②　各期の遺構

A．Ⅰ～Ⅱ期

1区南東部で行った一部の深掘り調査の所見では、地山上でいくつかのピットが認められることから、この時期に相当するなんらかの遺構は存在していたとみられる。

B．Ⅲ期

1区では、Ⅲa期に大規模な盛土により整地したのち、12～13列にかけて礎石建物1棟とその北に平行して溝が作られる。11列には北に下る緩斜面がある。Ⅲb期には、11列の緩斜面に盛土を行って平坦面を拡張し、建物と溝をやや北にずらしている。位置は動いているが、基本的な土地利用に変化はみられない。2区では確実にⅢ期以前にさかのぼる遺構は指摘できない。11区ではⅢb期に東西溝が1条みられるが、ほかは不明である。

1区南端のピット486・487はⅢ期とみられるが、a・b小期のどちらに属するか不明である。486は径45cmで深さ12cm程しか残っていない。487は径40cm前後深さ15cmで内部に礫がつまる。

Ⅲa期

【9号建物跡】(図14)

C～E—12・13区でピット5基(柱5は断面のみの確認)、1×3間分を検出。方向はE—25°—Nの東西棟である。柱1が一部調査区西壁にかかる。柱間寸法は東西で約2m、南北で約4.5mある。礎石は認められないが、径1.3m程の円形の掘り方内に拳大～人頭大の礫を敷きつめたのち礎石を置いたものであろう。掘り方の深さは最も深いもので70cm程度である。

【39号溝】(図14)

9号建物跡のすぐ北に接するように設けられた東西溝である。西壁際深掘りの断面で認めたのみで平面は未確認であり、方向等の詳細は不明である。西壁では幅1m以上、深さ50cmほどのものである。遺物は出土していない。

Ⅲb期

【8号建物跡】(図14)

確認できたのはピット3基、2間分で、方向はE—25°—Nである。建物として方形をなすには至らなかったが、掘り方のプランと構造、方向、柱間寸法が9号建物跡と同様であることから、9号建物跡を約1m北にずらして建て替えたものであると考えられる。

【37号溝】(図14)

建物を北にずらしたのに伴い、39号溝を作り替えたものと考えられる。石組を伴うようであるが片側にしかみられない。平面プランは未確認だが、この溝に伴うとみなせる石組の検出状況から、図のような方向のものと推定した。東西とも調査区外にのびているとみられる。西壁でみると、上端幅145cm、下端幅60cm、深さ75cmで、中程で屈曲して中央部が急に深くなる断面形のものである。

【38号溝】(図14)

D—16区を東西に走る素掘りの溝である。方向はE—25°—Nで1区の建物跡に平行する。幅80cm前後、断面は逆台形で、残存する深さは深いところで20cmである。

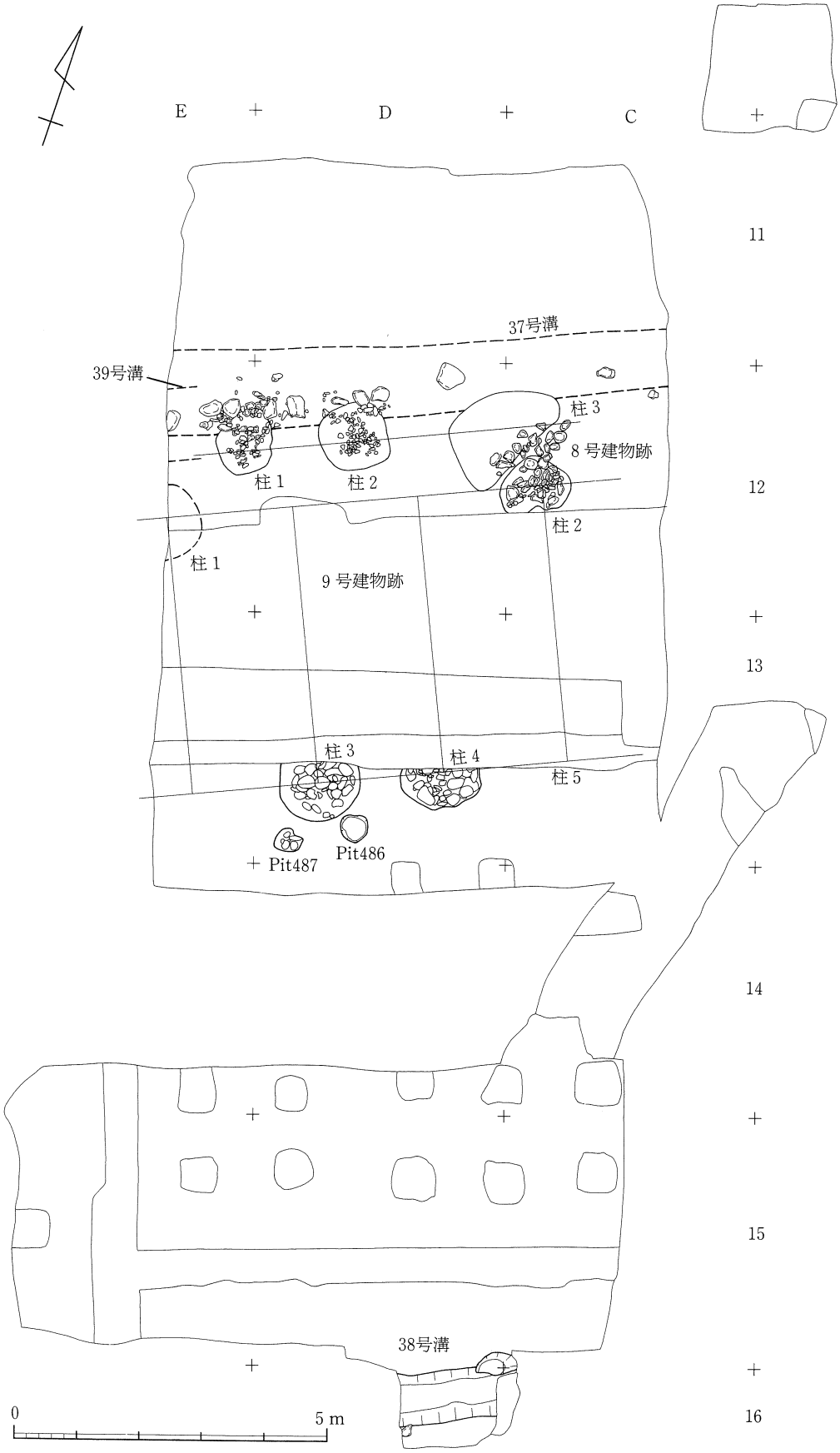


図14　二の丸跡第５地点１・２・11区平面図(1)

Fig. 14　Plans of Loc. 1, 2 and 11 at NM5(1)

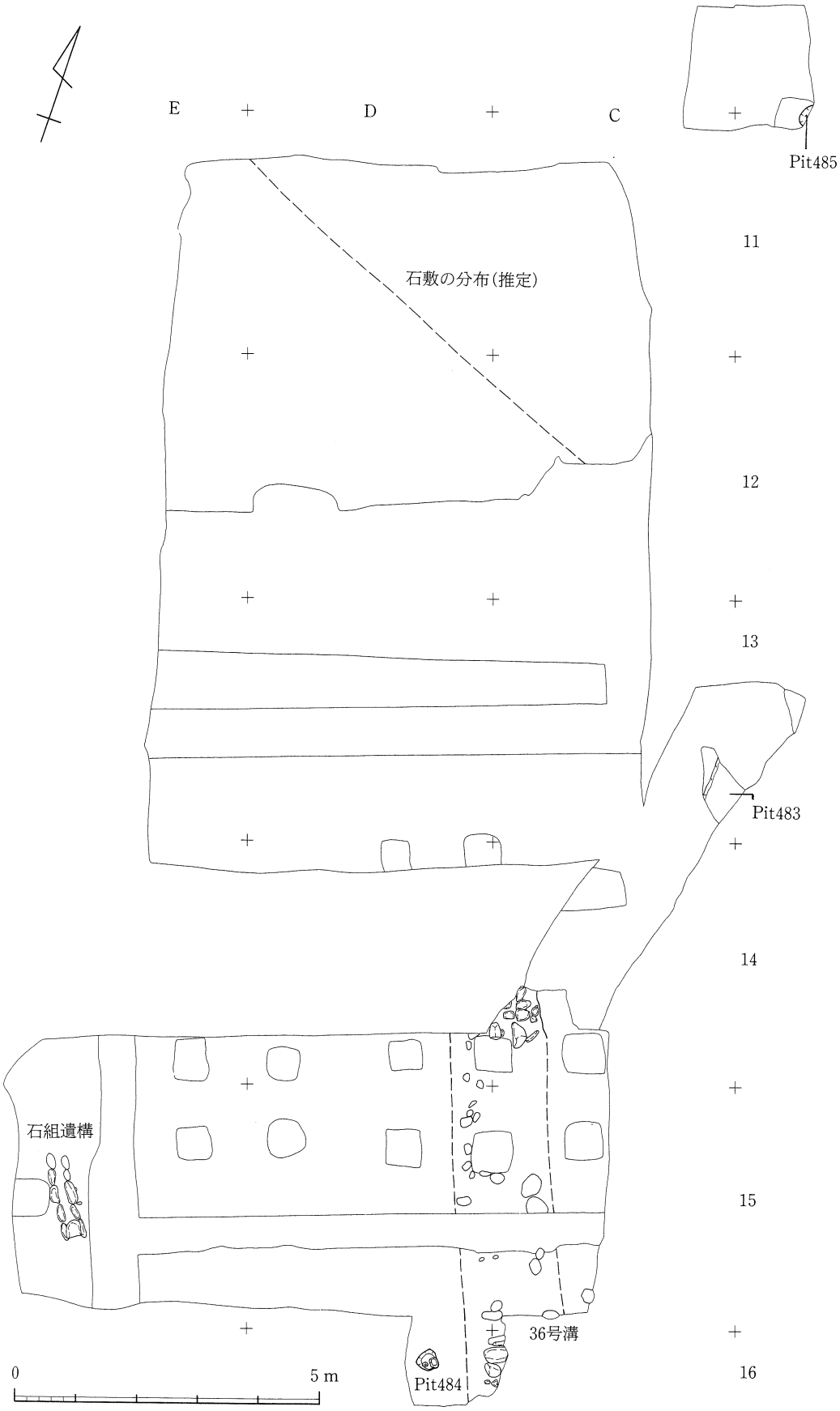
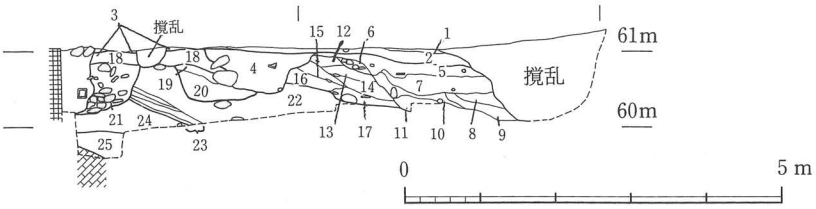


図15　二の丸跡第５地点１・２・11区平面図(2)

Fig. 15　Plans of Loc. 1, 2 and 11 at NM5(2)



1区土層注記（調査区西壁）
1　10YR2/2暗褐色砂質シルト　2ａ層
2　10TR5/8黄褐色シルトをブロックあるいは連続して含む盛土　2ｂ層
3　10YR5/1褐灰色シルト質砂　2ｃ層
4　3Ａ～3Ｃ層起源の土が混在　大量の炭化物・遺物を含む　上面に薄い焼け面がある　37号溝埋土
5　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　10YR5/6黄褐色シルトブロック多い　土師質土器などを含む
6　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　黄褐色シルトブロック多い
7　10YR2/3黒褐色シルト　黄褐色シルトブロック少ない
8　10YR2/2黒褐色シルト　炭化物含む　黄褐色土ブロック含まず
9　10YR2/1黒色シルト　炭化物含む　黄褐色土ブロック含まず
10　10YR2/2黒褐色シルト　黄褐色土を多量に含む
11　10YR2/1黒色シルト　オリーブ黒色がブロック状にまざる　木材片含む
（5～11：3Ａ層）
12　10YR4/4褐色砂質シルト　小礫・炭化物含む
13　10YR3/4暗褐色砂質シルト　黄褐色土ブロック含む
14　10YR3/3暗褐色シルト　炭化物が多くなる
15　10YR4/4褐色砂質シルト　腐れ礫・炭化物少量含む
16　10YR4/6褐色砂質シルト　腐れ礫含む
17　10YR3/4暗褐色砂質シルト
（12～17：3Ｂ層）
18　10YR4/6褐色砂質シルト　礫・腐れ礫・瓦含む　3Ｃ層
19　10YR3/3暗褐色シルト　腐れ礫含む　39号溝埋土1層
20　10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルトブロックを多量に含む　39号溝埋土2層
21　4層起源の土に沢庵石大の礫を多量に含む　9号建物跡柱1埋土
22　10YR3/3暗褐色シルト　10YR5/6黄褐色シルトブロック・腐れ礫を含む　盛土　4ｂ層
23　10YR3/3暗褐色シルトと5層に類似した10YR5/6黄褐色シルトの互層　盛土　4ｃ層
24　10YR5/8黄褐色シルト質粘土　小礫少量含む　盛土　5層
25　10YR3/1黒褐色粘土質シルト　均質　6層

図16　二の丸跡第5地点1区断面図
Fig. 16　Cross section of Loc. 1 at NM5

C．Ⅳ期

1区に石敷遺構、2・11区に石組溝1条、石組遺構1基、ピット3基が認められた。

【石敷遺構】（図15）

1区北東部、C・D―11・12区の2層下で検出された。3層を覆っている。北側と東側で調査区外に延びる。平面図は作成していなかったため、推定分布範囲を破線で示した。

【36号溝】（図15）

85年の2区調査時には、断面から存在を確認するにとどまっていたもので、89年に11区を調査した際、南北でその延長が検出されたことから図のように推定した。南北方向で、幅約1.5mの掘り方の両側に、30cm程の礫を小口を内側に向けて並べている。南側は調査区外に延び、北側では1区の北壁に認められないことから、その南側で屈曲するか、なくなると考えられる。

【石組遺構】（図15）

E―15区で検出。掘り方は未確認のため構築方法の詳細は明らかでないが、長さ30～40cmの平たい礫を長手に2列平行して並べて側石とし、南端には礫を落しこんで塞いだ形態のもので

ある。底面には特に石を敷いていない。幅は石の外側で30～45cm、内側で12～14cm、深さは記録のあるところでは20cmで、石の痕跡のみの部分を含めて1.4m残存する。方向は真北から30°程西偏している。内部の埋土は、砂が厚く堆積した後に周囲の土が流れ込んだ状況を示しており、本来水が流れていたと考えられる。本体区で検出されている16・17号溝のように板石で蓋をした暗渠であった可能性が高く、その場合、III期にさかのぼる可能性もある。

【ピット483～485】(図15)

D－16区のピット484は、不整台形を呈し長幅とも36cm、深さ20cm程のもので、柱穴の可能性がある。B－11区のピット485とB・C－13区のピット483はともにその一部を検出したのみで、浅く、性格も不明である。

(4) 5区（図17、図版3）

① 層序

調査面積は大きいが、撹乱が多く、江戸時代の地層が残るのは西壁と北壁近くのごく一部である。1層が大学による盛土、2層が米軍～第二師団時代、それより下層が江戸時代の地層と考えられる。試掘調査であるため全体の検出は2層を掘り上げた時点でやめ、より下層については撹乱の壁面での観察や、一部の掘り下げにとどめている。それらの知見では、調査区西半と東半で全く異なった様相が認められる。すなわち、東側では二の丸拡張時の盛土の可能性のある整地層が存在し、1区に近い状況と考えられるのに対し、西半では、それに対応するものがなく、地山までがもっと浅いと考えられる。そのため図示した断面図では各々異なる層名を用いている。西側の状況をどう解釈するかについては、分断されていること、遺物等の手がかりがないことから、現時点では不明である。

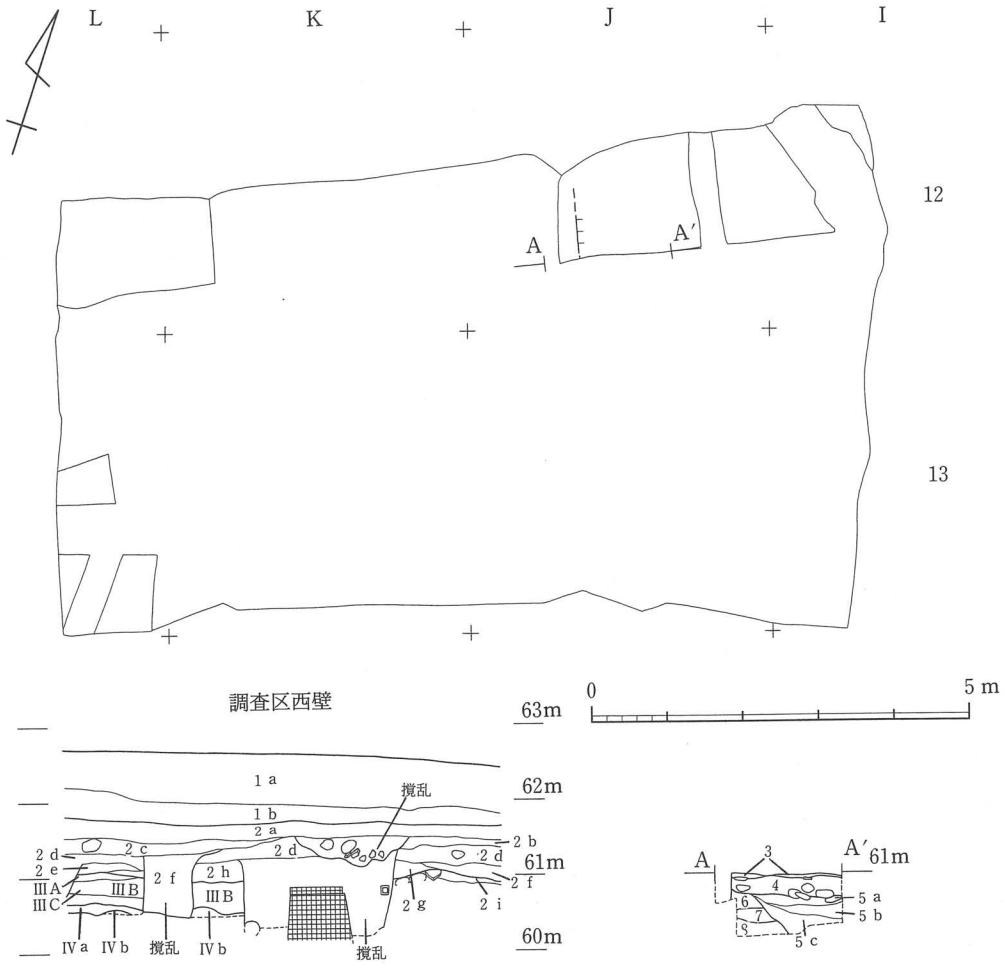
② 各期の遺構

A．I～III期

東半4層下で東に下っていく落込みが認められた。東側に相対する上がりがあって溝になるのかどうかは不明である。その落込みを埋める形で堆積する5c層には、1点のみであるが、17世紀後半～18世紀前半に位置づけられる陶器が含まれていることから、17世紀後半以降に埋められたものである。さらにその下層にもピット等が存在するようであるが、一部であるためその詳細については不明である。

B．IV期

平面図には表現していないが、調査区北側では2層下で東西ともに石敷遺構が検出されており、これを1区の石敷遺構に連続するものとみてIV期と推定しておきたい。西壁で見る限り、調査区中央より南側には延びていかないようである。



土層注記
1 a　グラウンド盛砂整地層
1 b　7.5YR5/6明褐色粘土質ローム　盛土
2 a　2.5Y3/1黒褐色砂質ローム　煉瓦・鉄片等多量に含む
2 b　パラスと砂
2 c　焼け層　木炭・焼土・灰が混じる
2 d　10YR3/4暗褐色ロームを主体とし灰色粘土ブロック多く含む
2 e　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　礫を多く含むが均質
2 f　10YR5/6黄褐色ローム質砂　礫・岩塊多量に含む
2 g　10YR4/4褐色シルト質ローム
2 h　10YR4/6褐色ローム　暗褐色粘土ブロックを少量含む
2 i　10Y3/1オリーブ黒色砂質粘土　炭化物・小礫混じる　酸化鉄ブロック含む
Ⅲa　10YR3/2黒褐色シルト質ローム　均質
Ⅲb　10YR4/4褐色シルト質ローム　均質
Ⅲc　10YR5/6黄褐色ローム　礫片を多く含む
Ⅳa　2.5Y6/4鈍い黄色と10YR6/4鈍い黄橙色が混じる粘土
Ⅳb　10YR7/6明黄褐色ローム質砂

土層注記
3　5Y1/3オリーブ黒色ローム　炭化物・礫を含む
4　10YR4/4褐色ローム　炭化物含む
5 a　10YR5/8黄褐色ローム　礫・くされ礫含む
5 b　7.5YR4/4褐色シルト質ローム　上面に酸化鉄
5 c　7.5YR3/4暗褐色シルト質ローム　部分的に明黄褐色シルト質ローム を含む
6　10YR2/1黒色粘土質ローム
7　7.5YR4/4褐色シルト質ローム
8　10YR5/4鈍い黄褐色シルト質ローム　粗砂・小礫を含む

図17　二の丸跡第5地点5区平面図・断面図

Fig. 17　Plan and cross sections of Loc. 5 at NM5

4. 出土遺物

(1) 陶磁器（図18～22、図版４～７、表２・３・８・11）

集計の方法および資料化の基準は、本体区の報告（年報６）に依拠している。

陶器、磁器とも、１区３Ａ層、10区２ａ層・Ⅲ層・Ⅴ層から比較的多くの資料が出土している。このうち、１区３Ａ層出土資料は、時期的なまとまりを持ち、多くの資料が18世紀後半に比定される。肥前産磁器では、猪口（535･537）や小坏（536）といった小型の器種が一定量を占めている。陶器は、大部分が大堀相馬産で占められる。大堀相馬製品は、灰釉の碗・皿類が中心である。372は、内面に鉄釉を流し掛けした、大堀相馬産の灰釉大皿であり、この資料では確認できないが、見込みに印花文を持つ例が多い。

10区のⅤ層は、本体区同様、元禄年間の二の丸拡張に伴う盛土と考えられ、出土陶磁器の大部分もそれに近い年代である。磁器の碗（525・526）は、器高が高く、高台もしっかりとした作りである。354の陶器碗は、鉄釉の上に灰流しの尾呂茶碗である。

磁器は肥前産が多いが、532は、中国からの舶載品である。内面に印花文が散らされ、畳付けを除いて、全面に青磁釉が施されている。高台内には放射状の削り痕が認められる。

(2) 土器・土製品（図23、図版７・８、表４・９・10・12）

【土器】

接合作業後の総破片数は、土師質土器2,885点、瓦質土器22点、軟質施釉土器８点で、本体区と同様に、土師質土器が最も多いが、そのほとんどは皿である。

土師質土器の皿は、本体区から続く10区から多く出土しており、その中でも、Ⅴ層からまとまって出土している。皿は、本体区と同様に、残存状況を基準に資料化する遺物を抽出した。口縁端部から底部まで残存しており、かつ全体のほぼ半分以上が残っているものを資料化した。皿以外のものは、ある程度特徴の判明する資料について、可能な限り資料提示に努めた。なお、105～107の３点については、本体区出土の資料であるが、報告漏れとなっていた資料である。

瓦質土器は出土量も少なく、特に集中して出土しているところはない。鉢類がほとんどである。資料化できたのは、130の高台の付く壷、もしくは鉢の１点だけである。

軟質施釉土器としたのは、透明釉をかけたもので、蓋（図23―136）と擂鉢（図23―132）が各１点確認され、ミニチュアかと考えられる。他には、焙烙が出土しているが、資料化できるものはなかった。それ以外は、小片で不明なものである。

【土製品】

土製品は、土人形も含めて８点の出土で、本体区と同様に出土量は少ない。細片以外のものは図化した。122は猫の人形で、123も人形の部分の可能性がある。124･133は用途不明である。

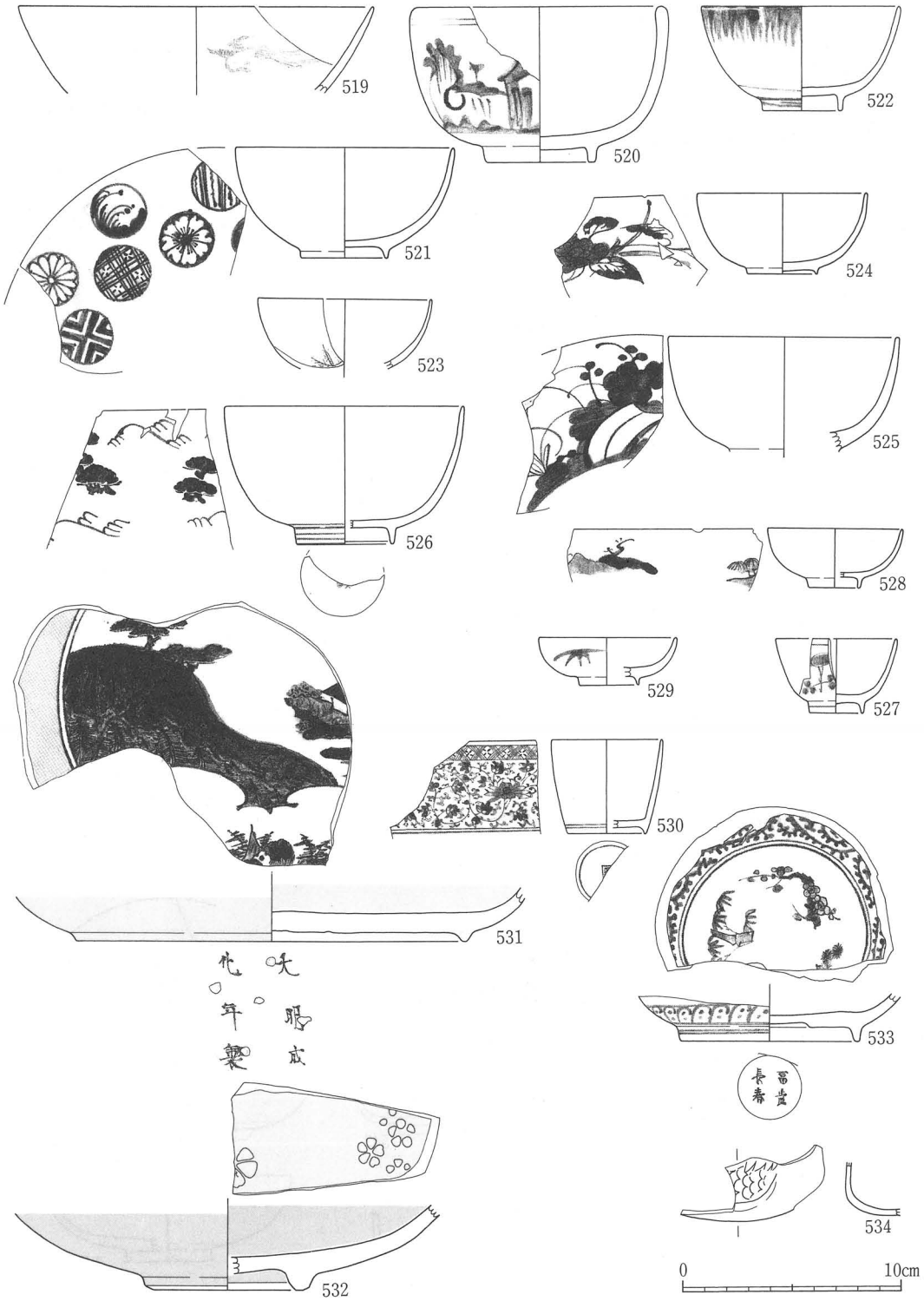


図18　二の丸跡第５地点出土磁器(1)
Fig. 18　Porcelains from NM5(1)

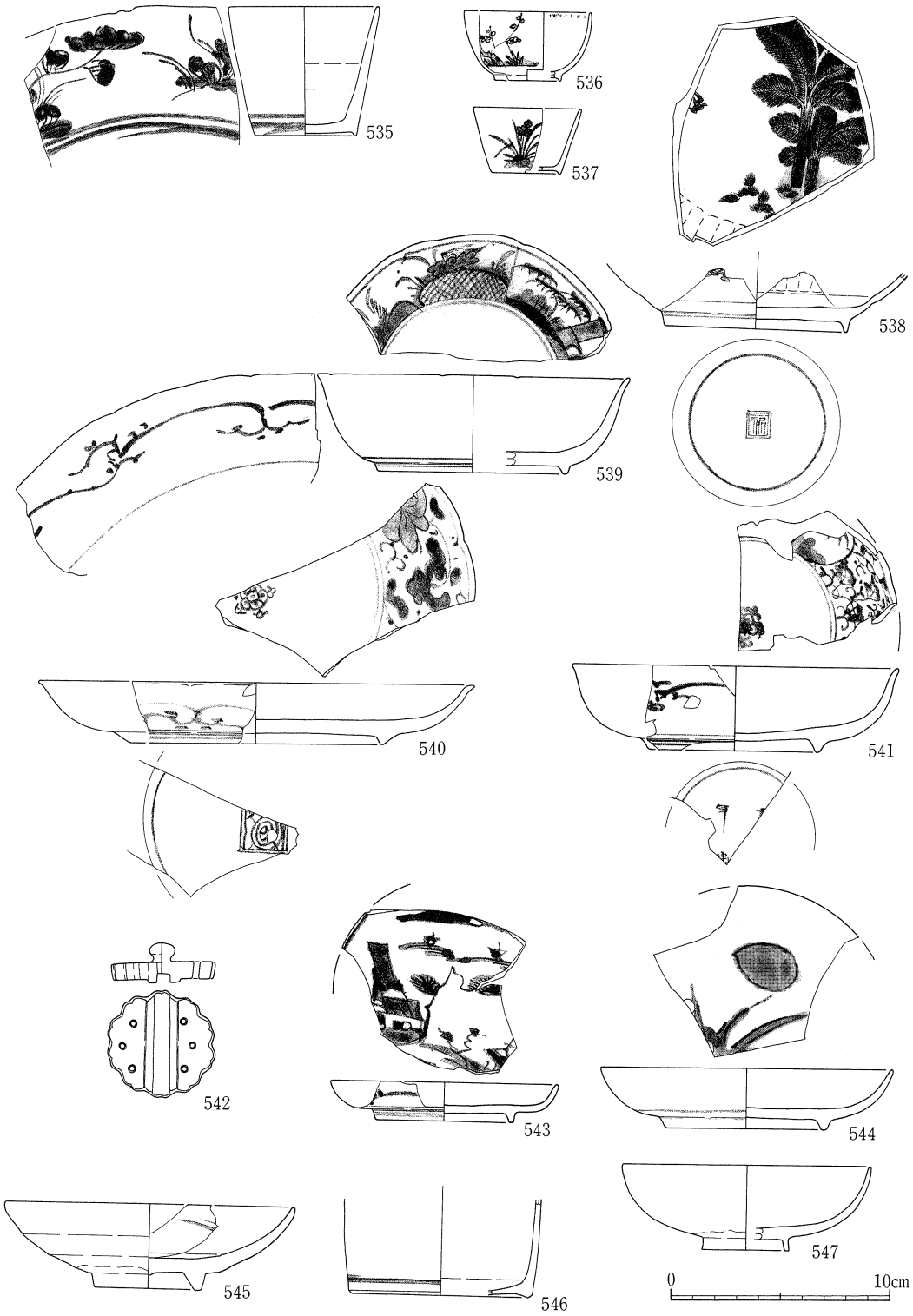


図19　二の丸跡第５地点出土磁器(2)
Fig. 19　Porcelains from NM5(2)

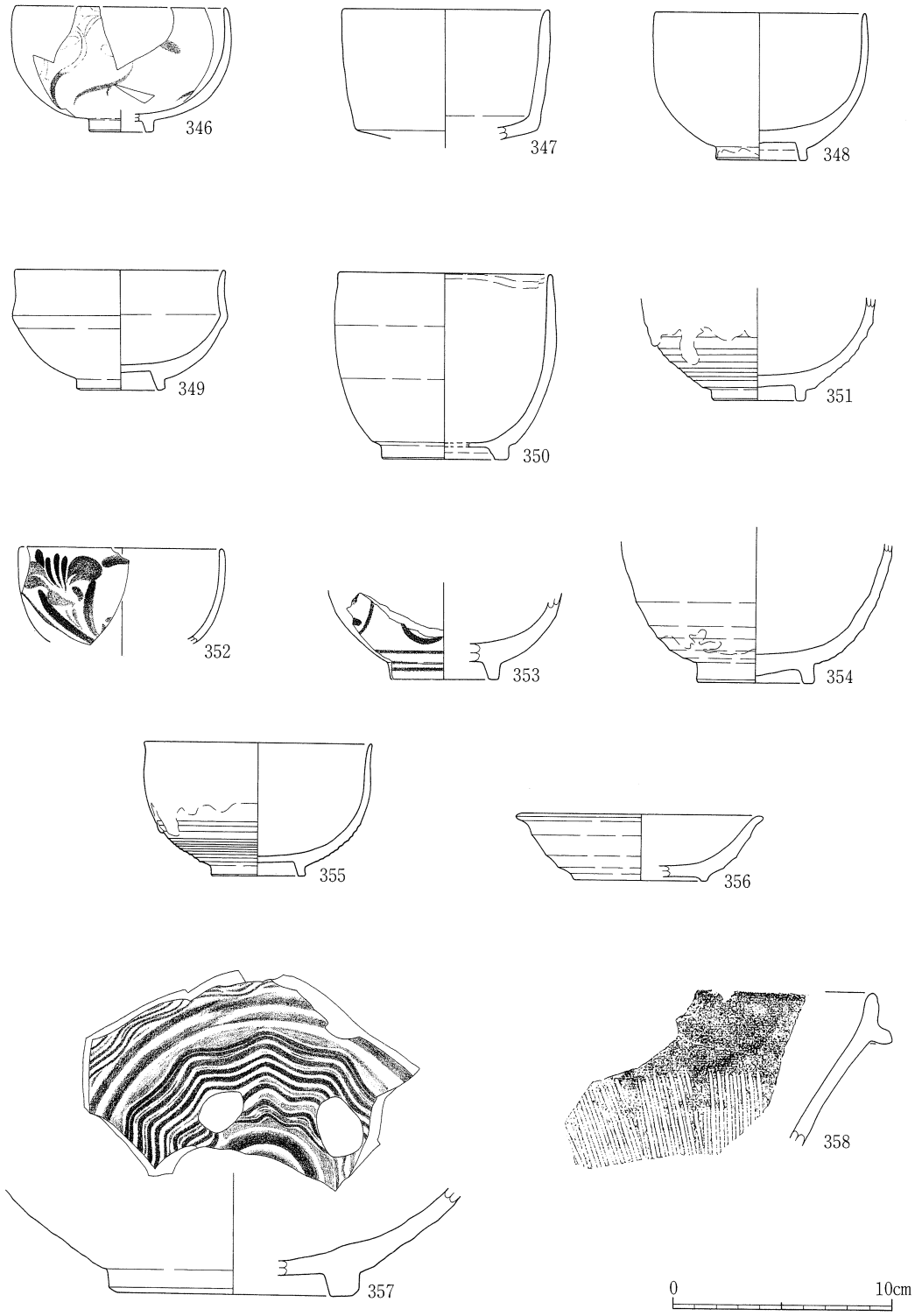


図20　二の丸跡第５地点出土陶器(1)
Fig. 20　Glazed ceramics from NM5(1)

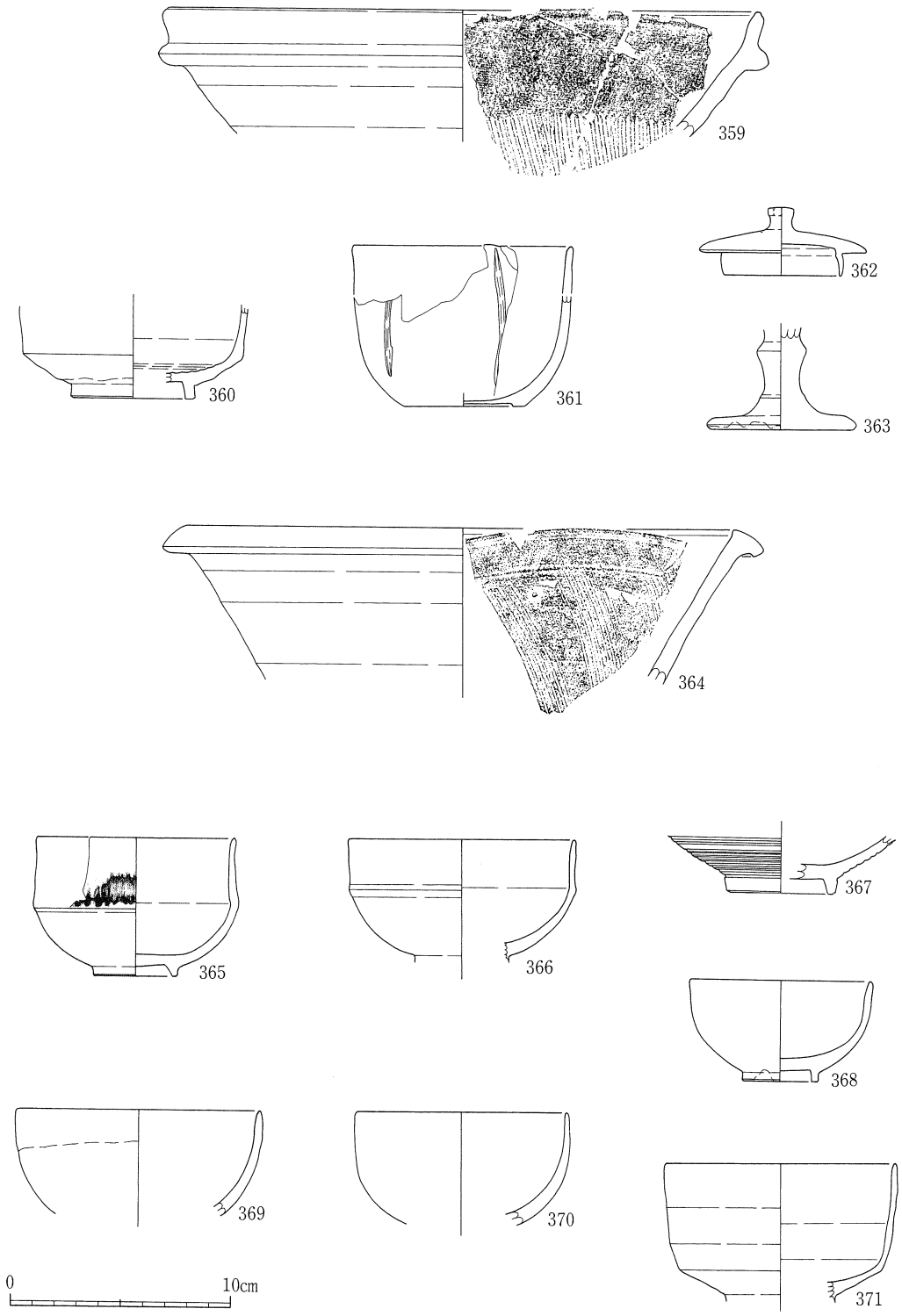


図21　二の丸跡第５地点出土陶器(2)
Fig. 21 . Glazed ceramics from NM5(2)

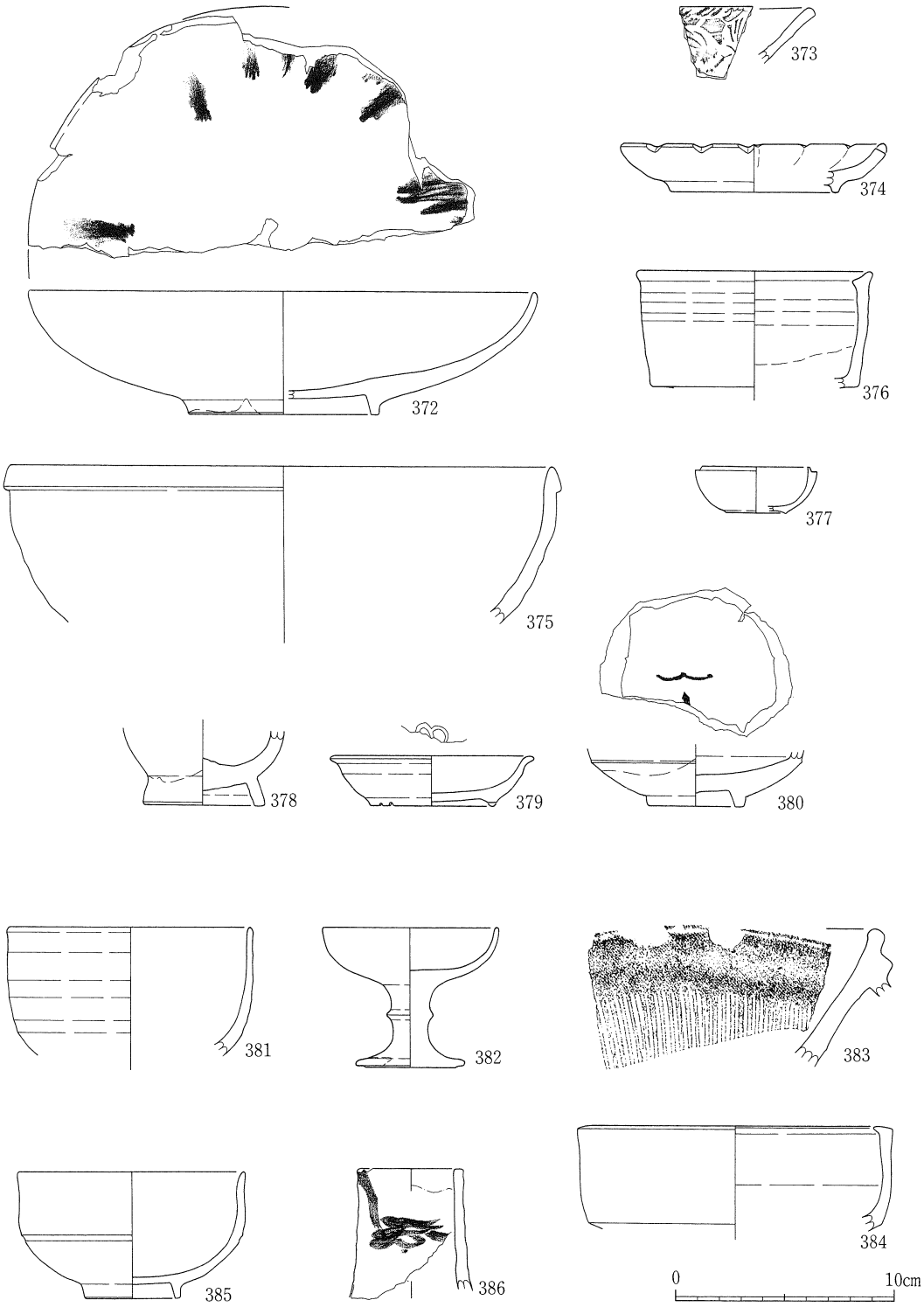


図22　二の丸跡第５地点出土陶器(3)
Fig. 22　Glazed ceramics from NM5(3)

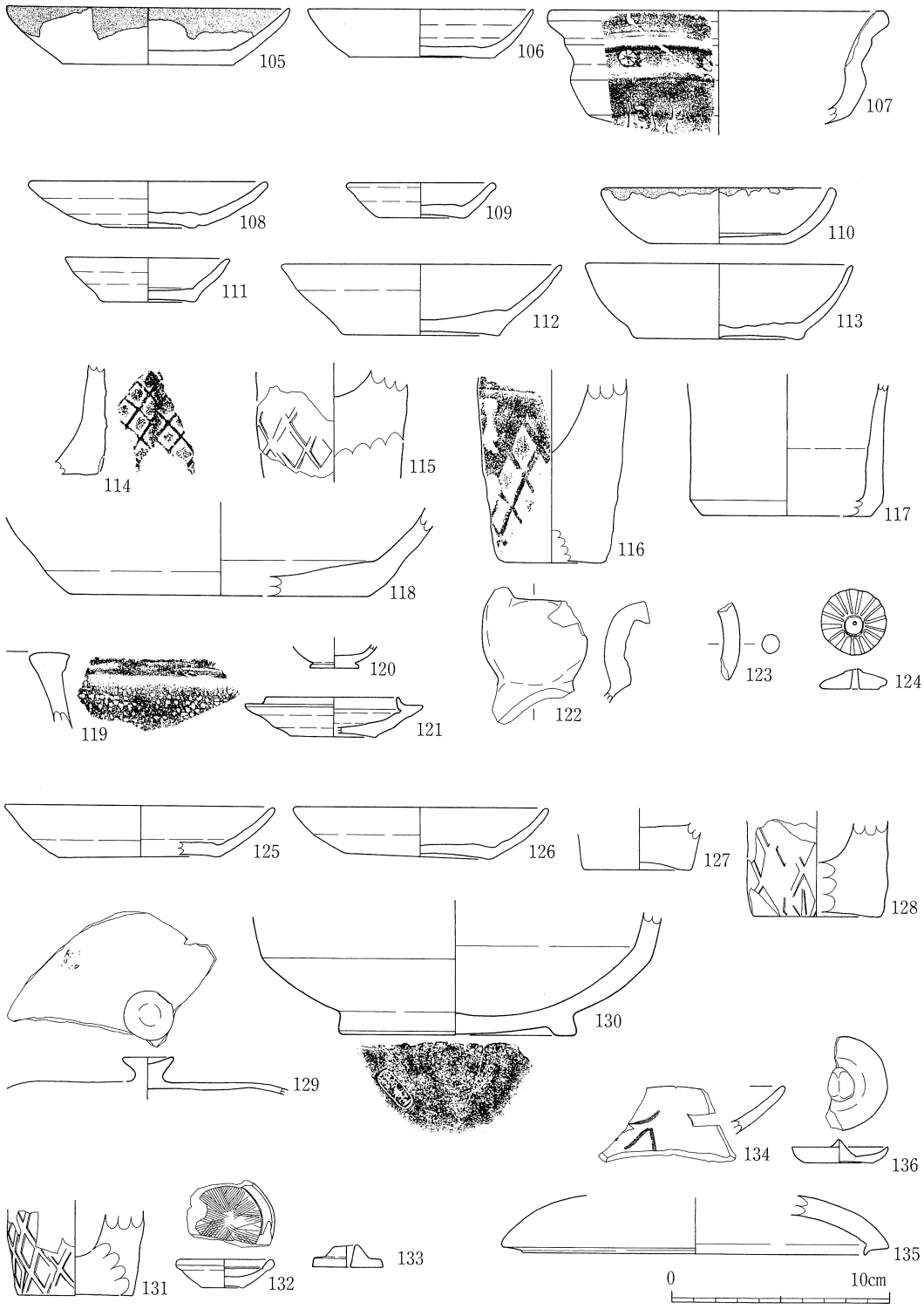


図23　二の丸跡第５地点出土土器・土製品
Fig. 23　Ceramics and clay objects from NM5

⑶ 瓦（図24～27、図版９～12、表５・13～20）

集計の方法及び資料化の基準は、本体区の報告と同様である。本体区の出土品で、年報６で報告もれのものもあわせて報告する。

各区ごとに出土傾向を概観すると、10区は全体に量が多いが、特に２ａ層に多く、Ⅲ～Ⅴ層がそれに次ぐ。12区では３層に最も多い。５・11区は全体に出土量が少ない。１区では３Ａ層に多い。２区は全体に量が多いが、大半が１層出土である。遺構では12区12号池、10区33号溝からややまとまった出土がある。種類としては平・丸・桟の３類が９割を占め、他に軒瓦、輪違い、熨斗瓦、板塀瓦、鬼瓦、袖瓦、谷丸瓦、谷瓦、棟瓦、仮称「Ｔ字瓦」がある。

各類の特徴

【軒丸瓦類】（図24、図版９、表13）

11・５区を除いて出土があるが、多くても３点と少ない。瓦当文様には三引両文、九曜文、連珠巴文がある。160は本体区８号溝（Ⅲｂ期）から出土の鳥伏間。同様のものが２号土坑から出土している。

【軒平瓦類】（図24、図版９、表14）

各区から出土があるが、10区に11点あり、１～２点の他区に比べ多い。瓦当文様には、三枚笹＋唐草１類（220）、雪持ち笹？＋唐草２類（171）、唐草３ａ類が認められ、本体区ではみられなかった無文のものもある。196は周縁部内縁が連弧状になるものである。

【軒桟瓦】（図24、図版９、表15）

10区33号溝（Ⅲｂ期）から、垂れ部に三引両文と唐草５類、小巴に三巴文の組合せのものが確認された（174）。

【平瓦類・丸瓦類】

各区から出土があり、平瓦類は10区２ａ層、２区１層に特に多い。全長のわかるものでは24.7～28.2cmのものがみられる。丸瓦類は10区Ⅴ層、２ａ層にやや多い。

【桟瓦】（図26・27、図版11・12、表16）

各区から出土があり、２区に多い傾向がある。167は全長39.0cmと長く、桟の弯曲が小さいものである。「宮」の字と漢数字を組み合わせた刻印を有するものが、10区以外の各区から出土しており、これまで知られていなかった「二五」「六□」「七□」の組合せが確認された。

【板塀瓦】（図26、図版12、表17）

山形の桟がつき、桟に直交する一辺に垂れのつく形状のものが確認された（177）。

【熨斗瓦】（図27、図版11、表18）

全形の明らかな２点はともに５区撹乱からの出土で、同大・同種のものである（208・209）。一短辺の両端に短い蒲鉾形の耳をつけ、中央に分割界線をいれる。釘穴には違いがあり、208は

耳近くにあるが209は同位置にみられない。

【輪違い】(図26、図版10、表19)

1・10・12区に出土があるがごく少量であり、全形が明らかなのは1点である(178)。

【その他の瓦】(図24～27、図版9・10・12、表20)

鬼瓦類

鬼瓦類は本体区・10区・12区から出土がある。161は弯曲のある破片で、外面に鱗状の文様があることから鯱と考えられる。162は周縁部の破片。163は半円形の抉りこみのあるもの、164は断面がV字状になる立体的な文様がある。165は縁辺が緩やかな山形を呈する薄手のものである。175は半截木瓜形の抉りこみのあるもの。176はやや平面的な雲形の文様が表現されたもので、側面には刻印がみられる。228も同様のものと考えられる。221はかなり厚手の平坦なもので、片面に十文字の刻線があり、2ケ所の釘穴がある。

仮称「T字瓦」

本体区のほか、10区から4点の出土がある。166は本体区8号溝(IIIb期)出土で、一端の両面から厚みを減じ、薄くしたところに釘穴を有するものである。

袖瓦

本体区報告もれの168は左側に垂れのつくものである。垂れ部分は欠損しているが、平瓦部の全形をうかがうことができる。7号溝(IV期)出土である。

谷丸瓦

10区・12区で1点ずつ出土している。179は幅12.1cmで平均的な丸瓦より3cm程小さい。

谷瓦

いずれも10区で3点が確認された。水切り溝を有するもの(181)、斜辺を片側から斜めにそいでいるもの(182)等がある。いずれも弯曲がなく平坦で、どちらかの辺側に偏った位置に釘穴を有する。斜辺と他の辺のなす角度は各々異なっており、使用する部分にあわせて様々なものが作られていたと考えられる。

瓦加工品

183は緩やかな弯曲をもつ瓦を素材として割り、凸面と左右の側面を研磨したものである。側面は両側から研磨されて尖っている。

刻印のある瓦

桟瓦の項で先に述べた「宮」刻印以外の刻印は、平瓦類と鬼瓦類に認められた。本体区と同様「紋様型」と「文字型」の双方がみられ、前者では一重の円のみのものが多い。後者では文字のみの「モ」(207)がある。184(「大」?)と190(「田」ないし四つ目結)は文字とも紋様とも判然としないもので、本体区では認められなかったものである。

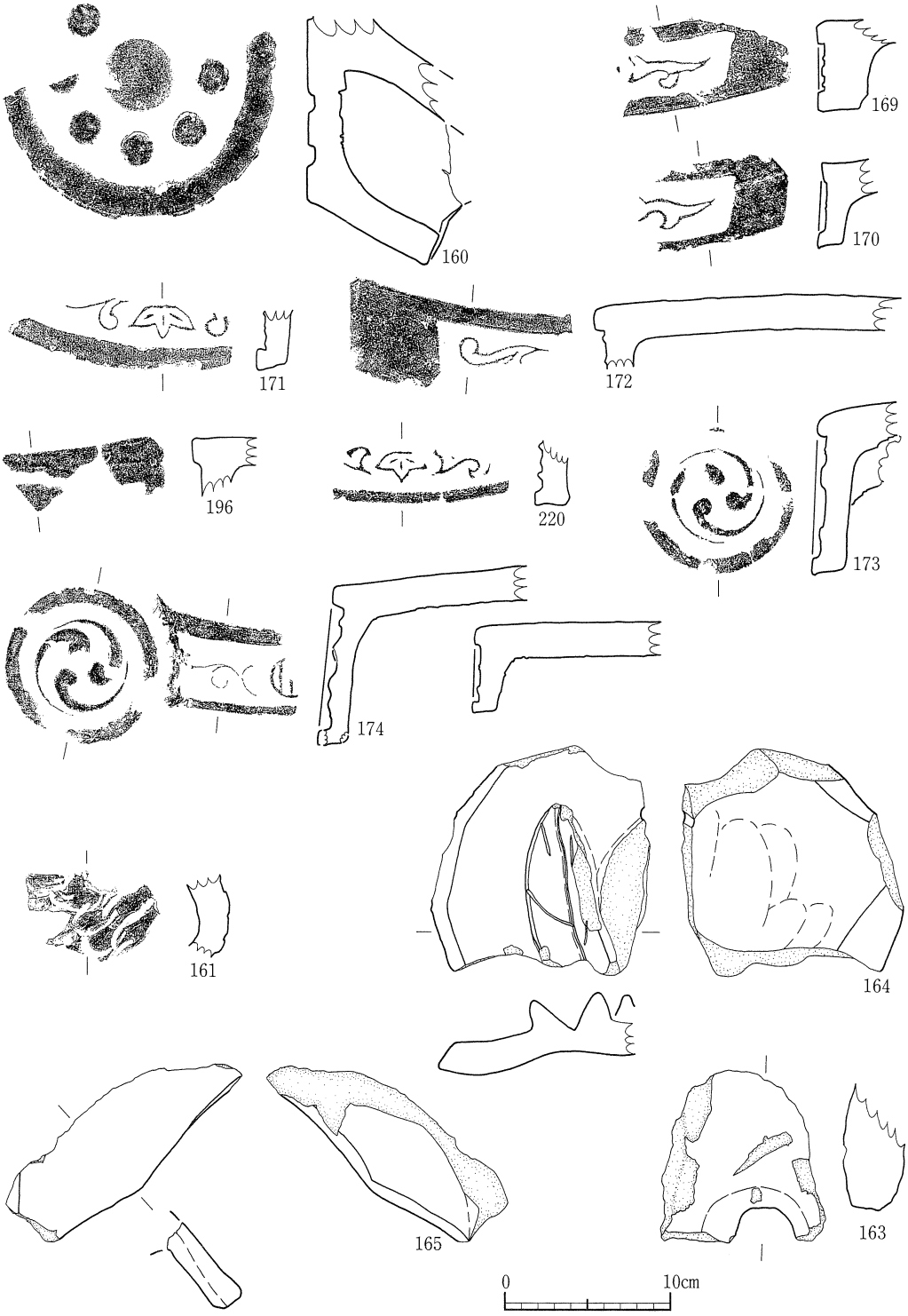


図24　二の丸跡第５地点出土瓦(1)
Fig. 24　Roof tiles from NM5(1)

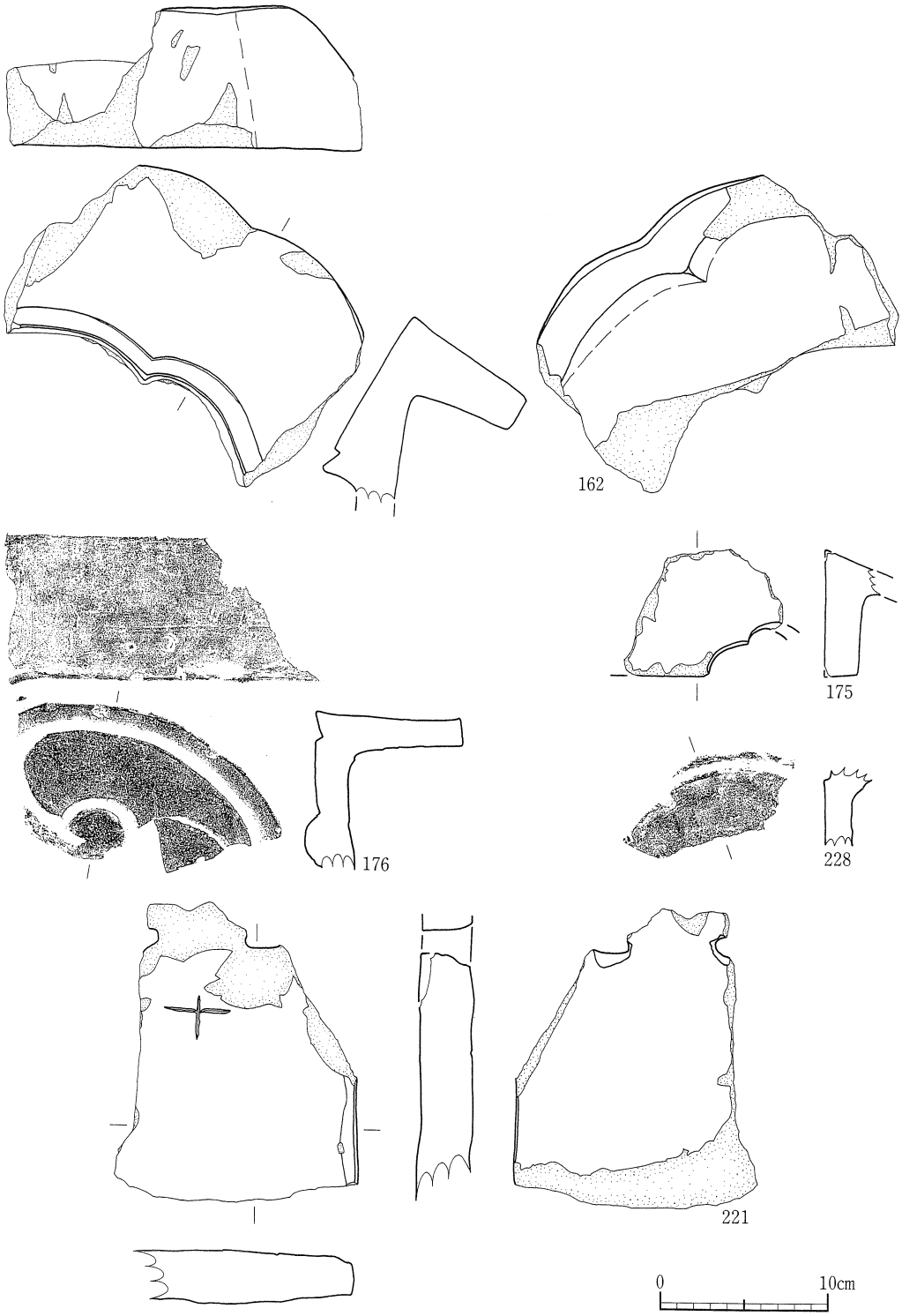


図25　二の丸跡第５地点出土瓦(2)
Fig. 25　Roof tiles from NM5(2)

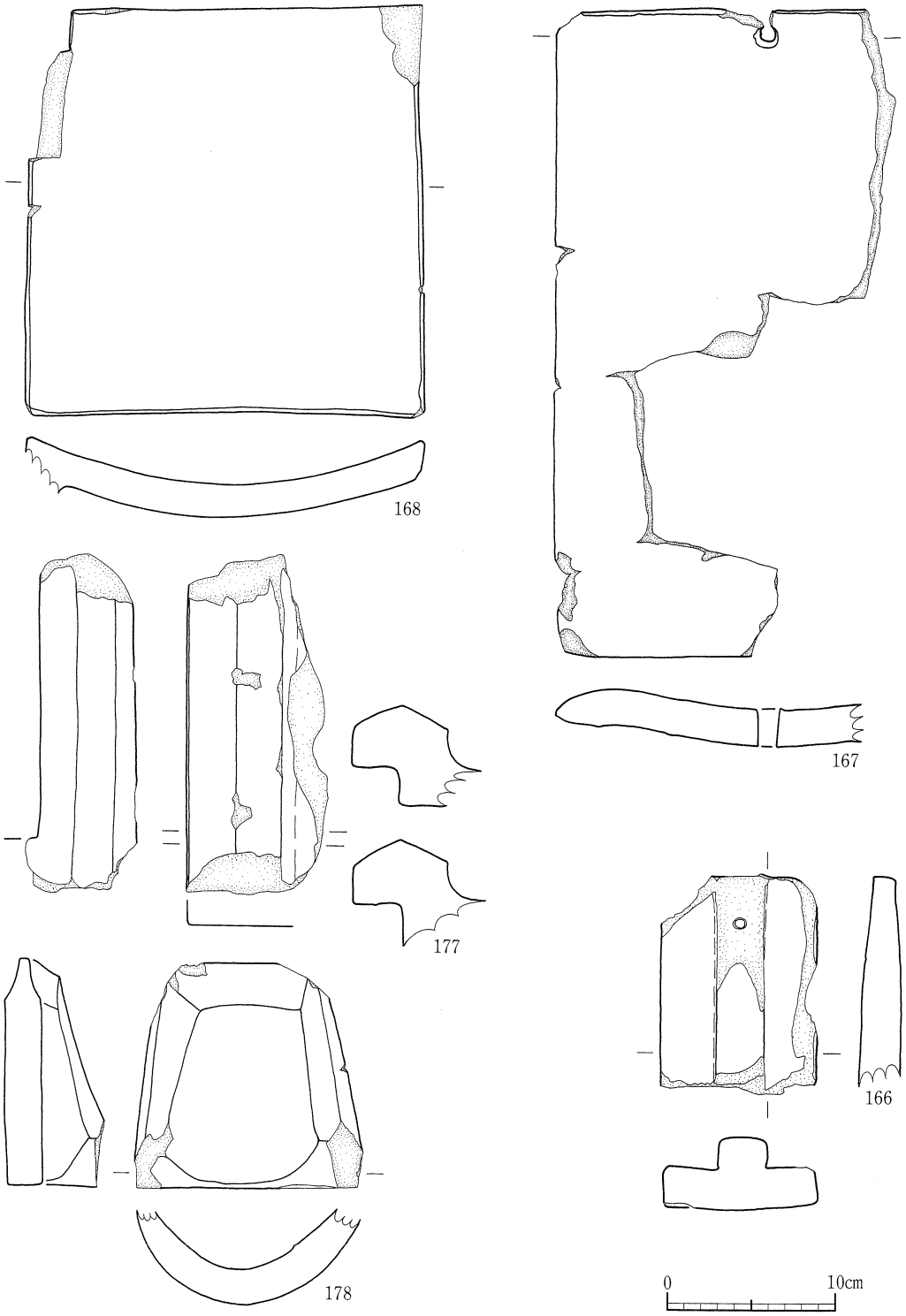


図26　二の丸跡第５地点出土瓦(3)
Fig. 26　Roof tiles from NM5(3)

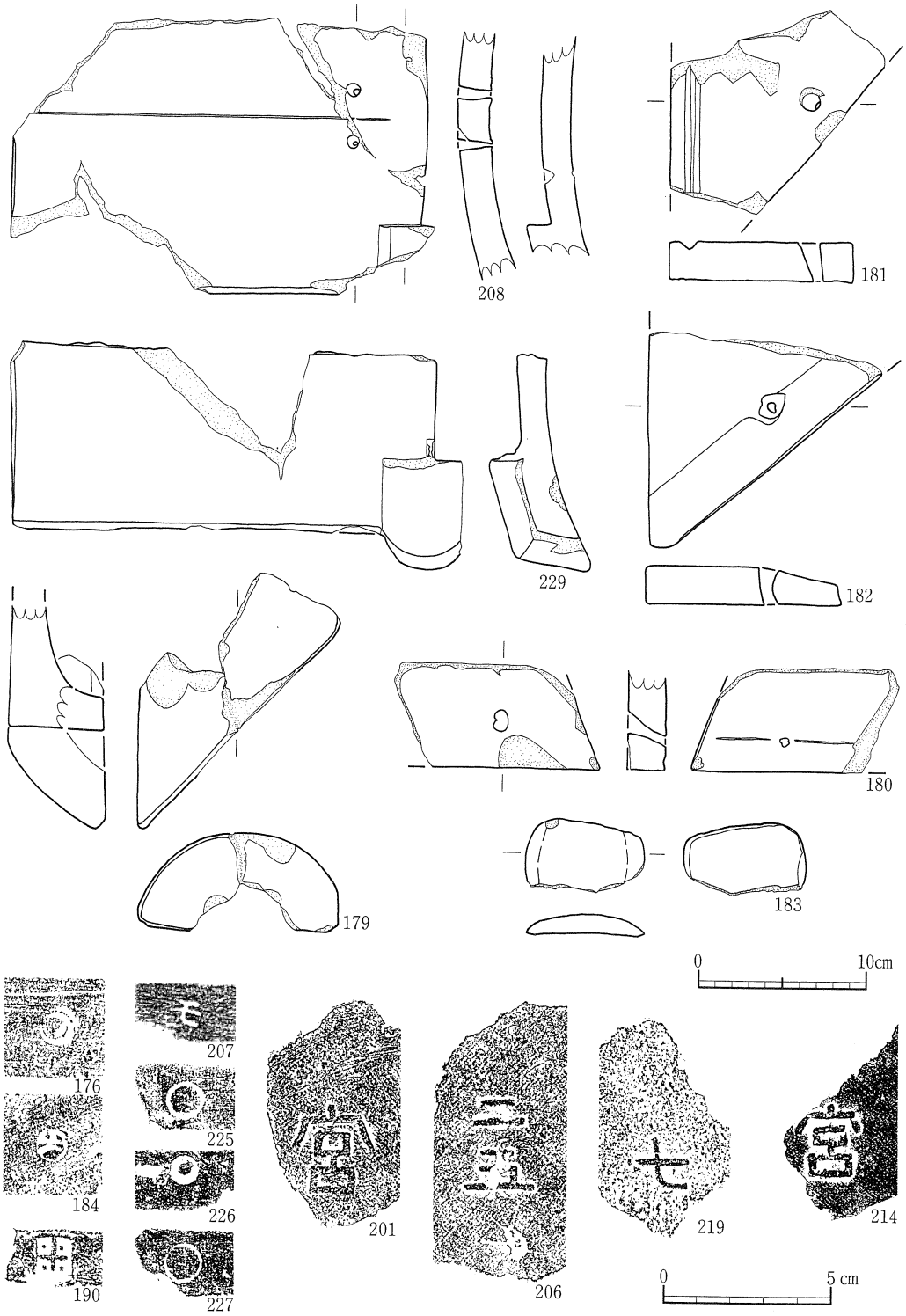


図27　二の丸跡第５地点出土瓦(4)
Fig. 27　Roof tiles from NM5(4)

⑷　木製品（表６）

元禄年間の二の丸造成に伴う整地層と考えられる10区のⅣ層、１ｂ期に比定される12区の12号池から、比較的まとまった量の木製品が出土している。図化した遺物はない。

⑸　金属製品（図28、図版８、表７・21～23）

本体区同様、釘をはじめ、鉄製品が主体を占める。古銭と煙管を図化した。

【古銭】（図28、図版８、表21）

８点出土している。銭名が判読できたものは、全て寛永通宝である。

【煙管】（図28、図版８、表22・23）

吸口３点、雁首５点が出土している。観察項目、分類基準は、第５地点本体区の報告（年報６）に依拠している。吸口は、全て一本の管で作られている。元禄年間の盛土と考えられる、Ⅴ層出土の雁首は、２点とも１本の管で製作され、脂返しが上方に大きく弯曲する（ⅡＢ類）。

⑹　その他の遺物（表７）

上記の遺物以外に、ガラス製品、石製品、皮製品、土管、レンガが出土しているが、図化した遺物はない。これらの大部分は、Ⅳ期の遺構や、近現代の盛土から出土している。

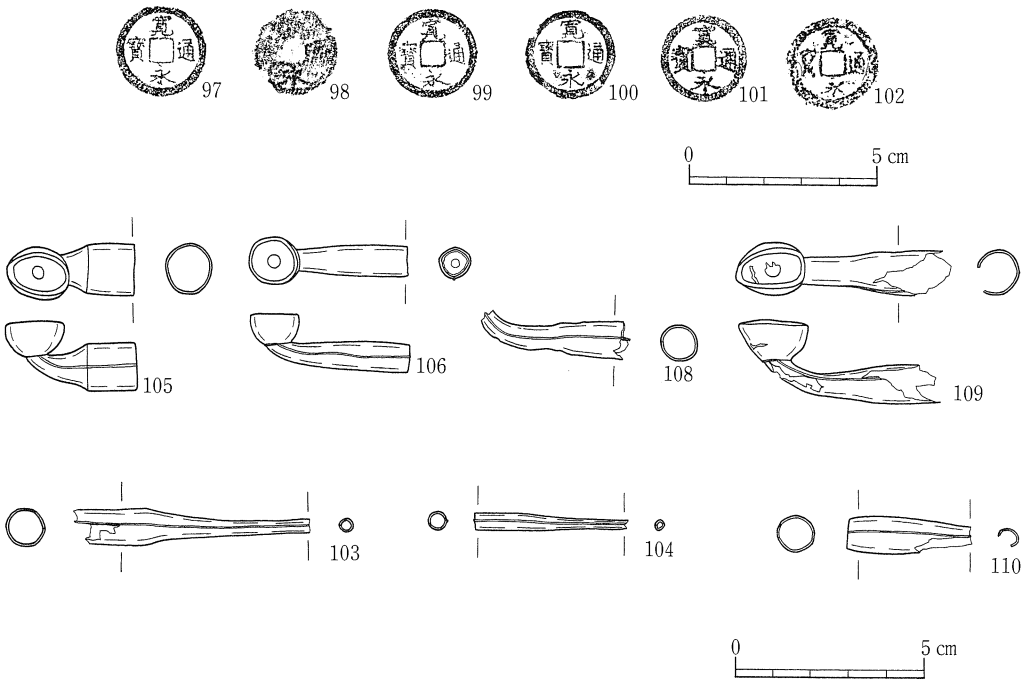


図28　二の丸跡第５地点出土古銭・煙管
Fig. 28　Coins and pipes from NM5

表2　二の丸跡第5地点出土磁器集計表

Tab. 2　Distribution of porcelains at NM5

区・層・遺構	大碗	中碗				小碗				碗不明	皿			碗皿識別不明	袋物				蓋	その他	不明
		丸形	筒形	端反	広東	丸形	筒形	端反	広東		極小	小中	大		水注	瓶類	その他	不明			
10区1層		21		4		4		2		34		7		36		2	壺2急須1	3	2	猪口4	7
2a上層						1				3				2						紅猪口1	1
2a層	1	1								20		7	1	15				1		猪口2 小坏1 ウガイ茶碗1	8
2b層		1								3		1						1			
III層		7				4		1		6		1		3		2					
IV層		1						1		2		1	1	1							
V層	1	8		1		5		1		16		3		10				5		仏飯1 猪口1 折湾形碗1	1
Vb層																					
VII層																					
攪乱						1				9		1		3		1		1	1	仏飯器1	
不明		7								5		2	1	3						1	1
32号溝		1				1						1		1							
IV期のピット																					
33号溝		1				1				1											
IIIb期のピット																					
34号溝	1											3		1				1			
35号溝																					
IIIa期のピット						1														小坏1	
Ib期のピット																					
10区合計	3	48		5		18		5		99		27	3	75		5	3	12	3	15	18
12区1層		1																			
2層		3										1		1							
3層		3								1		3		1		2					
4層																					
攪乱																					2
不明																					
IV期のピット																					
12号池								1				1									
12区合計		7						1		1		5		2		2					2
11区1層	2	4				3	1			25	1	8	1	29	1		壺1	1		水鉢？1 猪口1	10
2層										3				1				1		小坏1	
III層										1				2							
IV層																		1		猪口1 人形？(鷹)1	
A層										3				2				1			
攪乱		3		2		1				11		1		12			小壺1	3			
不明																					
36号溝										1											
IV期のピット		1								2		1									
11区合計	2	8		2		4	1			46	1	10	1	46	1		2	7		5	10
1区1層		3				2		1		29	2	5		28		2		2	1	鉢2 箸置1	11
2層														1							
3A層	1	4				3				9	1	5	1	9				3		猪口2 小猪口1 鉢1 小坏1	
3B層																					
3層		1								1		1									
4層上面										2								1			
4a層										3											
4b層										2				3				1			
攪乱						1				2				2			1			猪口1	2
不明		1								9		1		8				1			2
石敷												1									
8号建物跡										1				2							
37号溝												1		1							
1区合計	1	9				6		1		57	3	14	1	54		2	1	8	1	9	15
2区1層	2	3				5				50	2	11	1	93				15	10	猪口1 小鉢1	28
2層										3				4							
4層																					
攪乱	1					4				7		3		12				2		猪口2	3
不明						2				2				9							
2区合計	3	3				11				62	2	14	1	118				17	10	4	31
5区1層	2	2				1				2		1		1							
2層																					
東部3層上面																					
東部5層																					
西部石敷下層																					
攪乱		1										2		4				2			2
不明												1		1					1		
5区合計	2	3				1				2		4		6				2	1		2

表3　二の丸跡第5地点出土陶器集計表

Tab. 3　Distribution of glazed ceramics at NM5

区・層・遺構	大碗	中碗 丸形	中碗 その他	中碗 不明	小碗	碗不明	小中鉢	擂鉢	鉢不明	極小皿	小中皿	大皿	碗皿識別不明	土瓶身	土瓶蓋	壺瓶	袋物不明	甕	灯火具	土鍋	行平鍋	鍋蓋	その他	不明
10区1層	4	1			3	25	2	16	1		20	9	68	8	1	2	6	6		1			5	26
2a上層						5		1			5		9											
2a層	4	2	1			27		8	1		2		35	1	1	1	3			4			3	6
2b層						2							2				2							1
III層		1	1		1	20		4	1		6	2	15	1		1	1	1		2			5	9
IV層		4				1							4					1						2
V層	1	2				12		6					9							1			2	6
Vb層																								
VII層																							1	3
撹乱		1						1					3											1
不明			2			13		1			1		1		1								2	3
32号溝								1																2
IV期のピット																								
33号溝		1																						1
IIIb期のピット																								
34号溝																							1	
35号溝																								
IIIa期のピット	1					3											1							2
Ib期のピット							1																	1
10区合計	10	12	4		4	108	3	38	3		34	11	146	10	3	4	13	8		8			19	63
12区1層											7		6											1
2層											1		1											
3層						1		2					15											3
4層													3											
撹乱																								
不明																								
IV期のピット																							1	
12号池		1						1					1										1	1
12区合計		1				1		3			8		26										2	5
11区1層	1	2				2		1			3		10	3		1							仏飯器等4	7
2層													1	2										
III層						2		2			1			1		1								1
IV層				1																				1
A層								2			1		5							1				1
撹乱	1	4		1		7		2			2	1	4	2				1						6
不明																								
36号溝																								
IV期のピット																								
11区合計	2	6		2		11		7			7	1	20	8		2		1		1			4	16
1区1層	1		1	1		7		1	1		1		3	1				1		1	1			6
2層													3											
3A層	2	4	4			13	2	1	1		4	1	12	2								2	蓋1	6
3B層						1																		
3層		1				3					1		6											
4層上面						3							2	3										
4a層													1											1
4b層				1		1							3	1										2
撹乱						1																		
不明		1	2		1	7				1	1		3											5
石敷																								
8号建物跡												1					1						合子(身)1 火入1	1
37号溝		1																						
1区合計	3	7	7	2	1	36	2	2	2	1	7	2	33	7			1	1		1	1	2	3	21
2区1層		1	1		1	5		8	10	2	1		19	13	1	1	3			3		1	仏飯器1 取手1 下金1	55
2層					1	4		1	2				2	3	1									5
4層																							1	
撹乱						6			2		2		6	2						1				6
不明	1					1	1		1		1			1						1				1
2区合計	1	1	1		2	16	1	9	15	2	4		27	19	2	1	3			5		1	4	67
5区1層		1				1		1					3				1							
2層													1										仏飯器1	
東部3層上面																								
東部5層		1																						
西部石敷下層																								
撹乱						2							4	1										2
不明													2											2
5区合計		2				3		1					10	1			1						1	4

表4　二の丸跡第5地点出土土器・土製品集計表

Tab. 4　Distribution of ceramics and clay objects at NM5

区・層・遺構	土師質土器							瓦質土器				軟質施釉土器				土製品
	皿	耳皿	塩壺	鉢類	その他	不明	小計	鉢類	その他	不明	小計	焙烙	その他	不明	小計	
10区1層	365			3	灯火具1	13	382	5		1	6	2	鈴？1		3	人形(猫)2
2a上層	16			1			17	1			1					
2a層	183	1		3		3	190	1		2	3					
2b層	9						9									
III層	298			6	蓋2	11	317									不明1
IV層	118					1	119									
V層	923		2	1		6	932							1	1	
Vb層	13						13									
VII層	1						1									
撹乱	15						15									
不明	95	1	1	2		2	101	1			1		蓋？1		1	
32号溝	20						20									
IV期のピット																
33号溝	12			1			13									
IIIb期のピット	24						24									
34号溝																
35号溝	1						1									
IIIa期のピット	30					1	31									
Ib期のピット																
10区合計	2123	2	3	17	3	37	2185	8		3	11	2	2	1	5	3
12区1層	1						1									
2層	5						5							1	1	
3層	32			2			34									
4層	10						10			1	1					
撹乱						2	2									
不明																
IV期のピット																
12号池	58						58									
13号池																
12区合計	106			2		2	110			1	1			1	1	
11区1層	8			1			9	2			2	1			1	
2層	13						13									
III層	17					2	19									
IV層	8						8									
A層	11						11									
撹乱	12						12									
不明						4	4									
36号溝	1						1									
IV期のピット	7					1	8									
11区合計	77			1		7	85	2			2	1			1	
1区1層	44		1			6	51	1			1	1			1	1
2層	3					1	4									
3A層	77					2	79									
3B層	6						6									
3層	49		1			1	51									
4層上面	43			1		1	45		蓋1		1					
4a層																
4b層	15					1	16									
撹乱	12			1		1	14									
不明	38				蓋1	4	43									
石敷	2						2									
8号建物跡	49						49									
37号溝	42					1	43									
1区合計	380		2	2	1	18	403	1	1		2	1			1	1
2区1層	7			3		10	20	1		1	2					
2層	33						33	1			1					
4層																
撹乱	24						24	1		1	2					
不明						1	1	1			1					
2区合計	64			3		11	78	4		2	6					
5区1層	1						1									
2層																
東部3層上面	1			1			2									
東部5層																
西部石敷下層	1						1									
撹乱	10				1	3	14									
不明	6						6									
5区合計	19			1	1	3	24									

表5　二の丸跡第5地点出土瓦集計表

Tab. 5　Distribution of roof tiles at NM5

カッコ内は重量kg

区・層・遺構	平瓦類	丸瓦類	桟瓦類	軒平瓦類	軒丸瓦類	面戸瓦	輪違い	その他の瓦	不明瓦
10区1層	45(5.7)	12(1.1)					2(0.3)	15(4.4)	1(0.01)
2a上層	39(4.1)	5(0.7)	1(0.6)	2(0.27)					4(0.04)
2a層	116(15.975)	18(2.525)	3(0.48)	2(0.29)	1(0.7)		1(0.62)		12(0.1)
2b層	37(4.59)	9(0.66)							
Ⅲ層	54(12.65)	8(1.63)	1(0.38)					1(0.38)	2(0.06)
Ⅳ層	46(5.59)	5(0.75)		2(0.36)				1(0.645)	2(0.055)
Ⅴ層	87(8.44)	29(3.335)	2(0.22)	2(0.29)	1(0.05)		1(0.125)	1(0.04)	8(0.083)
Ⅴb層									
Ⅶ層									
撹乱									
不明	88(10.993)	9(2.14)	8(1.52)	1(0.6)				1(0.19)	14(0.46)
32号溝	5(1.115)	1(0.27)		1(0.9)					
Ⅳ期のピット									
33号溝	24(4.631)	3(0.39)		1(0.06)				1(0.25)	2(0.04)
Ⅲb期のピット	2(0.155)								
34号溝	16(2.515)	3(0.323)							
35号溝	1(0.03)								
Ⅲa期のピット	3(0.21)	1(0.04)							
Ⅰb期のピット	2(0.465)								
10区合計	565(77.159)	103(13.863)	15(3.2)	11(2.67)	2(0.22)		4(1.045)	20(5.905)	45(0.848)
12区1層	1(0.1)								
2層	17(3.5)	2(0.08)	2(0.1)				1(0.14)		3(0.1)
3層	75(8.4)	9(0.68)	6(0.46)		2(0.3)			1(0.3)	15(0.4)
4層	17(1.43)	6(0.6)	2(0.08)	1(0.1)					2(0.09)
撹乱	24(1.4)	1(0.04)	6(0.6)						13(0.3)
不明									
Ⅳ期のピット									
12号池	31(5.1)	12(2.3)	1(0.08)		1(0.03)			2(1.05)	6(0.14)
12区合計	165(19.93)	30(3.7)	17(1.32)	1(0.1)	3(0.33)		1(0.14)	3(1.35)	39(1.03)
11区1層	22(1.77)	2(0.05)	8(0.65)					2(0.07)	7(0.90)
2層	18(1.91)	1(0.07)	1(0.17)	1(0.06)					3(0.06)
Ⅲ層	7(0.9)	1(0.17)							
Ⅳ層	11(1.345)	1(0.045)							
A層									
撹乱									
不明									
36号溝	4(0.25)								
Ⅳ期のピット	12(1.09)			1(0.09)					
11区合計	74(7.265)	5(0.335)	9(0.82)	2(0.15)				2(0.07)	10(0.96)
1区1層							1(0.094)		1(0.05)
2層	18(0.825)	2(0.18)							
3A層	69(7.115)	8(1.013)	1(0.470)	1(0.021)				2(0.188)	8(0.18)
3B層	4(0.195)	1(0.055)							
3層	3(0.145)	2(0.4)							
4層上面	23(2.555)	7(0.745)			1(0.060)				2(0.01)
4a層	12(0.94)				1(0.12)				
4b層	24(2.1)	3(0.257)							4(0.04)
撹乱	24(1.885)	1(0.025)	3(0.507)						1(0.015)
不明	35(2.965)	10(2.305)			1(0.043)				4(0.01)
石敷	1(0.040)								
8号建物跡	5(0.305)	3(0.445)							2(0.036)
37号溝	12(1.91)	1(0.205)							9(0.026)
1区合計	230(20.98)	38(5.63)	4(0.977)	1(0.021)	3(0.223)		1(0.094)	2(0.188)	30(0.317)
2区1層	431(19.93)	3(0.225)	31(2.475)	2(0.215)					
2層	5(0.79)		1(0.04)						
4層									
撹乱	52(6.92)	1(0.065)	1(0.125)		1(0.155)				
不明	72(3.6)		11(0.7)						
2区合計	560(31.24)	4(0.29)	44(3.34)	2(0.215)	1(0.155)				
5区1層									
2層	3(0.18)			1(0.16)					
東部3層上面									
東部5層									
西部石敷下層	2(0.19)								
撹乱	11(0.74)	2(0.3)	2(0.125)						
不明	63(6.255)	17(1.9)	4(0.86)	1(0.035)				5(0.466)	
5区合計	79(7.365)	19(2.2)	6(0.985)	2(0.195)				5(0.466)	

表6　二の丸跡第5地点出土木製品・漆塗製品集計表

Tab. 6　Distribution of wooden implements at NM5

区・層・遺構	木製品					漆塗製品		木簡	杭		加工木				木羽(g)
	下駄	箸	栓	その他	不明	漆碗	その他		角材	丸材	板材	角材	丸材	小片	
10区1層		1									11	16			
2a上層															
2a層															
2b層															
III層															
IV層		1									12			1	
V層															
Vb層															
VII層															
撹乱															
不明															
32号溝															
IV期のピット											2				
33号溝															
IIIb期のピット															
34号溝															
35号溝															
IIIa期のピット											3				
Ib期のピット															
10区合計		2									28	16		1	
12区1層															
2層															
3層											12	1	1	1	
4層															
撹乱											3				
不明															
IV期のピット															
12号池		17		楔3 蓋？1 不明1							66	16	2	24	
12区合計		17		5							81	17	3	25	
11区1層															
2層															
III層															
IV層															
A層															
撹乱															
不明															
36号溝															
IV期のピット															
11区合計															
1区1層															
2層															
3A層											3				
3B層															
3層															
4層上面															
4a層											1				
4b層															
撹乱															
不明															
石敷															
8号建物跡															
37号溝															
1区合計											4				
2区1層											3	2			
2層															
4層															
撹乱															
不明															
2区合計											3	2			
5区1層															
2層															
東部3層上面															
東部5層															
西部石敷下層															
撹乱															
不明															
5区合計															

表7　二の丸跡第5地点出土その他の遺物集計表

Tab. 7　Distribution of various implements at NM5

区・層・遺構	金属製品								ガラス製品			石石製器品	皮製品	ボタン	土管	レンガ
	古銭	煙管	釘	鉄製品	銅製品	銃弾	薬莢	その他	瓶(ビール)	板(溶融)	その他					
10区1層	寛永通宝1	雁首1	洋3	鎹1 不明2	釘等3	1	3	不明3	18		2	不明1				10
2a上層																
2a層				不明3				不明1	7	1	1		1			3
2b層																
Ⅲ層		雁首1		不明1								不明1				
Ⅳ層									1							
Ⅴ層		雁首2	和2	不明1	不明2				1							
Ⅴb層																
Ⅶ層				不明1												
撹乱			洋3	和鋏1		1										
不明																
32号溝									4							
Ⅳ期のピット																
33号溝																
Ⅲb期のピット																
34号溝																
35号溝																
Ⅲa期のピット				不明1												
Ⅰb期のピット																
10区合計	1	4	洋6 和2	11	5	2	3	4	31	1	3	2	1			13
12区1層																
2層																
3層										1						
4層																
撹乱																
不明																
Ⅳ期のピット																
12号池		吸口1														
12区合計		1								1						
11区1層			洋2 和2	不明1		1	1		1							
2層									1	2						
Ⅲ層		雁首1														
Ⅳ層			和1													
A層																
撹乱			洋4 不明1		1							硯1				
不明																
36号溝																
Ⅳ期のピット								不明1								
11区合計		1	洋6 和3 不明1	1	1	1	1	1	2	2		1				
1区1層			洋10 不明1	鎹1 不明3					24	17(1)	3				1	2
2層			洋1	不明1												
3A層	寛永通宝1		洋2		不明1				1			不明1				
3B層	不明3		不明1													
3層				不明2												
4層上面			不明1					1			1					
4a層																
4b層				不明2					1							
撹乱	寛永通宝1			不明1					7							
不明		吸口1		不明1												
石敷				不明1												
8号建物跡			洋1	不明1					3			不明2				
37号溝			和1	不明1								板1				
1区合計	5	1	洋14 和1 不明3	14	1			1	36	17(1)	4	4			1	2
2区1層			洋32 和1	和鋏・鎹等25	不明3				101	47(26)	4	板2				
2層																
4層																
撹乱				歯車1					4	(1)						
不明																
2区合計			洋32和1	26	3				105	47(27)	4	2				
5区1層			洋1	不明1					2							
2層									4							
東部3層上面																
東部5層																
西部石敷下層																
撹乱				針金1 不明1												
不明																
5区合計			洋1	3					6							

表8　二の丸跡第5地点出土磁器観察表

Tab. 8　Notes on porcelains at NM5

登録番号	出土場所	器種	口径	底径	器高	文様等	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
519	10区 L11 2a層	うがい茶碗	16.4	—	—	内面色絵(青・黒) 鳳凰文	普通	肥前	17C末～18C	貫入顕著	18	4
520	10区 L7・6 2b層	中型丸碗	11.4	4.9	7.2	一屋山水文	粗	肥前	18C	器壁厚い 貫入顕著	18	4
521	10区 L10 III層	中型丸碗	10.0	3.9	5.1	団円ちらし文	やや密	肥前	18C	貫入顕著	18	4
522	10区 L10 III層	小型丸碗	9.1	3.6	4.8	雨降り文	普通	肥前	18C	貫入顕著	18	4
523	10区 L11 III層	小型丸碗	8.0	—	—	色絵(赤) 若松文	やや密	肥前	18C	貫入顕著	18	4
524	10区 L11 IIIa層	小型丸碗	7.8	3.2	3.7	牡丹文	やや粗	肥前	18C	貫入顕著	18	4
525	10区 L16 V層	中型丸碗	10.6	—	—	雪に梅花文	やや密	肥前	18C	くらわんか手	18	4
526	10区 L16 V層	中型丸碗	11.0	4.4	6.3	山に三階松文 高台内に文様か	やや密	肥前	18C		18	4
527	10区 L10 2a層	小坏	5.5	2.5	3.4	草花文	やや粗	肥前	18C		18	4
528	11区 C11 2a層	小坏	6.2	2.4	2.7	山水文	やや密	肥前	18C末～19C前		18	4
529	10区 P468 埋1層	小坏	6.3	2.7	2.2	笹葉文	やや粗	肥前	18C末～19C前		18	4
530	10区 L11 2a層	小型猪口	5.0	3.6	4.3	花唐草文 高台内角渦「福」銘？	やや密	肥前	18C末～19C前		18	4
531	10区 L11 2a層	大皿	—	17.8	—	染付青磁 山水文 高台内「大明成化年製」銘	普通	肥前	18C	円錐ピン跡5箇所	18	4
532	10区 L10 IV層	大皿	—	6.8	—	青磁 印花文	普通	中国	不明	高台内放射状削り	18	4
533	11区 P483 埋1層	中皿	—	8.1	—	蛸唐草文 見込円松竹梅文 高台内「富貴長春」銘	やや密	肥前	19C前半	蛇ノ目凹型高台	18	4
534	11区 D15 IV層	人形？(鷹)	—	—	—		普通	肥前	17C末～18C		18	4
535	1区 3A層	猪口	6.7	4.7	5.9	草花文	やや粗	肥前	18C		19	4
536	1区 3A層	小坏	5.8	3.1	3.2	梅枝文	やや密	肥前	18C		19	4
537	1区 3A層	小型猪口	4.9	3.2	3.0	草花文	やや密	肥前	18C後半		19	4
538	1区 3A層	中皿	—	8.0	—	鳥にソテツ・若松文 外面骨描き唐草文 高台内二重角「福」銘	やや密	肥前	18C	円錐ピン跡1箇所	19	4
539	1区 37号溝	中皿	14.1	8.7	4.5	区画 雪持ち笹に蛇篭草花文 外面唐草文	粗	肥前	18C		19	4
540	1区 3層	中皿	19.9	11.6	2.8	花唐草に見込手描き五弁花 外面唐草文 高台内二重角渦「福」銘	粗	肥前	18C	円錐ピン跡1箇所	19	4
541	2区 1d層	中皿	16.9	7.9	3.9	笹文窓絵区画唐草文 見込五弁花(コンニャク版) 外面唐草文	粗	肥前	18C	高台内「□□年□」銘	19	5
542	2区 1b層	蓋	4.8	4.5	1.8	上面に鉄釉	やや密	不明	19C後半以降		19	5
543	12区 2層	小皿	10.3	6.3	1.8	楼閣山水文 外面唐草文	普通	肥前	18C後半		19	5
544	12区 3b層	小皿	13.3	7.2	2.8	草花文？	粗	肥前	17C中～後	生掛け 漆継ぎ	19	5
545	12区 12号池 埋3層	小皿	13.2	4.9	3.9	草文	粗	肥前	17C末～18C前	見込蛇ノ目釉剝ぎ	19	5
546	12区 3b層	燭徳利	—	8.0	—		やや密	不明	19C		19	5
547	10区 不明	中型半球碗	11.3	4.0	3.9		普通	肥前	18C		19	5
353	10区 L10 V層	中型丸碗	—	4.8	—	団円文	粗	肥前	17C中		20	5

表9　二の丸跡第5地点出土土師質土器皿観察表

Tab. 9　Notes on ceramic plates at NM5

登録番号	出土場所	口径	底径	器高	調整			回転方向	付着物	備考	図	図版
					内面	体部外面	底部外面					
105	本体区 L18 VII層下層	13.0	7.8	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	右	口縁部にタール状		23	8
106	本体区 K18 VII—6層	10.4	6.6	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	右	なし		23	8
108	10区 L7・6 2b層	10.6	4.2	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	右	なし		23	8
109	10区 L10 III層	6.7	4.0	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	右	なし		23	8
110	10区 L11 III層	10.4	6.5	2.6	ロクロナデ	全体ミガキ		不明	口縁部に煤		23	8
111	10区 L10 V層	7.4	4.2	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	左？	なし		23	7
112	10区 L10 V層	12.9	7.3	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	左	口縁部に煤		23	7
113	10区 L16 V層	12.2	7.4	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	右	なし		23	7
125	1区 不明	12.3	7.6	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	左	なし		23	8
126	1区 不明	11.5	6.7	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	右	なし		23	8
134	12区 12号池 埋2層	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	なし	体部内面に墨書	23	8

表10　二の丸跡第5地点出土土製品観察表

Tab. 10　Notes on clay objects at NM5

登録番号	出土場所	種類	長(長径)	幅(短径)	厚	備考	図	図版
122	10区 L・M18 1層	土人形(猫)	—	—	—	土師質 頭部(後頭部) 破片	23	8
123	10区 L10 III層	不明土製品	—	—	0.8	土師質	23	8
124	10区 L13 IV層	円盤形土製品	3.0	—	0.9	土師質 片面に菊花状の文様の型押し？ 中央に穿孔1	23	8
133	3区 表土	不明土製品	3.3	—	1.0	土師質 中央部が凸形で穿孔1	23	8

表11　二の丸跡第５地点出土陶器観察表

Tab. 11　Notes on glazed ceramics at NM5

登録番号	出土場所	器種	口径	底径	器高	文様等	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
346	10区 L９ 撹乱	中型丸碗	9.6	2.8	5.7	色絵(緑)草花文？	灰釉 貫入顕著	やや密	京・信楽	18C		20	5
347	10区 L11 2ａ層	中型筒形碗	9.4	—	—		灰釉 貫入顕著	粗	瀬戸・美濃	18C		20	5
348	10区 L11 V層	中型丸碗	9.6	4.0	6.7		灰釉 貫入顕著	やや密	不明	17C末～18C前		20	5
349	10区 L10 III層	中型腰折形碗	9.4	3.8	5.5		灰釉 貫入顕著	やや密	大堀相馬	18C		20	5
350	10区 L11 III層	蓋物	9.6	5.5	8.5		鉄釉	普通	不明	不明		20	5
351	10区 L10 IV層	中型丸碗	—	—	4.0	腰部刻線文	腰部・高台内鉄釉 他灰釉	やや密	大堀相馬	18C	貫入顕著	20	5
352	10区 L13 IV層	中型丸碗	9.2	—	—	色絵(青・緑・赤)あやめ文	灰釉 貫入顕著	密	京・信楽	18C		20	5
354	10区 L17 V層	中型丸碗	—	5.2	—	流し掛け(白釉)	鉄釉	粗	瀬戸・美濃	17C後半		20	5
355	10区 32号溝 埋３層	中型丸碗	10.3	4.4	6.1	腰部刻線文	腰部・高台内鉄釉 他灰釉	やや密	大堀相馬	18C	貫入顕著	20	5
356	10区 L８ １層	小皿	11.3	6.0	3.0		灰釉	粗	瀬戸・美濃	17C		20	5
357	10区 L11 2ａ層 1ｃ～1ｅ層	大鉢	—	11.4	—	刷毛目文	灰釉(白化粧)	普通	肥前	17C後～18C前		20	6
358	10区 L15 2ａ層	擂鉢	—	—	—		鉄釉	やや粗	不明	不明		20	6
359	10区 L11 IIIａ層	擂鉢	13.4	—	—		鉄釉	粗	不明	不明		21	6
360	10区 L11 IIIａ層	火入？	—	5.4	—		灰釉 貫入顕著	密	大堀相馬	不明		21	6
361	10区 L11 III層	不明	—	5.7	7.2		灰釉(白化粧)	粗	不明	不明		21	6
362	10区 L16 2ａ層	蓋(土瓶)	—	5.4	3.1		灰釉 貫入顕著	普通	不明	19C		21	6
363	10区 33号溝 埋２層	仏飯器	—	6.8	—		鉄釉	密	不明	不明		21	6
364	11区 C10 A層	擂鉢	12.7	—	—		鉄釉	普通	不明	不明		21	6
365	１区 ３A層	中型腰折形碗	9.1	3.7	6.3	流し掛け(鉄釉)	灰釉 貫入顕著	やや密	大堀相馬	18C		21	6
366	１区 ３A層	中型腰折形碗	10.4	—	—		灰釉 貫入顕著	やや密	大堀相馬	18C		21	6
367	１区 ４ｂ層	中型碗	—	5.0	—	腰部刻線文	内面灰釉 外面鉄釉	やや粗	大堀相馬	18C		21	6
368	１区 不明	小型丸碗	8.1	3.5	4.6		灰釉 貫入顕著	普通	不明	18C後～19C前		21	6
369	１区 ８号建物跡 柱３	中型丸碗	11.0	—	—		腰部鉄釉 他灰釉 貫入顕著	普通	大堀相馬	19C前半		21	6
370	１区 ８号建物跡 柱３	中型丸碗	9.4	—	—		灰釉 貫入顕著	普通	大堀相馬	18C		21	6
371	１区 ３A層	中型筒形碗	10.4	—	—		鉄釉	密	不明	不明		21	6
372	１区 ３A層	大皿	23.0	8.8	5.6	流し掛け(鉄釉)	灰釉 貫入顕著	やや粗	大堀相馬	18C		22	7
373	１区 ３A層	鉢	—	—	—	刷絵	灰釉 貫入あり	やや粗	瀬戸・美濃	18C		22	6
374	１区 ３A層	小皿	12.1	7.7	2.2		長石釉 貫入あり	粗	美濃	16C末		22	6
375	１区 ３A層	鉢	25.0	—	—		灰釉	粗	不明	不明		22	6
376	１区 ８号建物跡 柱３	火入	10.8	9.4	5.3		灰釉	やや粗	肥前？	不明		22	6
377	１区 ８号建物跡 柱３	合子(身)	10.8	9.4	5.3		灰釉 貫入顕著	密	京・信楽	不明		22	7
378	２区 １ｂ層	瓶類？	10.8	9.4	5.3		高台内外鉄釉 他灰釉	粗	不明	不明		22	7
379	２区 撹乱	小皿	9.0	5.8	2.3	見込印花文	灰釉 貫入あり	粗	瀬戸・美濃	17C前半	高台内輪トチン痕	22	7
380	２区 ４層	向付	—	4.2	—	見込鉄絵千鳥文	灰釉	粗	唐津	16C末		22	7
381	５区 東５ｃ層	中型丸碗	11.0	—	—		灰釉 貫入顕著	普通	瀬戸・美濃	17C後～18C前		22	7
382	５区 東２ｉ層	仏飯器	7.9	4.1	6.4		鉄釉	密	不明	不明		22	7
383	12区 ３ｂ層	擂鉢	—	—	—		鉄釉	粗	不明	19C		22	7
384	12区 12号池 埋２層	香炉	14.4	—	—		灰釉	粗	唐津？	不明		22	7
385	10区 不明	中型腰折形碗	10.2	4.2	5.8		灰釉 貫入顕著	普通	大堀相馬	18C		22	7
386	10区 不明	灰吹？	4.5	—	—	鉄絵	灰釉(白化粧) 貫入顕著	やや粗	大堀相馬？	19C		22	7
132	３区 表土	ミニチュア擂鉢	4.5	2.0	1.3		透明釉					23	8
136	10区 不明	ミニチュア蓋	3.4	3.0	1.1		透明釉					23	8

表12　二の丸跡第５地点出土その他の土師質土器・瓦質土器観察表

Tab. 12　Notes on various ceramics at NM5

登録番号	出土場所	器種	口径	底径	器高	備考	図	図版
107	本体区 J28 ３層上面	土師質土器　鉢？	15.2	—	—	内外面ロクロナデ 体部外面に菊花？の刻印	23	7
114	10区 L10 V層	土師質土器　焼塩壺	—	—	—	内面ロクロナデ 外面：体部格子叩き 底部回転糸切無調整（回転方向不明）	23	8
115	10区 L12 V層	土師質土器　焼塩壺	—	—	—	内面調整不明 外面：体部斜格子叩き 底部欠損	23	8
116	10区 L10 不明	土師質土器　焼塩壺	—	—	—	内面ロクロナデ 外面体部：上部ロクロナデ 下部斜格子叩き 底部回転糸切無調整	23	8
117	10区 L13 1ｃ～1ｅ層	土師質土器　鉢？	—	7.8	—	内外面ロクロナデ	23	8
118	10区 L11 2ａ層	土師質土器　鉢	—	13.8	—	内面・外面体部ロクロナデ 底部回転糸切無調整(左回転) 内面に煤付着 体部に穿孔1	23	8
119	10区 L11 III層	土師質土器　鉢	—	—	—	内面ロクロナデ 外面に不規則な縄目様の押圧文様	23	8
120	10区 L10 2ａ層	土師質土器　小壺？	—	2.2	—	内面・外面体部ロクロナデ 底部回転糸切無調整（左回転）	23	8
121	10区 L11 1ｃ～1ｅ層	土師質土器　灯明受皿	6.2	3.8	1.8	内面・外面体部ロクロナデ 底部回転糸切無調整（回転方向不明）	23	8
127	１区 １層	土師質土器　焼塩壺	—	4.9	—	内面ロクロナデ 外面：体部調整不明 底部回転糸切無調整？（回転方向不明）	23	8
128	１区 ３層	土師質土器　焼塩壺	—	5.9	—	内面調整不明 外面：体部斜格子叩き 底部回転糸切無調整（左回転？）	23	8
129	１区 不明	土師質土器　蓋	—	—	—	内面ロクロナデ 外面ミガキ 外面体部に墨書	23	8
130	２区 不明	瓦質土器　壺or鉢	—	10.9	—	内外面ロクロナデ 外面上部に不規則な縄目様の押圧文様 高台内に「松嶋春□」の刻印	23	8
131	３区 表土	土師質土器　焼塩壺	—	5.2	—	内面ロクロナデ 外面：体部斜格子叩き 底部回転糸切？後ナデ	23	8
135	10区 L11 III層	土師質土器　蓋	15.6	—	—	内面ロクロナデ後ミガキ？ 外面回転ミガキ	23	8

表13　二の丸跡第５地点出土軒丸瓦類観察表

Tab. 13　Notes on round eaves tiles at NM5

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径	瓦当内径	周縁幅	備考	図	図版
160	本体区 8号溝 埋2層	九曜文	16.6	13.5	2.0	鳥伏間	24	9

表14　二の丸跡第５地点出土軒平瓦類観察表

Tab. 14　Notes on flat eaves tiles at NM5

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当幅	頭幅	備考	図	図版
169	10区 L11 1c～1e層	？　＋唐草1類	不明	4.9	—		24	9
170	10区 L16 2a層	？　＋唐草1類	不明	5.2	—		24	9
171	10区 L11 Ⅳ層	雪持笹(太葉)？＋唐草2類	太剣	—	—		24	9
172	10区 32号溝 埋土	？　＋唐草2類	不明	5.3	—		24	9
196	2区 1b層	不明	不明	—	—		24	9
220	12区 4層	三枚笹＋唐草1類	太剣	—	—		24	9

表15　二の丸跡第５地点出土軒桟瓦観察表

Tab. 15　Notes on eaves-pan tiles at NM5

登録番号	出土場所	瓦当小巴部分文様	瓦当垂れ部分文様	瓦当垂れ形状	備考	図	図版
173	10区 1層	三ツ巴文	不明	不明		24	9
174	10区 33号溝 埋2層	三ツ巴文	三引両文＋唐草5類	並剣		24	9

表16　二の丸跡第５地点出土桟瓦観察表

Tab. 16　Notes on pan tiles at NM5

登録番号	出土場所	全長	全幅	きき幅	きき足	備考	図	図版
167	本体区 1号土坑 埋5層	39.0	—	—	—		26	11
185	11区 B13 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
186	11区 B13 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
187	11区 C14 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
188	11区 C14 1層	—	—	—	—	刻印「宮」？	—	—
189	11区 C14 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
191	1区 撹乱	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
192	1区 1層	—	—	—	—	刻印「(宮) 六□」	—	—
193	1区 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
194	1区 1層	—	—	—	—	刻印「(宮) 六□」	—	—
195	1区 2a層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
197	2区 撹乱	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
198	2区 不明	—	—	—	—	刻印「(宮) 六？□」	—	—
199	2区 1b層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
200	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「宮」？	—	—
201	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「宮」	27	12
202	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
203	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「(宮) 二？□」	—	—
204	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「(宮) 二？□」	—	—
205	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
206	2区 1c層	—	—	—	—	刻印「(宮) 二五」	27	12
209	5区 撹乱	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
210	5区 撹乱	—	—	—	—	刻印「(宮) 一五」	—	—
211	5区 撹乱	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
212	5区 撹乱	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
213	5区 撹乱	—	—	—	—	刻印「(宮) □五」	—	—
214	5区 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
215	5区 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
216	5区 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
217	5区 1層	—	—	—	—	刻印「宮」？	—	—
218	5区 1層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
219	5区 1層	—	—	—	—	刻印「(宮) 七□」	27	12
223	12区 3c層	—	—	—	—	刻印「宮」	—	—
224	12区 3c層	—	—	—	—	刻印「宮」	27	12

表17　二の丸跡第５地点出土板塀瓦観察表

Tab. 17　Notes on pan tiles used for fence at NM5

登録番号	出土場所	全長	全幅	きき幅	きき足	桟接合法	桟断面形	釘穴	備考	図	図版
177	10区 L・M15 1層	—	—	—	—	不明	B	不明		26	12

表18　二の丸跡第５地点出土熨斗瓦観察表

Tab. 18　Notes on ridge tiles at NM5

登録番号	出土場所	長	厚	幅	耳長	備考	図	図版
208	5区 撹乱	24.9	1.7	—	—	両付紐熨斗	27	11
229	5区 撹乱	25.7	1.7	—	6.8	両付紐熨斗	27	11

表19　二の丸跡第５地点出土輪違い観察表

Tab. 19　Notes on ridge decoration tiles at NM5

登録番号	出土場所	長	上幅	下幅	高	備考	図	図版
178	10区 L11 2a層	13.5	—	—	—		26	10

表20　二の丸跡第５地点出土その他の瓦観察表

Tab. 20　Notes on various roof tiles at NM5

登録番号	出土場所	種類	備考	図	図版
161	本体区 D24 3b層直上	鬼瓦類（鯱）	鱗状の文様あり 中空	24	9
162	本体区 L24 2d層	鬼瓦	並型？	25	9
163	本体区 K25 1層	鬼瓦		24	9
164	本体区 L20 不明	鬼瓦		24	9
165	本体区 9号溝 埋1～3a層	鬼瓦？		24	9
166	本体区 8号溝 埋2層	不明	仮称「T字瓦」	26	9
168	本体区 7号溝 埋2層	袖瓦	頭幅22.5 尻幅29.5 長24.6 谷深2.7	26	10
175	10区 L13 1c～1e層	鬼瓦		25	10
176	10区 L16 IV層	鬼瓦		25	10
179	10区 L9 撹乱	谷丸瓦（右）		27	10
180	10区 L13 撹乱	谷瓦		27	12
181	10区 L12 1c～1e層	谷瓦		27	12
182	10区 L13 III層	谷瓦		27	12
183	10区 L16 V層	瓦加工品	凸面および側面を研磨	27	12
184	11区 C10 撹乱	平瓦類	刻印あり	27	12
190	1区 撹乱	平瓦類	刻印あり	27	12
207	2区 撹乱	平瓦類	刻印あり	27	12
221	12区 12号池 埋1層	鬼瓦	片面に焼成前ヘラ状工具による十字型の刻線	25	10
222	12区 12号池 埋2層	谷丸瓦		—	—
225	12区 3c層	平瓦	刻印あり	27	12
226	12区 12号池 埋2層	平瓦	刻印あり	27	12
227	12区 4層	平瓦	刻印あり	27	12
228	10区 L14 1c～1e層	鬼瓦		25	10

表21　二の丸跡第５地点出土古銭観察表

Tab. 21　Notes on coins at NM5

登録番号	出土場所	銭名	外径（mm）	穿径（mm）	重量（g）	備考	図	図版
097	本体区 撹乱	寛永通宝（新寛永）	24.7	5.5	3.0		28	8
098	11区 Pit483 埋1層	寛永通宝？	—	—	—		28	8
099	10区 L7 1c～1e層	寛永通宝（古寛永）	24.1	5.8	2.5		28	8
100	1区 撹乱	寛永通宝（新寛永）	23.9	6.0	2.1		28	8
101	1区 3A層	寛永通宝（古寛永）	23.5	5.3	2.0		28	8
102	1区 3B層	寛永通宝	25.0	5.6	—	3枚付着 うち2枚は銭名不明	28	8

表22　二の丸跡第５地点出土煙管（吸口）観察表

Tab. 22　Notes on pipes (mouthpieces) at NM5

登録番号	出土場所	全体形状	全長(mm)	ラウロ直径(mm)	吸口直径(mm)	備考	図	図版
103	10区 L10 1c～1e層	II	—	—	3.5		28	8
104	12区 12号池 埋2層	II	—	4.5	2.5		28	8
110	1区 不明	II	—	8.0	—		28	8

表23　二の丸跡第５地点出土煙管（雁首）観察表

Tab. 23　Notes on pipes (stems and bowls) at NM5

登録番号	出土場所	全体形状	火皿形状	接合方法	首部アワセメ	全長(mm)	火皿直径(mm)	ラウロ直径(mm)	備考	図	図版
105	10区 L7 1c～1e層	IB	1 b	3	左中	34.0	17.0	13.0		28	8
106	10区 L10 III層	IIC	1 b	3	左中	42.0	13.0	8.0		28	8
107	11区 D16 III層	—	—	3	右上	—	—	—		—	—
108	10区 L10 V層	IIB	—	—	左中	—	—	—		28	8
109	10区 L10 V層	IIB	2 b	2	左中	—	19.0	—		28	8

5. 自然科学的分析

(1) 花粉分析

守 田 益 宗

川内図書館新館建設に伴う発掘調査では、元禄時代の畑跡が検出された。この畑跡の畝の低い所（試料№.4）と高い所（試料№.5）から得られた土壌試料について、当時ここで何が栽培されていたかをさぐる目的で花粉分析をおこなった。

試料の処理は、最初KOH-$ZnCl_2$-Acetolysis法を用いて処理したが、花粉・胞子をわずかしか分離できなかった。そこで、再度KOH-HF-Acetolysis処理を行ったがやはり同様であった。各試料について高木花粉（Tree Pollen）が200粒以上に達するまで同定することを目標とし、その間に出現する全ての花粉・胞子を記録した。しかし、試料№.5では高木花粉総数が200粒に達しなかった。花粉・胞子の出現率は、高木花粉では高木花粉総数を、その他の花粉・胞子は高木花粉を除いた花粉・胞子総数をそれぞれ基本数として百分率で求めた。高木花粉に含めた花粉は表に示した*Pinus*（マツ属）～*Acer*（カエデ属）までの諸属である。両試料について同定した花粉・胞子の数を表24に示し、主要な花粉・胞子の割合を図29に円グラフで示した。

Faegri&Iversen（1975）によると堆積物中の花粉・胞子含量の少ない原因は、①元来、付近の植生の花粉生産量が少なかった。②何らかの原因によって堆積した花粉・胞子が分解した。③花粉の供給量に比べ堆積物の堆積速度が大であった場合が考えられるという。我が国のような森林が発達する国土では、花粉生産量の少ない植生は考えにくい。花粉が分解された場合には、相対的に分解されにくいシダ胞子の比率が高くなる傾向があるが、両試料とも12～13%前後とあまり高くない。また、この畑跡が屋敷内にあったことから土壌の堆積速度が大きかったとは考え難い。おそらく、畑としての利用期間が短かったために土壌中に十分な花粉・胞子が埋積しなかった結果であろう。

全花粉・胞子に対する高木花粉の割合は、試料№.4では約45%、試料№.5では約30%であり、低木花粉は両者とも極めて低率である。草本花粉は、試料№.4では約35%、試料№.5では約55%を占める。

高木花粉ではスギ属(*Cryptomeria*)が過半を占め、次いでマツ属(*Pinus*)、ナラ属(*Quercus*)の順であり、他の高木性樹種は極めて低率である。通常スギ属がこのような高率を占めることは稀である。当時、発掘区に近い所にスギが存在していたと考えられる。

草本花粉は試料№.4ではヨモギ属（*Artemisia*）が約20%と最も多く、次いでイネ科(Geamineae)、アブラナ科（Cruciferae)、アカザ科—ヒユ科（Chenopodiaceae-Amaranthaceae)が各約10%であり、これらで草本花粉の過半を占める。試料№.5ではアブラナ科が約30%、イネ科が約25%を占めている。この他、カヤツリグサ科(Cyperaceae)、ナデシコ科(Caryo-

phyllaceae)、アリノトウグサ属(*Haloragis*)は両試料ともやや多く認められる。これらの植物の仲間には畑地の雑草となるものが多い。草本花粉の出現率からは、この場所が畑地として利用されたことを否定するものではないが、畑地に限って出現する雑草や栽培植物そのものの花粉が検出されないことから積極的に支持するものでもない。

≪引用文献≫

Faegri, K. & Iversen, J. (1975) Textbook of **pollen** analysis. (3rd ed.) Munksgaard, Copenhagen

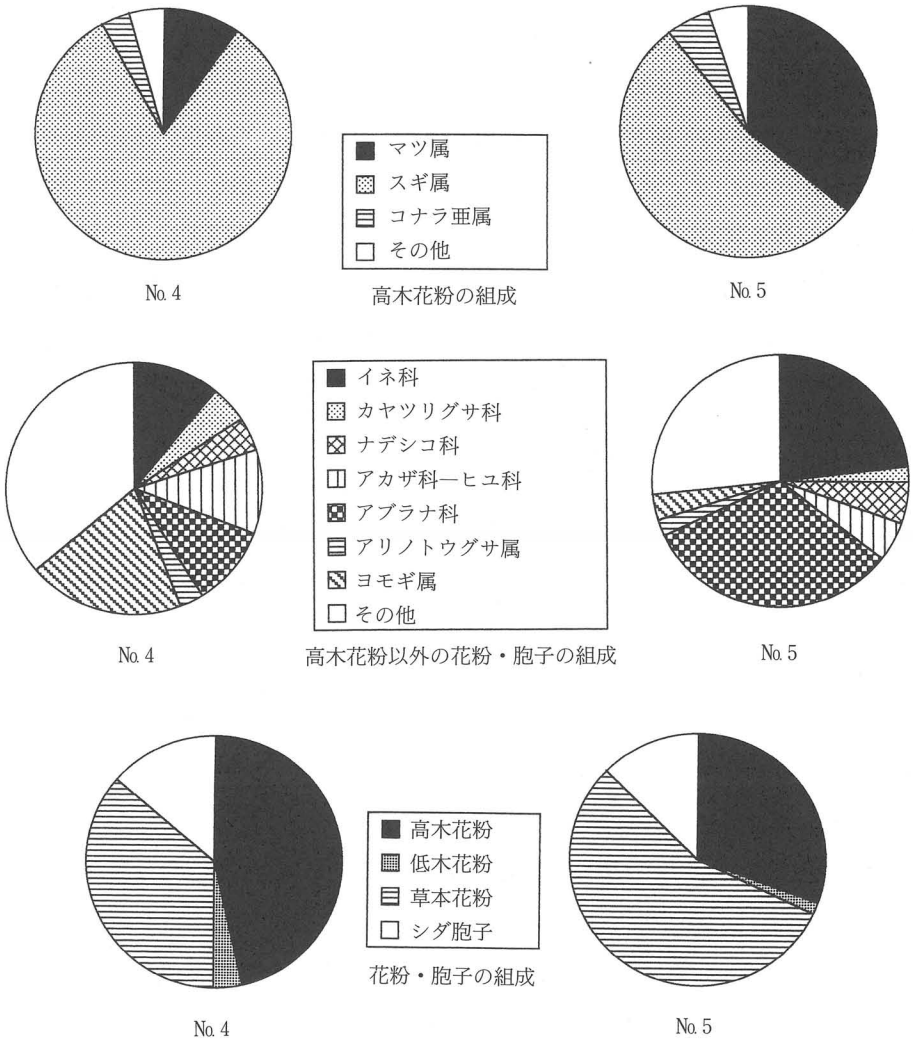


図29　花粉分析結果

Fig. 29　Composition of pollen by sample from NM5

表24　二の丸跡第５地点検出花粉・胞子一覧表

Tab. 24　List of pollen and spore from NM 5

学　　名	和　　名	3 層No. 4	3 層No. 5
Pinus	マツ属	24	65
Abies	モミ属	1	
Cryptomeria	スギ属	202	97
Sciadopitys	コウヤマキ属		1
Betula	シラカンバ属	1	
Carpinus	クマシデ属	3	2
Fagus	ブナ属	3	4
Quercus	コナラ亜属	9	10
Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	1	1
Ulmus-Zelkova	ニレ属―ケヤキ属	1	1
Acer	カエデ属	1	
Corylus	ハシバミ属	4	1
Alnus	ハンノキ亜属	9	7
Alnaster	ヤシャブシ亜属	2	
Sapium	シラキ属	1	
Zanthoxylum	サンショウ属	1	
Elaeagnus	グミ属	1	
Aucuba	アオキ属	1	
Araliaceae	ウコギ科	1	1
Gramineae	イネ科	32	96
Cyperaceae	カヤツリグサ科	13	9
Typha	ガマ属		8
Eriocaulon	ホシクサ属		1
Iridaceae	アヤメ科		1
other Monocotyledoneae	他の単子葉類	1	1
Reynoutria	イタドリ属		1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	13	21
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科―ヒユ科	30	21
Clematis type	センニンソウ属型		1
Cruciferae	アブラナ科	29	134
Lythrum	ミソハギ属	1	1
Haloragis	アリノトウグサ属	9	8
Umbelliferae	セリ科	2	5
Galium	ヤエムグラ属	1	
Patrinia	オミナエシ属	2	2
Artemisia	ヨモギ属	56	14
other Carduoideae	他のキク亜科型	2	4
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	50	54
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子	11	10
Botrychium	ハナワラビ属	12	12
Ophioglossum	ハナヤスリ属	1	
Trees	高木花粉	246	181
Shrubs	低木花粉	20	9
Herbs	草本花粉	191	328
Ferns	シダ胞子	74	76
Unknown	不明	29	29

⑵ プラント・オパール分析

古環境研究所

① はじめに

仙台城二の丸跡では、元禄期（17世紀末～18世紀始め）の畝状遺構が検出され、当時の畠跡と見られていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、同遺構における農耕の検証を試みたものである。

② 試料

試料は、遺構の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。資料№1は畝間（溝部）から、試料№2は畝の最上部から採取されたものである。

③ 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原1976）」をもとに、次の手順で行った。

1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
2) 試料土約1ｇを秤量、ガラスビーズ添加（真径約40μm、約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量
3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

④ 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表25に示す。分析試料から検出されたプラント・オパールの分類群は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属などが含まれる）である。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す（図版13）。

⑤ 考察（イネ科栽培植物の検討）

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、キビ族（ヒエなどが含まれる）やムギ類、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）など

がある。このうち、同遺構ではイネのプラント・オパールのみ検出された。プラント・オパール密度はいずれも1,400個／gと低い値である。ただし、同遺構は直上を二の丸拡張工事の際の盛り土で覆われていることから、後代の耕作の影響は考え難い。したがって、同遺構でイネが栽培されていた可能性が考えられる。

なお、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未同定のプラント・オパールの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、プラント・オパール分析で復原できる植生はイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は対象外となっていることに留意されたい。

≪引用・参考文献≫

杉山真二・藤原宏志　1987　「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山―古環境編―』川口市遺跡調査会報告10　pp.281～298

杉山真二・松田隆二・藤原宏志　1988　「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕追求のための基礎資料として―」『考古学と自然科学』20　pp.81～92

藤原宏志　1976　「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―」『考古学と自然科学』9　pp.15～29

藤原宏志　1979　「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.）生産総量の推定―」『考古学と自然科学』12　pp.29～41

藤原宏志・杉山真二　1984　「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―」『考古学と自然科学』17　pp.73～85

表25　プラント・オパール分析結果

Tab. 25　List of plant opal from NM5

単位：個/g

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族
No.1	1,400	0	22,200	700
No.2	1,400	0	25,600	1,400

(3) 動物遺存体

富岡直人・氷見淳哉・赤木進二（東北大学文学部考古学研究室）

① 動物遺存体の内容

仙台城二の丸跡第５地点においては、食料残滓と考えられる動物遺存体が、元禄年間に池を埋めた整地層を中心に出土した。出土動物の種名を表26に記す。貝殻はカルシウムが溶け出し、保存状態は不良であり、魚類・鳥類・哺乳類遺存体の骨体は変色し、茶褐色を呈している。

【貝類】

貝類は２綱９科８属７種が元禄年間の層を中心として出土した。表27に種名・出土層位・属性を記す。河口付近などの汽水域にすむヤマトシジミが最も多く出土し、次いで内湾潮間帯の砂浜に生息するアサリ・ハマグリや岩礁に生息するイガイが多い。淡水域に生息するタニシ科なども少量ながら出土した。これは池の中に生息し、自然死した個体が含まれている可能性がある。

表26　二の丸跡第５地点出土動物遺存体種名表

Tab. 26　List of animal remains from NM5

軟体動物門　MOLLUSCA
- 腹足綱　GASTROPODA
  - タニシ科　Viviparidae
    - オオタニシ　*Cipangopaludina japonica*　V.　Martens
  - ミミガイ科　Haliotidae gen et. sp. indent
    - エゾアワビ　*Haliotis*（*Nortidae*）*discus hannai* I no
  - アクキガイ科　Muricidae
    - アカニシ　*Rapana venosa venosa*（Valenciennes）

陸産貝類：land snails
- Aタイプ：キセルガイ科　Clausiliidae gen et sp. indet
  - キセルガイモドキ科　Enidaeuta gen et sp. indet
  - オカチョウジガイ科　Sublinidae gen et sp. indet
- 斧足綱　Pelecypoda
  - マルスダレガイ科　Veneridae
    - アサリ　*Ruditapes philippinarum*（Adams et reeve）
    - ハマグリ　*Memetrix lusoria*（Rodding）
  - イガイ科　Mytilidae
    - イガイ　*Mytilus corsucus* Gould
  - イタボガキ科　Ostrsaidae
    - マガキ　*Crassostrea gigas*（Thunberg）
  - ニッコウガイ科　Tellinidae gen.,et sp. indet
  - フネガイ科　Arcidae gen. et sp. indet
  - シジミガイ科　Corbiculidae
    - ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

脊椎動物門　VERTEBRATA
- 魚上綱　PISCES
- 硬骨魚綱　OSTEICHTHYIS
  - タイ科　Sparidae
    - マダイ　*Pagrus major*（Temmick et Schlegel）
  - アイナメ科　Hexagrammidae gen. et sp. indet
  - スズキ科　Sarranidae
    - スズキ　*Lateolablax* japonicus（Curvier）
  - カレイ科　Pleuronectidae gen. et sp. indet
  - ボラ科　Mugidae
    - ボラ　*Mugil cephalus* Linnaeus
  - サバ科　Scombridae sp. indet
    - マグロ属　*Thunnus* sp. indet
    - カツオ　*Katsuwonus pelamis*（Linnaeus）
  - フサカサゴ科　Scorpaenidae gen. et sp. indet
  - コチ科　Platycephalidae gen et sp. indet
  - サケ科　Salmonidae gen. et sp. indet
- 軟骨魚綱　CHONDRECHTHYES
- 板鰓亜綱　ELASMOBRANCHII
  - エイ目　Rajida fam. indet
- 鳥綱　AVES
  - ガンカモ目　Anseriformes
  - ガンカモ科　Anatidae
  - カモ類　；Ducks

Bタイプ　クロガモ、オナガガモ、ヨシガモ相当
- キジ目　Galiformes
  - キジ科　Phasianidae
    - キジ　*Phasianus*（*Corchicus*）*versicolor* Vieillot
    - ニワトリ　*Gallus gallus domesticus*
  - チドリ目　Charadriiformes
    - チドリ科　Charadriidae
  - スズメ目　Passeres fam. indet
- 哺乳綱　MAMMALIA
  - ウシ目（偶蹄目）Artiodactyla
    - シカ科　Ceravidae
      - ニホンジカ　*Cervus nippon*
  - ネズミ目（齧歯目）Rodentia
    - ネズミ科　Muriddae
      - クマネズミ属　*Rattus* sp. indet

【魚類】

魚類は2綱9科5属4種が元禄年間の整地層であるⅦ層を中心に出土した。表28に種名・出土層位・属性を記す。魚類遺存体は大半が茶褐色に変色しており、地下水の影響と考えられる。マダイが最も多く(45点)、タイ科と同定した破片(49点)も大半がマダイであると考えられる。次いでスズキ(10点)、アイナメ科(10点)、カレイ科(9点)が多く出土している。クロマグロ *Thunnus thynnus* (Linnaeus)、キハダ *Thunnus albacares* (Bonnaterre)の可能性があるマグロ属の尾椎が連結した状態で検出されている。また、サケ科の比較的大型の椎骨片が、1点出土している。

多くの魚類の破片には、刃物による切痕が観察された。マダイ・スズキ・アイナメ科・カレイ科の頭部骨には切り分けられた痕跡がみられる。特にマダイの前頭骨・鋤骨には正中線から左右に割る切痕がみられ、「かぶと割り」にされたと推定される。椎骨にも切痕が観察され、胴体がぶつ切りにされるか、あるいは3枚または2枚におろされていたと考えられる。

【鳥類】

ガンカモ科、キジ科、ニワトリ、チドリ科、スズメ目など1綱3科2属2種が出土している。表29に種名・出土層位・属性を記す。ニワトリは現代の整地層の1層、元禄年間の3b層から出土している。ガンカモ科、キジ科、チドリ科は元禄年間のⅦ層から出土している。ガンカモ科とした破片はカモBタイプ(註1)に分類され、クロガモ、ヨシガモ、オナガガモなどのカモ類と考えられる。また、出土したキジ科には、キジ *Phasionus colchius*、ウズラ *Coturnix coturnix*、コジュケイ *Bambuisicola thora cica* などが含まれている可能性がある。

1層および元禄年間の3b層より出土したニワトリの骨には、鋭利な切痕とネズミの噛み痕が残されていた。(図30:整理番号23)。

【哺乳類】

哺乳類は3点が同定され、1綱2科2属2種が確認された。表29に種名・出土層位・属性を記す。2d層からニホンジカの左中手骨が出土している。骨端部の化骨化の状況から、若〜成獣と考えられる。切痕とイヌの噛み痕が観察されることから、解体後イヌに餌として与えられた可能性が考えられる。また、Ⅶ—8層からはクマネズミ属の左下顎骨が出土している。これは池の中で自然死したか、あるいは駆除・廃棄されたものと推定される。

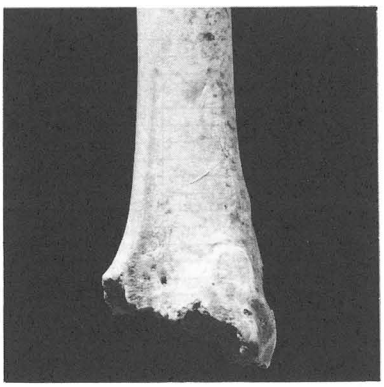


図30 切痕とネズミの噛み痕の見られるニワトリ大腿骨(遠位端、L)S=2:3

Fig. 30 A Femur of a *Gallus gallus damesticus* with cut marks and chewing marks by mouse

表27　二の丸跡第５地点貝類出土表

Tab. 27　Notes on Mollusca (shell) from NM5

整理番号	発掘区	層位遺構	種　　名	L/R	点数	殻頂or殻軸	殻皮	腹縁or殻唇	貝殻破片	蓋	風化・色調	備　　考
1	基礎９区	Ⅶ－７	アカニシ	－	1	○	○	○	○	×		
2	Ｊ22	3	斧足綱	?	1	×	×	×	○	×		
3	H22	９号溝埋土３	不明	?	1	×	×	×	○	×		
4	H29	1	ミミガイ科	－	1	×	○	×	○	×		
5	K18	Ⅶ－８′	アカニシ	－	1	○	×	×	○	×		
6	K18	Ⅶ－８′	イガイ	?	1	×	×	×	○	×		
7	不明	不明	アサリ	L	1	○	○	○	×	×	チョーク	
8	F24	３ｂゴミ層	シジミガイ科	?	6	×	○	×	×	×		
9	F24	３ｂゴミ層	イガイ科	?	1	×	×	×	○	×		
10	F25	１号溝埋土	アサリ	?	1	×	×	×	○	×	黒色	
11	Ｊ18	1	イガイ	L	1	○	×	×	×	×		
12	Ｊ18	5	シジミガイ科	?	2	×	○	×	×	×		
13	E24	３ｂ上ゴミ層	シジミガイ科	?	5	×	○	×	×	×		
14	E24	３ｂ上ゴミ層	タニシ科	?	1	×	○	×	×	×		
15	L29	２ａ	アカニシ	－	1	○	○	×	○	×		
16	F23	３ｂゴミ層	イガイ科	－	2	×	○	×	×	×		
17	F23	３ｂゴミ層	シジミガイ科	－	4	×	○	×	×	×		
18	E25	3	シジミガイ科	－	1	×	○	×	×	×		
19	K18	Ⅶ－２ゴミ層	シジミガイ科	L	1	×	○	×	×	×		
20	M24	７号溝埋土１	陸産貝類Ａタイプ	－	1	○	○	○	○	×		殻高：22.82mm
21	E25	３ｂ上面ゴミ層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
22	Ｉ21	1	エゾアワビ	－	1	○	○	○	○	×		殻径：68.40mm
23	不明	1	アサリ	L	1	○	○	○	○	×		殻高：31.00mm
24	不明	1	斧足綱	－	1	×	×	○	×	×		
25	Ｊ28	２ａ	ニッコウガイ科	R	1	○	×	×	×	×		
26	F22	1	フネガイ科	－	1	×	×	×	○	×		
27	F22	1	ヤマトシジミ	R	1	○	○	○	×	×		
28	F22	1	アサリ	－	1	×	×	×	○	×		
29	L23	池埋土	フネガイ科	－	1	×	×	×	○	×		
30	F23	３ｂゴミ層	シジミガイ科	－	5	×	○	×	×	×		
31	F23	３ｂゴミ層	イガイ科	－	4	×	○	×	×	×		
32	D27	１号井戸掘方埋土２	アカニシ	－	1	×	×	×	○	×		
33	K18	Ⅶ－５	腹足綱	－	1	×	×	×	○	×		
34	K18	Ⅶ－４	腹足綱	－	1	×	×	×	○	×		
35	D27	１号井戸掘方	アカニシ	－	1	×	×	×	○	×		
36	K18	Ⅶ－７	アカニシ	－	1	×	○	×	○	×		
37	D28	20号溝埋土	シジミガイ科	－	1	×	○	×	○	×		
38	K19	不明	不明	－	1	×	○	×	×	×		
39	E24－26	３ｂ上ゴミ層	斧足綱	－	1	×	○	×	×	×		
40	K18	Ⅶ－７	斧足綱	－	1	×	○	×	×	×		
41	K18	Ⅶ－７	腹足綱	－	1	×	○	×	×	×		
42	D29	１号溝埋土	シジミガイ科	－	1	×	○	×	×	×		
43	K18	Ⅶ－２	タニシ科	－	1	×	×	×	×	○		
44	K18	Ⅶ－２	不明	－	1	×	○	×	×	×		
45	K18	Ⅶ－２	シジミガイ科	－	1	×	○	×	×	×		
46	F24	３ｂ直上ゴミ層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
47	E29	3	シジミガイ科	－	1	×	○	×	○	×		
48	E26	３ｂ上面ゴミ層	不明	－	>1	×	○	×	×	×		
49	K18	Ⅶ－３	不明	－	>1	×	○	×	×	×		
50	K18	Ⅶ－３	シジミガイ科	－	>1	×	○	×	×	×		一部に靱帯外殻層を残す
51	E24	３ｂ層ゴミ層	シジミガイ科	－	>1	×	○	×	×	×		
52	E25	３ｂ上面ゴミ層上	不明	－	1	×	○	×	×	×		
53	E24	３ｂ層ゴミ層	不明	－	>1	×	○	×	×	×		
54	E25	３ｂ層上面ゴミ層	不明	－	>1	×	○	×	×	×		
55	F25	１号溝埋土	タニシ科？	－	1	×	×	×	○	○		
56	K18	Ⅶ－８	腹足綱	－	1	×	×	×	×	○		タニシ科に似る
57	K18	Ⅶ－８	腹足綱	－	1	×	×	×	×	○		タニシ科に似る
58	K18	Ⅶ－８	腹足綱	－	1	×	○	×	×	×		
59	K18	Ⅶ－８	腹足綱	－	1	×	○	×	×	×		
60	K18	Ⅶ－６	不明	－	>1	×	○	×	×	×		
61	K18	Ⅶ－８′	アカニシ？	－	1	×	×	○	○	×		
62	K18	Ⅶ－８′	タニシ科	－	1	○	○	×	○	×		オオタニシに似る
63	K18	Ⅶ－５	不明	－	1	×	○	×	×	×		
64	K18	Ⅶ－９	腹足綱	－	1	×	○	×	×	○		
65	K18	Ⅶ－９	シジミガイ科	－	1	×	○	×	×	×		一部に靱帯外層を残す
66	R18	Ⅶ－２植物層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
67	K18	Ⅶ－４	不明	－	1	×	○	×	×	×		
68	K18	Ⅶ－４	シジミガイ科	－	1	×	○	×	×	×		一部に種不明殻皮を含む
69	E25	３ｂ上ゴミ層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
70	E23	３ｂ直上ゴミ層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
71	E26	３ｂ層ゴミ層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
72	H22	８号溝埋土	不明	－	1	×	○	×	×	×		
73	E25	３ｂ上面ゴミ層	不明	－	1	×	○	×	×	×		
74	E27	3	ミミガイ科(トコブシ大)	－	1	×	×	×	○	×		
75	F24	３ａ	シジミガイ科	L	1	○	○	×	○	×		ヤマトシジミ？
76	E29	23号溝	ハマグリ	L	1	×	×	○	○	×		
77	E28	3	アカニシ	－	1	○	×	×	×	×		臍孔をともなう
78	基礎９区	Ⅶ－８	不明	－	1	×	×	×	○	×		
79	基礎９区	Ⅶ－８	シジミガイ科	－	4	×	○	×	×	×		
80	基礎９区	Ⅶ－８	タニシ科	－	1	×	×	×	×	○		
81	基礎９区	Ⅶ－７	アカニシ	－	1	○	×	○	×	×		かなり大型の個体
82	基礎９区	Ⅶ－５	斧足綱？	－	1	×	○	×	×	×		
83	基礎９区	Ⅶ－２植物層	シジミガイ科	－	2	×	○	×	×	×		
84	F25	１号溝、３層	アカニシ	－	1	○	×	○	×	×		小型の個体
85	E29	Pit１埋土	アカニシ	－	1	○	×	○	×	×		大型の個体

表28　二の丸跡第５地点魚類出土表

Tab. 28　Notes on Pisces (fish) from NM5

整理番号	発掘区	層位	BNO	綱	種名	部位	L/R	破損	色調	風化
52	K18	Ⅶ－２	45	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	R	なし	茶褐	なし
62	K18	Ⅶ－２	55	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	R	なし	茶褐	なし
96	K18	Ⅶ－５	2	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	R	なし	茶褐	あり
30	K18	Ⅶ－２	23	硬骨魚綱	マダイ	主上顎骨	R	なし	茶褐	なし
61	K18	Ⅶ－２	54	硬骨魚綱	マダイ	歯骨	R	?	茶褐	あり
24	K18	Ⅶ－２	17	硬骨魚綱	マダイ	歯骨	R	なし	茶褐	なし
37	K18	Ⅶ－２	30	硬骨魚綱	マダイ	鋤骨	L	切痕	茶褐	なし
53	K18	Ⅶ－２	46	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	L	切痕	茶褐	なし
40	K18	Ⅶ－２	33	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	L	切痕	茶褐	なし
34	K18	Ⅶ－２	27	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	L	切痕	茶褐	なし
39	K18	Ⅶ－２	32	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	R	なし	茶褐	なし
65	K18	Ⅶ－２	58	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	R	なし	茶褐	なし
31	K18	Ⅶ－２	24	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	R	なし	茶褐	なし
156	K18	Ⅶ層植物	7	硬骨魚綱	マダイ	口蓋骨	R	なし	茶褐	なし
12	K18	Ⅶ－２	5	硬骨魚綱	マダイ	尾舌骨	M	切痕	茶褐	なし
23	K18	Ⅶ－２	16	硬骨魚綱	マダイ	角骨	L	?	茶褐	あり
122	K18	Ⅶ－８	2	硬骨魚綱	マダイ	角骨	L	なし	茶褐	なし
70	K18	Ⅶ－２	63	硬骨魚綱	マダイ	方骨	R	なし	茶褐	あり
32	K18	Ⅶ－２	25	硬骨魚綱	マダイ	角舌骨	R	切痕	茶褐	なし
89	K18	Ⅶ－３	17	硬骨魚綱	マダイ	角舌骨	R	切痕	茶褐	あり
90	K18	Ⅶ－３	18	硬骨魚綱	マダイ	角舌骨	R	なし	茶褐	あり
106	K18	Ⅶ－５	12	硬骨魚綱	マダイ	角舌骨	R	なし	茶褐	なし
150	K18	Ⅶ－２	67	硬骨魚綱	マダイ	上舌骨	L	なし	茶褐	なし
33	K18	Ⅶ－２	26	硬骨魚綱	マダイ	上舌骨	R	切痕	茶褐	なし
54	K18	Ⅶ－２	47	硬骨魚綱	マダイ	副蝶形骨	M	切痕	茶褐	あり
76	K18	Ⅶ－３	4	硬骨魚綱	マダイ	副蝶形骨	M	?	茶褐	なし
63	K18	Ⅶ－２	56	硬骨魚綱	マダイ	舌顎骨	R	なし	茶褐	なし
29	K18	Ⅶ－２	22	硬骨魚綱	マダイ	前鰓蓋骨	L	切痕	茶褐	なし
43	K18	Ⅶ－２	36	硬骨魚綱	マダイ	前鰓蓋骨	R	?	茶褐	あり
85	K18	Ⅶ－３	13	硬骨魚綱	マダイ	前鰓蓋骨	L	切痕	茶褐	なし
36	K18	Ⅶ－２	29	硬骨魚綱	マダイ	間鰓蓋骨	R	切痕	茶褐	なし
25	K18	Ⅶ－２	18	硬骨魚綱	マダイ	主鰓蓋骨	L	?	茶褐	あり
148	K18	Ⅶ－２	66	硬骨魚綱	マダイ	主鰓蓋骨	L	なし	茶褐	なし
164	K18	層不明	28	硬骨魚綱	マダイ	主鰓蓋骨	R	なし	茶褐	なし
82	K18	Ⅶ－３	10	硬骨魚綱	マダイ	擬鎖骨	R	なし	茶褐	なし
81	K18	Ⅶ－３	9	硬骨魚綱	マダイ	擬鎖骨	R	なし	茶褐	なし
60	K18	Ⅶ－２	53	硬骨魚綱	マダイ	擬鎖骨	R	?	茶褐	なし
153	K18	Ⅶ－２	70	硬骨魚綱	マダイ	上擬鎖骨	R	なし	茶褐	なし
159	K18	Ⅶ－３	23	硬骨魚綱	マダイ	上擬鎖骨	R	なし	茶褐	なし
36	K18	Ⅶ－２	31	硬骨魚綱	マダイ	後側頭骨	L	切痕	茶褐	なし
35	K18	Ⅶ－２	28	硬骨魚綱	マダイ	後側頭骨	L	なし	茶褐	なし
27	K18	Ⅶ－２	20	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	L	切痕	茶褐	あり
75	K18	Ⅶ－３	3	硬骨魚綱	マダイ	翼耳骨	L	?	茶褐	なし
74	K18	Ⅶ－３	2	硬骨魚綱	マダイ	基後頭骨	M	?	茶褐	なし
9	K18	Ⅶ－２	2	硬骨魚綱	マダイ	第１椎骨	M	切痕	茶褐	なし
138	K18	Ⅶ－８	18	硬骨魚綱	タイ科	前上顎骨	L	なし	茶褐	あり
10	K18	Ⅶ－２	3	硬骨魚綱	タイ科	前上顎骨	L	なし	茶褐	なし
136	K18	Ⅶ－８	16	硬骨魚綱	タイ科	歯骨	L	なし	茶褐	なし
94	K18	Ⅶ－４	2	硬骨魚綱	タイ科	尾舌骨	M	?	茶褐	あり
97	K18	Ⅶ－５	3	硬骨魚綱	タイ科	尾舌骨	M	?	茶褐	あり
124	K18	Ⅶ－８	4	硬骨魚綱	タイ科	尾舌骨	M	なし	茶褐	あり
28	K18	Ⅶ－２	21	硬骨魚綱	タイ科	角骨	L	なし	茶褐	なし
69	K18	Ⅶ－２	62	硬骨魚綱	タイ科	角骨	R	なし	茶褐	なし
67	K18	Ⅶ－２	60	硬骨魚綱	タイ科	方骨	L	なし	茶褐	あり
59	K18	Ⅶ－２	52	硬骨魚綱	タイ科	方骨	L	?	茶褐	あり
26	K18	Ⅶ－２	19	硬骨魚綱	タイ科	方骨	L	?	茶褐	なし
68	K18	Ⅶ－２	61	硬骨魚綱	タイ科	角舌骨	L	?	茶褐	あり
66	K18	Ⅶ－２	59	硬骨魚綱	タイ科	角舌骨	L	なし	茶褐	なし
101	K18	Ⅶ－５	7	硬骨魚綱	タイ科	角舌骨	L	なし	茶褐	あり
87	K18	Ⅶ－３	15	硬骨魚綱	タイ科	上舌骨	L	なし	茶褐	なし
80	K18	Ⅶ－３	8	硬骨魚綱	タイ科	上舌骨	L	なし	茶褐	なし
104	K18	Ⅶ－５	10	硬骨魚綱	タイ科	上舌骨	L	切痕	茶褐	なし
105	K18	Ⅶ－５	11	硬骨魚綱	タイ科	上舌骨	R	?	茶褐	あり
13	K18	Ⅶ－２	6	硬骨魚綱	タイ科	前鰓蓋骨	L	なし	茶褐	なし
163	K18	Ⅶ－４	27	硬骨魚綱	タイ科	前鰓蓋骨	R	なし	茶褐	なし
41	K18	Ⅶ－２	34	硬骨魚綱	タイ科	間鰓蓋骨	L	切痕	茶褐	あり
72	K18	Ⅶ－２	65	硬骨魚綱	タイ科	間鰓蓋骨	R	なし	茶褐	あり
71	K18	Ⅶ－２	64	硬骨魚綱	タイ科	主鰓蓋骨	R	?	茶褐	あり
155	K18	Ⅶ－２	71	硬骨魚綱	タイ科	前頭骨	L	なし	茶褐	なし
160	K18	Ⅶ－３	24	硬骨魚綱	タイ科	後側頭骨	R	なし	茶褐	なし
46	K18	Ⅶ－２	39	硬骨魚綱	タイ科	上擬鎖骨	L	なし	茶褐	あり
77	K18	Ⅶ－３	5	硬骨魚綱	タイ科	第１椎骨	M	なし	茶褐	なし
86	K18	Ⅶ－３	14	硬骨魚綱	タイ科	第２椎骨	M	なし	茶褐	あり
100	K18	Ⅶ－５	6	硬骨魚綱	タイ科	第２椎骨	M	なし	茶褐	なし
8	K18	Ⅶ－２	1	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
19	K18	Ⅶ－２	12	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
20	K18	Ⅶ－２	13	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
79	K18	Ⅶ－３	7	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
78	K18	Ⅶ－３	6	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	切痕	茶褐	なし
131	K18	Ⅶ－８	11	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
18	K18	Ⅶ－２	11	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
50	K18	Ⅶ－２	43	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
51	K18	Ⅶ－２	44	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	あり
49	K18	Ⅶ－２	42	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	切痕	茶褐	なし
17	K18	Ⅶ－２	10	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
84	K18	Ⅶ－３	12	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	あり
108	K18	Ⅶ－５	14	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	切痕	茶褐	なし
121	K18	Ⅶ－８	1	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	切痕	茶褐	なし
123	K18	Ⅶ－８	3	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
133	K18	Ⅶ－８	13	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
115	K18	Ⅶ－６	4	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	なし	茶褐	あり
137	K18	Ⅶ－８	17	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	切痕	茶褐	なし
102	K18	Ⅶ－５	8	硬骨魚綱	タイ科	椎骨	M	?	茶褐	あり
134	K18	Ⅶ－８	14	硬骨魚綱	タイ科	尾部棒状骨	M	なし	茶褐	なし
11	K18	Ⅶ－２	4	硬骨魚綱	スズキ	前上顎骨	R	なし	茶褐	なし
125	K18	Ⅶ－８	5	硬骨魚綱	スズキ	舌顎骨	L	切痕	茶褐	なし
107	K18	Ⅶ－５	13	硬骨魚綱	スズキ	基後頭骨	M	なし	茶褐	なし
64	K18	Ⅶ－２	57	硬骨魚綱	スズキ	腹椎	M	なし	茶褐	あり
48	K18	Ⅶ－２	41	硬骨魚綱	スズキ	腹椎	M	?	白色	なし
88	K18	Ⅶ－３	16	硬骨魚綱	スズキ	腹椎	M	?	茶褐	あり
55	K18	Ⅶ－２	48	硬骨魚綱	スズキ	尾椎	M	なし	茶褐	なし
126	K18	Ⅶ－８	6	硬骨魚綱	スズキ	尾椎	M	なし	茶褐	あり
6	K18	Ⅶ	5	硬骨魚綱	スズキ	尾椎	M	なし	茶褐	なし
139	K18	Ⅶ－８	19	硬骨魚綱	スズキ	下尾軸骨	M	なし	茶褐	なし
145	K18	Ⅶ－９	3	硬骨魚綱	アイナメ科	角骨	L	切痕	茶褐	あり
132	K18	Ⅶ－８	12	硬骨魚綱	アイナメ科	舌顎骨	R	なし	茶褐	なし
158	K18	Ⅶ－３	22	硬骨魚綱	アイナメ科	口蓋骨	R	なし	茶褐	なし
2	K18	Ⅶ	1	硬骨魚綱	アイナメ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
142	K18	Ⅶ－８	22	硬骨魚綱	アイナメ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
4	K18	Ⅶ	3	硬骨魚綱	アイナメ科	尾椎	M	?	茶褐	なし
5	K18	Ⅶ	4	硬骨魚綱	アイナメ科	尾椎	M	?	茶褐	なし
22	K18	Ⅶ－２	15	硬骨魚綱	アイナメ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
103	K18	Ⅶ－５	9	硬骨魚綱	アイナメ科	尾椎	M	なし	茶褐	あり
14	K18	Ⅶ－２	7	硬骨魚綱	アイナメ科	尾椎	M	なし	茶褐	あり
116	K18	Ⅶ－６	5	硬骨魚綱	カレイ科	後側頭骨	L	なし	茶褐	なし
7	K18	Ⅶ－１	1	硬骨魚綱	カレイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
165	K18	Ⅶ－５	18	硬骨魚綱	カレイ科	腹椎	M	なし	茶褐	なし
1	E24	３ｂゴミ層	1	硬骨魚綱	カレイ科	尾椎	M	なし	茶褐	あり
58	K18	Ⅶ－２	51	硬骨魚綱	カレイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
93	K18	Ⅶ－４	1	硬骨魚綱	カレイ科	尾椎	M	?	白色	あり
117	K18	Ⅶ－６	6	硬骨魚綱	カレイ科	尾椎	M	切痕	茶褐	なし
127	K18	Ⅶ－８	7	硬骨魚綱	カレイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
21	K18	Ⅶ－２	14	硬骨魚綱	カレイ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
99	K18	Ⅶ－５	5	硬骨魚綱	マグロ属	尾椎	M	なし	茶褐	あり
98	K18	Ⅶ－５	4	硬骨魚綱	マグロ属	尾椎	M	なし	茶褐	あり
140	K18	Ⅶ－８	20	硬骨魚綱	マグロ属	尾椎	M	なし	茶褐	あり
146	E26	３ｂゴミ層	2	硬骨魚綱	カツオ	尾椎	M	なし	白色	チョーク
120	K18	Ⅶ－７	3	硬骨魚綱	フサカサゴ科	尾舌骨	M	なし	茶褐	なし
143	K18	Ⅶ－９	1	硬骨魚綱	フサカサゴ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
118	K18	Ⅶ－７	1	硬骨魚綱	フサカサゴ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
149	K18	Ⅶ層植物	6	硬骨魚綱	サケ科	椎骨片		なし	茶褐	なし
112	K18	Ⅶ－６	1	硬骨魚綱	ボラ科	尾椎	M	なし	茶褐	なし
162	K18	Ⅶ－３	26	硬骨魚綱	コチ科	口蓋骨	R	なし	茶褐	なし
83	K18	Ⅶ－３	11	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	なし	茶褐	なし
147	F24	３ｂゴミ層	3	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	なし	白色	チョーク
110	K18	Ⅶ－５	16	硬骨魚綱	不明	主鰓蓋骨	R	なし	茶褐	なし
113	K18	Ⅶ－６	2	硬骨魚綱	不明	前上顎骨	M	なし	茶褐	なし
161	K18	Ⅶ－３	25	硬骨魚綱	不明	角骨	R	なし	茶褐	なし
135	K18	Ⅶ－８	15	硬骨魚綱	不明	第１椎骨	M	?	茶褐	あり
111	K18	Ⅶ－５	17	硬骨魚綱	不明	腹椎	M	なし	茶褐	あり
114	K18	Ⅶ－６	3	硬骨魚綱	不明	腹椎	M	なし	茶褐	あり
144	K18	Ⅶ－９	2	硬骨魚綱	不明	腹椎	M	なし	茶褐	なし
3	K18	Ⅶ	2	硬骨魚綱	不明	尾椎	M	なし	茶褐	なし
47	K18	Ⅶ－２	40	硬骨魚綱	不明	尾椎	M	なし	茶褐	あり
109	K18	Ⅶ－５	15	硬骨魚綱	不明	尾椎	M	なし	茶褐	なし
95	K18	Ⅶ－５	1	硬骨魚綱	不明	尾椎	M	なし	茶褐	なし
146	K18	Ⅶ－９	4	硬骨魚綱	不明	尾椎	M	切痕	茶褐	あり
56	K18	Ⅶ－２	49	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	あり
15	K18	Ⅶ－２	8	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	なし	茶褐	あり
45	K18	Ⅶ－２	38	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	あり
57	K18	Ⅶ－２	50	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	あり
44	K18	Ⅶ－２	37	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	なし	茶褐	あり
42	K18	Ⅶ－２	35	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	なし	茶褐	あり
92	K18	Ⅶ－３	20	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	なし
91	K18	Ⅶ－３	19	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	なし
129	K18	Ⅶ－８	9	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	?	茶褐	あり
128	K18	Ⅶ－８	8	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	?	茶褐	あり
141	K18	Ⅶ－８	21	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	あり
130	K18	Ⅶ－８	10	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	あり
73	基礎９区	Ⅶ－３	1	硬骨魚綱	不明	椎骨	M	切痕	茶褐	あり
119	K18	Ⅶ－７	2	硬骨魚綱	不明	下尾軸骨	M	なし	茶褐	なし

表29　二の丸跡第５地点鳥類・哺乳類出土表

Tab. 29　Notes on Aves and Mammalia from NM5

整理番号	発掘区	層位遺構	綱	種　　名	部　位	L/R	部　分	化骨化	破損（SP：スパイラル状の割れ）	色調	風化	ビビアナイト	残存長（単位：mm）
14	K18	Ⅶ－６	鳥類	カモBタイプ	脛骨	L	遠位端	終了	ＳＰ	茶褐	なし	なし	
9	G21	1	鳥類	ニワトリ	大腿骨	L	遠位端	終了	ＳＰ、ネズミ噛み痕	茶褐	なし	なし	
5	F22	1	鳥類	ニワトリ	脛骨	L	近位端	終了	切痕	未変	なし	なし	
4	E26	３ｂ	鳥類	ニワトリ	脛骨	L	完形	終了	ネズミ噛み痕	茶褐	なし	なし	121.45
6	F24	攪乱	鳥類	ニワトリ	脛骨	R	骨幹部	？	切痕	淡褐	なし	なし	
3	E25	3b	鳥類	ニワトリ	中足骨	L	完形	終了	切痕、ＳＰ	淡褐	なし	あり	68.83
23	C27	共同溝埋土	鳥類	ニワトリ	大腿骨	R	完形	終了	切痕、ネズミ噛み痕	白色	なし	なし	73.85
12	K18	Ⅶ－３	鳥類	チドリ科	中手骨	L	近位端	終了	なし	茶褐	なし	なし	
11	K18	Ⅶ－３	鳥類	キジ科	中手骨	R	完形	終了	なし	茶褐	あり	なし	17.40
20	K18	Ⅶ－３	鳥類	キジ科	上腕骨	L	遠位端	終了	なし	茶褐	あり	あり	
22	K18	Ⅶ－５	鳥類	スズメ目	上腕骨	L	遠位端	終了	なし	茶褐	あり	あり	
1	D25	３ｂ	鳥類	不明	四肢骨	？	骨幹部	？	？	白色	なし	なし	
10	K18	Ⅶ－１	鳥類	不明	肋骨	？	骨幹部	？	？	白色	なし	なし	
21	K18	Ⅶ－３	鳥類	不明	指骨	？	完形	終了	なし	茶褐	あり	あり	
13	K18	Ⅶ－３	鳥類	不明	脛骨	R	骨幹部	？	ＳＰ	茶褐	なし	なし	
18	K18	Ⅶ－６	鳥類	不明	四肢骨	？	骨幹部	？	ＳＰ	茶褐	なし	なし	
15	K18	Ⅶ－７	鳥類	不明	不明	？	骨幹部	？	ＳＰ	茶褐	なし	なし	
16	K18	Ⅶ－８	鳥類	不明	四肢骨	？	骨幹部	？	ＳＰ	茶褐	なし	なし	
8	F26	２ｄ	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	L	完形	終了	切痕、イヌ噛み痕	茶褐	あり	あり	216.00
17	K18	Ⅶ－８	哺乳類	クマネズミ属	下顎骨	L	遠位端	？	なし	茶褐	なし	なし	
2	E24	３ｂ	哺乳類	不明	四肢骨	？	骨幹部	？	ＳＰ	茶褐	あり	あり	

②　まとめ

魚貝類は沿岸に生息するものを主体としており、仙台湾付近での沿岸漁業の漁獲物が主として搬入されていたと考えられる。さらに、カツオ・マグロ属の出土は、外洋の漁獲物も搬入されていたことを示している。

哺乳類遺存体の出土量は少なく、その内容も仙台城三の丸跡（高橋理1986）とは大きく異なっている。このような動物遺存体の内容の違いは、微妙な時期差や出土遺構の性格の違いが反映されていると考えられる。

（註１）カモ類は部位骨の特徴が比較的似ており、種のレベルでの同定が困難である上に、雌雄で大きさが異なるので、Ａ～Ｅタイプを設定し、段階的に大きさによる分類基準を設けている。Ｂタイプは、クロガモ、オナガガモ、ヨシガモに相当する大きさで、全長は47cm程度、上腕骨全長は80～90mm程度に相当する。

≪引用・参考文献≫

茂原信生・小野寺覚　1986　「仙台城三ノ丸跡出土の17世紀犬骨について」『仙台城三ノ丸跡』
仙台市文化財調査報告書第76集　pp.547～559

高橋　理　1986　「仙台城三ノ丸跡出土の動物遺存体」『仙台城三ノ丸跡』
仙台市文化財調査報告書第76集　pp.561～564

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報』６

⑷ 植物遺体

内藤俊彦（東北大学理学部附属植物園）

二の丸跡第５地点は、江戸時代初期に伊達政宗の娘である五郎八姫の居館である西屋敷があった場所で、それ以前は竹林であったという。五郎八姫の死後に屏風蔵や道具蔵として、二の丸に付随した蔵として利用されたらしいという。

層序は地山の上にⅧ・８層が確認され、Ⅴ層は畑跡と推定されている。２層は明治以降の旧陸軍第二師団当時の層と考えられ、最上層の１層は太平洋戦争終結後の進駐軍と東北大学による盛土であるという（東北大学埋蔵文化財調査委員会、1993）。また、この地には裏山からにじみでた地下水にかん養された池が存在したといわれる。Ⅶ層は元禄年間に埋め立てられた層で、ゴミ捨場として利用された可能性があるそうである。このような層から出土した植物遺体について調査を行った。

植物遺体は、北区のⅦ層や南区の３ｂ層上面ゴミ層など、二の丸中奥造営に伴う、元禄年間の整地・盛土層から多く出土している。これら植物遺体を多く含む層からは、多種多様な遺物が出土していることから、検出された植物遺体のなかには、二の丸地区からゴミとして出されたものが多く含まれている可能性が高い。

出土した植物遺体を裸眼および実体顕微鏡を用いて形態的特徴を検討し、植物図鑑の検索表や記載特徴と照合して種を特定した。植物遺体には、調査時に手掘りで取り上げられたものと、土壌サンプルを水洗して得られた資料がある。土壌サンプルの採取は、植物遺体の集中が認められた場合に必要に応じて任意に行われている。そのため、今回は定量的な検討は行わず、確認できた種名を記述するにとどめる。

調査結果は表30のようであった。層位別に出現した種類は、進駐軍および東北大学が盛土した１層にはオニグルミの種子（核）が認められた。このオニグルミ種子にはリスおよびアカネズミの食痕が認められた。

明治時代の層位である２層上および２ｂ層にはオニグルミ、モモおよびサクラの１種の種子（核）が認められ、スギの球果と種子が認められた。

江戸時代後期（18世紀）である北区Ⅲ層ではオニグルミ、ヒメグルミおよびモモ種子（核）が認められた。

18世紀初頭から前葉の江戸時代中期の北区Ⅳ層および南区２ｄ層からはオニグルミ種子（核）の破片、モモ種子（核）およびイヌブナ種子が検出された。

17世紀末の元禄４年と書かれた木簡が出土した元禄年間に盛土された北区Ⅴ～Ⅶ層および南区３層などからは、オニグルミ種子（核）、ヒメグルミ種子、モモ種子、スギ球果、スギ種子、スイバ種子、タデの１種の種子、エゴノキ種子、キュウリ種子、ウメ種子（核）、小ウメ種子（核）、

表30　二の丸跡第５地点出土種子一覧表

Tab. 30　List of seeds from NM5

出　土　場　所	植　　物　　名
１層	オニグルミ核、オニグルミ（リス食痕）、オニグルミ核（アカネズミ食痕）
２層上面	モモ核
２層	オニグルミ核
２ａ層直上層	オニグルミ核
２ａ層	オニグルミ核、スギ球果、スギ種子、サクラ類種子
２ｂ層	オニグルミ核、モモ核
北区III層	オニグルミ核、ヒメグルミ核、モモ核
北区IV層	オニグルミ核破片、イヌブナ種子
南区２ｄ層	モモ核
北区Ｖ層	オニグルミ核、オニグルミ核（ヒト食痕）、オニグルミ核（ヒト食痕・炭化痕有）、オニグルミ核(アカネズミ食痕)、オニグルミ核破片、ヒメグルミ核、ヒメグルミ核（リス食痕）、モモ核、カヤ種子
北区VI層	オニグルミ核、モモ核、スギ球果
北区VII層	オニグルミ核、オニグルミ核（炭化痕有）、オニグルミ核（リス食痕）、ウメ核、コウメ核、丹波栗？、クリ種子、ナシ？種子、スイカ種子、カキ種子、キュウリ種子、カボチャ種子、スギ球果、スギ球果と鱗片、スギ種子、スギ枝、スギ雌花、クロマツ球果、モミ種子、モミ葉、カヤ種子、カヤ葉、コブシ種子、イヌブナ穀斗、シラカシ種子、ミズキ種子、サンショウ種子、エゴノキ種子、ハクウンボク種子、ツノハシバミ種子、ツクシハギ種子、ヌスビトハギ種子、イヌツゲ葉、チャノキ種子、チャ種子、ヒヨドリジョウゴ種子、エゾノギシギシ果実、キカラスウリ種子、タデの１種、タデの１種の種子、スイバ種子、スズメノエンドウ種子、マメ科種子、ノブドウ種子、アンズ核
南区３層上面	スギ球果
南区３ａ層	オニグルミ核（リス食痕、炭化跡有）、モモ核、ウメ核、コウメ核、キュウリ種子、スギ球果、イヌツゲ種子？
南区３ｂ層上面ゴミ層	オニグルミ核（ヒト食痕）、オニグルミ核（リス食痕）、オニグルミ核（ヒト食痕・炭化痕有）、モモ核、ウメ核、コウメ核、コウメ種子、クリ種子、キュウリ種子、スギ球果、アカマツ種子、カヤ種子、カヤ（穴２個）、サンショウ種子、タデの１種、タデの１種の種子、マタタビ種子、アカザ種子、ツボスミレ種子、ヒメヘビイチゴ種子、スギ種子
南区３層	オニグルミ核、オニグルミ核（炭化痕有）、オニグルミ核破片、モモ核、コウメ核、スギ球果、カヤ種子、マダケ材
南区３ｂ層	オニグルミ核、オニグルミ核（ヒト食痕）、オニグルミ核（炭化痕有）、オニグルミ核(リス食痕)、モモ核、スモモ核、ウメ核、コウメ核、クリ種子、スギ球果、スギ球果と鱗片、スギ種子、アンズ核、サンショウ種子、タデの１種の種子、スイバ種子、マタタビ種子、ツボスミレ種子、ヤマゴボウ種子
南区３ｃ層	モモ核
１号土坑（IV期）	コウメ核、スイカ種子
２号土坑（IV期）	コウメ核
７号溝（IV期）	オニグルミ核、オニグルミ核(アカネズミ食痕)、モモ核、カヤ種子、ピーナッツ莢
６号暗渠（IV期）	ヒメグルミ核
８号溝（IIIｂ期）	オニグルミ核、オニグルミ核破片、スモモ核、コウメ核、キュウリ種子、カボチャ種子、スギ球果、カヤ種子、エドヒガン核
３号土坑（IIIａ期）	オニグルミ核（リス食痕）
10号柱列（IIIａ期）	オニグルミ核（炭化痕有）
６号池底（Ｉｂ期）	オニグルミ核、キュウリ種子、スギ種子、スギ球果、モミ種子
12号溝（IIａ期）	マメ科、スギ枝
15号溝（IIａ期）	オニグルミ核（ヒト食痕・炭化痕有）、オニグルミ核（リス食痕）、コウメ核、スギ球果、スギ種子、マツ鱗片、ノコンギクの頭花？、シラカシ葉
Pit317（IIａ期）	オニグルミ核、スギ種子、マタタビ種子、スイバ種子
12号池（Ｉｂ期）	モモ核
20号溝（Ｉａ期）	オニグルミ核、オニグルミ核（リス食痕）、オニグルミ核破片、ヒメグルミ核破片、スギ種子、スギ球果
23号溝（Ｉａ期）	スギ球果、スギ種子
９号池（Ｉａ期）	オニグルミ核、スギ球果、マツ球果鱗片
不明	オニグルミ核、オニグルミ核（ヒト食痕有）、イチョウ種子

ヒヨドリジョウゴ種子、ミズキ種子、エゾノギシギシ種子、カヤ種子、サンショウ種子、イヌブナ殻斗、ツノハシバミ種子、キカラスウリ種子、スズメノエンドウ種子、コブシ種子、アンズ種子(核)、ナシ種子？、スギ枝、スギ雄花、丹波栗？、ノブドウ種子、ツクシハギ種子、クリ種子、シラカシ種子、チャノキ種子、ヌスビトハギ果実、マメ科種子、ハクウンボク種子、カキ種子、スイカ種子、カボチャ種子、クロマツ球果、イヌツゲ種子、アカザ種子、ツボスミレ種子、マタタビ種子、ヒメヘビイチゴ種子、アカマツ種子など40種類の植物の果実や種子が検出され、カヤの葉、モミの葉、イヌツゲの葉が検出された。スギの枝や雄花も検出された。また、動物としては淡水産のヤマトシジミの殻が検出された。

オニグルミ種子にはリスの食痕、アカネズミの食痕およびヒトの食痕が認められた。また、オニグルミ種子の一部分が炭化したものも見られた。

カヤの種子には割ったように小片に分かれたものが大部分であった。ウメの種子には大きいウメと小さいウメの種子があり、大きい方はウメとし小さい方は小ウメとした。そして小ウメの方が数が多かった。

17世紀の江戸時代初期から元禄年間までの北区Ⅷ層と南区３層からはカヤ種子、スギ球果、オニグルミ種子、モモ種子、アンズ種子、スモモ種子、小ウメ種子、クリ種子、マタタビ種子、タデ科の１種の種子、スイバ種子、サンショウ種子、ツボスミレ種子、ヤマゴボウ種子など14種類の果実や種子が検出された。

遺構からの出土物について見ると、19世紀の江戸時代末期から明治期のⅣ期の遺構からは、スイカ種子、小ウメ種子、オニグルミ種子、モモ種子、カヤ種子、ヒメグルミ種子、ピーナッツ果実片の７種類の果実と種子が検出された。

18世紀後半から19世紀中葉の江戸時代後期のⅢｂ期の遺構からはキュウリ種子、スギ球果、オニグルミ種子、カボチャ種子、カヤ種子、エドヒガン種子、小ウメ種子、スモモ種子の６種類が検出された。

17世紀後半の江戸時代前期のⅠｂ期からⅡｂ期の遺構から出土した植物遺体はモミ種子、オニグルミ種子、キュウリ種子、スギの球果と種子であった。

17世紀の江戸時代初期から前期のⅠａ期からⅡｂ期の遺構からはヒメグルミ種子、オニグルミ種子、スギ球果と種子の３種類であった。ヒメグルミは核が破片として出土し、オニグルミは破片およびリスの食痕が認められた。

17世紀末の江戸時代中期のⅡａ期の遺構からはオニグルミ種子、小ウメ種子、スイバ種子、マタタビ種子、スギ球果と種子、マツ球果の鱗片、マメ科の果実の７種類の果実と種子、ノコンギクの頭花？とシラカシの葉が認められた。オニグルミの種子にはリスの食痕、ヒトが割ったと思われる小片状になったものが出土した。また、一部に核が炭化したものもあった。

17世紀後半の江戸時代前期のⅠｂ期の遺構からはモモ種子が検出された。

17世紀前半の江戸時代初期のⅠａ期の遺構からはスギ球果と種子、マツの球果の鱗片およびオニグルミ種子が検出された。この遺構は池の底である。

時代区分が時期不明であるＫ―18区層不明の遺構からはイチョウの種子が検出された。

二の丸跡第５地点から出土した植物遺体はスギ、モミ、オニグルミなど54種類の果実や種子が出土した。また、スギの枝、モミの葉、イヌツゲの葉なども出土した。これらの植物遺体がどこから供給されたかが解明されると、仙台城二の丸の植物的環境が推測できるものと考える。旧二の丸周辺の現在の植生状況などから出土した植物遺体の供給について述べてみる。

江戸時代中期の元禄年間の層位からモミの種子や葉およびイヌブナ種子が出土したが二の丸の後背地は御裏林として、城の防備のため人の侵入を禁止してきたことから現在気候的極層林であるモミ―イヌブナ林が成立している。おそらく当時も現在と同様の植生であったと考えられるから、御裏林に生育していたモミとイヌブナから飛来したものであろう。

オニグルミ種子が二の丸跡第５地点の全ての層位や遺構から出土している。このオニグルミ種子は硬い核が綺麗に縫合線から分離しているものがあり、これはホンドリスが種子を食べた痕と考えられる。さらに、核の中央部に指先ほどの穴が２個認められるものが出土しており、これはアカネズミの食痕である。オニグルミはやや湿った土地に生育し、池の周辺や谷筋に生育する樹木である。二の丸跡第５地点には複雑な形をした池が存在するので、この周辺に生育していた可能性が考えられる。

しかし、この報告書の守田の花粉分析の結果を見ると、クルミ属の花粉は検出されていない。クルミ属の花粉は風媒であるから周囲に飛散されるであろうからオニグルミが池の周りに生育していたという証拠は、花粉分析からは支持されない状況である。城の中で整地のために土砂を移動するとすれば、周辺の高い所を削り、低い所を埋めたと考えると、池の周辺ではなく池よりも離れた場所から運ばれた可能性が考えられる。現在の仙台城二の丸跡の地にオニグルミおよびヒメグルミが生育することから、当時の城内にオニグルミとヒメグルミが生育しなかったという結論は導き得ないと考える。

モモ、ウメ、小ウメ、アンズ、丹波栗？、クリ、ピーナッツ、イチョウ、カヤ、オニグルミ、ヒメグルミ、キュウリ、カボチャ、スイカは食料として利用されてきている。これらの中カヤは油を取り、灯明の油や食用油として使用され、重要な油脂植物であったと考えられる。また、灰汁抜きをして食糧として利用されてきた。この利用については昭和30年代まで続いていたという。しかし、現在では殆ど利用はされていない。

オニグルミおよびヒメグルミの種子もクルミ餅などとして、カヤと同様に食糧として利用されてきたものであろう。

ウメや小ウメは梅干しとして利用された残些として捨てられたものか、二の丸の庭園に植えられていた庭木から落下した種子の何れかであろうが、何れであるかは確定できない。

モモはおそらく食糧として果肉を利用した残些として捨てられたものであろうと考えられる。

カボチャ、スイカ、キュウリについては食糧として利用された残些が捨てられたものであることは疑う余地はないものであろう。キュウリ種子については種子の大きさに変異が多かったが全てキュウリとしたが食用のウリ属の他の種類であるかどうかは今後の検討を要する。

イチョウ種子は現在でも銀杏として食用に利用されているが、出土した量が少ないので、食用として利用されたものの残些であるかどうかは判然としない。

土壌層位や遺構などとの関わり、城内における種子類の利用などそれぞれの専門分野との検討が必要であると考えている。

≪引用・参考文献≫

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編　1982　日本の野生植物　草本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　平凡社
佐竹義輔・原　　寛・亘理俊次・富成忠夫編　1989　日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ　平凡社
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　東北大学埋蔵文化財調査年報6

⑸ 昆虫

保谷忠良（仙台市立図南萩陵高等学校）

仙台城二の丸跡第５地点の調査で検出された、昆虫の同定結果は、表31の通りである。

１・３・５等の双翅目ハエ類は、有機質（特に動物質）のゴミ堆積物中でも発生する。

２のヤマトゴキブリは屋外から屋内まで生活範囲は広い。屋外では普通朽木の中で生活している。

４・６のキンナガゴミムシは、現在の宮城県では森林から草地に広く分布しており、畑地や住宅の庭地でも見かけることができる。ミミズや他の地表性動物、糖蜜などを摂取する。

７のゲンゴロウは、水がきれいであれば、水深１m前後の浅い池沼でも生息している。メダカや他の小魚、オタマジャクシなどを食べるので、それなりの広い水域が必要である。

８のガムシは前種と同じような生活をしているが、よごれがひどく、狭い水域でも生息している。

これらの出土した昆虫は、当時その場所で生活していたものか、人為等によって外部から移動してきたものかは、出土状況や同一場所の特に植物遺体などと合わせて考察する必要があり、現時点では判断できない。

表31　二の丸跡第５地点出土昆虫一覧表

Tab. 31　List of insects from NM5

整理番号	出土場所	種類・部位など
1	基礎９区　Ⅶ—３層	双翅目ハエ類の蛹殻
2	E25　１号土坑　埋５層	ヤマトゴキブリ♂幼虫
3	K19区　層不明	双翅目クロバエ科ミドリキンバエ
4	E26区　3b層ゴミ層	鞘翅目オサムシ科キンナガゴミムシ　頭部の一部
5	基礎９区　Ⅶ—３層	双翅目ハエ類の蛹殻
6	基礎９区　Ⅶ—４層	鞘翅目オサムシ科キンナガゴミムシ　前胸背左半分
7	J20区　８層	鞘翅目ゲンゴロウ科ゲンゴロウ 前翅・腹節・後基節突起・前胸背一部（破損大）
8	J26　３層	鞘翅目ガムシ科ガムシ ほぼ１個体、ただし左前翅が２枚ある

第Ⅲ章　仙台城二の丸跡第５地点調査成果の検討

１．遺構の変遷

今回の第５地点の報告では、18列以南の本体区を先の年報６で、これより北の部分について本年報で報告した。ここでは、５地点の調査区全体について、Ⅰ期からⅣ期にいたる各時期の遺構を、それぞれ検討してみたい。

(1)　Ⅰ期の遺構

Ⅰ期は、元禄年間の整地層以前のもので、二の丸拡張以前に置かれていた、五郎八姫の居館、西屋敷に関わる遺構と考えられる。Ⅰ期は、Ⅰａ期とⅠｂ期に細分された。まず、このⅠａ期とⅠｂ期の年代を検討したい。

①　Ⅰａ期・Ⅰｂ期の遺構の年代

文献から知られる西屋敷に関わる記述の内、屋敷の改変につながる可能性のある出来事としては、以下の３件が考えられる。

元和６年（1620年）五郎八姫の帰仙に伴う西屋敷の造営。

寛永13年（1636年）伊達政宗の死去に伴い隠居した茂庭綱元が、愛子村栗生の西館を五郎八姫に差し上げ、西屋敷と愛子の西館が併存するようになったこと。

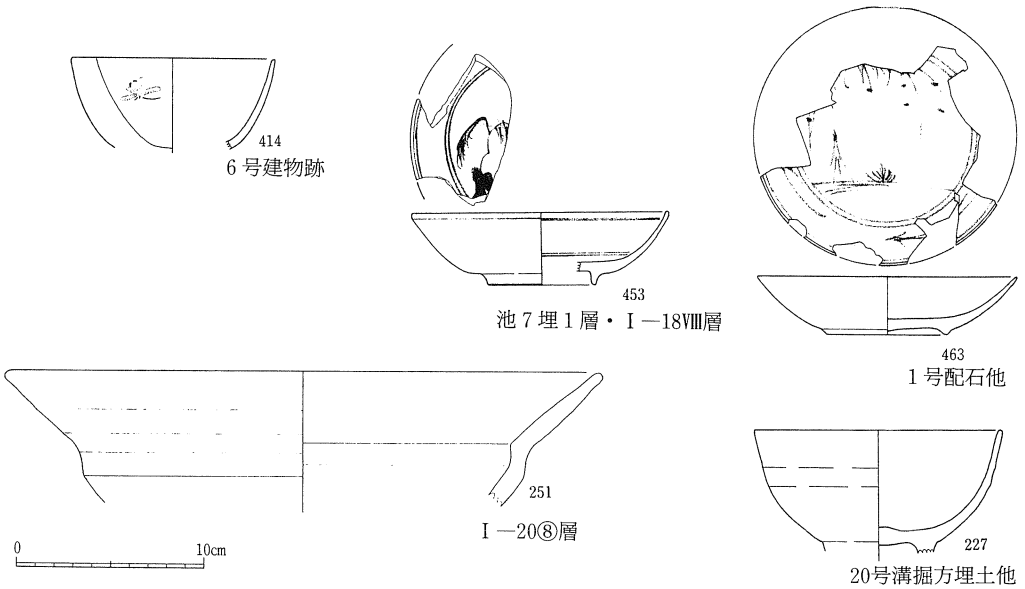


図31　Ⅰａ期の遺構出土遺物

Fig. 31　Porcelains and glazed ceramics from features of phase Ⅰa at NM5

寛文元年（1661年）五郎八姫の死去。

Ⅰａ期の開始時期を直接検討できるような遺物は出土していないが、元禄年間以前で庭園を伴う礎石建物群という大規模な造営は、西屋敷の造営以外には考え難い。したがって、Ⅰａ期の開始が、元和６年（1620年）の西屋敷造営にあたると考えられる。

図31に示したのは、Ⅰａ期の遺構を埋めている層から出土した陶磁器である。この内、453が1640～1650年代、その他のものは、17世紀後半のものか、17世紀後半以降のものと考えられる。これ以外に、Ⅰａ期の20号溝埋土から17世紀末以降の磁器が出土しているが、Ⅱｂ期に畑が作られた際に、20号溝に重なり、その窪みを利用する形で、畑の周囲の区画溝が設けられており、本来はⅡｂ期の遺物であったと考えられる。したがって陶磁器からは、Ⅰａ期とⅠｂ期の境を寛永13年の西館との併存開始の時期とするのは難しく、寛文元年の五郎八姫の死去以降と考えられる。また、３号石列遺構の掘方埋土から寛永通宝が出土している。寛永通宝の鋳造開始は、寛永13年であり、この点からもⅠｂ期の開始を寛永13年まで上げることは難しい。

Ⅰｂ期の遺構を埋めているⅦ層からは、元禄４年（1691年）の紀年銘のある木簡が出土しており、元禄年間に行われた二の丸改造の際に埋められていることが判明する。木簡は荷札と考えられるもので、使用されてから捨てられるまでの時間が、さほど長いとは考えがたいことから、元禄４年頃までには、Ⅰｂ期の遺構は廃絶したものと考えられる。

以上の点から、Ⅰａ期が元和６年（1620年）の五郎八姫の帰仙から、五郎八姫の亡くなる寛文元年（1661年）まで続き、Ⅰｂ期が寛文元年以降で、元禄４年以前であることは、ほぼ確実であると判断できる。

②　Ⅰａ期の遺構と西屋敷

Ⅰａ期の遺構（図32）は、先に述べたように、伊達政宗の長女五郎八姫の西屋敷の遺構と考えられる。西屋敷が記載された絵図は、正保２・３年（1645・46年）の「奥州仙台城絵図」が唯一のものである(図33)。この絵図は、西屋敷の南に存在した伊達政宗の四男伊達宗泰の屋敷のあった場所に、寛永13年（1638年）に二の丸が造営されて以降の状況を表している。城下全体を表した絵図であり、屋敷の中の建物などは描かれていないが、東西102間、南北60間の規模であったことが記されている。

今回の調査区が、この西屋敷の中で、どのような位置にあたるのかを検討したい。これまでの二の丸跡の調査において、二の丸造営以前の遺構が検出されている地点としては、今回の第５地点の他に、1984年度と1987年度に調査した第４地点（年報５）と、1990年度調査の第９地点（東北大学埋蔵文化財調査委員会1990、須籐・佐久間・山田1991）がある。

第４地点では、二の丸造営に伴う大規模な整地層の下層から、伊達宗泰の屋敷と、西屋敷を分ける施設の可能性のある遺構が検出されている(図34)。59区から75区の間が、幅の広い浅い

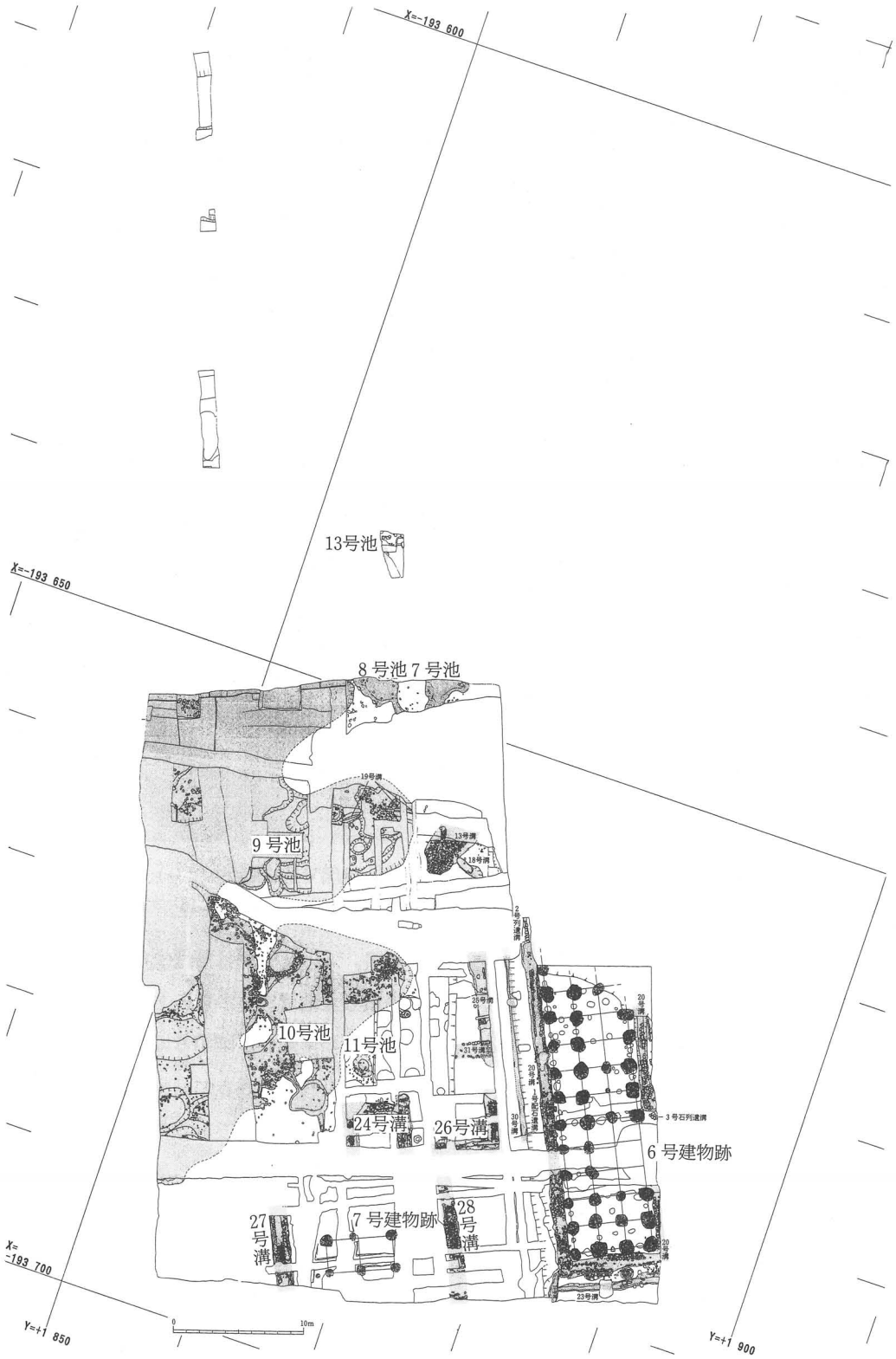


図32　二の丸跡第5地点全体遺構配置図（Ⅰa期）

Fig. 32　Distribution of features at NM5 (phase Ⅰa)

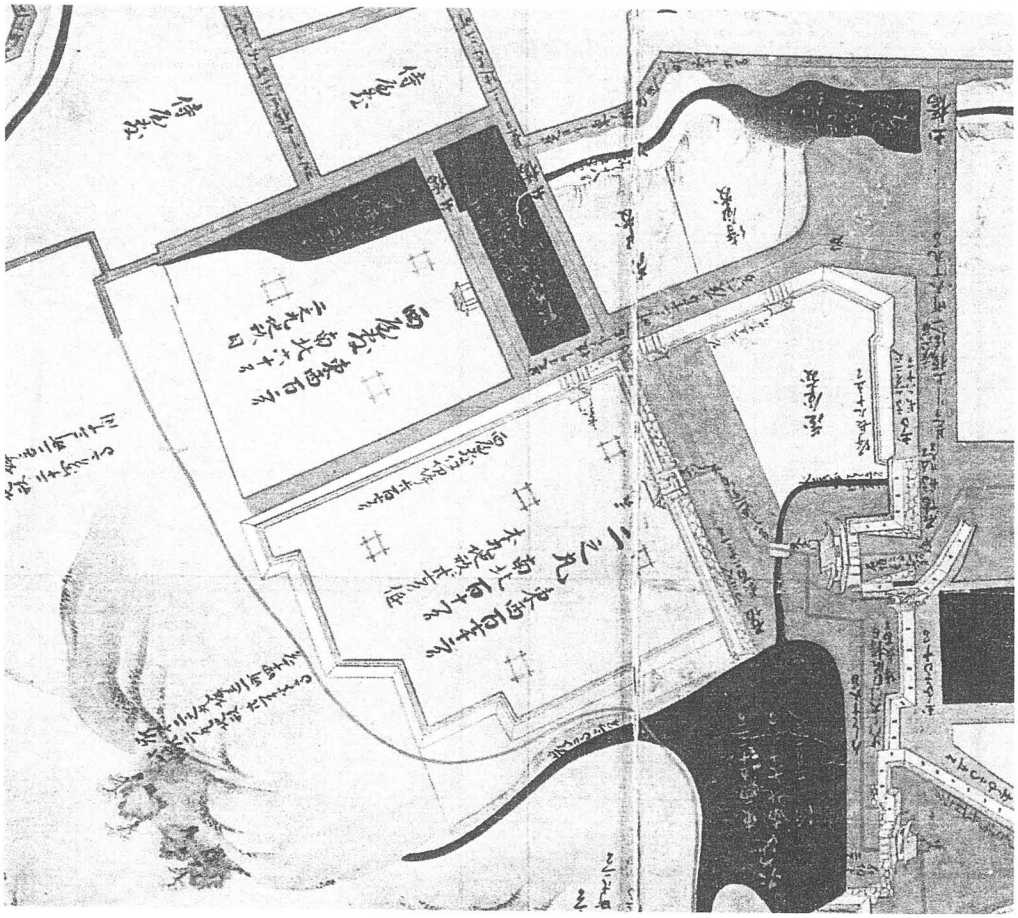


図33　正保二・三年仙台城下絵図（『絵図・地図で見る仙台』より）
Fig. 33　A historical map of Sendai city, drawn in 1645-46

堀状を呈しており、その中に６・７号溝が掘られている。６・７号溝は平行することから、道路の側溝の可能性もあるが、溝にはさまれた部分に堆積した地層から多量の木製品が出土し、低湿な状況であったと推定されることから、宗泰の屋敷と西屋敷を区画する堀状の浅い掘り込みの中で、排水を目的とした溝の可能性を指摘している。これらのさらに南側に、８号溝が存在する。第９地点は、未報告であり、詳細な検討は加えていない段階であるが、二の丸造営に伴う整地層の下層から、伊達宗泰の屋敷と考えられる建物跡と、第４地点の南端で検出された８号溝の続きが検出されている。

この第４地点と第９地点の様相から考えると、西屋敷の南端は、少なくとも、第４地点で検出された堀状の落ち込みより南には行かないことは確実であろう。但し、ここで問題となるのは、今回の第５地点で検出された遺構群は、二の丸期のものも含めて、基本的にN―25°―Wの方向を取り、ずれるものでもN―24°―W程度である。それに対して、第４地点と第９地点の下

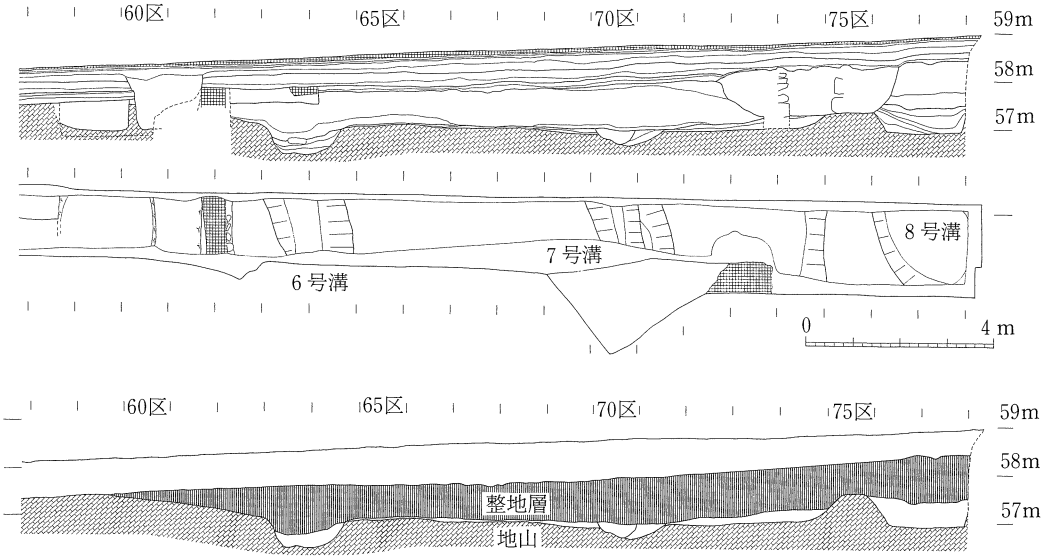


図34　第4地点下層検出遺構

Fig. 34　Distribution of features at NM4 (earlier phase)

層遺構は、N—29～30°—Wの方向を取っている。そのため、宗泰の屋敷と対面する西屋敷の南辺を、どちらの方向で復元するのかが問題となる。N—29～30°—Wの方向で復元すると、西屋敷の西南隅の位置が、著しく南によってしまうことと、屋敷内の建物との方向がずれることになるため、ここではN—25°—Wに直交する方向で南辺を想定した。

西屋敷の北辺には、北側の沢を拡張して造られたと考えられる「ため池」があり、ここが屋敷の北端となっている。この「ため池」は、二の丸が拡張された以降も、その北辺の堀として幕末まで継続していることが、その後の時期の絵図から判明する(年報4)。10区の北端で検出された堀状の落ち込みが、二の丸北側の堀の南岸の落ち込みに相当すると考えられるが、この10区の堀が形成された時期は、その埋土から遺物が出土していないため不明である。しかし、現状の地形も合わせて考えると、大きくその位置が動いているとは考え難い。次に述べる西辺の推定ラインから、屋敷南西隅のコーナーを推定し、そこから1間＝197cmとして60間（118.2m)北に進んだ所に北辺を推定すると、この10区北端の堀の落ち込みの位置に近い所にあたる。西屋敷の北辺の東側は、この部分だけ「ため池」が南に広がっている。現地形でも、これに相当すると考えられる部分で標高が低くなっており、この部分は現地形から推定ラインを考えた。

正保2・3年図では、二の丸北辺の裏門である台所門の前は、「ため池」となっており、その西側に西屋敷の前の道が南北に走っている。後の二の丸が拡張されて以降の城下絵図と見比べると、周囲の武家屋敷との関係などから、正保2・3年図の西屋敷の前の道が、後の絵図で台所門から北へ伸びる道に相当すると考えられる。台所門の位置が時期によって変化している可

能性は低いので、正保２・３年図の台所門の位置が若干ずれて描かれている可能性がある。そうであるならば、西屋敷の東端は、台所門の位置までは行かず、それより西側であると考えられる。後に詳述するが、III期（二の丸期）の遺構と二の丸絵図との対比から、IIIｂ期で検出された門跡が中奥の門に相当すると考えられるため、この中奥の門の位置を基準に、台所門の西側の位置を算出することができる。二の丸絵図の中で、１間ごとの方眼が描かれている享和２年図を利用して、間数を数えて距離を算出した。中奥の門の西端で中奥北辺の塀とぶつかるところをＡ点、台所門西側から北に伸びる塀が御借長屋の脇の門に分かれるところをＣ点とすると(図42)、Ａ点からＣ点までの距離は、東に80間、南に17間進んだところになる。１間を６尺５寸（＝197cm）として計算すると、それぞれ157.6mと33.49mになる。この点を現地形上に落としたのが図35のＣ点である。この点を通るように、南辺の推定ラインから直角に振って東辺のラインを推定した。ここから102間（200.94m）西に進んだ所に西辺のラインを想定すると、現地形上で平坦面から丘陵斜面に移行する付近に位置することとなる。

以上の検討から、現地形上に西屋敷の範囲を復元したのが図35である。この復元では、西屋敷の西辺が、第４地点の調査区の中を通るが、第４地点の調査では、西屋敷の西辺に相当すると考えられる確実な遺構は検出されていない。このため実際には、この復元から若干ずれるであろう。わずかなデータから推測を重ねた復元であるので、今後、修正が必要な部分も多く残っているであろう。しかし、北側の沢と、西側の丘陵地との関係から、西屋敷の推定範囲がこの復元から大きくずれることは考え難い。

以上のように西屋敷の範囲を考えると、第５地点の調査区は、屋敷の西よりの部分に相当することとなる。正保二・三年図では、西屋敷の門は東側に描かれており、東側が屋敷の表であり、第５地点の調査区は、奥よりの部分にあたることとなる。

Ｉａ期では、２棟の礎石建物跡が検出された。その内の７号建物跡は、１×２間分の礎石が検出されただけであるが、27号・28号溝がこの建物に伴う雨落溝と考えられる。27号・28号溝の伸び方から考えると、７号建物跡は、東西４間、南北４間以上になる可能性がある。東側は28号溝までの距離が広いため、さらに半間ほど広がる可能性もある。また、７号建物跡の北側には、24号溝がコ字状に走っており、これも雨落溝と考えられることから、この部分に１間四方の庭を望む縁台のような張り出した部分が附属すると思われる。７号建物跡は、柱間が252cmと通常の建物と比べると広くなっており、池に面して立てられ、１間四方の張り出しを持つことから、日常的な住空間ではなく、ハレの空間であったと考えられる。但し、先に復元した西屋敷の範囲の中では、最も奥まった位置にあたることから、正式な面会などに使われたことは考え難い。そのような用途の建物は、門を入ってほど無い所に設けられたと考えられる。したがって、私的な供応・遊興などの際に利用されたものと考えておきたい。

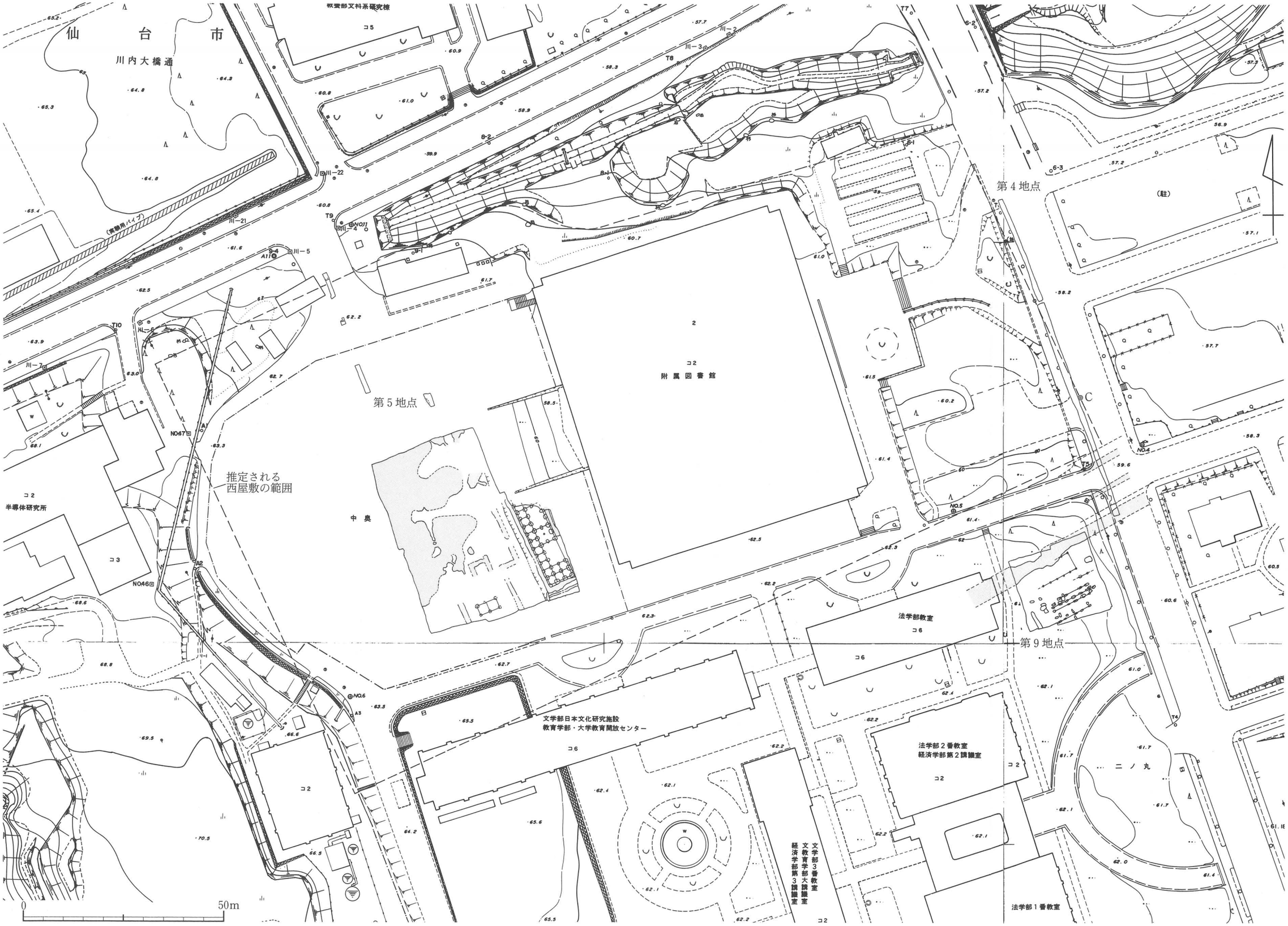


図35　二の丸築造以前の遺構配置と西屋敷の復元

Fig. 35　Distribution of features before construction of *Ninomaru* and inferred area of *Nishiyashiki*

24号溝の東側には、26号溝がＬ字状に伸び、さらに北側には31号溝と25号溝が存在する。これらの溝も、その構造から、建物に伴う雨落溝と考えられるが、建物については明らかにできなかった。池との位置関係から、比較的小規模な建物と考えられ、あるいは７号建物跡と６号建物跡をつなぐ廊下のような部分を含むのかもしれない。

６号建物跡は、池や７号建物などの分布する区域より、一段低くなった部分にあり、柱間はほぼ200cmで、１間＝６尺５寸（197cm）になるものと考えらえれる。このことから、特別な性格を持った建物とは考え難く、日常的な生活空間であると推定される。また、６号建物跡の周囲をめぐる雨落溝と考えられる20号溝が東側で切れており、この部分からさらに東側に建物が展開していく可能性がある。そのため、いくつかの建物が廊下でつながる、分棟型建物を構成していくものと考えられる。

本体調査区の建物跡の西側には、池を配した庭園が広がっている。本体調査区より北側は、この時期の遺構面まで調査した範囲は狭いものの、12区において本体区から続く池と考えられる遺構が発見されており、庭園がこの付近まで広がっていたことが判明する。本体調査区の西側にも池が続いていくが、西側の丘陵地との関係から、池のさらに西側に施設が設けられていた可能性は、茶室などの小規模なものを除くと、考え難い。そのため、この池を配した庭園は、屋敷の西端まで伸びていたものと思われ、西側の丘陵を借景として利用していた可能性も考えられる。

③　Ｉｂ期の遺構と「天麟院様元御屋敷」

Ｉｂ期の遺構（図36）は、五郎八姫死去後のものと考えられるが、これを検討するに際に問題となる、「天麟院様元御屋敷」と記された絵図が、宮城県立図書館所蔵の『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調　寛文延宝貞享定書共』の中に２枚存在する（図37、註１）。この冊子は、戊辰戦争以降に散逸したものを、明治25年に集めたものであり、それぞれの図の明確な年代は判らない。ただ、その図の題名から、五郎八姫の亡くなった寛文元年から、二の丸の改造が行われた元禄年間より前であることは確実であろう。そうすると、今回の調査のＩｂ期が相当することになる。

いま仮に、この２枚の絵図のうち、冊子のなかで先に綴じられているものをＡ図、後ろをＢ図とすると、２枚の「天麟院様元御屋敷」の図は、共通する建物も多いが、両者で異なっている建物も見られる（註２）。しかし、屏風蔵などの蔵と、下級の役職の藩士などの居所、あるいは作業場などで占められる点で共通する。二の丸の北側に付随する、実務的な建物の置かれた区画と考えられ、五郎八姫の西屋敷時代からは、この区域の性格が大きく変わっているものと考えられる。

これらの建物の中で、姓名の書かれているものを抜き出すと、次の通りとなる。

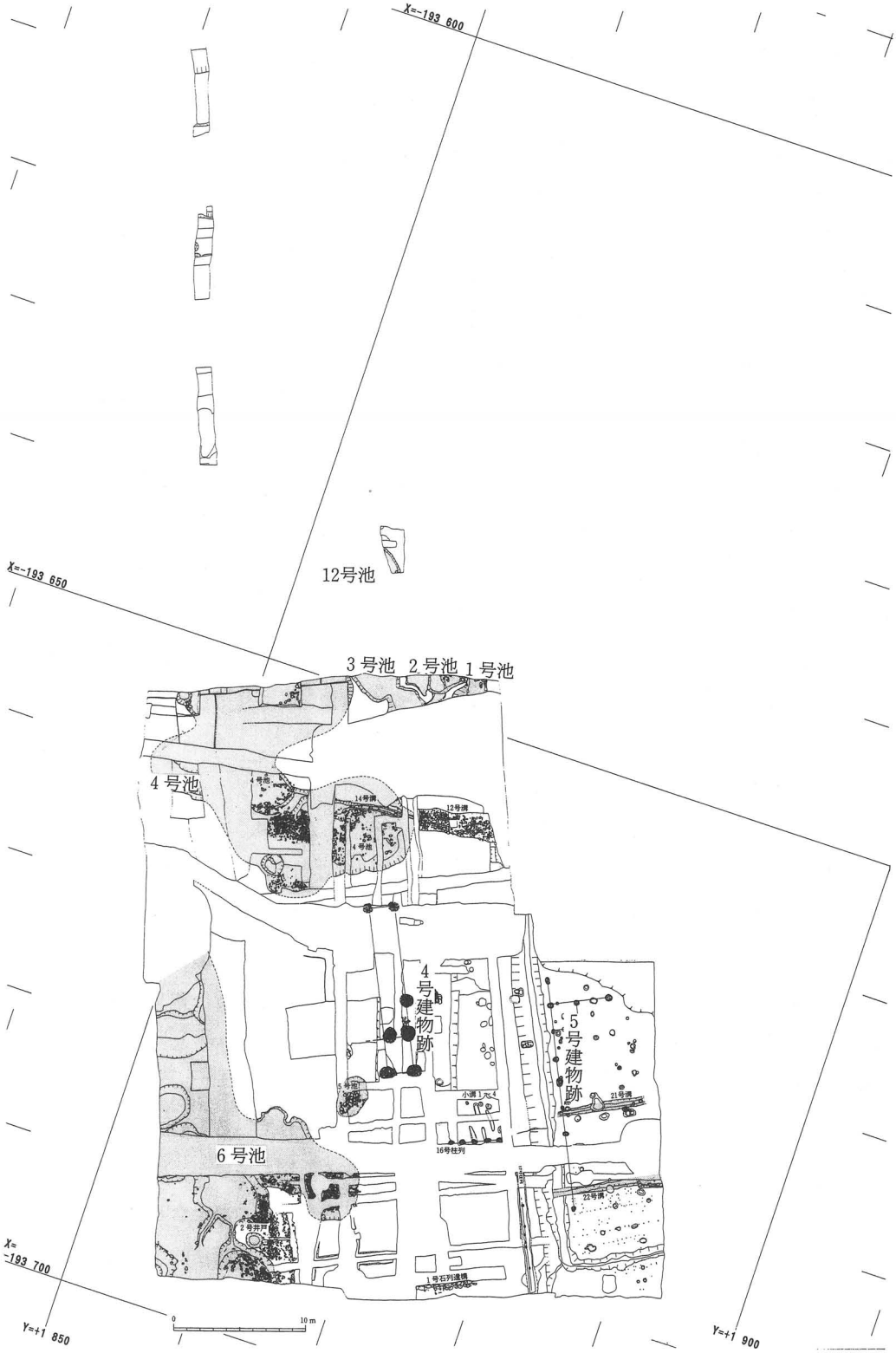


図36　二の丸跡第５地点全体遺構配置図（Ⅰｂ期）

Fig. 36　Distribution of features at NM5 (phase Ⅰb)

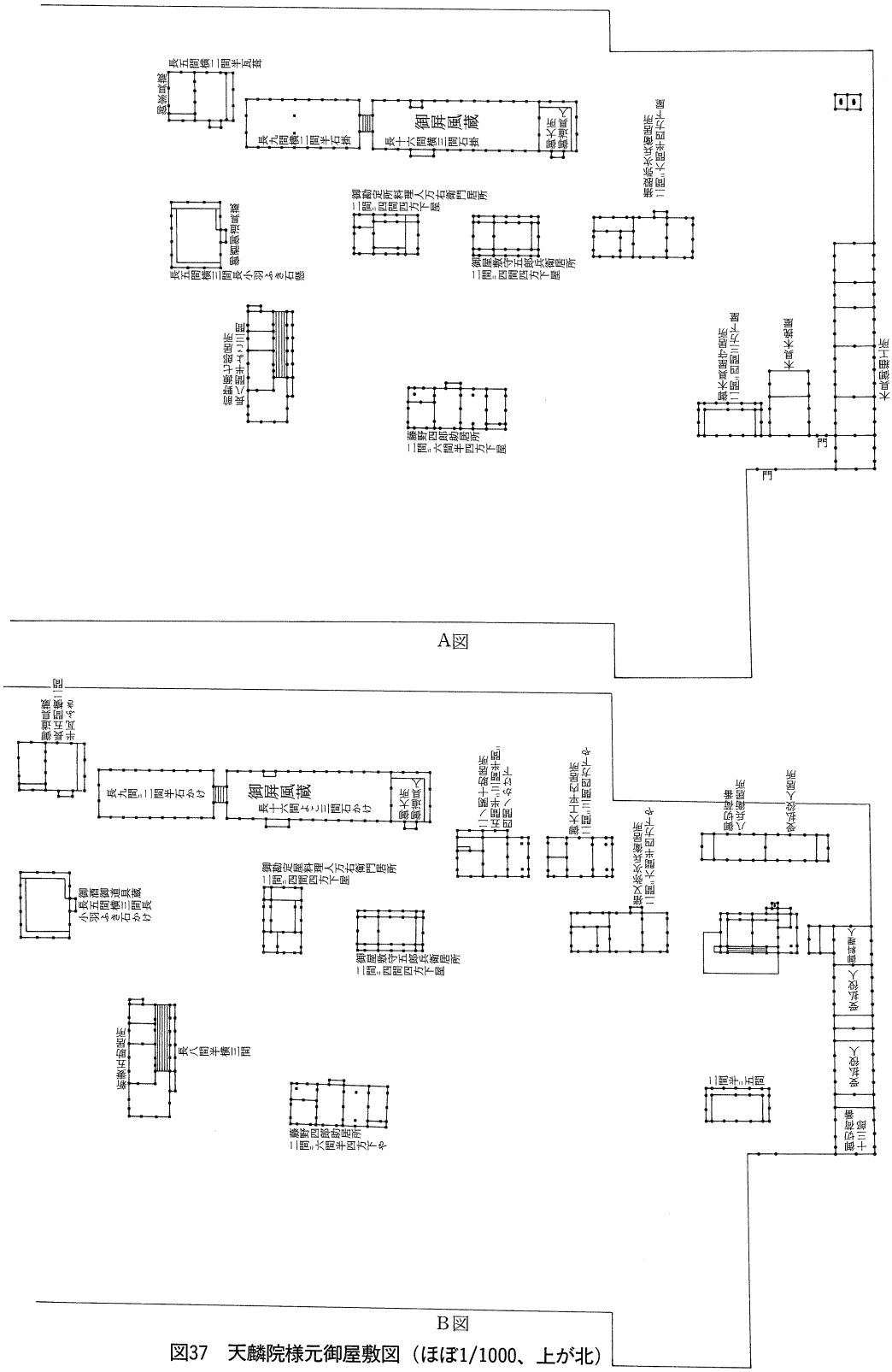


図37　天麟院様元御屋敷図（ほぼ1/1000、上が北）

Fig. 37　A picture of the area where formerly *Nishiyashiki* had been built

Ａ図　前野源七郎　藤野四郎助　猪股弥次兵衛

Ｂ図　　藤野四郎助　猪又弥次兵衛　新妻五助　二ノ関十助

このうち、Ｂ図の藤野四郎助を除く３名は、延宝６～８年（1678～1680年）製作の「仙台城下大絵図」中に見える人名である。新妻五助は、寛文８・９年（1668・1669年）製作の「仙台城下絵図」にも見られる（阿刀田令造1936）。

Ａ図・Ｂ図ともに、敷地の東端には、長屋状の建物があり、Ａ図では「木具御細工所」となっており、Ｂ図では「御切荷番」「受払役人」などの役職が書かれている。このＢ図に見える役職名は、宮城県立図書館所蔵の『御修覆帳』の中にある「御二丸御屏風蔵并御貸長屋」図（図45）の、「御貸長屋」（享和２年図では御借長屋、図42）に書き込まれた役職名と共通する。このＢ図の長屋状の建物が、後の「御借長屋」に相当すると考えると、その脇の鉤の手状になる所にある門が、図45の「御貸長屋」の脇の「御門」に、図42の「御借長屋」の脇の門に、それぞれ位置関係が良く対応する。ただし、享和２年図では、「御借長屋」が他の建物とは方向を変えている点で、問題を残しているが、これらの建物が対応するとして、大過ないものと考えられる。そうすると、Ｂ図と「御貸長屋」との役職名の類似性から、Ｂ図の後にＡ図が書かれ、「御貸長屋」図に続くという順序は考え難く、Ａ図→Ｂ図→「御貸長屋」図という時間的関係が想定される。Ｂ図に見える人名の多くが、延宝６～８年の城下絵図に見えることから、Ｂ図が延宝年間頃、それに先行すると考えられるＡ図が寛文年間頃のものである可能性が考えられる。

先にＩａ期の検討でも述べた「御借長屋」西側の門の脇のＣ点（図35・42）は、長屋状の建物の西側の門横の、鉤の手に曲がる角に相当する。図37は、「御屏風蔵」の桁行16間を、１間６尺５寸（＝197㎝）として計算し、縮尺を合わせている。これを利用し、この点で合わせて重ねて見ると、第５地点の調査区は、Ａ図・Ｂ図ともに、図に表された範囲のさらに西側の位置になり、この絵図には描かれていない部分となる。

しかし、Ａ図とＢ図では、同じ建物と考えられるものの位置や、それらの建物相互の位置関係がかなりずれており、大まかな配置関係のみを示し、それら相互の距離などの位置関係については、厳密でない可能性がある。特に「御屏風蔵」は、ほとんど同じ規模で二の丸期の絵図にも描かれているため（図44・45）、その位置は二の丸期まで変わっていないことも考えられる。そのように仮定すると、後に詳しく検討する二の丸期の「御屏風蔵」と中奥の門との位置関係から考えると、この「天麟院様元御屋敷」図の「御屏風蔵」の南西側の建物が、今回の調査区に重なってくる可能性も考えられる。その場合、５号建物跡がＡ図の「前野源七郎居所」、Ｂ図の「新妻五助居所」に対応し、４号建物跡が「御酒御道具蔵」に対応する可能性が考えられる。しかしＩｂ期には、Ｉａ期の池を改修して、あらためて池を造っており、この池の性格が問題

となる。Ⅰａ期のような庭園を構成するものでなく、西側の丘陵から流れてくる水に対処するための、排水処理のために池を残したのであろうか。しかし、４号建物跡は池に囲まれた中にあり、これが「御酒御道具蔵」であるとすると、いかにも不自然である。また、４号建物跡は、桁間約273cm（約９尺）と、一般的な建物より間尺が広いことは、蔵との想定に合わない。あるいは、この池の周辺の区画のみ庭園として維持され、別の用途に使われた可能性も残る。その場合、５号建物跡と４号建物跡は、「天麟院様元御屋敷」図に見られる建物には対応せず、今回の調査区は絵図に描かれた範囲の外ということになる。

⑵　II期の遺構

II期も２時期に細分されるが、この２時期の遺構面と、その前後に形成された整地層が、元禄年間の二の丸大改造に関連するものと考えられる。

『伊達治家記録』から二の丸の普請関係の記事を抜き出すと、貞享４年（1687年）にも、御座間の普請の記事などが見えるが、翌元禄元年（1688年）以降、元禄年間の前半を中心として、表向きの建物に一連の新築工事が行われている（佐藤巧1967・1979）。奥方については、元禄３・４年にも記事が見えるが、元禄13年（1700年）に、奥方普請の記事があり、同年９月に「奥方造営落成」との記載がある。

Ⅰｂ期の遺構を埋めている北区18・19列のⅦ層とⅥ層からは、元禄４年の紀年のある木簡が出土しており、この頃に形成されたことが確実である。この18・19列のⅦ層とⅥ層に相当する20～22列の⑦層と⑥層からは、瓦や加工木が多く出土しており、元禄年間前半に行われた一連の工事によって排出された廃材が捨てられた可能性がある。18・19列のⅦ層には、土師質土器の皿が大量に含まれ、また白木の箸も多く出土している。このため、宴会に伴うゴミが捨てられている可能性が考えられる。一方、20～22列では土師質土器の皿も箸もほとんど出土しない。場所によって、捨てるものが決まっていたのであろうか。

IIａ期のⅥ層上面の遺構は、溝２条と土坑が１基ある程度で、遺構密度は極めて低い（図38）。溝は、Ⅰｂ期に池があった部分に造られており、排水の目的で設けられた溝の可能性が考えられる。したがって、IIａ期の遺構は、一連の整地の間に、一時的に排水の目的で造られた遺構と考えられ、存続時期は短かかったものと思われる。

IIｂ期では、畝状の遺構が展開し、畑の区画状に溝で区画されている遺構のあり方から、畑跡であると推定した（図39）。しかし、第II章５で報告したように、花粉分析結果からは、畑として利用された積極的な根拠は得られなかった。II期の存続期間は、全体で10年前後であることが先に示した文献資料からは推測される。畑としての利用期間も短かったものと考えられる。

一方、プラントオパール分析では、イネのプラントオパールが検出されており、イネが栽培

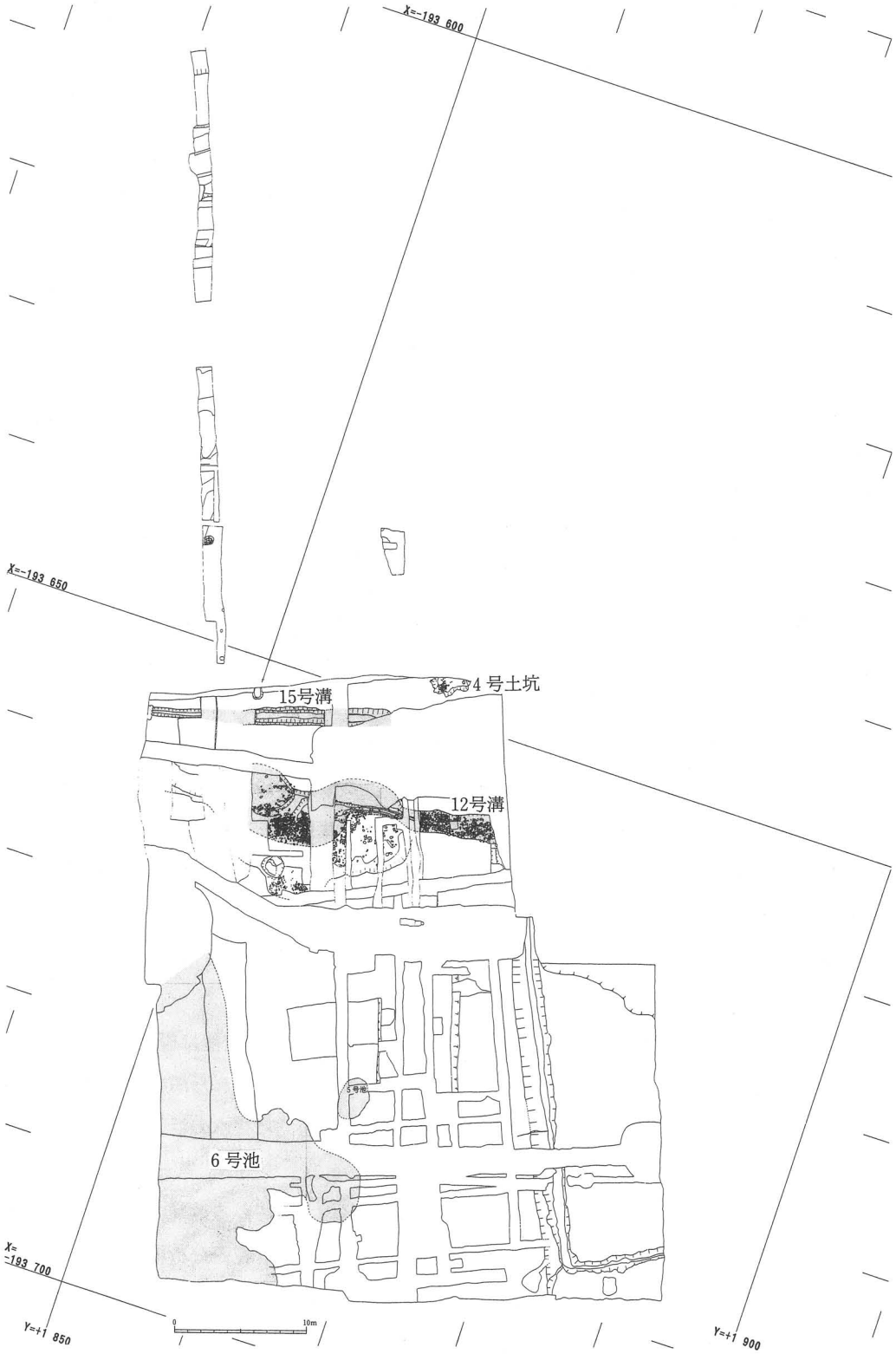


図38　二の丸跡第５地点全体遺構配置図（II a 期）

Fig. 38　Distribution of features at NM5 (phase IIa)

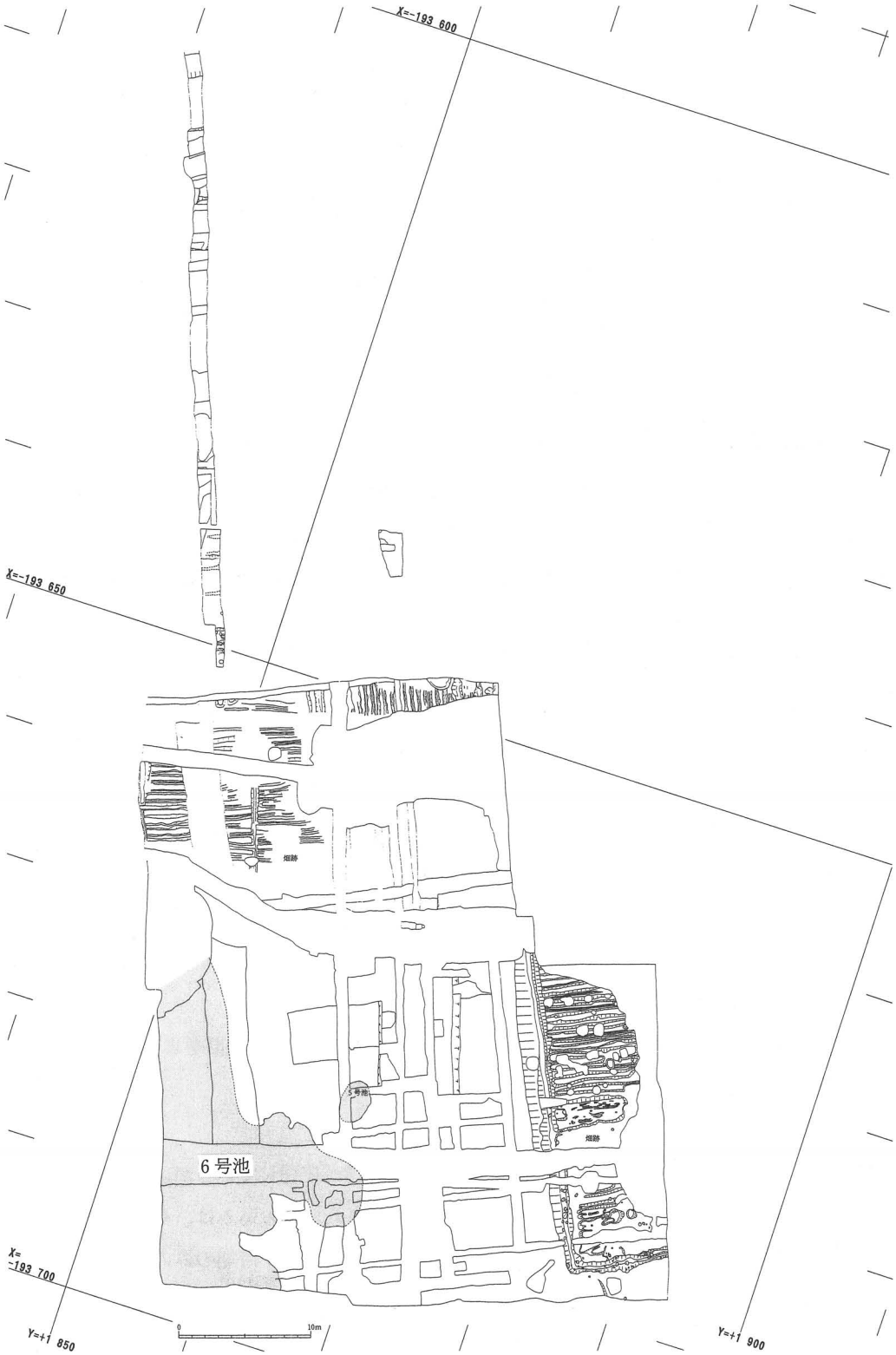


図39　二の丸跡第５地点全体遺構配置図（IIｂ期）

Fig. 39　Distribution of features at NM5 (phase IIb)

されていた可能性が指摘された。ただし、その密度は低い値であった。この段階では、狭義の二の丸の範囲内ではないものの、仙台城の一連の施設のある区域の中で、陸稲が栽培されている状況というのは、あまり想定し難い。畑の存続期間が短いとすると、何ゆえ稲を栽培する必要があったのか、解釈しずらいものがある。あるいは、保温のためなどに稲藁が敷かれた場合も想定しておいた方が良いのであろうか。

なお、花粉分析ではスギ属の花粉が高率を占めているが、二の丸の周囲には杉の並木がめぐっていたことと関連するものであろう。今回の調査区の周辺では、北側の堀との境付近に現在でも二の丸時代から残る杉が存在している。

(3) III期の遺構

III期の遺構は、元禄年間の二の丸改造によって、中奥がこの区域にまで拡張された後の遺構群と考えられる。III期は、IIIａ期とIIIｂ期に細分されたが、基本的な土地利用のあり方は、両期を通じて大きな変化は見られない(図40•41)。次に詳しく検討するが、IIIａ期とIIIｂ期では、ほとんど位置を変えないで、同様の遺構が存在しており、ある時期に、この区域全体で2ｃ層と、それに対応する整地層によって整地が行われ、造り替えられている。本体区の2ｃ層に相当すると考えられる、１区の３Ａ層から18世紀後葉の陶磁器がまとまって出土しており、この頃に整地が行われた可能性がある。しかし、文献記録上では、18世紀後葉に二の丸の改変の記録は見つけられない。文化元年（1804年）に、雷火のため中奥を含む二の丸が全焼するという記録が残っており(仙台市教委1967)、IIIａ期からIIIｂへの改変が、第５地点のほぼ全域で認められる大規模なものであるため、この文化元年の火災に伴う造り替えのである可能性も考えられるが、３Ａ層の一括遺物の年代とずれてしまう。また、今回の調査区では、火災の痕跡を示すような状況は確認できなかった。そのため、今回の調査成果からは、IIIａ期からIIIｂ期に移り変わる時期は、18世紀後葉以降と限定するに留めておきたい。

IIIａ期とIIIｂ期では、基本的な遺構配置は変化が無いので、以下、両期をまとめて検討する。

① 検出遺構と絵図との対比

Ａ．調査区の位置

IIIａ期とIIIｂ期では、ほとんど同じ場所で、同様の遺構が存在しているが、特に区画施設と考えられる遺構で顕著である。但し、10区の北端で検出された落ち込みは、その位置から、二の丸北側の堀の南岸の落ち込みと考えられるが、これについては１時期のみの確認である。埋土から遺物が出土していないので、その時期は不明であるが、IIIａ期・IIIｂ期ともに、ほぼ近い位置に堀の落ちが存在したものと考えられる。この堀より南側の、IIIａ期とIIIｂ期の対応する遺構を、北から順に示すと次の通りである。

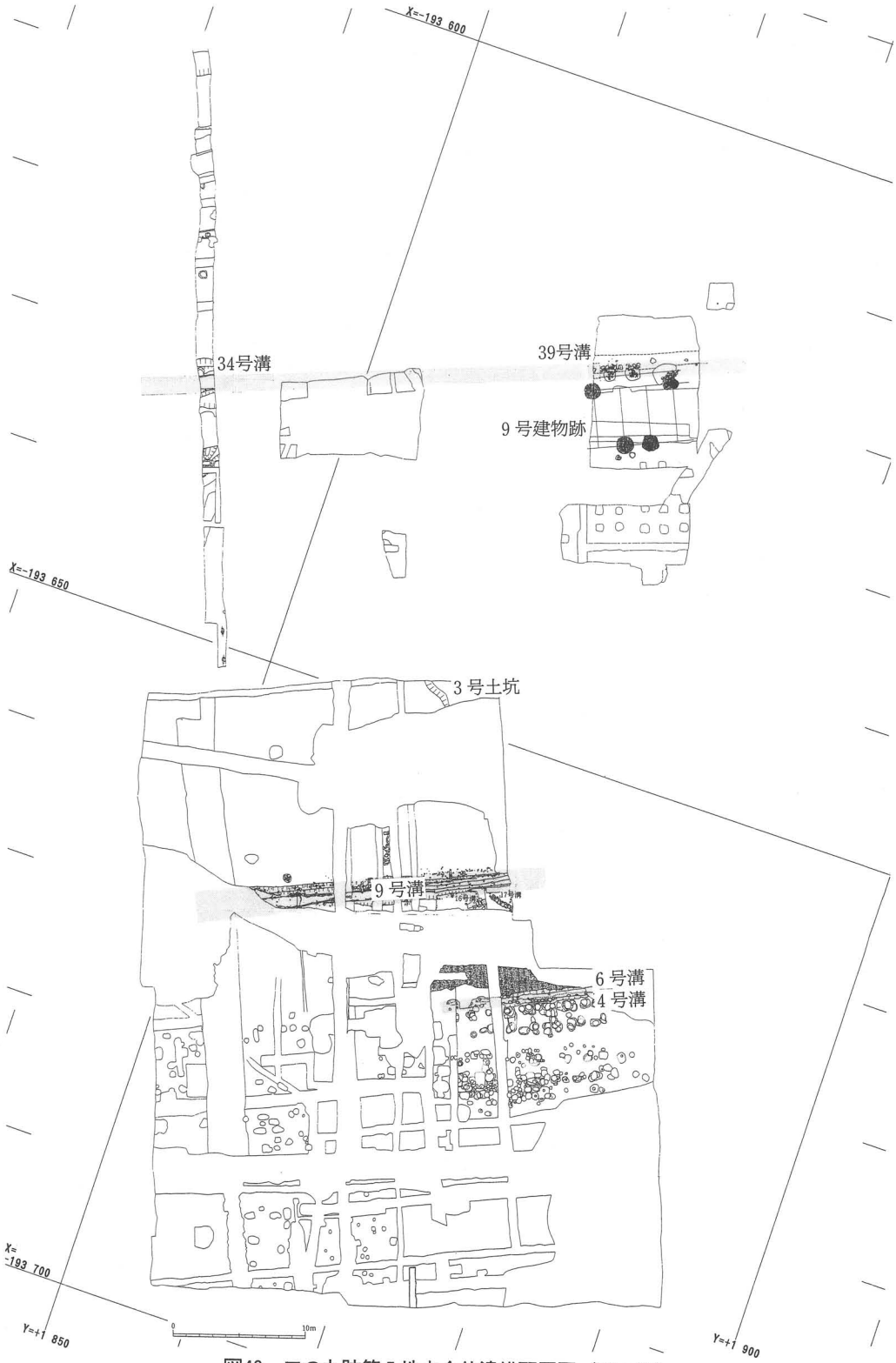


図40　二の丸跡第 5 地点全体遺構配置図（III a 期）

Fig. 40　Distribution of features at NM5 (phase IIIa)

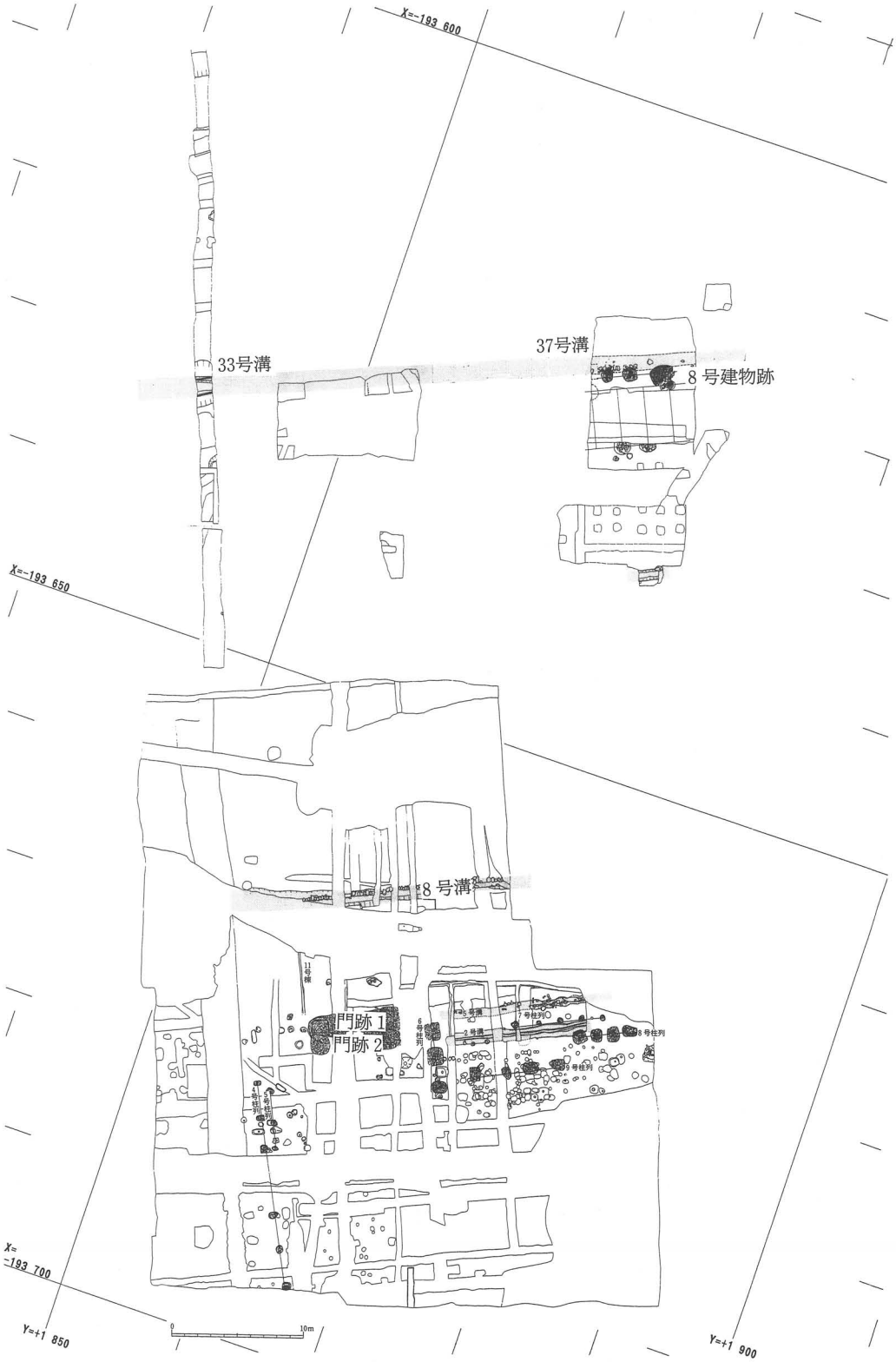


図41　二の丸跡第 5 地点全体遺構配置図（III b 期）

Fig. 41　Distribution of features at NM5 (phase IIIb)

Ⅲａ期　34号・39号溝、９号建物―９号溝―４・６号溝

Ⅲｂ期　33号・37号溝、８号建物―８号溝―５号溝

Ⅲａ期の34号・39号溝、Ⅲｂ期の33号・37号溝は、方向が一致することから一連の溝であると考えられる。しかし、これらが一連の溝であれば、５区の撹乱を受けていない部分で検出されるはずであるが、確認できていない。この点で問題が残っているが、５区は試掘調査のため、遺構をほとんど掘り下げていないため、十分確認できなかったものと考えておきたい。

Ⅲａ期の４・６号溝、Ⅲｂ期の５号溝の南側には、掘立柱の建物跡や柱列が集中している。Ⅲｂ期では、２号溝が５号溝の南側に平行して走っており、これらの溝の西側に門跡１・２がある。Ⅲａ期には門跡が確認されていないが、これはⅢｂ期の門跡２の規模が大きいため、遺存していないものと考えられる。また、門跡の西側には、確実な遺構が確認されていないが、Ⅳ期の７号溝を保存したためその部分の調査を行っていないこと、２号建物跡などⅣ期の遺構が比較的密な部分であるため、これらによって破壊されたか、あるいは十分認識できなかったものと考えられる。

このような遺構のあり方から、絵図で類似する部分を探すと、中奥の北辺に設けられた門とその周辺から、北側の中奥馬場・屏風蔵をへて、二の丸北側の堀の部分に相当すると考えられる（図42～45）。すなわち、９号建物と８号建物が「屏風蔵」に相当し、34・39号溝、33・37号溝が、「屏風蔵」の北側の溝に相当する。これらの遺構の南側は９号溝、８号溝まで、遺構はほとんど検出されておらず、この部分が「中奥馬場」に対応すると考えられる。９号溝から４・６号溝の間、８号溝から５号溝の間が、二の丸北辺の外側の道路状の部分に対応すると考えられる。Ⅲａ期では、４・６号溝の北側が、石を敷いた道路状を呈していた。この４・６号溝と５号溝が、中奥北辺の塀の外に伸びる溝で、門跡が北辺の門に相当するであろう。

二の丸の絵図の内、北側の堀まで１間ごとの方眼にのせて施設を描いている享和２年図を利用して、これらの遺構と、絵図に表された施設との距離関係を検討してみたい（図44、註３）。なお溝は、その中心で距離を計測した。

絵図　土手Ａ南端―12.5間―溝Ａ――18.7間―溝Ｂ――3.5間―溝Ｃ――2.2間―溝Ｄ
　　(24.6m)　　(36.8m)　　(6.9m)　　(4.3m)

Ⅲａ期　　堀上端―23.5m―34号溝―39.8m―９号溝―9.2m―４号溝

Ⅲｂ期　　堀上端―23.6m―33号溝―39.6m―８号溝―9.6m―５号溝―2.0m―２号溝

いずれにおいても、若干のずれが出ているが、大きな位置関係としては、対応しているとみなして良いであろう。また、このように推定すると、門跡の西側で南北方向に伸びる、Ⅲｂ期の３号柱列・４号柱列は、「番所」から南に伸びる塀に相当するものであろう。

ただし、享和２年図では「御屏風蔵」は梁行３間で描かれている。８号建物と９号建物は、

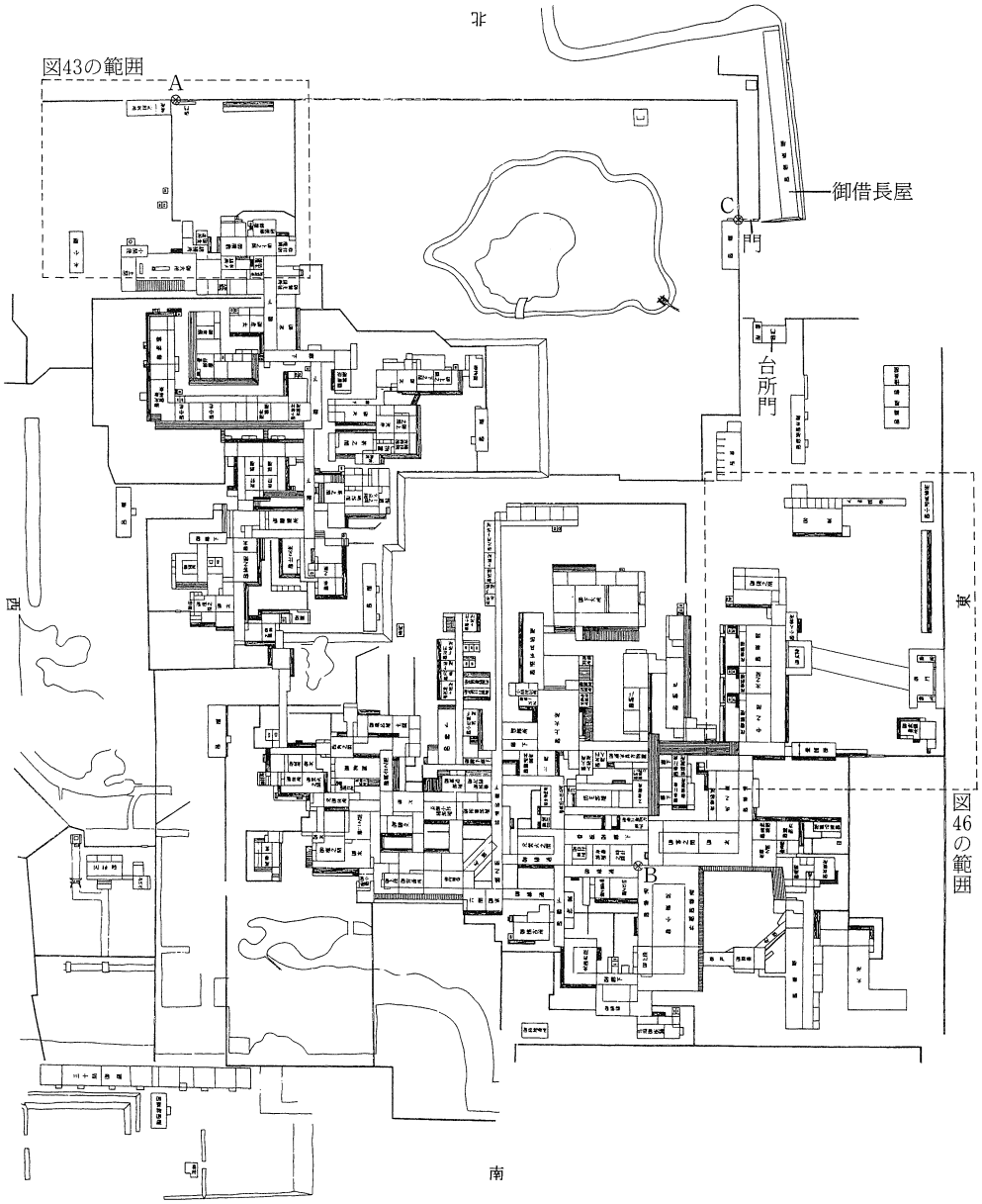


図42　享和二年御家作御絵図写（『近世武士住宅』より、一部改変）

Fig. 42　A transcript of construction plan for *Ninomaru* (originally drawn in 1802)

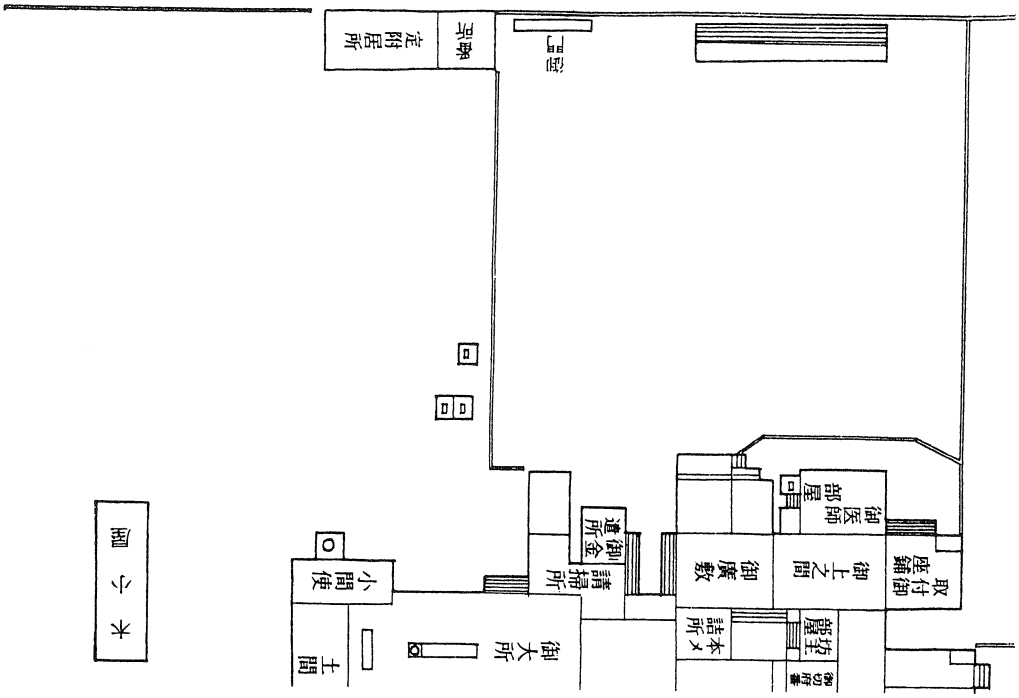


図43　調査区周辺の絵図（享和２年図、『仙台城』より、上が北）
Fig. 43　A picture map around the area of NM5 (transcript, originally drawn in 1802)

いずれも東西方向は柱間約２ｍで、ほぼ１間＝６尺５寸と考えられるのに対し、９号建物跡の南北方向の柱間は4.5mとなり、絵図の３間という表現に合わない。ただし、図45のなかでは「御屏風蔵」は梁行３間半（４間？）で描かれている。また、この８号建物と９号建物については、周囲に撹乱が多く、柱穴も全て検出できている訳ではない。そのため、示したのとは異なる組み合わせになる可能性も残っている。問題は残っているが、８号・９号建物の位置関係から、礎石を用いた建物としては、「御屏風蔵」以外に対応しそうな建物は見あたらないため、このように考えておきたい。

享和２年図では、８号溝・９号溝に相当すると考えられる溝Ｂの南側に、土手の表現がある（図44、土手Ｃ）。８号溝・９号溝はいずれも、その両側で岸の高さが異なっており、南側が高く、北側が低くなっており、溝をはさんで地表面の高さが変わる。その高低差は、９号溝で40cm、８号溝で30cmであり、この段差の部分を土手として表現したものと考えられる。

さらに、宮城県立図書館所蔵の『御修覆帳』所収の「御貸長屋并御二丸御屏風蔵」と題された絵図には、中奥北辺の塀が描かれているが、この北辺で門は、先に推定した場所にのみ見られ、それ以外には「塀口」しか無く（図45）、上記の推定に符合する。なお、この絵図には、中

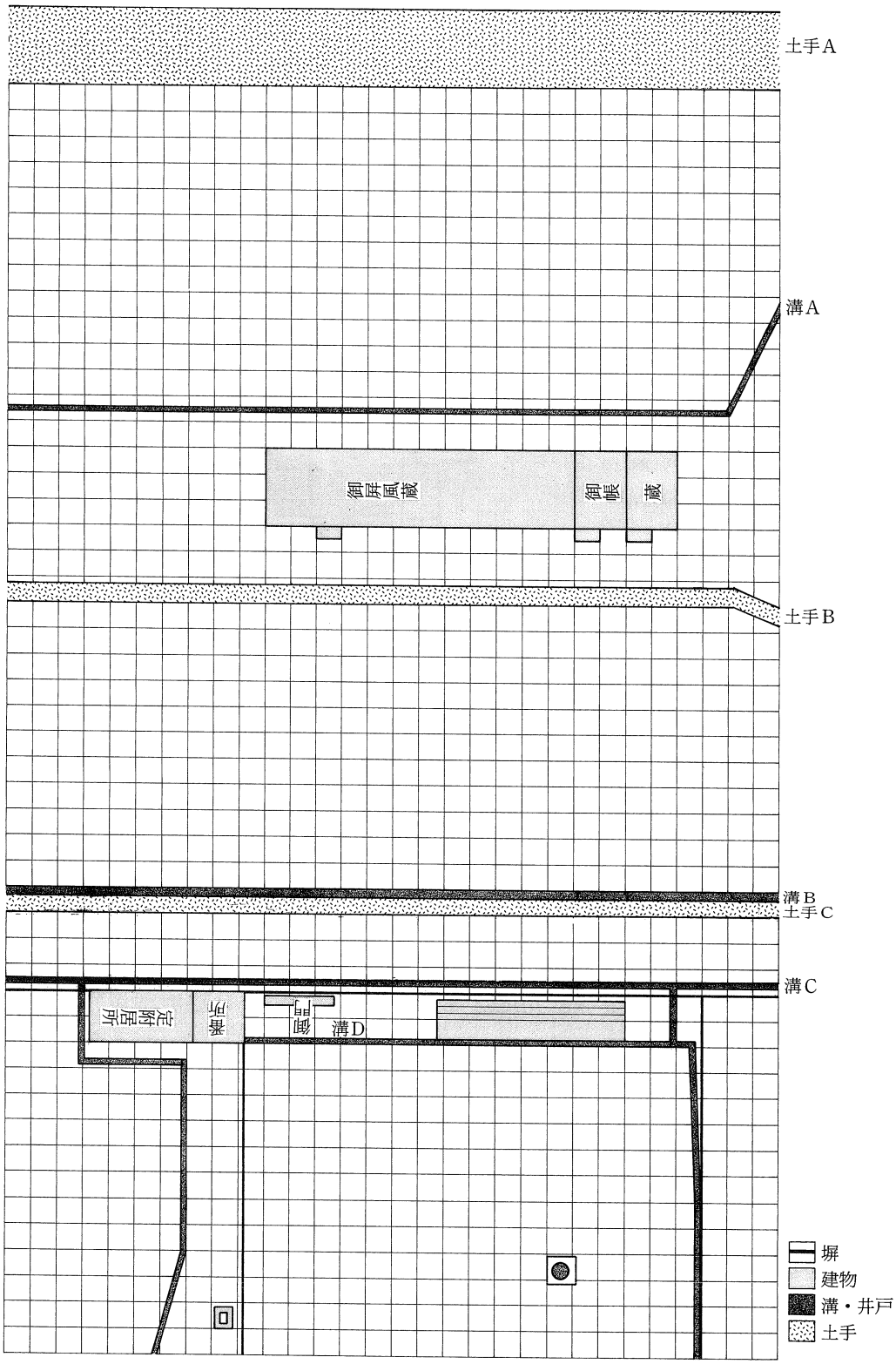


図44　中奥と屏風蔵付近の絵図（享和２年図、１/500、上が北）

Fig. 44　A picture map around *Nakaoku* and *Byobugura* (transcript, originally drawn in 1802)

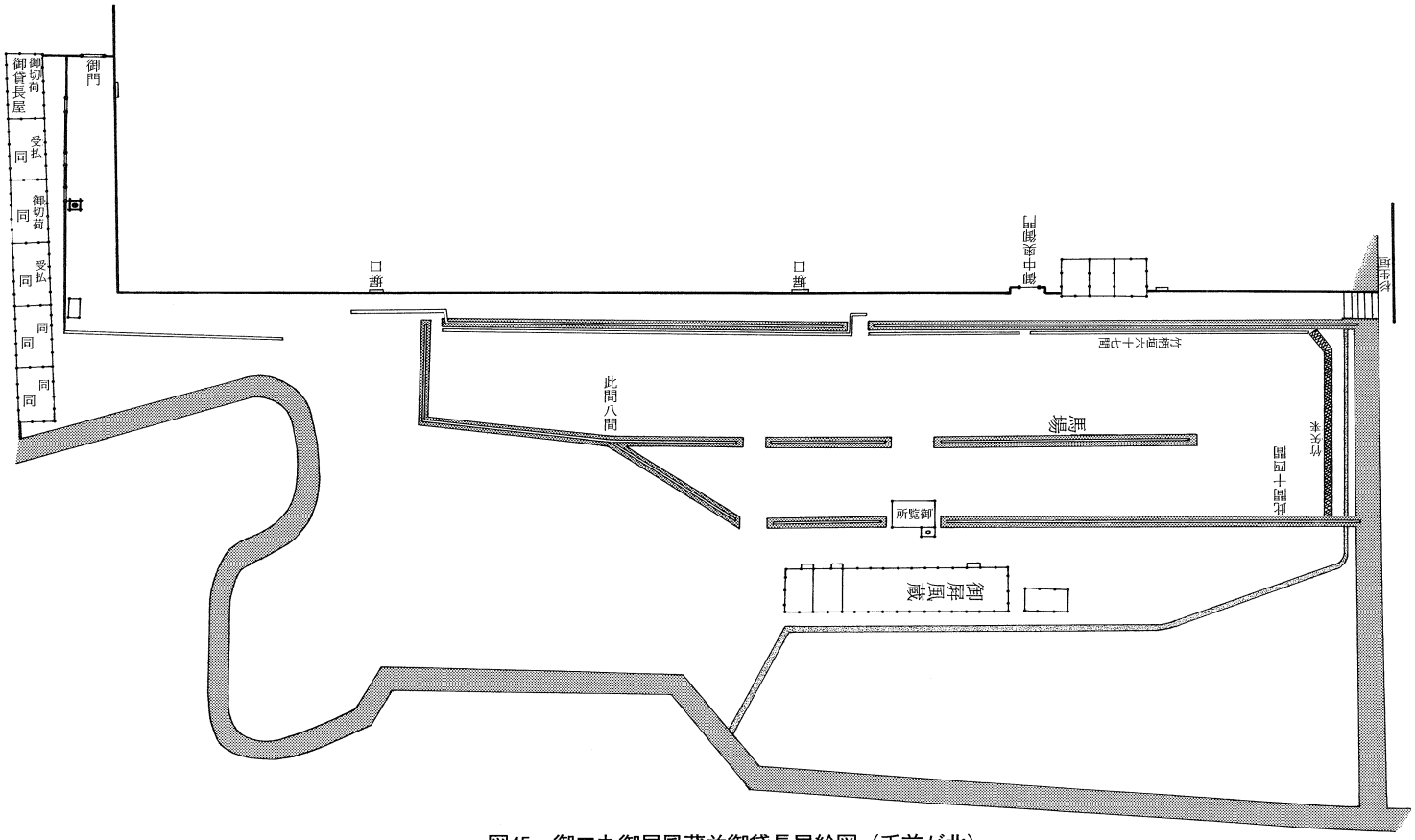


図45　御二丸御屏風蔵并御貸長屋絵図（手前が北）

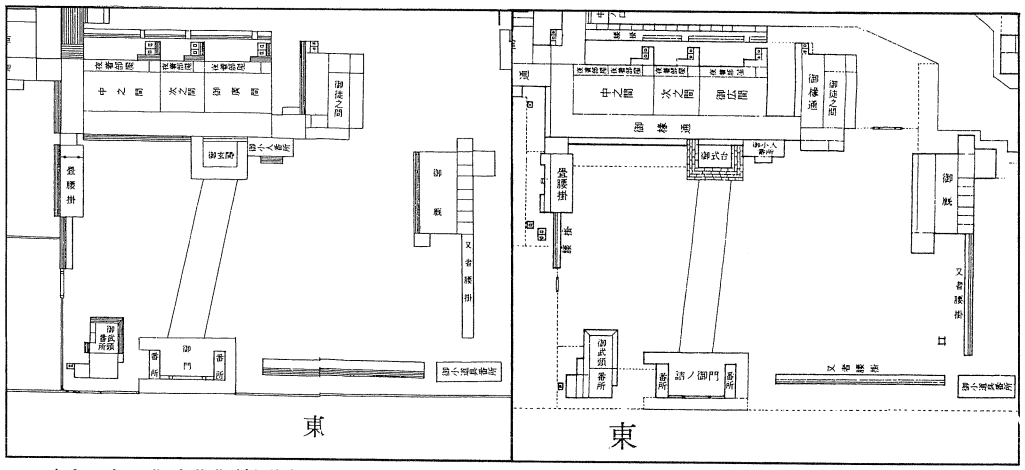
Fig. 45　A picture map of the north end of *Ninomaru* (transcript)

奥北辺の北側に、土手の表現と同じ色で、中心を開けた表現が見られる。これが先に指摘した、享和２年図の溝Ｂにあたると考えられ、８号溝・９号溝に相当する。このすぐ北側に、細い平行線で施設を描いており、脇に「竹柄垣」と記載されている。具体的な構造は不明であるが、竹を用いた垣根であると思われる。９号溝では、その北岸に小規模な杭状の穴が多量に検出されており、これらが絵図に記載された「竹柄垣」に相当する可能性が高い。また、「馬場」中央にも、土手の色で中心を開けた表現が見られるが、Ⅲｂ期の38号溝が、これに位置が対応する。享和２年図では、土手Ｂにあたる位置である。

Ｂ．門跡東側の遺構

Ⅲａ期・Ⅲｂ期ともに、門跡の東側にあたる区域には、多くの掘立柱の柱穴が密集していた（図47）。遺構の整理に努めたが、きわめて複雑なため、なお多くの組み合い関係が不明な柱穴が残っており、実際には示した以上の柱列や建物が存在するものと考えられる。

享和２年図では、この区域に相当する中奥の「御門」の東側には、４間の間をあけ、約１間×約７間の東西に細長い建物が描かれているが、建物の名前は書かれていない（図43）。この建物は、北側半分に平行線が引かれており、板敷きを表していると考えられる。同様の建物は、同じ享和２年図では、二の丸の正門である「詰之門」北側に存在する（図46Ａ）。この「詰之門」北側の建物も名前が書かれていないが、嘉永六年図では同じ建物に「又者腰掛」との名前が記載されており、「詰之門」の西側の広場を取り囲むように、同じ表現で「又者腰掛」「腰掛」と記された建物が描かれている（図46Ｂ）。これらの「腰掛」は、供廻りの者の控え所と考えられ、半間分の平行線の引かれた部分が板敷きで、空白の半間分の部分が土間であろう。「詰之門」の脇には、これらの「腰掛」とともに「番所」が並んでいる。「中奥御門」は、表から中奥に入る



享和二年之御家作御絵図写　　御二丸御城中並御中奥下水技溝御絵図（嘉永六年）

図46　詰之門周辺の絵図（上が西）

Fig. 46　Picture map around the main gate of Secondary Citadel (transcript)

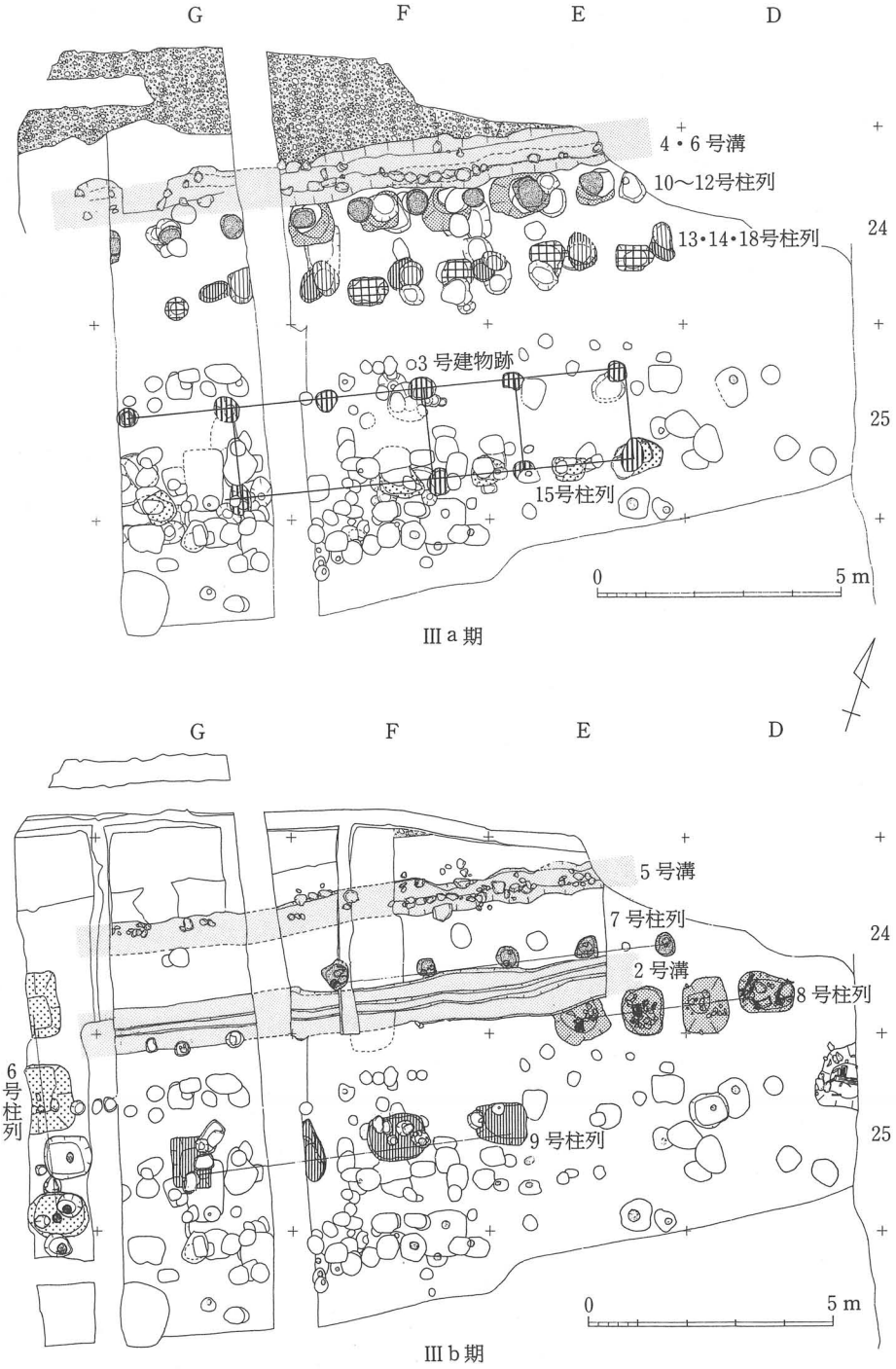


図47　門跡東側の遺構

Fig. 47　Features locating in the east side of gate at NM5 (phase III)

「御鈴廊下」を除けば、中奥に入る門としては、唯一のものである。「中奥御門」の脇にも「番所」があり、門の東側の建物が「腰掛」であると考えると、「詰之門」でのあり方と共通し、無理なく理解が可能である。県立図書館所蔵の文化元年（1804年）の「御造営御絵図」では、門から5間離れて1間×5間の大きさに、この「腰掛」と考えられる建物が描かれており（図48）、微妙に位置と規模を変えながら建て替えられていることが判明する。

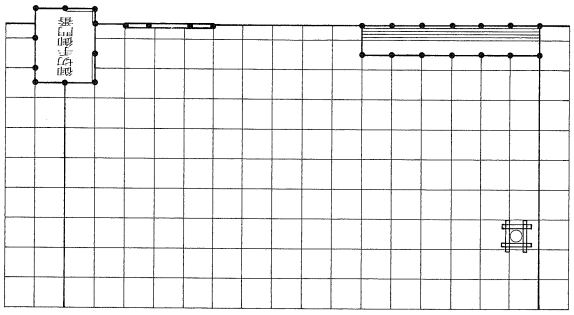


図48　調査区周辺の絵図（文化元年図、1/500、上が北）
Fig. 48　A picture map around the area of NM5 (transcript, originally drawn in 1804)

Ⅲa期では、4・6号溝のすぐ南に10～12号柱列があり、さらに南に13・14・18号柱列が伸びる。これからほぼ1間開けて、3号建物跡が存在する。「腰掛」が、中奥北辺の塀に取り付く形であると、北側の2列の柱列が組み合い、これが「腰掛」に相当することとなる。「腰掛」が北辺の塀から離れて建っていたとすると、北側の柱列が北辺の塀で、3号建物が「腰掛」に相当することとなる。

Ⅲb期では、5号溝に平行して、2号溝が存在する。先に見た享和2年図では、「腰掛」の南北両側に溝が走っており、2号溝が南側の溝（図44、溝D）に相当する可能性がある。その場合、7号柱列が「腰掛」の南辺の柱に相当することとなる。しかし、この場合、5号溝と2号溝の間が、塀と「腰掛」が入るには狭すぎることと、2号溝の南にも8号柱列・9号柱列が存在し、これらに対応する建物が見あたらなくなるなど、問題が残る。あるいは、時期によって、中奥北辺の位置がずれ、2号溝が北辺の溝で、その南側の柱列が、北辺の塀や「腰掛」に対応することも考えられる。

このように、細部においては決めきれない部分が多く残っているが、門跡東側の遺構に、「腰掛」に対応する建物が含まれることは、間違いないものと思われる。門の東側の建物が「腰掛」であるとすると、その建物の性格から、簡素な構造の建物であったことが推定される。これらの建物跡が掘立柱建物であり、柱穴の構造も小規模なものが多いことは、このような建物の性格を反映するものと考えられる。

文化元年図では、中奥の門は「御切手御門」と書かれており、このような呼び方もあったことが判明する（図48）。この点について興味深いことは、今回の第5地点のF—24区2d層から出土した陶器碗の底面に書かれた墨書である（図49、年報6では登録番号219として報告）。この資料は二の丸拡張に伴う2d層出土で、大掘相馬産の可能性があり18世紀のものとして報告した。再検討したところ、大掘相馬産と考えられ、体部下半の広がりが大きい形態から、元禄年

間まで遡ることは考え難く、18世紀後半以降、19世紀に入る可能性もある。これが出土したF—24区は、先に「腰掛」とその周辺であると推定した掘立柱柱穴が集中する区域であり、二の丸期の遺構が複雑で、最も調査が難渋した区域である。そのため、確認できなかった柱穴埋土か、検出しても掘り足りなかった部分に埋まっていた遺物と考えた方が良く、二の丸期の遺物と考えられる。墨書は「御切□御門」と書かれており、3文字目は「水」かとして報告した。再度検討したが、3文字目を「手」と読むのは難しく、やはり「水」の可能性が高いと考えられる。この点で問題を残しているが、一部異なった呼び方があったことも想定され、この墨書が中奥の門を示している可能性が高いものと考えられる。

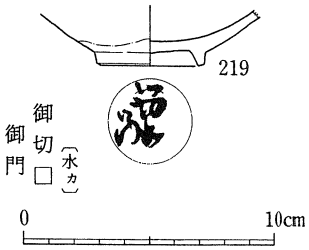


図49　第5地点出土墨書陶器
Fig. 49　A glazed ceramic with inscriptions in black ink from NM5

②　現地形上での二の丸建物配置の復元

これまでに、現地形の上での二の丸建物の位置については、『年報1』の「付図1現況建造物・道路と二の丸建造物との関係」において、現況での二の丸建物群の推定位置を示した。今回の第5地点の調査結果と絵図との対比は、この『年報1』の対比とは大きくずれてしまう。また、『年報1』の「付図1」での復元では、二の丸建物群は、現在の大学の地割りよりわずかに西に振れるN—21.5°—Wの方向で復元されている。しかし、第5地点を含めてその後の調査では、二の丸建物群はN—24～25°—Wの方向をとることが明らかとなっており、再検討する必要を以前にも指摘してきた（年報5）。

『年報1』での対比は、第2地点と第3地点の検出遺構と絵図との対比が根拠となっている（図50）。それは、第3地点で検出された石垣が、二の丸南端を画する石垣と考え、そこからの距離を絵図に表された距離と対比させ、第2地点の遺構配置に対応する位置を求めている。その結果、第2地点が「御小広間」の南西側で、「元御書院」へと続く「御廊下」に相当すると推定している（図51）。しかしこの推定は、その前提となる、第3地点で検出された石垣を二の丸の時期のものとみなすという点に、問題がある。この石垣は、池と考えられるピット12を切って構築されている。このピット12には、溝2がつながっている。ピット12と溝2との関係は、明確でない部分が残されているが、調査時の認識では、同時存在と考えられている。この溝2は、溝の中に石を詰め込んだ暗渠で、このような暗渠は、第5地点の調査では、明治時代のⅣ期にのみ存在し、江戸時代の暗渠は、両側に石を並べ、平らな石で蓋をしたものである（第5地点16•17号溝）。その後の二の丸跡の調査でも、石を詰め込んだ暗渠は、いずれも明治時代と考えられるものである。したがって、第3地点の遺構の前後関係からは、この石垣は明治時代以降のものとなり、二の丸南端の石垣と推定することはできなくなる。

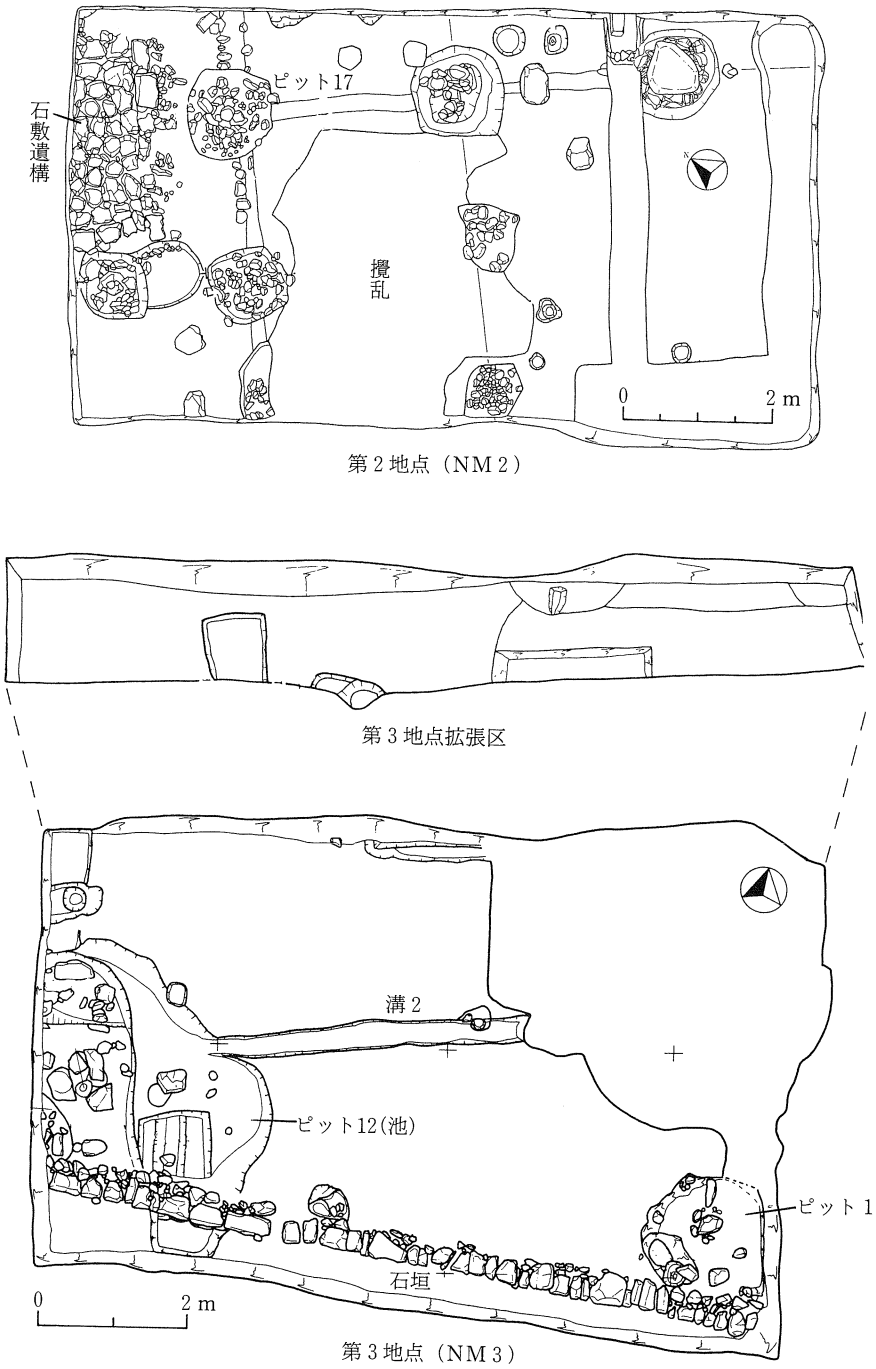


図50　第2・第3地点遺構配置図

Fig. 50　Distribution of features at NM2 and NM3

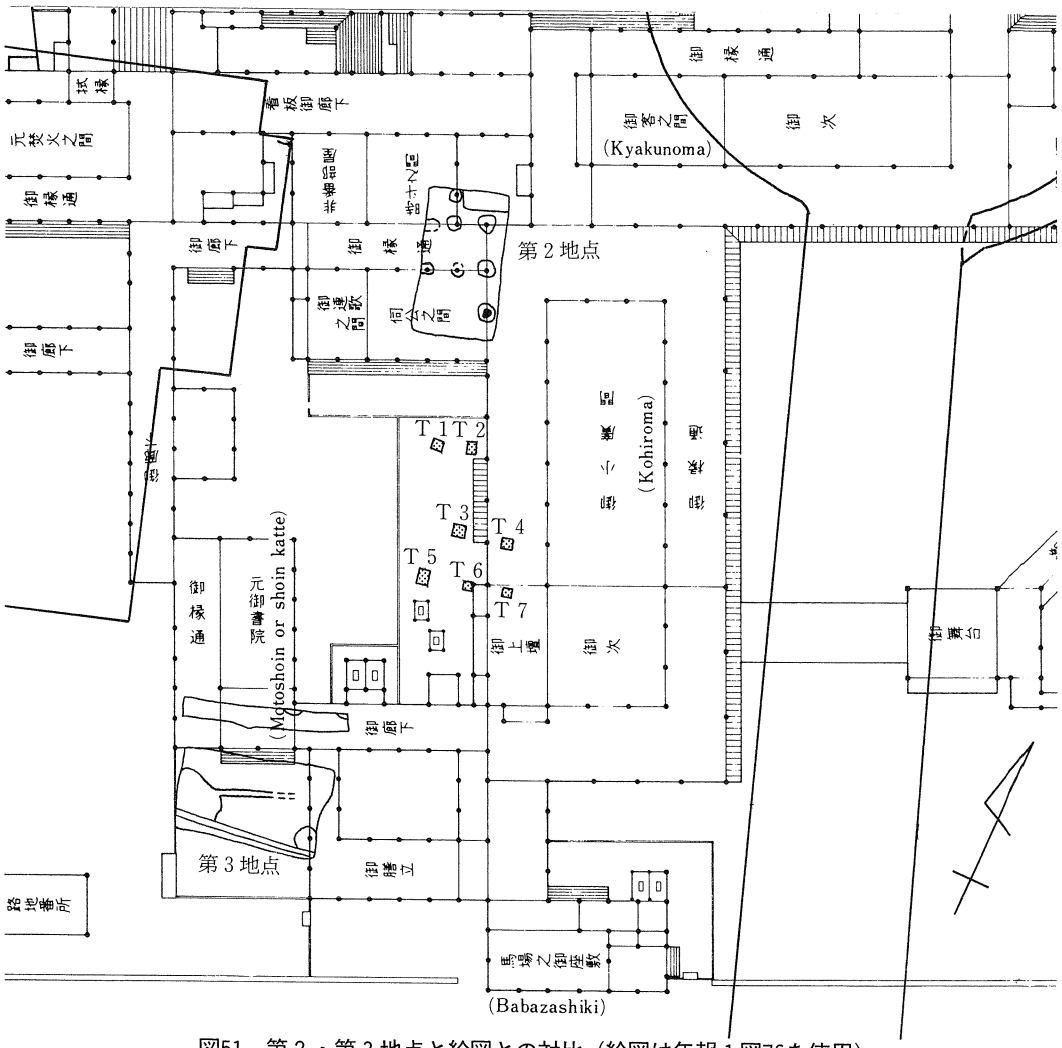


図51　第2・第3地点と絵図との対比（絵図は年報1図76を使用）
Fig. 51　Locations of NM2, NM3 corresponding to a picture map

そこで、あらためて、第2地点の検出遺構と対応する部分を絵図で探すと、「御小広間」の北西側の、「伺公之間」と「時斗之間」との間の「御椽通」の部分があげられる。第2地点の石敷遺構は、建物の無い露地の部分と考えられ、これが「時斗之間」と「御客之間」の間の中庭のような露地の部分に相当すると考えると、柱の配列や石敷遺構の配置が、極めて良く合致する（図51）。

この第2地点の位置推定が、先に述べた第5地点の位置推定と矛盾しないかを次に検討したい。二の丸の絵図には、建物などの施設を、1間ごとの方眼にのせて書いているものがあり、その間数を数えることで、距離が算出できる。中奥の門までを描いている絵図は少ないが、こ

こでは、享和２年図と文化元年図を用いる。中奥の門の西端で中奥北辺の塀とぶつかるところをＡ点、小広間のまわりをめぐる「御椽通」の北西の角をＢ点とし（図42）、ＡとＢとの間の距離を示せば以下の通りとなる。なお、第２地点の位置推定では、ピット17がこのＢ点に相当する。実寸の計測は、二の丸の地割りがＮ―25°―Ｗであるとして、縮尺１/500の図上で計測した。絵図からの距離の算出には、１間を６尺５寸とし、１間＝197cmとして算出した。

遺構間実寸	南北	208.2m			116.0m
享和２年図	南北108.5間	213.745m	東西	64間	126.08m
文化元年図	南北109間	214.73m	東西	63間	124.11m

最大で５間分前後の誤差が出るが、石敷遺構と柱配列が対応する部分で、最も距離の誤差が少ないのが、この位置である。絵図によって、間数が異なっている部分もあり、絵図がどれだけの精度を保っているのかという問題もある。また、二の丸北辺の位置も、時期によって微妙にずれている可能性もある。したがって、この推定位置で、大きく矛盾するものでは無いと考えておきたい。一方、『年報１』での推定位置では、さらに南に15.5間（30.535m、享和２年図）ずれ、Ａからの距離は244.28mとなり、より差が大きくなってしまう。

第２地点をこのような位置に対比させると、第３地点は、「元御書院」の南側の、塀で囲まれた部分に相当する（図51）。この場合、第３地点のピット１が「御廊下」西側の柱に相当する可能性がある。このピット１より北側については、相当する遺構が無いが、この部分は撹乱によって破壊されていたところである。また、遺構の掘り下げは行っていないが、第３地点の拡張区で検出されたピット状のプランが、「御廊下」北側の柱に相当する可能性もある。

第２地点は、保存状態も良好で重要な遺構が発見されたため保存され、その代換地として、第３地点が選ばれた。第３地点では、明治15年の火災に伴う焼土層が認められなかったため、この場所が選ばれたのであるが、この推定では、第３地点は塀に囲まれた露地で建物がほとんど無かったため、焼土層が発達しなかったと考えられ、この点でも矛盾しない。

第３地点が選ばれる過程では、その前に第２地点の南側で、Ｔ１～Ｔ７の区域で試掘調査を行っている（図51）。この試掘調査で、この区域の保存状態が良いことが判明し、第３地点が選ばれたという経緯がある。Ｔ１とＴ２ではコンクリートが一面にあり、既に破壊されていたが、Ｔ３～Ｔ７では明治15年の火災と考えられる焼土層が検出されており、二の丸の遺構が遺存していることは確実である。この試掘区と東側の道路との間は、現在荒地で薮となっており、大学移転以後には、遺構を破壊するような大きな施設は造られていない。したがって、二の丸の中で最も中心の建物である「小広間」は、破壊をまぬがれて遺存している可能性が、極めて高いものと考えられる。今後、この区域とその周辺での工事については、特に注意が必要であろう。

(4) IV期の遺構

IV期は、２ｂ層と２ａ層から掘り込まれている遺構と、出土遺物から明治以降と考えられる遺構を一括したため、何時期かの遺構が含まれているが、土地利用のあり方は、いずれもIII期とは大きく異なっている（図22）。

１号土坑と２号土坑は切り合い関係にあり、２号土坑が新しいが、出土遺物にほとんど差は無く、近い時期のものであろう。いずれもゴミ穴と考えられる。二の丸建物群は、明治15年（1882年）の火災によって焼失し、第２地点では明治15年の火災によって形成されたと考えられる焼土層が検出されている（年報１）。この第２地点の焼土層に覆われた層からは、明治６年（1873年）から製作されたと伝えられる大堀相馬製の鮫肌土瓶が出土しているが、１号・２号土坑には全く含まれていない。このことから、１号・２号土坑は明治15年の火災による後片づけとは考え難く、明治７年以前の可能性がある。明治２年（1869年）には、版籍奉還によって二の丸に勤政庁が置かれるとともに、藩務と家務が区分され、元の藩主伊達慶邦の家族が中奥に移される。また、明治４年（1871年）には、廃藩置県によって仙台城全体が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台が置かれる。１号・２号土坑は、この明治２年・４年頃の、二の丸の利用のあり方の変化に伴うゴミ穴である可能性が考えられる。１号・２号土坑は、III期の「腰掛」と推定した建物を壊して造られており、この地区では、明治15年の火災の以前に、二の丸建物が既に改変されていたことが判明する。

１号溝は、南側が残っていないが、方形にめぐる可能性も考えられ、建物のまわりをめぐる溝であることも考えられる。１号・２号土坑との前後関係は、直接にはとらえられないが、１号溝が建物に伴うとした場合、建物のすぐ脇にゴミ穴を造るとは考え難いため、１号・２号土坑より遅れるものであろう。

１～７号暗渠は、遺構間の切り合い関係からは、最も新しい遺構群である。便所と考えられる木箱埋設遺構が取り付くものがあることから、本来は建物に伴う排水施設を含むと考えられるが明確にはできなかった。

(5) 小結

二の丸跡第５地点の検出遺構は、Ｉ期からIV期に大別され、Ｉ期が元和６年（1620年）の五郎八姫の西屋敷造営から元禄年間以前、II期が元禄年間の二の丸大改造の期間、III期が元禄年間の大改造後の中奥、IV期が明治以降に対比された。Ｉ期・II期・III期は、それぞれａ・ｂの新古２段階に細別され、合計７段階に分けられた。この中で、Ｉ期とIII期については、絵図などとの対比から、やや詳しく検討することができた。

Ｉ期は、Ｉａ期とＩｂ期に細別され、Ｉａ期が元和６年の西屋敷造営から五郎八姫が死去す

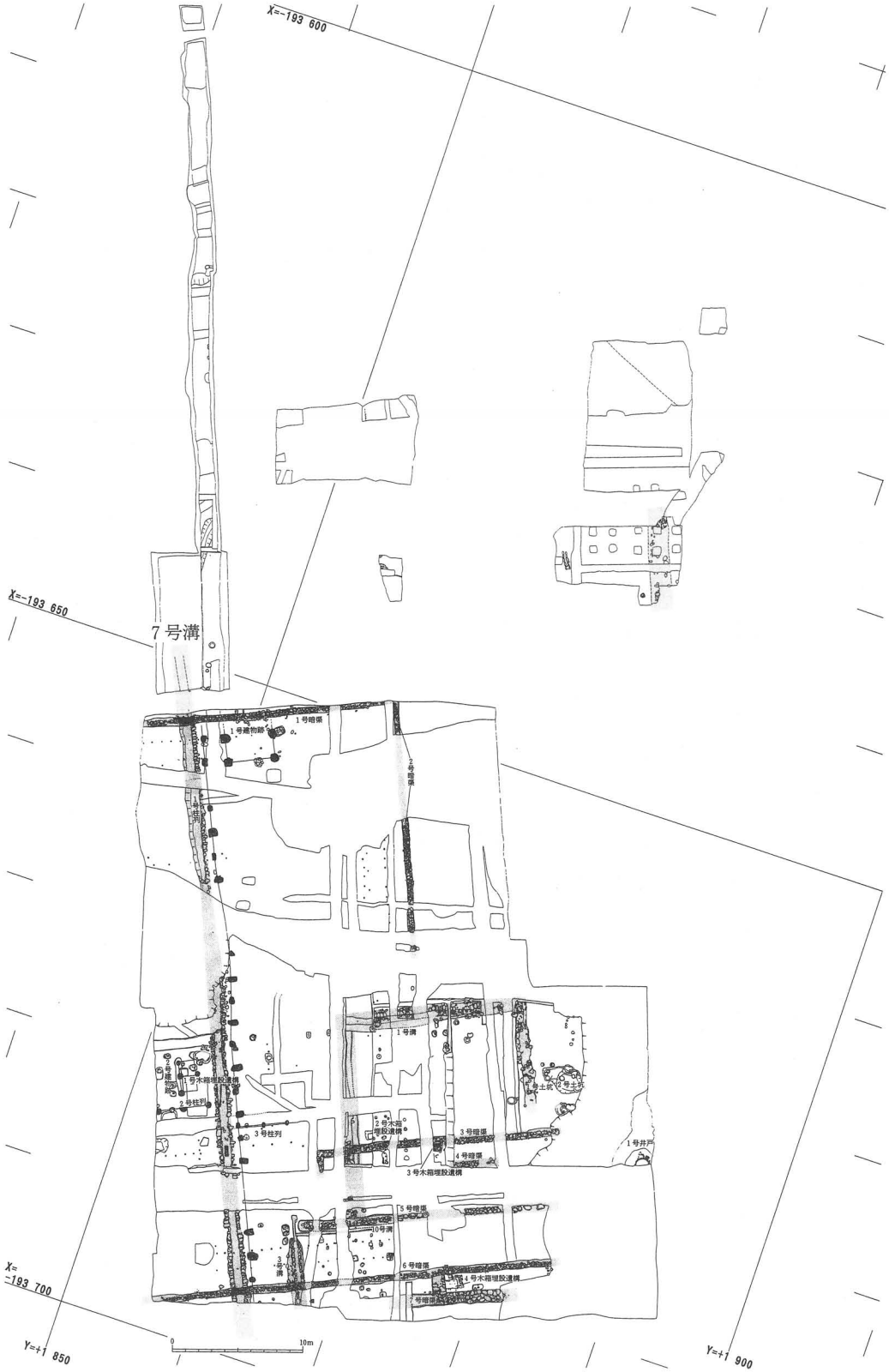


図52　二の丸跡第５地点全体遺構配置図（Ⅳ期）

Fig. 52　Distribution of features at NM5 (phase Ⅳ)

る寛文元年（1661年）まで続き、Ｉｂ期は寛文元年以降から二の丸の改造が行われる元禄年間までの時期に相当すると考えられた。したがって、Ｉａ期が五郎八姫の西屋敷の時期に相当し、Ｉｂ期は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれた時期に相当する。

Ｉａ期については、今回の調査地点以外で、二の丸以前の遺構が検出されている調査区の成果を合わせて、絵図と対比して検討したところ、西屋敷の範囲を大まかではあるが復元することができた。その結果、今回の調査区が屋敷の中でも奥よりの部分にあたることが判明した。このことから、今回の調査で検出された池からなる庭園と建物の一部は、屋敷の奥よりに設けられた、私的な供応・遊興のための施設と考えられる。調査範囲が限定されたものであったため、不確実な部分を多く残しているが、江戸時代初期の庭園の調査例として貴重である。Ｉｂ期については、「天麟院様元御屋敷」と記された絵図を中心に検討を加えたが、今回の調査区が具体的にどのような部分に相当するかについては、明確にはできなかった。

II期は、元禄年間に行われた、二の丸が改造される時期に相当する。Ｉｂ期の遺構は、廃棄物層や整地層によって埋められ、この廃棄物層からは元禄４年（1691年）の紀年のある、荷札木簡が出土している。これらの層の上面にあたるIIａ期は、遺構密度が低く、存続期間は短かったものと推定される。IIｂ期は、IIａ期の遺構面に盛土を行い形成され、畑の畝状遺構が展開する。花粉分析では、畑として利用された積極的根拠は得られなかったが、存続期間が短かったと考えられ、この点が関係する可能性がある。

III期の遺構面は、IIｂ期の遺構面に大規模な整地を行って形成されており、元禄年間の改造によって、北側に拡張されて以降の中奥に相当すると考えられる。III期の遺構も、整地層をはさんで、IIIａ期とIIIｂ期に細分されたが、両期で基本的な施設の配置関係に違いは認められない。元禄年間の大改造によって二の丸の基本的構成が確立し、幕末まで維持されることが確認された。IIIａ期からIIIｂ期に移り変わる時期は、出土遺物から見て、18世紀後葉以降であることは確実であるが、細かな年代は確定できなかった。

III期の遺構については、絵図との対比から、中奥の北辺とそれに伴う門の周辺から、北側の中奥馬場・屏風蔵などを経て、二の丸北側の堀にいたる部分に相当すると推定される。門の東側で検出された多数の掘立柱建物は、供回りの者が控えるための「腰掛」と考えられ、北辺の塀とともに何回も建て替えられていることが判明した。細部では、若干絵図とずれる部分も残るが、検出された門跡が、中奥北辺の門にあたることは確実であると考えられ、今後の絵図との対比にあたって、定点の一つとなるであろう。

この検討結果をもとに、以前の調査地点の絵図との対比を見直したところ、第２地点が「小広間」の北西側の「伺公之間」と「時斗之間」の間の「御椽通」に相当し、第３地点が「元御書院」の南側に相当すると推定された。この推定から、二の丸の中で最も中心の位置を占める

建物である「小広間」は、破壊をまぬがれて遺存している可能性が高いことが判明した。今後、絵図との対比の精度を高めていくとともに、検討結果を遺跡の保護策に活かしていくことが重要であろう。

Ⅳ期は、明治以降の層位で検出された遺構と、検出層位が不明でも出土遺物から明治以降に下る遺構を一括したため、さらに細かく時期が分かれる可能性があるが、いずれも土地利用のあり方は、Ⅲ期とは大きく変化している。ゴミ穴と考えられる1号・2号土坑は、出土遺物から、明治15年（1882年）よりは古くに形成されたと考えられ、この区域では明治15年の火災以前に、二の丸の建物が既に改変されていたことが判明した。

今回の第5地点の調査は、仙台城二の丸跡の調査としては、最も広い面積の調査であり、なおかつ大別4期、細分では7期にわたる複雑な変遷を遂げている。そのため、整理作業、絵図との対比などの分析作業の過程において、膨大な作業量と時間が必要となり、ここでは、調査地点に直接関わる絵図などの資料を検討したに留まり、他の遺跡の調査例などの関連資料を検討することはできなかった。近年、近世遺跡の調査例は増加しており、これらの調査成果とも照らし合わせて、検討を進めていくことが、今後必要であろう。

（註1）この「天麟院様元御屋敷」図と、図45の『御修覆帳』の「御二丸御屏風蔵并御貸長屋」図については、宮城県立図書館において撮影させていただいた写真と、同図書館所蔵の複写を元にして、図面を起こしたものである。そのため、寸法が原本に厳密に対応している訳ではない。

（註2）「天麟院様元御屋敷」図、ならびに図45の「御二丸御屏風蔵并御貸長屋」図の、図中の文字の記載、また図49の墨書陶器の墨書の再検討については、東北大学記念資料室の中川学助手のご教示を得た。

（註3）この享和2年図と、図48の文化元年図は、宮城県立図書館において撮影させていただいた写真を元に、方眼を1間として、図面を起こしたものである。

≪引用・参考文献≫

阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』　斉藤報恩会博物館図書部研究報告第四

小林清治編　1982　『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書2　名著出版

佐藤宏一ほか　1990　『宮城町西館跡、利府町郷楽・天神台遺跡』
宮城県文化財調査報告書第123集

佐藤　巧　1967　「仙台城の建築」『仙台城』　pp. 23～87　仙台市教育委員会

佐藤　巧　1979　『近世武士住宅』　叢文社

須籐隆・佐久間光平・山田しょう　1991　「仙台城二の丸跡第9地点の調査」

『考古学ジャーナル』№332　pp. 28～31
仙台市教育委員会　1967　『仙台城』
高倉淳ほか　1994　『絵図・地図で見る仙台』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報』1
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報』3
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『仙台城二の丸跡第9地点の調査　現地説明会資料』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1982　『東北大学埋蔵文化財調査年報』4・5
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報』6
土生慶子　1987　『伊達政宗娘　いろは姫』　東光出版

2. 陶磁器

(1) 仙台城二の丸跡第5地点出土陶磁器の検討

仙台城二の丸跡第5地点から出土した陶磁器のうち、北区のⅦ～Ⅴ層、3号土坑、4号土坑、1区3A層ならびに2号土坑出土資料は、一括性が比較的高く、層位的な検討が可能である。北区Ⅶ～Ⅴ層は、西屋敷時代に庭園を構成していた、池の埋土や、元禄年間の二の丸拡張に伴うと考えられる整地層である。二の丸古段階の遺構群は、Ⅳ層上面から構築されており、Ⅶ～Ⅴ層は少なくとも、二の丸の大改造が完了した、元禄13年（1700年）以前に位置づけられる。Ⅶ層とⅥ層からは、ともに元禄4年（1692年）の紀年銘木簡が出土している。さらにⅥ層とⅤ層の上面には、恒久的な建造物が存在していないことから、これらの盛土、整地は、元禄の二の丸大改造が行われた、元禄元年（1688年）から同13年までの、きわめて短期間に行われた可能性が高い。Ⅵ層上面で検出された4号土坑の年代も、上記の時間幅に収まる。3号土坑は、Ⅳ層上面で検出された二の丸古段階の遺構で、年代の上限を元禄年間に求めることができる。1区3A層は、二の丸中奥古段階（Ⅲa期）と新段階（Ⅲb期）に挟まれた整地層であり、18世紀後半の遺物を主体とする。2号土坑は、Ⅳ期の遺構で、幕末から明治初年の遺物が出土している。以上、層位関係からみた盛土・整地層、遺構の年代観は、次の様になる。

a. 北区Ⅶ層出土陶磁器（図53）　1680―90年代前半（元禄年間前半期？）
b. 北区Ⅵ層出土陶磁器（図53）　1680―90年代前半（元禄年間前半期？）
c. 4号土坑出土陶磁器（図53）　1690年代（元禄年間後半期？）
d. 北区Ⅴ層出土陶磁器（図54）　1690年代（元禄年間後半期？）
e. 3号土坑出土陶磁器（図54）　18世紀前葉
f. 1区3A層出土陶磁器（図55）　18世紀後葉
g. 1号土坑出土陶磁器　19世紀前葉～中葉
h. 2号土坑出土陶磁器（図56）　19世紀前葉～中葉

元禄年間に比定される一括資料のうち、北区Ⅶ層には、17世紀中葉の肥前磁器や、明末・清初の青花など、少量ではあるが、年代の上がる資料が含まれている。

はじめに、上記の一括資料のうち、a～e・g・hの数量的分析を行い、器種別・産地別組成の変化を検討する。fは、表土剝ぎの際に、重機により層の一部が削平されてしまっているため、定量的な分析からは除外した。なお、数値は、接合および同一個体の認定を行った上で、破片数を用いた。器種毎の組成については、表32～35、図57、58、60、61に示した。

江戸時代中期では、17世紀末葉から18世紀前葉にかけて、磁器、陶器ともに、碗類が増加する。それと併行して、磁器では皿類、陶器では擂鉢がそれぞれ減少する。碗類がこの時期に増加した背景には、肥前産の大衆化した磁器碗の普及と、大堀相馬産陶器碗の流通量の拡大が挙

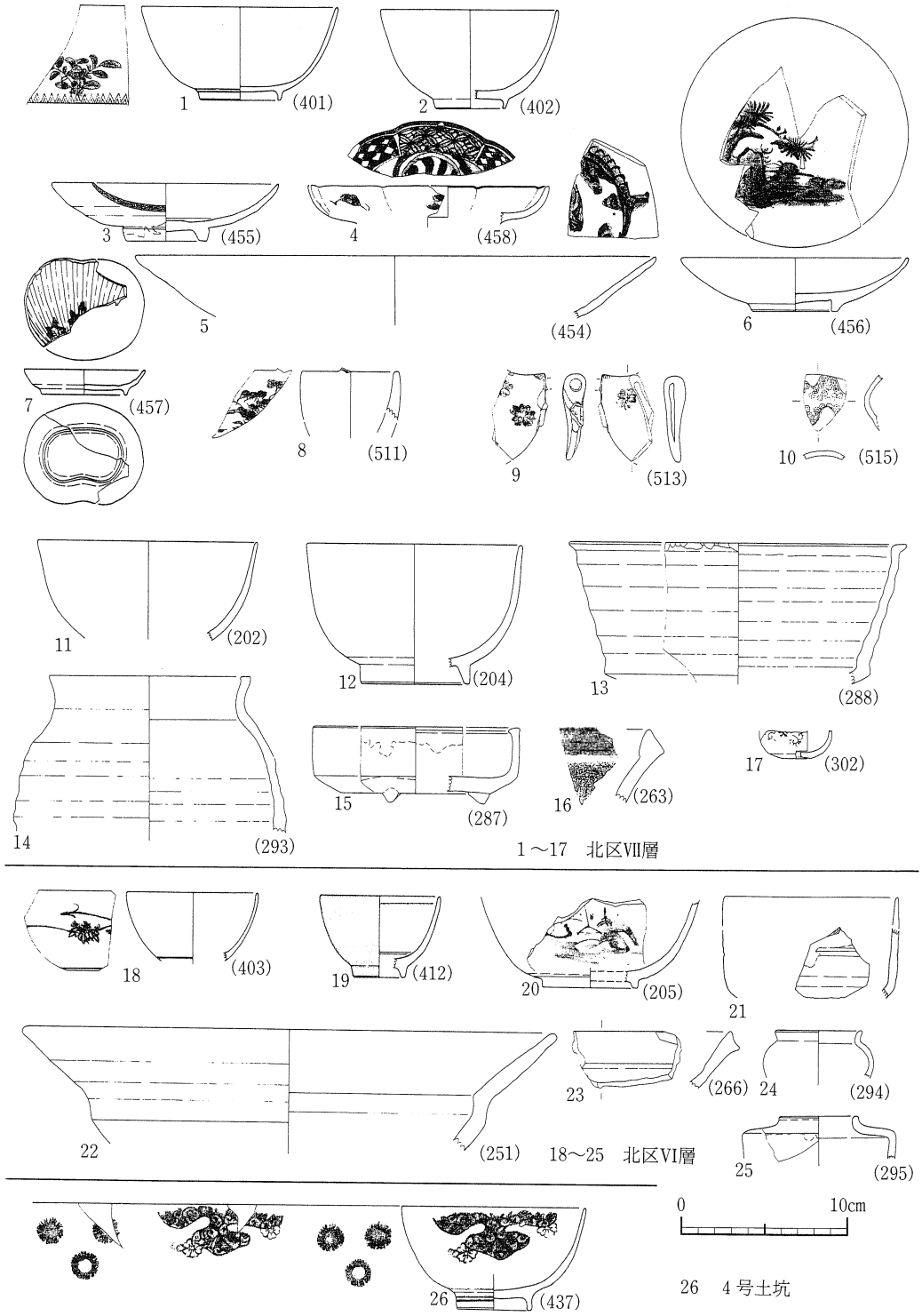


図53　二の丸跡第5地点出土陶磁器(1)

Fig. 53　Porcelains and glazed ceramics from NM5(1)

1～4、6～10、18、19、26　肥前系磁器
5　中国磁器　11、12、15、20、22、24、25　肥前系陶器
13、21　瀬戸・美濃系陶器　17　京・信楽系陶器
14、16、23　産地不明陶器

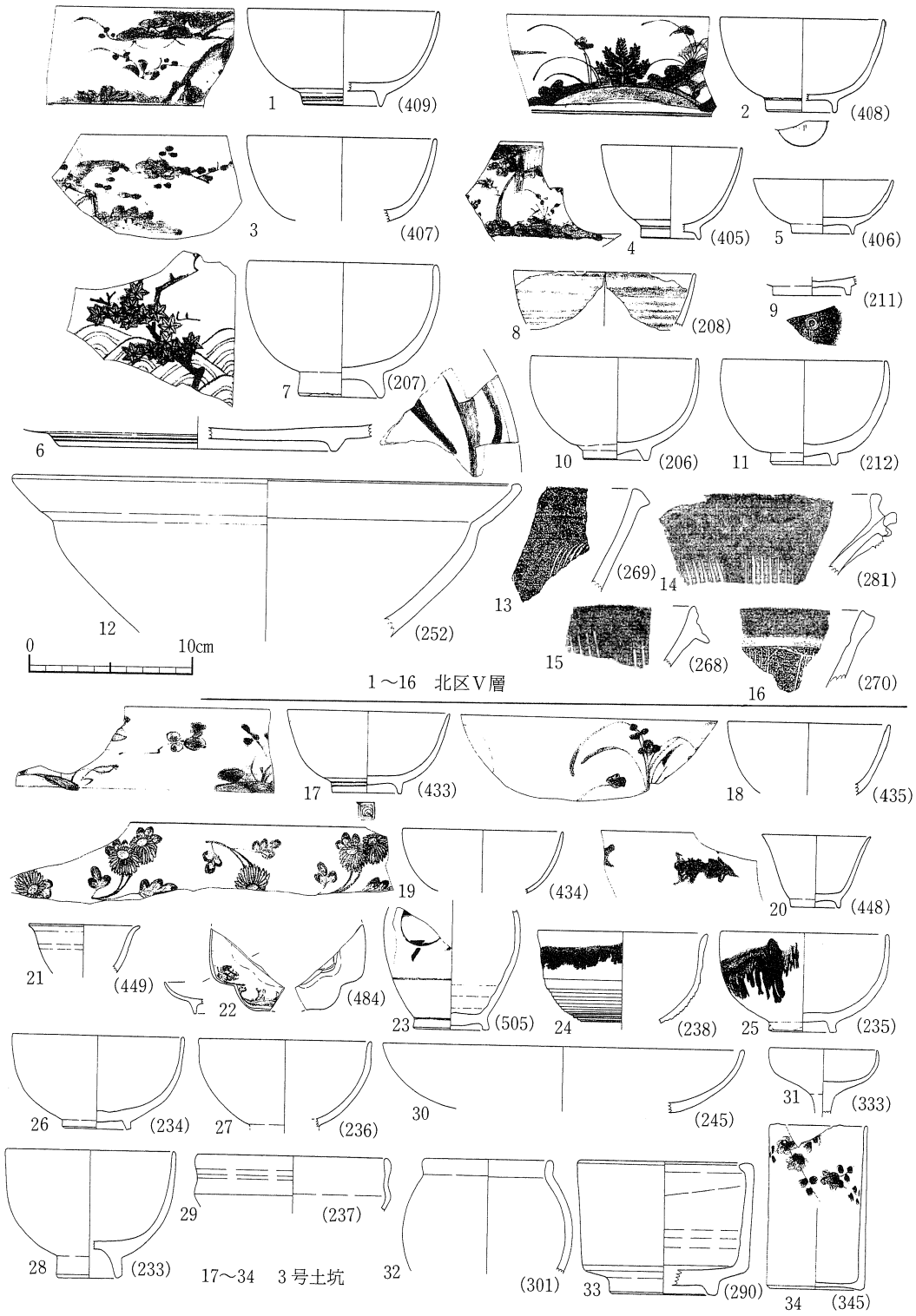


図54　二の丸跡第５地点出土陶磁器(2)

Fig. 54　Porcelains and glazed ceramics from NM5(2)

1～6、17～23　肥前系磁器　8、9、12、28、32　肥前系陶器
10、11、24～27、30、31　大堀相馬系陶器　34　京・信楽系陶器
7、13～16、29、33　産地不明陶器

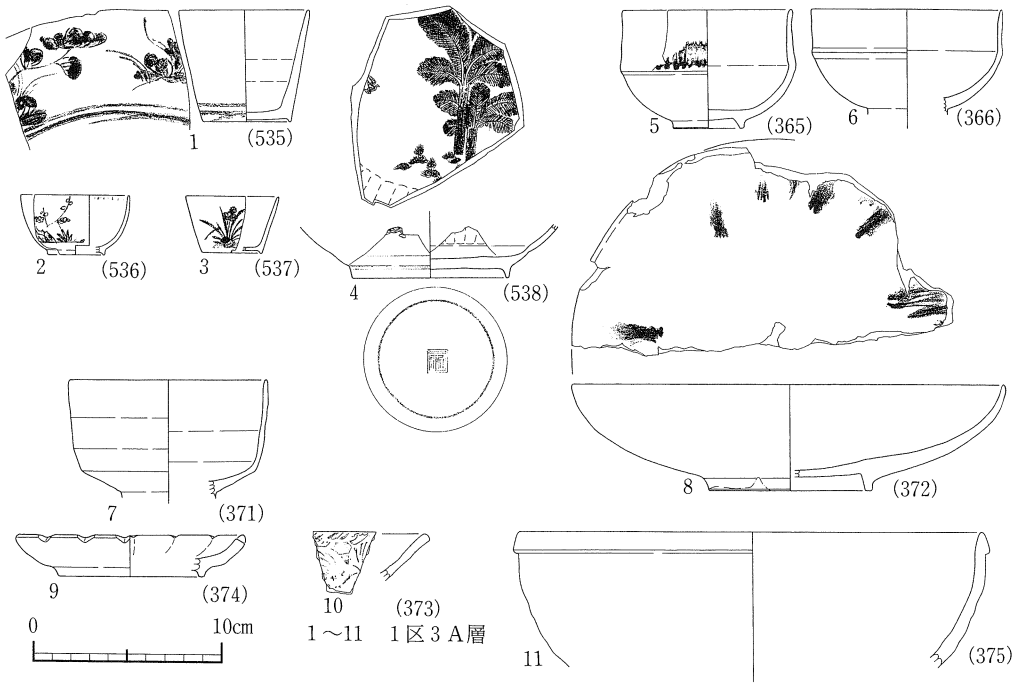


図55　二の丸跡第5地点出土陶磁器(3)　　1～4　肥前系磁器　5～8　大堀相馬系陶器
Fig. 55　Porcelains and glazed ceramics from NM5(3)　9・10　瀬戸・美濃系陶器　11　産地不明陶器

げられる。擂鉢の減少は、それを多用する、中世以来の伝統的な調理方法が、大きく変化したことを示している。碗類については、時期的な変化の実態を明らかにするため、実測資料を対象として、器高と口径の関係を調べた(図59)。肥前産磁器碗は、口径7～9cm、器高4～5cmの小碗と、口径10～12cm、器高5～7cm程度の中碗に分類できる。時期的な変化としては、中碗に関して器高の低下が看取される。肥前産陶器碗に関しては、計測資料が全て「呉器手」に偏ったため、口径に対する器高の比率が高い。大堀相馬産陶器碗については、計測資料は全て「中碗」に相当し、「小碗」にあたる資料は含まれていない。口径と器高の比率は、磁器碗に近く、両者のプロファイルは類似している。時期的な変化に関しても、磁器碗同様、器高の低下が認められる。形態上、肥前産の磁器中碗と、大堀相馬産の陶器中碗は、喫茶に用いられた可能性の高い「呉器手」とは大きく異なり、ともに飯碗として用いられたと考えられる。

幕末から明治初頭の資料では、陶器と磁器で器種の違いが顕著になる。すなわち、碗・皿などの供膳具は磁器が主体となり、土瓶や鍋など、直接火にかける道具には陶器が用いられる。

江戸時代中期に属するa～eの資料群では、総数369点の磁器のうち、中国製品は4点だけで、残りは全て肥前産であった。中国製品は、いずれも明末～清初に属し、aの北区Ⅶ層に小中皿2点、小碗1点、bの北区Ⅵ層に小中皿が1点認められた。Ⅶ層の小中皿のうち1点は、「呉須赤絵」と呼ばれる色絵磁器である。

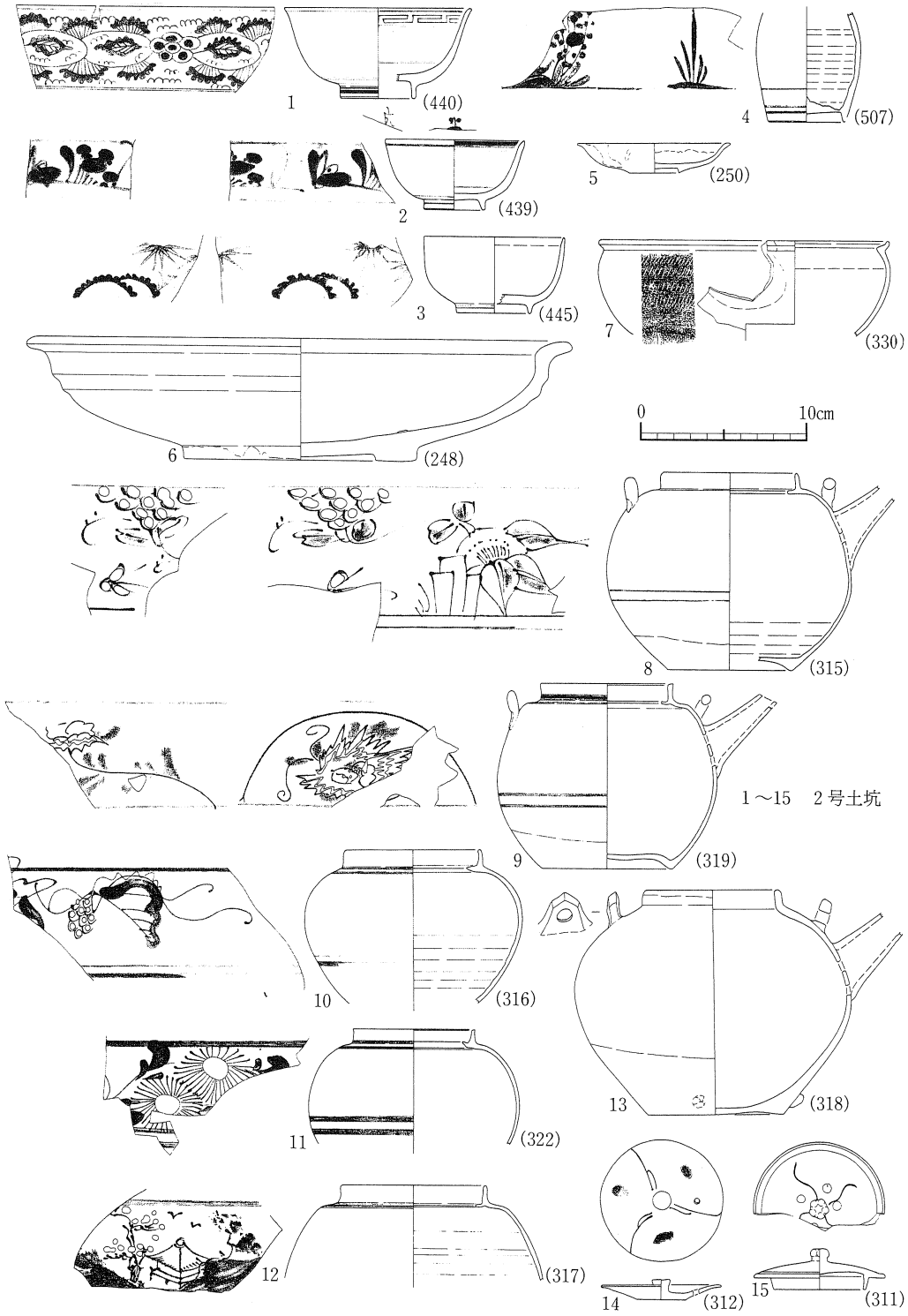


図56　二の丸跡第5地点出土陶磁器(4)

Fig. 56　Porcelains and glazed ceramics from NM5(4)

1、2　瀬戸系磁器　3　産地不明磁器　4　肥前系磁器
5、7～15　大堀相馬系陶器　6　瀬戸・美濃系陶器

表32　仙台城二の丸跡第５地点出土磁器器種別出土点数（江戸時代中期）

Tab. 32　Count of porcelains from NM 5 (middle of Edo period)

磁器器種	碗　類	皿　類	碗皿不明	壺甕瓶類	その他	不　明	混　入
北区Ⅶ層	24	17	10	1	4	21	0
北区Ⅵ層	11	10	16	0	2	0	0
４号土坑	8	0	3	0	1	3	0
北区Ⅴ層	42	20	60	7	7	68	4
３号土坑	13	1	6	3	2	5	0

表33　仙台城二の丸跡第５地点出土陶器器種別出土点数（江戸時代中期）

Tab. 33　Count of glazed ceramics from NM5 (middle of Edo period)

陶器器種	碗　類	皿　類	鉢　類	壺・甕類	瓶　類	袋物不明	香炉火入	擂　鉢	その他	不　明	混　入
北区Ⅶ層	14	3	0	2	0	1	4	7	1	7	1
北区Ⅵ層	6	1	1	2	0	0	1	2	1	7	0
４号土坑	2	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0
北区Ⅴ層	41	3	2	1	1	4	2	18	1	24	6
３号土坑	27	4	0	2	0	2	1	2	2	6	0

表34　仙台城二の丸跡第５地点出土磁器器種別出土点数（幕末から明治初頭）

Tab. 34　Count of porcelains from NM5
(late of Edo period-beginning of Meiji period)

磁器器種	碗　類	皿　類	碗皿不明	壺甕瓶類	その他	不　明	混　入
１号土坑	2	4	1	0	0	4	2
２号土坑	13	4	2	3	1	14	0

表35　仙台城二の丸跡第５地点出土陶器器種別出土点数（幕末から明治初頭）

Tab. 35　Count of glazed ceramics from NM5
(late of Edo perion-beginning of Meiji period)

陶器器種	碗　類	皿　類	鉢　類	壺甕袋物	土　瓶	鍋	擂　鉢	その他	不　明	混　入
１号土坑	3	1	0	6	50	8	1	1	14	3
２号土坑	3	2	1	12	136	12	3	2	30	6

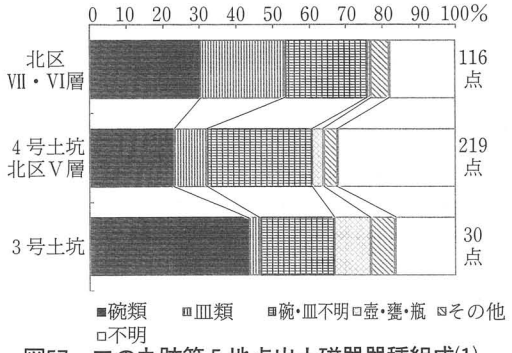


図57　二の丸跡第5地点出土磁器器種組成(1)

Fig. 57　Histgrams of porcelains shapes from NM5(1)

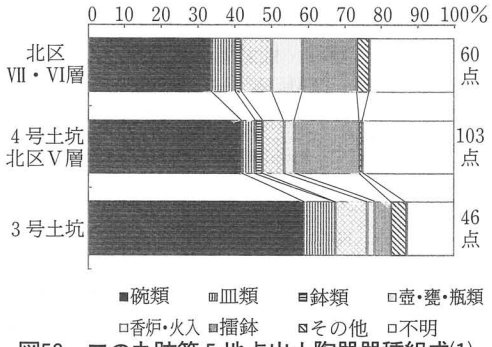


図58　二の丸跡第5地点出土陶器器種組成(1)

Fig. 58　Histgrams of glazed ceramics shapes from NM5(1)

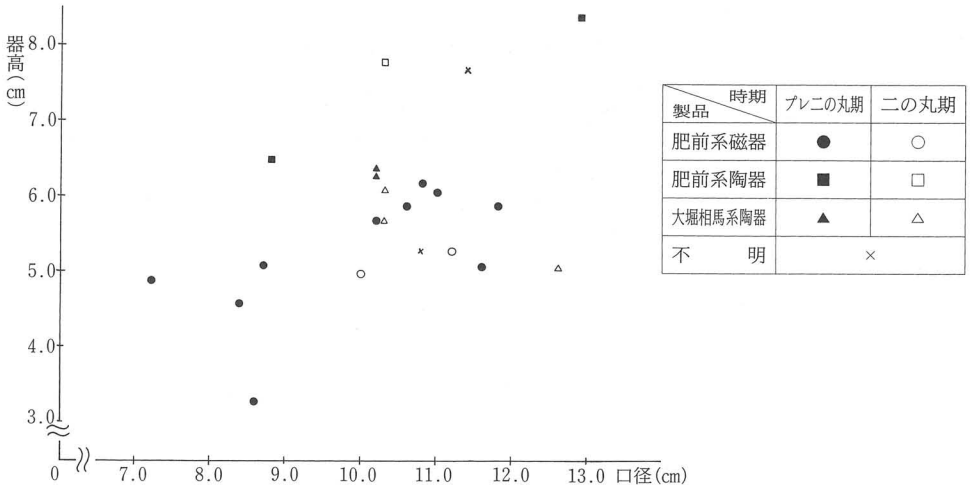


図59　二の丸跡第5地点出土陶磁器（碗類）の口径・器高分布

Fig. 59　A scatter diagram of size of bowls, porcelains and glazed ceramics

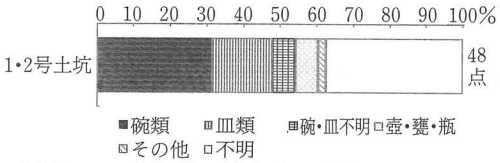


図60　二の丸跡第5地点出土磁器器種組成(2)

Fig. 60　A histgram of porcelains shapes from NM5(2)

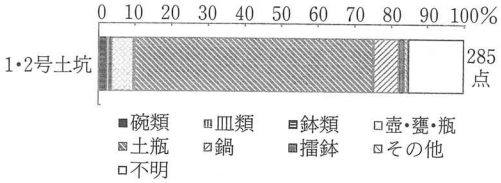


図61　二の丸跡第5地点出土陶器器種組成(2)

Fig. 61　A histgram of glazed ceramics shapes from NM5(2)

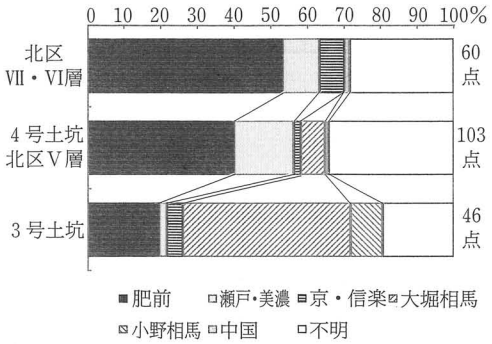


図62　二の丸跡第5地点出土陶器産地別組成

Fig. 62　Histgrams of glazed ceramics by producing district from NM5

江戸時代中期の陶器の産地別組成は、図62に示した。陶器は、17世紀末葉には肥前製品が優勢であったものが、比較的短期間のうちに、大堀相馬製品主体に変化したことが判る。肥前製品の占める割合は、分析を行った17世紀末葉以前では、瀬戸・美濃製品とならんで、さらに高かったことが予想される。大堀相馬に若干遅れて、小野相馬製品が出現する点も看過できない。大堀相馬、小野相馬製品におされる形で、それらと競合関係にある瀬戸・美濃製品は、肥前製品同様、比率が低下する。京・信楽製品は、量的には少ないものの、常に一定量存在している。京・信楽製品の多くは、京焼と呼ばれる「ブランド物」であり、日常雑器を主体とする大堀相馬、小野相馬製品の台頭とは無関係であったと考えられる。

幕末から明治初頭の１・２号土坑では、磁器は瀬戸産が肥前産を上回り、陶器は大部分が大堀相馬産で占められる。両土坑あわせて、磁器は、混入した古い資料２点を除き、48点出土している。産地別では、肥前10点（20.8%）、瀬戸18点（37.5%）、不明20点（41.7%）である。器種との関係では、碗類は瀬戸産が多く、皿類や瓶類は肥前産が多い。陶器は、同じく混入した古い資料９点を除き、285点出土している。産地別では、大堀相馬274点（96.1%）、堤３点、瀬戸１点、不明９点となる。瀬戸産の１点は石皿であり、堤産のものは全て擂鉢である。

以上、本遺跡出土陶磁器で最も注目されるのは、大堀相馬の創業年代と、創業期の製品の特徴を知る手がかりが得られたこと、さらに、18世紀前葉には、それが他の製品を凌駕するほど大きな比重を占めることが明らかになったこと、の２点である。この成果を受けて、次に他の消費地遺跡や窯跡出土資料を検討し、大堀相馬の生産と流通について考察を加える。

⑵　18世紀代の大堀相馬と周辺の窯業生産

18世紀から19世紀初頭の操業が確認される相馬・双葉地方の陶器（「相双陶器」）、ならびにその生産窯は、主要製品のあり方と窯跡の分布状況から、次のように整理することができる。

	1	大堀相馬系	1 a	浪江町大堀・小丸地区諸窯（大堀深野窯、小丸渡辺窯他）
			1 b	大熊町野上山神窯
			1 c	相馬市小野中平横田窯
相双陶器	2	小野相馬系		相馬市小野中里窯
	3	館ノ下系	3 a	相馬市館ノ下
			3 b	浪江町小野田・田尻・酒井・末の森地区諸窯？
	4	相馬藩窯		相馬市田代窯

１～３の窯業生産は、遅くとも18世紀の後半には、器種別分業あるいは器種内分業とでも呼ぶべき体制を採っており、「相双陶器」というような、それらを包括する概念が必要である。

大堀相馬系陶器（以下「大堀相馬」と表記）とは、福島県双葉郡浪江町大堀地区周辺で生産

された施釉陶器を主とする焼物で、近隣の大熊町や相馬市内でも、同一の技術系統に属すると考えられる窯跡が確認できる。

１ａ　浪江町大堀・小丸地区諸窯

浪江町内の窯跡に関しては、今日まで組織的な分布調査が行われておらず、大堀長井屋窯跡の発掘調査報告書のなかで、山田秀安、大竹憲治の両氏により一部の窯跡の分布図が示されたにとどまる。現状では、個々の窯の製品の特徴や、操業年代など、基礎的な知見がほとんど得られていない。また、最も窯跡の集中している大堀地区では、宅地化が進んでいる上、旧窯の上に今日まで窯が重複して築かれている。そのため、表面的な分布調査により窯跡の実態、特に操業期に関わるような古い段階の様相を捉えることは困難である。しかし今回、工事等の際に窯跡から出土した資料を検討した結果、大堀地区では、現久保田氏宅（旧深野氏宅）窯跡で、小丸地区においては、北沢の渡辺氏宅窯跡他で、18世紀代の製品の生産を確認できた（註１）。

旧深野氏宅窯跡採集資料には、灰釉丸碗、同腰折碗、鉄釉･灰釉掛け分け碗、灰釉皿がある。灰釉には、御深井釉に近いものから、いわゆる糠白釉まで、様々なものが含まれる。
腰折碗の形態に関しても、体部の沈線の上に明瞭な稜線が認められるものから、沈線・稜線ともに不明瞭なものまで、変異が大きく、ある程度の時間幅が想定される。なお、灰釉皿のなかには、一重亀甲型六角区画内に梅文？の印文を見込みに有する資料が含まれている。これは、見込み印花文を有する皿が多く確認されている小丸地区では確認されていないタイプである。

渡辺氏宅窯跡は、小丸地区に現存する窯跡の中で最も保存状態がよい。窯跡の存在は古くから知られていたようで、故竹島國基氏のコレクションにも本窯跡の採集資料（「渡辺巳之助窯」と注記）が含まれており、その一部が「小丸窯」として紹介されたことがある（竹島1974）。窯本体と考えられる部分は現在竹藪で、高さ３ｍ以上の高まりとして確認できる。竹藪の北側には、県道落合浪江線が走っており、県道拡幅工事の際に、物原と考えられる部分の一部が削平され、多量の遺物が佐藤仁司氏によって採集されている。図63に示したのは、今回小丸地区の踏査の際に、渡辺氏宅窯跡で表採した資料である。製品は全て、灰釉もしくは鉄釉、および両者の掛けわけで占められる。灰釉は、御深井釉に近く、糠白釉は全く認められない。中型の灰釉丸碗が最も多く、他に腰折碗、掛け分け碗、丸皿、折縁皿、小坏、仏飯器、灯明皿がある。

小丸地区では、踏査の結果、渡辺氏宅窯跡を含め、６箇所で窯跡の所在を確認した（図64）。見込みに印花文を有する碗皿類は、渡辺氏宅窯跡をはじめ、山田氏宅窯跡、小丸氏宅窯跡、同東窯跡でも出土しており、小丸地区の主要産品であったと考えられる。印花文には、菊花文、菊花枝文、二重剣先型六角区画内梅（桔梗）文が見られる。菊花文は碗に、菊花枝文は丸皿に、二重剣先型六角区画内梅（桔梗）文は折縁の輪花皿に用いられている。

１ｂ　大熊町野上山神窯

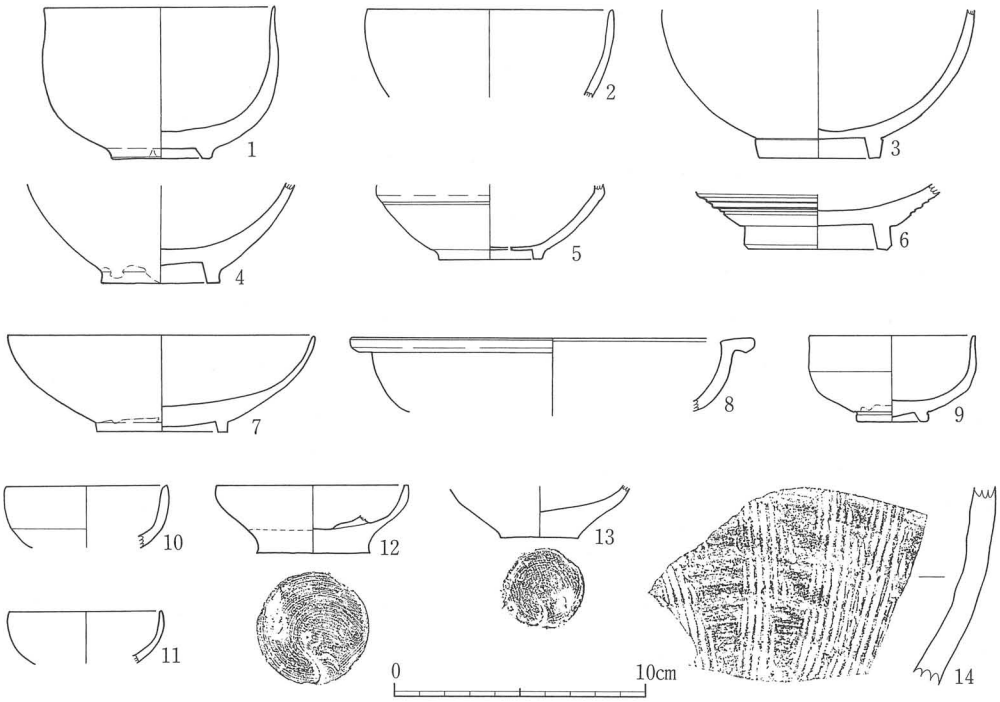


図63　福島県浪江町小丸地区渡辺氏宅窯跡採集資料　1・2・4・5・7～12　灰釉
13・14　鉄釉　3・6　素焼き段階

Fig. 63　Ohbori-souma ware from the site of kiln of Omaru-kitazawa area, Namie town, Fukushima prefecture

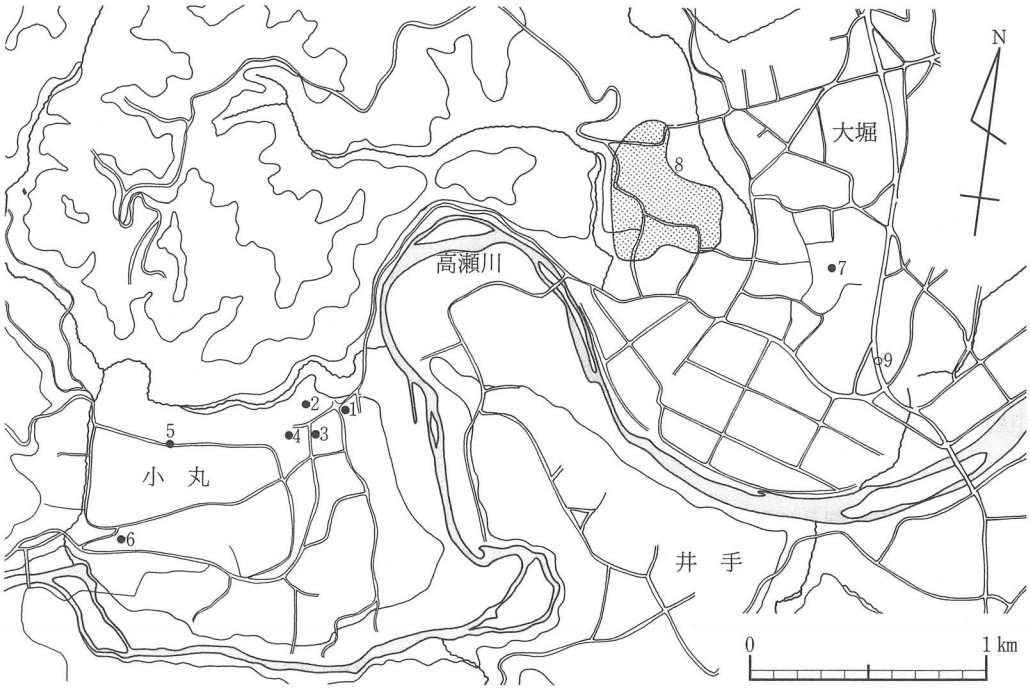


図64　浪江町小丸地区諸窯と周辺遺跡

1　北沢渡辺窯　2　下平小丸窯　3　下平小丸東窯　4　小丸観音南窯　5　出口堂ノ前窯
6　立石山田窯　7　大堀深野窯　8　中平遺跡　9　大堀長井屋窯跡

Fig. 64　Distribution of the sites of kiln at Omaru area, Namie town, Fukushima prefecture

町史編纂に伴い、大竹憲治氏らにより調査が行われ、報告書が刊行されている（大竹ほか1982)。報告書によれば、飯碗としての用途が考えられる中型の腰折碗と、湯呑としての用途が考えられる、口縁部に割菊花文を施した小型の丸碗が主要な製品である。18世紀末葉から19世紀初頭にかけて、短期間の操業が想定される。

１c　相馬市小野中平横田窯

今回、故竹島國基氏旧蔵の近世陶器コレクションを検討する機会を得、窯跡採集資料から、横田窯においても、大堀相馬が生産されていたことが確認できた。採集資料であるため、必ずしも全体の様相を反映しているとは言えないが、割菊花文や山水文等の鉄絵を施した皿類が多く認められる。18世紀末葉から19世紀初頭の製品が主体であろう。

小野相馬系陶器（以下「小野相馬」と表記）

仙台城跡をはじめ、宮城、福島県の近世遺跡から、大堀相馬に伴って普遍的に出土する陶器のなかに、特徴的な胎土・釉調を持つ一群がある。その特徴は、「海鼠釉を基調とし、素地が粗（飯村1987)」という点にある。これまでは、東北地方産である可能性が高いとの認識はあっても、産地不明とされたり、大堀相馬に含めたり(飯村前掲)、研究者によって意見の分かれるところであった。今回、故竹島國基氏旧蔵の近世陶器コレクションを検討した際、相馬市小野に所在する中里窯跡採集資料のなかに問題の一群が確認できた。窯跡資料には、碗、見込み蛇ノ目釉剝ぎ小皿、片口鉢、仏飯器、筒形香炉がある。消費地遺跡ではこれ以外に、折縁輪花皿、鬢水入、花生、猪口などの器種が出土している。これらには、いわゆる海鼠釉と呼ばれる青灰濁から白濁色の釉が掛かり、ザックリとした粗い胎土中には黒色の粒子が認められる。碗や片口鉢の見込みには、目跡が残るものが多い。消費地遺跡から多く出土する器種は、肥前陶器を写したと考えられる見込み蛇ノ目釉剝ぎ小皿や片口鉢であり、鬢水入も比較的目立つ。これらの器種は、大堀相馬ではあまり生産されておらず、そうした大堀相馬の間隙を突く形で、小野相馬の販路が存在していたものと考えられる。なお、中里窯では、緻密な胎土を持つ、灰釉鉄絵の碗皿類も生産されており、これらの製品については、大堀相馬として流通していたと考えられる。18世紀後半を中心とした年代の操業が考えられるが、仙台城二の丸跡第５地点の出土状況が示すとおり、一部の製品については、18世紀の前葉にまで遡る可能性がある。

(3)　大堀相馬製品に関する消費地編年

大堀相馬の操業年代に関しては、発掘調査された窯跡が浪江町大堀の長井屋窯跡と大熊町野上の山神窯跡の２箇所に限られ、いずれも18世紀後半を遡る可能性はないため、窯跡の調査資料に基づき論じることができない。地元では元禄３年（1690年）創業説が有力であるが（大堀相馬焼協同組合1988)、その根拠となっている史料の年代は、最も古い「瀬土系譜」（半谷家文

書）でも寛政５年（1793年）であり、創業当時の史料ではない。文献史料では、元禄10年（1697年）に相馬藩による「瀬戸物土他領江不可出事」の布令（給人以下諸法度）が最も古く、この史料から、大堀相馬の創業年代が17世紀代に遡る可能性の高いことが窺える。

今回、仙台城二の丸跡第５地点において、層位的見地および、共伴した木簡に記された年号や肥前陶磁器の年代から、確実に17世紀末まで遡ることのできる大堀相馬が確認できた。このことを受けて、生産地での窯別編年が困難な現状では、他の消費地遺跡において実年代を特定しうる一括資料に基づき、大堀相馬の消費地編年を組み立てる作業が急務となった。編年の基準として用いた資料は、仙台城二の丸跡第５地点を除き、次の５資料である。

宮城県河南町群田遺跡１号井戸出土資料（中野1993）

共伴した硯に「享保拾七」（1732年）の線刻があることから、それに近い年代が想定される。

大堀相馬には、掛け分け碗と灰釉碗がある。掛け分け碗は、器高が高く、口頸部が直立気味で、刻線文の施される体部との境には明瞭な屈折点を有する。他には見込み部分の釉薬を蛇ノ目状に剝いだ、肥前産の二重網目文磁器小皿、産地不明の擂鉢が出土している。

福島県いわき市泉城跡第５号土坑出土資料（中山1992）

共伴した「板倉伊豫守（荷）」木簡から、出土遺物は、板倉氏が泉城に入府した元禄15年（1702年）から、他所へ転封した延享３年（1746年）の間に年代比定できる。さらに共伴した「泉湊伊織」銘刻印を有する焼塩壷から、廃棄年代の上限を1738年に置くことができる。なお、報告書では、出土遺物について、板倉氏が泉城を去る際に処分した可能性が指摘されている。

大堀相馬には、掛け分け碗、鉄釉碗、灰釉碗がある。掛け分け碗は、少なくとも２種類が確認できる。ひとつは、体部下方が強く張り、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。器壁は比較的薄く、体部の二箇所を凹ませている。体部に数条の沈線を持たない点を除けば、形態、釉薬の用い方とも、瀬戸・美濃における出現期の腰錆碗（本業焼編年の腰錆碗第１型式）に類似する。もうひとつは、底部からの立ち上がりが緩やかで、体部下半に刻線文を持つタイプである。大堀相馬以外には、肥前産の陶磁器、瀬戸・美濃産の陶器が多く、少量ではあるが、京・信楽系の碗、丹波産の擂鉢が出土している。肥前産の磁器は、碗、皿、猪口、小坏、香炉、仏飯器、蓋が出土している。碗は、草花文を描いた、くらわんか手が多く、二重網目文碗も出土している。碗、皿、猪口、小坏には、コンニャク印判手法が認められる。磁器には、17世紀後半代にあがる資料が若干含まれるが、主体は18世紀前葉である。肥前陶器は、京焼写しの碗、刷毛目文碗、唐津の三島手ならびに刷毛目文大鉢がある。瀬戸・美濃製品では、碗、皿、水注、香炉、灰落し？、擂鉢がある。碗には鉄釉碗、御室写し碗、尾呂茶碗、腰錆碗がある。皿は、黄瀬戸釉を施した菊皿である。鉄釉水注は、多治見市平野西窯の63層出土資料［平野西窯III窯式］（田口編1993）に類例を求めることができ、美濃焼編年の連房III期ｂに位置づけられる。連房III期

bは、1710年～1750年に当てられており、共伴した木簡から推察される年代や、肥前陶磁器等の年代観とも合致する。摺鉢は、本業焼編年の第5小期と第6小期の過渡的様相を示す。香炉は、同じく第5小期の特徴を有する。

岩手県岩泉町江川鉄山出土資料（羽柴1994）

江川鉄山は、文献資料に残された「元文五年申年山入、取立十三カ年ノ内」との記述から、操業期間を、元文五年（1740年）から宝暦2年（1752年）の13年間に限定することができる。

大堀相馬では、掛け分け碗、灰釉丸碗、灰釉腰折碗、鉄釉小皿、鉄釉鉢が出土している。掛け分け碗は、比較的器高が低く、体部と口頸部の間に明瞭な稜線を持たない。灰釉の施される口頸部は短く、直立もしくは僅かに内傾する。灰釉丸碗は、比較的器高の高いものが主体的で、鉄釉を流し掛けした製品も認められる。肥前磁器は、碗、皿、火入れ、猪口、小坏、徳利、水滴、紅皿等が出土している。全体としては、泉城跡第5号土坑と時期的な様相は共通する部分が多いが、遺跡の性格に起因して、粗製の製品が多いようである。肥前陶器は、呉器手の碗や刷毛目文の碗、徳利の他に、京焼写しの碗が出土している。瀬戸・美濃産の陶器は、碗、皿、灰落し？がある。碗は、御室写し碗、尾呂茶碗、腰錆碗、灰釉丸碗からなり、それらの組合せから、瀬戸の本業焼編年（藤沢1987―89）の第5小期ないし第6小期に比定できる。

福島県浪江町中平遺跡5号墓出土資料（山内ほか1989）

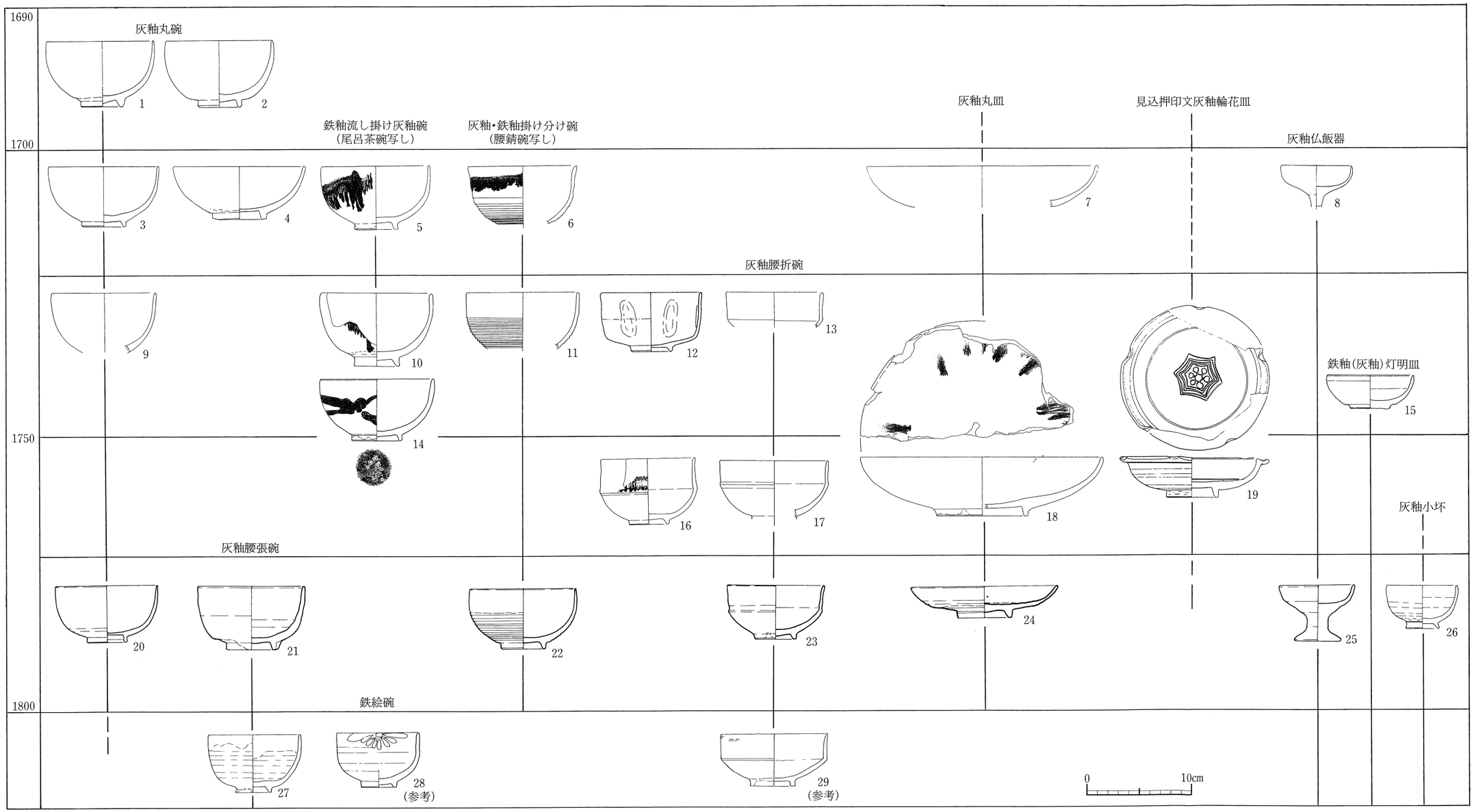
大堀相馬産の鉄釉流し掛け灰釉丸碗と灰釉灯明皿？が出土している。前者は、仙台城二の丸跡第5地点の3号土坑のものに比べ器高が低く、全体的に若干新しい様相が認められる。丸碗の高台内には、「彦之丞」のヘラ描きがある。彦之丞は、「瀬土系譜」（半谷家文書）に記載された、十五人衆の十番目に名前が登場する。「瀬土系譜」自体の成立は、寛政5年（1793年）であり、この時点で、彦之丞の系譜に連なる陶工として、喜宗次一代助の2代の名前が挙げられていることから、彦之丞自身が活躍したのは18世紀中葉以前であろう。宝暦年間（1751～63年）には、陶工数が数十人に及んだとの「奥相志」（岩崎編1969所収）の記述が正しいとするなら、十五人衆の活躍した時代は、それ以前である可能性が高い。

仙台市新妻家墓地15号墓出土資料（佐藤1986）

墓石の碑文から、天明6年（1786年）に没した、新妻源之丞先妻の墓であることが明らかである。柄鏡、櫛、キセルとともに、大堀相馬産の灰釉小坏が1点出土している。胎土は、黒灰色粒子を比較的多く含み、密で、硬く焼きしまっている。外面にはロクロ目痕が明瞭に残る。

以上、18世紀代の大堀相馬の実態を明らかにするため、実年代を特定しうる一括遺物の検討を行った。これと、先に行った仙台城二の丸跡第5地点の層位的出土事例の検討から、17世紀末から18世紀の大堀相馬産の主要製品に関して、図65に示した編年案が考えられた。

灰釉丸碗は、仙台城二の丸跡第5地点出土資料（図65―1、2）から、17世紀末まで遡るこ



1・2　仙台城二の丸跡
　　第5地点北区Ⅴ・Ⅳ層

3～8　仙台城二の丸跡
　　第5地点3号土坑

9～11・13　江川鉄山
　　12　泉城跡5号土坑
14・15　中平遺跡5号墓

16～18　仙台城二の丸跡
　　第5地点1区3A層
　　19　八沢要害遺跡

20～25　金谷館跡
　　1号集石遺構他

　　26　新妻家墓地15号墓

　　27　新妻家墓地25号墓

28・29　大熊町山神窯跡

図65　消費地遺跡一括資料に基づく大堀相馬系陶器の編年（17世紀末～18世紀代）

Fig. 65　Chronological sequence of Ohbori-souma ware belonging to the end of the 17th century-the 18th century

とが確認できた。この資料は、胎土、形態、施釉部位など、これまで18世紀代の大堀相馬産の灰釉碗として認識されてきた資料との類似点が多く、他に産地を求めるよりは、それらに先行する製品である可能性が高い。これら初期の製品は、釉調が青灰色に近い。灰釉の色調は、18世紀の前葉から後葉には緑灰色を呈し、18世紀末葉以降は、いわゆる糠白釉が主体となる。器形は次第に浅くなり、それとともに、高台径が相対的に大きくなる傾向が窺える。18世紀末葉には、腰張碗が出現し、丸碗に代わって主体を占めるようになる。高台内は無釉である。

鉄釉流し掛け灰釉碗は、18世紀前葉から中葉に、存在が確認できる。尾呂茶碗を写した製品と考えられ、瀬戸の本業焼編年（藤沢前掲）における尾呂茶碗の年代観とも、ほぼ一致する。

灰釉・鉄釉掛け分け碗は、18世紀前葉に出現し、中葉から後葉にかけて盛行する。体部上半に灰釉、下半に鉄釉を掛け分けており、高台内にも鉄釉が施される。体部下半に多条の刻線文を有する例が多い。本類は、瀬戸・美濃の腰錆碗の写しと考えられるが、初期の腰錆碗（藤沢編年の腰錆碗第１・２型式）の特徴である、体部沈線上の指頭圧痕を有する製品は、大堀相馬ではほとんど生産されていない。管見では、いわき市に所在する泉城跡の５号土坑出土例（図65―12）が知られるのみである。最初期の製品と考えられる、仙台城二の丸跡第５地点３号土坑例（図65―６）は、体部上半から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる。形態的には、初期の腰錆碗に近い。その後、口縁部は直立気味へと変化し、腰錆碗の第３ないし４型式に近い形状を呈するようになる。釉調の変化は、灰釉丸碗と一致する。18世紀後葉には、体部に刻線を持たないやや大ぶりの碗が見られる。

灰釉腰折碗は、18世紀中葉に出現する。初期の製品は単純に屈曲するだけであるが、18世紀後半には、稜線の上下に沈線状の凹を伴う例が多くみられる。灰釉丸碗同様、器形は次第に浅くなり、釉調は、緑灰色から糠白色へと変化する。

灰釉皿には、丸皿と折縁輪花皿がある。丸皿には、直径23cm前後の大皿と、14cm前後の中皿がある。輪花皿には、同じく14cm前後の中皿と、９cm程度の小皿がある。大皿には鉄釉を流し掛けした製品もある。丸皿、輪花皿とも、見込みに印花文が多用されている。輪花皿の消長は明らかにし得ていないが、美濃製品との類似から、連房Ⅲ期ａに併行する年代、すなわち、遅くとも18世紀初頭には出現していた可能性が高い。

その他、確実に18世紀前半まで遡りうる器種としては、仏飯器と灯明皿がある。仏飯器は、薄手で坏部が深く、脚の細いものから、厚手で坏部が浅く、脚の太いものへと変化する。脚部はいずれも中実である。灯明皿には、鉄釉と灰釉の両者があり、さらに灯芯の支えの有るものと無いものとがある。仏飯器、灯明皿ともに回転糸切りによって切り離され、底部に痕跡を残す。酒坏として用いられたと考えられる小坏、それとセットになる瓶類が出土するようになるのは18世紀末葉であり、それらが本格的に生産されるのは19世紀に入ってからと考えられる。

⑷ 東北地方近世陶磁史における大堀相馬系陶器の位置づけ

これまでの検討から、大堀相馬の開窯は、17世紀末の元禄年間前半か、それ以前に求められることが明らかとなった。近世陶磁史では、二大生産地である、肥前、瀬戸・美濃ともに、全国的な消費者層の拡大を背景に、大衆消費製品の量産体制を確立した時期にあたる（大橋1989 楢崎1990）。相馬藩や仙台藩においても、この時期、新田開発の蓄積などから、藩の財政が最も充実し、都市部だけでなく農村部においても、消費活動が飛躍的に活発化した。大堀相馬の開窯の背景には、そのような経済的状況が存在しており、開窯当初から一貫して、廉価な大衆消費製品の製造を目的としていたと考えられる。

今のところ、確実に最初期と断定できる製品は灰釉丸碗だけであるが、これに灰釉の皿類が伴っていたと考えられる。鉄釉を流し掛けした灰釉丸碗は、瀬戸・美濃の尾呂茶碗を写した可能性がある。尾呂茶碗などに見られる釉流し技法は、連房III a 期・III b 期に多く認められ、大堀相馬がそれを取り入れたと考えた場合、時期的にも整合する。鉄釉・灰釉掛け分け碗についても、瀬戸・美濃の腰錆碗を写した可能性が高い。折縁輪花皿の出現年代は不明であるが、連房II期からIII a 期に見られる御深井釉折縁輪花皿を写したとの仮定が正しければ、17世紀末の開窯期にまで遡る可能性がある。また、小丸東窯採集品にみられる、見込みに菊花枝文などを型押しした灰釉小型丸皿が、これと併行する可能性がある。これらは器形・釉調ともに、いずれも「御深井釉製品」に近い。大堀相馬産の各種皿類に見られる型押し文様についても、施文部位、意匠の類似性から、瀬戸・美濃産の皿類に多用される摺絵文、鉄絵文を意識していると考えられる。摺絵技法は連房II期に出現し、続く連房III期に盛行する。さらに型押し技法に関しても、同じく瀬戸・美濃の皿や大平鉢の見込みに見られる、菊印花文との関連が考えられる。

現時点では、最初期の製品が焼かれた窯跡を特定することはできないが、大堀地区の西方、山寄りの小丸地区には、続く18世紀代の窯跡の集中することから、この地区を候補地の一つに挙げることができる。18世紀には、小丸地区と大堀地区の双方で、灰釉碗皿類の生産が行われる。18世紀末葉から19世紀初頭には、大熊町野上の山神窯や、相馬市小野中平の横田窯の存在が示すように、周辺の地域でも大堀相馬の技術を取り入れた窯業生産が行われるようになる。

これまで述べてきたように、大堀相馬に関しては、創業の段階から、18世紀代を通して、一貫して瀬戸・美濃系陶器の「写し」を行っていた。今後、肥前における京焼写しの問題など、他の事例との比較研究を通して、そのことの持つ意味を明らかにしていかねばならない。大堀相馬製品にみられる京・信楽系陶器との類似点を根拠に、大堀相馬は、京・信楽系陶器を志向した生産を行っていたとの意見がある（伊藤1990）。しかし、これまで明らかにしてきたように、大堀相馬が直接、写しの範を求めたのは瀬戸・美濃であり、京・信楽系陶器との類似は、それ

を志向していた瀬戸・美濃製品を介して、間接的な影響を受けたことによるものであったと言える。今後、窯本体の構造や窯道具の構成を明らかにするなかで、瀬戸・美濃窯の技術が、どの様な形で大堀相馬の窯業生産に関わったかを論じる必要がある。

仙台城二の丸跡第５地点出土資料の検討の結果、創業直後から、大堀相馬の流通圏が、相馬藩の領国を越えた広がりを有していたことが明らかとなった。18世紀には、東北地方中部から南部の太平洋側の地域に広く分布する。岩手県内では、旧盛岡藩領と旧仙台藩領では、様相が異なる。盛岡藩領に位置する、盛岡城跡（室野・八木他1991）や江川鉄山（羽柴前掲）では、瀬戸・美濃産陶器が大堀相馬を上回る量出土する。北上市浮牛城跡（浅田1992）など、仙台藩領に属する遺跡では、大堀相馬が優勢で、瀬戸･美濃製品はごく僅かである。仙台城をはじめ、仙台藩領に位置する近世遺跡では、18世紀前半以降、出土陶器の大部分を大堀相馬が占めている。福島県内でも、遺跡が藩政時代にどの藩に属していたかで、事情が異なる。新地町十二所Ａ遺跡（飯村前掲）や観音山遺跡（高橋・小野田1990）などの資料から、相馬藩や白河藩領では、大堀相馬の独占状況が窺える。しかし、泉城跡（中山前掲）の資料は、この地域では、18世紀に入ってもなお、多くの瀬戸・美濃製品が大堀相馬と併用されていたことを示している。

18世紀代に限って言えば、大堀相馬の主な市場は、相馬藩と仙台藩の領域内であり、この地域では、完全に瀬戸・美濃製品を抑えて、広く流通している。さらにその外側の地域、すなわち、盛岡藩や泉藩では、大堀相馬が入ってきてはいるものの、瀬戸・美濃製品と競合する状況にあったといえる。とはいえ、18世紀の前半には既に、北は盛岡から、南はいわきまで、東北地方の近世陶器としては比類無い程、広範囲な流通圏を確立している点は重要である。その背景には、相馬藩の窯業保護・管理政策に支えられた生産体制（註２）のみならず、瀬戸・美濃製品のコピーなど、消費者層のニーズに沿った商品の開発が考えられる。今後、消費地遺跡出土資料の分析から、消費者側の事情、すなわち消費者の社会的地位や経済事情が、そこで使われた焼物の産地とどの程度の関連を有するかを明らかにする必要がある。

（註１）窯跡採集資料の見学にあたっては、亀田利雄、佐藤仁司、松本哲夫の各氏にお世話になった。また、浪江町小丸地区の窯跡踏査に際しては、小丸哲也氏の御協力を得た。

（註２）相馬藩の窯業政策に関しては、既に、在郷給人の副業という側面に視軸を据えた、山形万理子氏の研究がある（山形1987）。相馬藩は、「御所焼ノ瀬戸物」（大堀相馬焼）を保護し、その国産品化を図るため、「下リ瀬土物」を仕入れ、領国内で商売することを禁止している。この禁令は、現存する史料では、享保18年（1733年）のものが最も古い。

≪引用・参考文献≫

青山国丸　1979　『焼物の破片と語る』

浅田知世　1992　『浮牛城跡』　北上市埋蔵文化財調査報告第１集

飯村均　1987　「福島県新地町十二所Ａ遺跡の近世陶磁器」『福島考古』28　pp. 75～88

伊藤正義ほか　1990　『東北の陶磁史』　福島県立博物館

岩崎敏夫編　1969　『相馬市史４　資料編１（奥相志）』

大竹憲治　1989　「大堀相馬焼きにおける茶器・照明具の編年」『いわき地方史研究』第26号　pp. 41～55

大竹憲治・長瀬州伸ほか　1982　『近世・山神窯跡の研究　福島県大熊町史三巻別冊』

大竹憲治・志賀敏行ほか　1989　『大堀・長井屋窯跡』　福島県浪江町教育委員会

大堀相馬焼協同組合　1988　『大堀相馬焼創業三百年記念誌』

工藤哲司・佐藤洋　1986　『柳生』　仙台市文化財調査報告書第95集

小井川和夫　1980　「八沢要害遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』
宮城県文化財調査報告書第72集　pp. 351～398

佐藤洋　1986　「新妻家墓地改葬調査報告」『年報７』　仙台市文化財調査報告書第94集　pp. 37～54

高橋信一・小野田義和　1990　『福島空港関連遺跡発掘調査報告Ⅲ　観音山遺跡』
福島県文化財調査報告書　第237集

高橋良一郎　1975　『相馬のやきもの』　ふくしま文庫40

竹島國基　1974　「相馬の民窯」『行方文化』第２集　pp. 37～49　はらまち史談会

田口昭二編　1993　『美濃窯の焼物』　多治見の古窯第３号　多治見市教育委員会

寺島文隆・石本弘・日下部善己　1980　「金谷館跡」『伊達西部地区遺跡』
福島県文化財調査報告書　第82集　pp. 109～149

仲田茂司・山口晋ほか　1988　『担橋窯跡発掘調査報告書』　三春町教育委員会

中野裕平　1993　『群田遺跡』　河南町文化財調査報告書　第８集

中山雅弘　1992　『泉城跡』　いわき市埋蔵文化財調査報告　第31冊

楢崎彰一ほか　1990　『尾呂』　瀬戸市教育委員会

羽柴直人　1994　「東北地方北部における近世陶磁器の様相」
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要ＸⅣ』　pp. 95～118

藤沢良祐　1987～89　「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ～Ⅷ

室野秀文・八木光則ほか　1991　『盛岡城跡Ⅰ』　盛岡市教育委員会

山形万里子　1987　「奥州相馬藩における陶業生産の展開」『日本歴史』第468号　pp. 63～79

3. 土器・土製品

(1) 土師質土器

① 皿

土師質土器は、陶磁器も含めて、遺物の中で最も多くの量が出土している。その中の圧倒的多数が皿である。土師質土器の皿は、ロクロ整形で外面をミガキで再調整するもの以外は、全てロクロ整形・回転糸切りによるもので、手づくねのものは見られない。ここでは、ロクロ整形・回転糸切りで再調整のないものをA類、ロクロ整形で外面をミガキで再調整するものをB類と大別する。図66で、ミガキと脇に注記したものがB類である。

これまでの仙台藩領内の近世遺跡の調査例を見ても、江戸時代の初頭から幕末に至るまで、手づくねのものは見られず、基本的にこの大きく2種類の皿に限定され、形態と技法上の変異に乏しい。そのため、時期ごとの特徴がつかみ難く、陶磁器と異なり、時期の異なる資料の混入を判断することが困難である。この点から、出土状況から、時間が限定される一括資料と認識できる資料群中の土師質土器皿を分析の対象としたい。皿以外の土師質土器、あるいは瓦質土器についても、時間的な変化のみならず、どのような器種のものが存在するかについても、まだ十分明らかではないので、これも一括資料中のものを中心に検討したい。

今回の第5地点では、時期的に限定できる一括資料で、なおかつ土器類がある程度まとまって出土している資料としては、次にあげる、本体区の3群の資料を用いたい（図66）。

北区18・19列の元禄年間の整地層とそれにはさまれる遺構（北区Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層、4号土坑・15号溝）＝17世紀末～18世紀初頭

Ⅲb期の3号土坑＝18世紀前葉

Ⅳ期の2号土坑出土資料＝19世紀前葉～中葉

土師質土器の皿については、これらの資料群の内、図化したものも含めて、口縁もしくは底部の外周の6分の1以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径・底径・器高が計測できるものを分析対象として抽出した。口縁もしくは底部が6分の1以上残っているものを選んだのは、経験的に、これだけ残存していれば、口径もしくは底径の復元が、安定した数値が得られるであろうという判断に基づくものである。

先に述べたように、皿は形態や技法上の変化に乏しいため、法量での検討を加えてみたい。図67に口径と器高での法量分布を示す。

まず、資料数の多い、元禄年間の整地層・遺構出土のものを検討したい。B類は7点と数が少ないため明確ではないが、A類の分布に重なり、A類とB類で顕著な法量の差は見出し難い。全体的に、口径10cm前後と、15cm前後を境に、大・中・小の3群にグルーピングが可能である。仙台城三の丸跡での検討でも、ほぼ同様に3群に分けられることが指摘されている（佐藤洋ほ

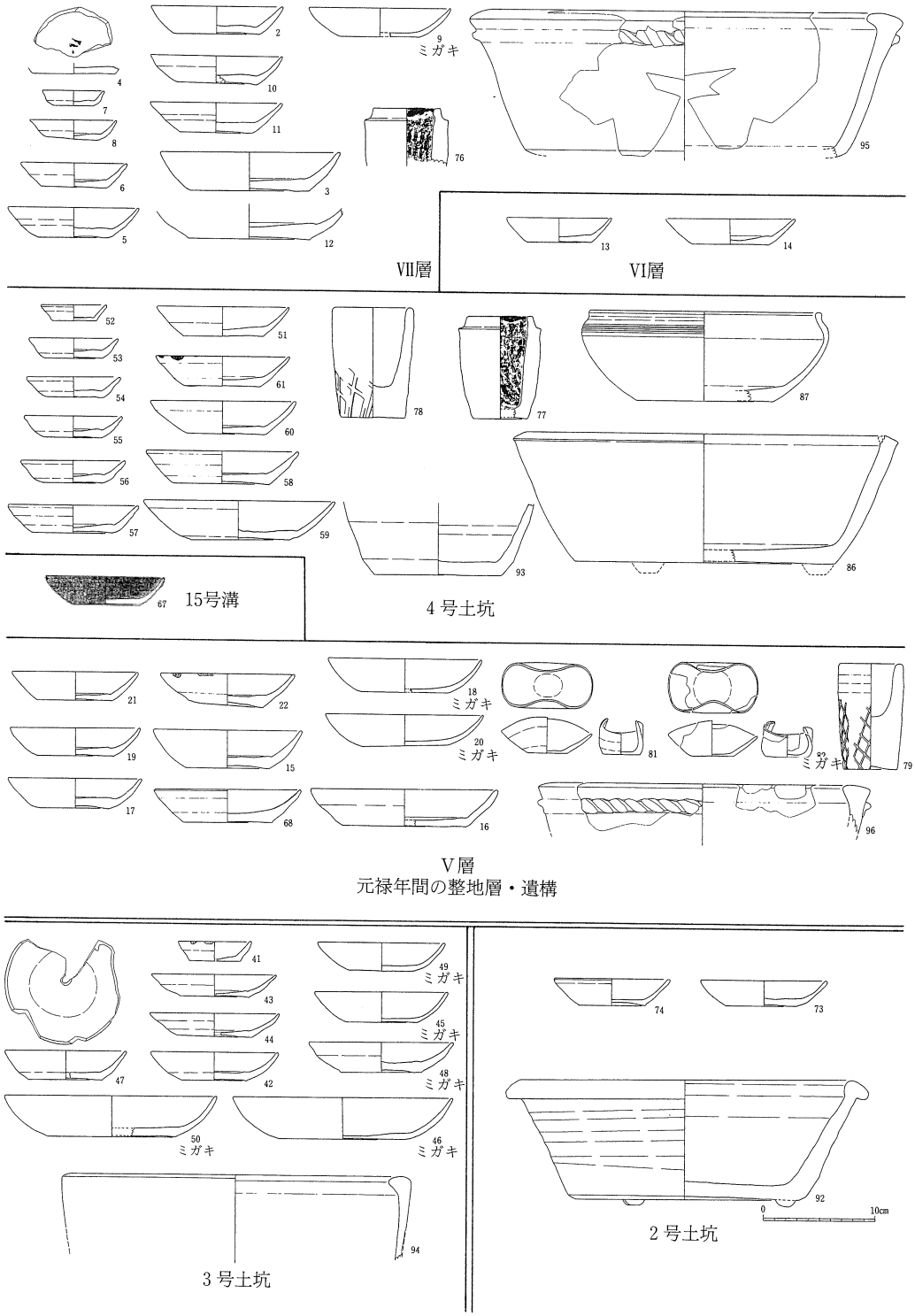


図66　二の丸跡第5地点一括資料に伴う土師質・瓦質土器

Fig. 66　Ceramics from NM5

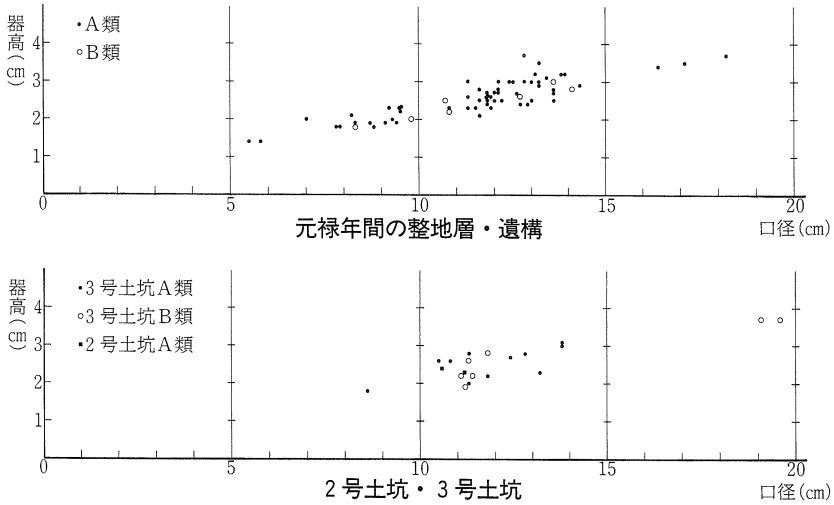


図67　土師質土器皿の法量分布

Fig. 67　Scatter diagrams of size of ceramic dishes from NM5

か1985)。ただし三の丸跡では、小のグループに相当するものは、口径3寸（約9cm）がその分布の上限となっている。第5地点では、小のグループの口径の分布の上限は、ほぼ10cmに近い値となっており、この点で相違する。三の丸跡の小のグループに相当するものの資料数が少ないため、これが時期差を示すものかどうか明確にはできない。また、第5地点の資料では、口径5.5cm前後のものが、さらに極小の群として分離できる可能性がある。

3号土坑出土のものも、元禄年間の資料と同様に、大・中・小の3群に分けることができそうである。ただし、小はA類が1点、大は口径が20cmに近いB類が2点存在するのみなので、確実ではない。この3号土坑出土の中の大きさのグループには、元禄年間の資料より、器高の低いものが含まれる点で異なっている。図66の43・44・48などである。これは、A類、B類の両者に見られる現象である。ただ、器高の変化もさほど大きくなく、元禄年間の資料とあまり変わらない器高を持つものもある。

2号土坑出土のものは、A類が2点あるだけなので、大きさの作り分けは判らない。いずれも中の大きさのグループに属する。図66の73は、3号土坑の器高が低いものに近いが、74はさほど低くない。そのため、3号土坑の段階には、器高の低いものが出現することは確実であるが、新しくなると器高が低くなるとは必ずしも断じ難い。使われた用途によって形態が変わる可能性も考慮して、今後時期的な変化をとらえていくことが必要であろう。

②　耳皿

耳皿は、皿と同様に、再調整の有無で2大別が可能である。ロクロ整形・回転糸切り後に両側を曲げるもの（A類）と、両側を曲げた後に外面を磨くもの（B類）がある。皿B類の場合

は、外面のミガキがらせん状を呈し、回転力を利用したと考えられるのに対し、耳皿B類の場合、当然ながら回転力は利用できず、手持ちで磨いている。耳皿で、出土層位から年代の明らかなものは、本体区V層出土の2点（図66—81・82）で、元禄年間のものである。A類1点、B類1点で、元禄年間には、この両者が共存していたことが判明する。

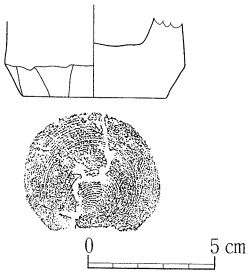


図68　二の丸跡第4地点出土焼塩壺
Fig. 68　A ceramic salt pot from NM4

③　焼塩壺

焼塩壷は、全部で21点出土している。年報6で報告した本体区部分では16点出土しており、その内8点が格子タタキ目を施し、コップ状の形態と考えられるものである。2点は、口縁部に段が付く印籠形のもので、残存状況が良くないため、刻印の有無は不明であるが、その形態から、畿内産のものと考えられる。2点が口縁部の小破片で、全体の特徴は判らないが、口縁部に段が付かないもので、格子タタキ目を施すコップ状の形態のものの口縁部の可能性がある。その他は小片のため、特徴などは不明なものである。本年報で報告した、本体区以外の調査区では、計5点出土しており、全て格子タタキ目を施すものである。

これらの焼塩壷の内、出土層位・遺構から年代の明らかなものは、図66の76～79で、元禄年間のものである。また、10区V層出土の図23—114・115も同じく元禄年間のものである。今回の調査以前に、仙台城二の丸跡から出土した焼塩壷としては、第4地点（年報5）出土のものが1点あるのみである。これは第4地点II区の73・74区6a層出土のもので、年報5では、実測図が掲載されていないので、図68に示した。ロクロ整形で、回転糸切りの後に底部外周をヘラ削りでカットグラス状に面取りを施す。この焼塩壷の出土した6a層は、寛永15年(1638年)の二の丸造営に伴う大規模な整地層に覆われる層で、1638年以前であることが確実な資料である。

これら仙台城二の丸跡から出土した焼塩壷の中で主体を占めるものは、ロクロ整形で回転糸切り、コップ状の形態で、体部下半部に斜格子状のタタキ目を施すものである。第5地点出土の焼塩壷では、21点中13点がこのタイプのもので、62%を占める。この格子タタキ目の焼塩壷は、今のところ、その出土が仙台藩領内に限られ、他の地域に見られないことから、地元で生産された可能性が指摘されてきた(佐久間ほか1993)。図69に仙台藩領内でこれまでに報告された焼塩壷を示した。

仙台城三の丸跡の資料は、いずれも三の丸跡の変遷のI期の資料である（佐藤洋ほか1985)。三の丸跡I期は、三の丸が造営され米蔵が置かれる以前の時期と考えられている。三の丸造営は、二の丸造営と同じ寛永15年（1638年）に開始されており、これらの焼塩壷も寛永15年以前のものである。図69の1・2はロクロを使わないもので、その形態から畿内産か、その系譜を

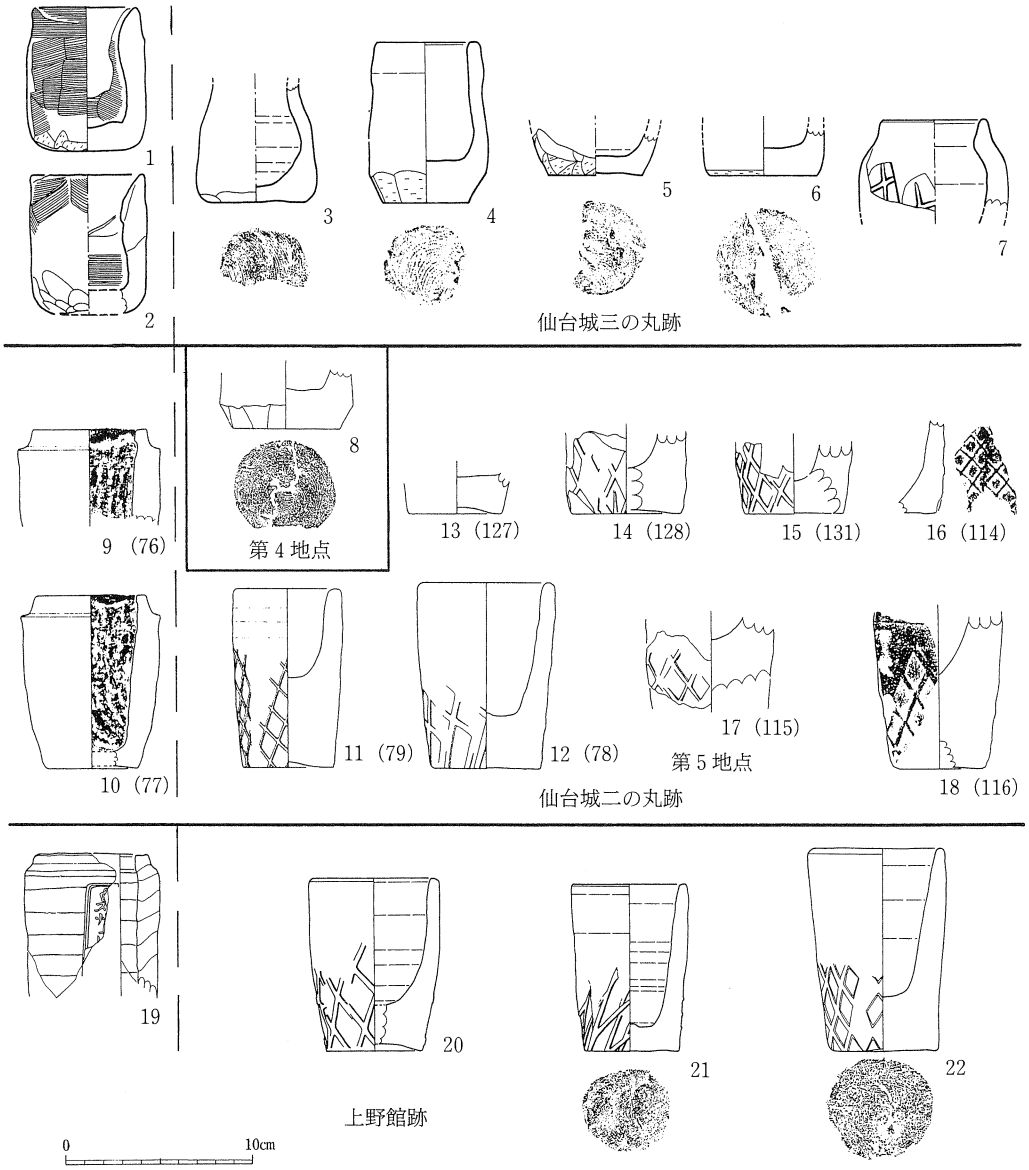


図69　仙台藩領内出土の焼塩壺

Fig. 69　Ceramic salt pots from the area of Sendai domain

引くものであろう。これ以外は、全てロクロ整形のものである。

上野館跡は、宮城県志田郡松山町千石に所在し、仙台藩の奉行・若老などの要職を努めた茂庭氏の居館である（佐久間ほか1993）。焼塩壷は20個体以上出土しているが、「泉州麻生」とみられる刻印をもつ印籠形の１点（図69―19）を除くと全て格子タタキ目を施すものである。20は17世紀末から18世紀代、21は17世紀代、22は17世紀末以降とされている層位・遺構から出土している。

仙台城二の丸跡第４地点と、仙台城三の丸跡からは、寛永15年（1638年）以前の資料が出土しているが、コップ状の形態で格子タタキ目を施すものは含まれていない。三の丸跡出土資料に、格子タタキ目を施すものが存在するが(図69―７)、形態が後のものとは大きく異なる。図69の破線より右側は、ロクロ整形の焼塩壷であるが、三の丸跡と二の丸第４地点の寛永15年以前の焼塩壷は、形態上では変異が大きい。しかし、格子タタキ目のあるもの以外は、ロクロ整形で底部回転糸切り、底部外周付近にヘラ削りを施す点で共通する。これらのロクロ整形のものは、地元で生産された焼塩壷である可能性が高い。

一方、この寛永15年以前の資料以外のものでは、畿内からの搬入品と考えられるもの以外は、図69の13の１点を除くと、全てコップ状格子タタキ目のものである。13は第５地点１区１層出土のもので、年代は明確でなく、また形態から焼塩壷の可能性を考えたが、確実では無いものである。このようなコップ状格子タタキ目の焼塩壷は、既に指摘されてきたように、仙台藩領内以外では出土しないことから、地元産と考えられ、ある時期以降、このタイプのものに統一されていくと考えられる。おそらく、三の丸例が変化して、コップ状格子タタキ目のものが成立するのであろう。したがって、17世紀前葉までは、様々な形態の、ロクロ整形の焼塩壷を作っていたのが、その後、ロクロ整形は同じであるが、コップ状格子タタキ目のものに統一されていくものと考えられる。第５地点の出土例から、少なくとも元禄年間には、コップ状格子タタキ目のものが確立していたことが判明する。上野館跡資料は、確実に年代が限定できるものではないが、さらにさかのぼる可能性も考えられる。

⑵　瓦質土器

瓦質土器は、出土量が少なく、大型の鉢類と考えられるものがほとんどである。この内、図66の95・86・96・92は、口径に比べて浅い体部に、三足が付くもので、火鉢と考えられる。口縁部の直下に縄目状の帯を貼り付けるものと、それがないものとに大別できる。元禄年間の資料中には、両者が含まれており、この時期には確実に併存することが判明する。これらの火鉢と考えられるものには、口縁部の形態に、細かな差異があるが、これが時期的な変化を示すのかどうかは、資料が少ないため明確にはできない。これらに対して94は、体部が深いもので、体部外面に火熱によるものと考えられる剝落があり、これも火鉢になる可能性が考えられる。

⑶　土製品・土人形

図70に示したのは、本体区出土資料で、年報６では報告漏れとなっていた資料であり、まず最初にこれらについて報告しておきたい。

137はＨ18区３号土坑埋３層（Ⅲａ期）出土で、菊花状の型押しがなされ、中央に孔があり、

孔の周囲が高くなる。138はH18区3号土坑埋3層（IIIa期）出土の土人形で、尾が巻いているところから犬であると考えられる。型作りで、左右別々に型で作られた後、合わせて作られたものと考えられる。139はG24区1号溝（IV期）出土の土人形である。猿の頭部で、首にあたる部分に剝落痕が残る。140はL20区7号溝埋2層（IV期）出土の土製品で、笠状のもので、型作りである。141もL20区7号溝埋2層（IV期）出土で、修験者の頭部を表していると思われる。型作りで、裏面は剝離の痕跡が明確でなく、もともとこれだけで完結し、泥面子になる可能性がある。これ以外に、猿の胴部と猪が、2a層から各1点出土している。

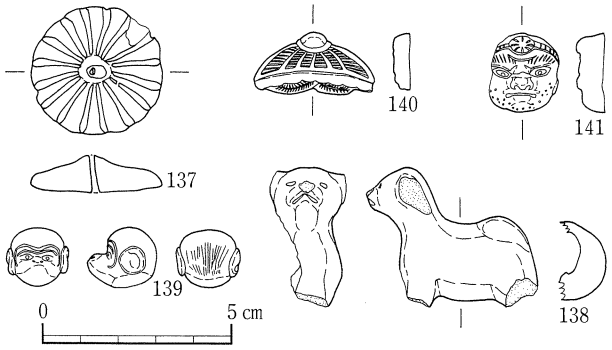


図70　二の丸跡第5地点出土土製品
Fig. 70　Clay objects from NM5

これらの資料を加えても、第5地点出土の土製品は、本体区14点、付帯施設・試掘部分4点の、合計18点にすぎず、極めて少ない。その内、二の丸期かそれ以前にさかのぼることが確実な資料は、4点である。ここで報告した3号土坑出土の2点以外には、碁石かと思われる円盤状の土製品が2c層から出土しているのと、棒状の瓦質の土製品がVII層から出土しているだけである。特に、玩具類と考えられるものがほとんど含まれないことは、城跡という遺跡の性格を反映しているものと考えられる。

≪引用・参考文献≫

江戸遺跡研究会編　1991　『江戸の食文化』　吉川弘文館

小川　望　1990　「刻印からみた焼塩壷の系統性について」『医学部附属病院地点』
東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3　pp.892～907

佐久間光平ほか　1993　『上野館跡』　宮城県文化財調査報告書第156集

佐藤洋ほか　1985　『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報』1

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報』3

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報』4・5

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報』6

中山　雅弘ほか　1992　『泉城跡』　いわき市埋蔵文化財調査報告第31冊

4. 瓦

仙台城に用いられた瓦については、三の丸跡の発掘調査である程度まとまった成果が報告されているが、二の丸関係ではこれまで資料の蓄積はあるものの、その変遷や特色を把握するにはいたっていない。第5地点は二の丸跡のなかでは最も広い面積を調査しており、瓦の出土量もかなりある。元禄年間に限定しうる整地層との関連で、整地層とその下層出土品は下限年代を限定できることから、17世紀代の様相をある程度把握できる。

ここではまず基礎的な作業として、軒瓦の瓦当文様について、特徴を把握し、層位的、型式学的検討を加えて、その変遷を検討してみることにしたい。

(1) 軒丸瓦類

① 文様の分類と特徴

モチーフの種類からすると巴文、伊達家の家紋、菊花文に大別される。

【巴文】

平坦な周縁部の中に巴文のみを配するものと、巴文と周縁の間に珠文をめぐらす連珠巴文がある。両者とも巴文の構成は三ツ巴で左巻きであり、その点では軒桟瓦の小巴部の場合も例外ない。後者の珠文の数は17個のものが確認できる。小巴では8個のものがある。

小巴を除くと瓦当直径は、計測可能なものはともに3点しかないが、巴文で16.0～17.5cm、連珠巴文で16.7～17.2cmであり、17cm前後に集中する。巴の巻き込みと長さは、巴文のみの場合のほうがきつく長い。

【伊達家家紋】

三引両文と、平坦な周縁部の中に九曜文を配するものが認められる。九曜文は鳥伏間に用いられたものが2点確認される。桟瓦の小巴にこれらが用いられた例は確認されなかった。

瓦当直径は、三引両文では計測可能な11点のうち10点が14.1～15.2cmの間に含まれ(平均14.7cm)、残りの1点は17.7cmで、約1寸違いの2種類の大きさがある。九曜文では計測可能な4点は17.0～17.2cmでよくまとまっており、1種類である。

【菊花文】

この類の場合、直径12cm程度の菊丸瓦に用いられている。周縁部の区別がなく、文様の表現方法に、輪郭を突出させるものと全体を立体的に表現するものの2タイプがある。

② 層位別出土状況

出土点数では、三引両文が45点で最も多く、連珠巴文と九曜文が33点と32点でほぼ同量、巴文が19点、菊文が2点で最も少ない。巴文としたものの中には連珠巴文の珠文を欠損したものも含まれているとみられるので、巴文はさらに少なかった可能性が高い。

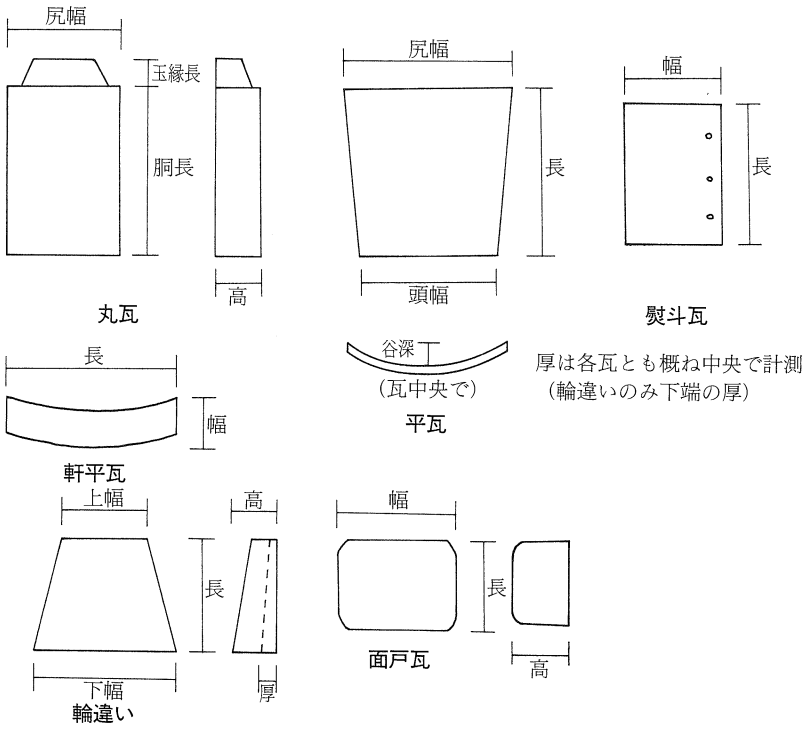


図71　瓦の計測部位

Fig. 71　Points of measurement on roof tiles

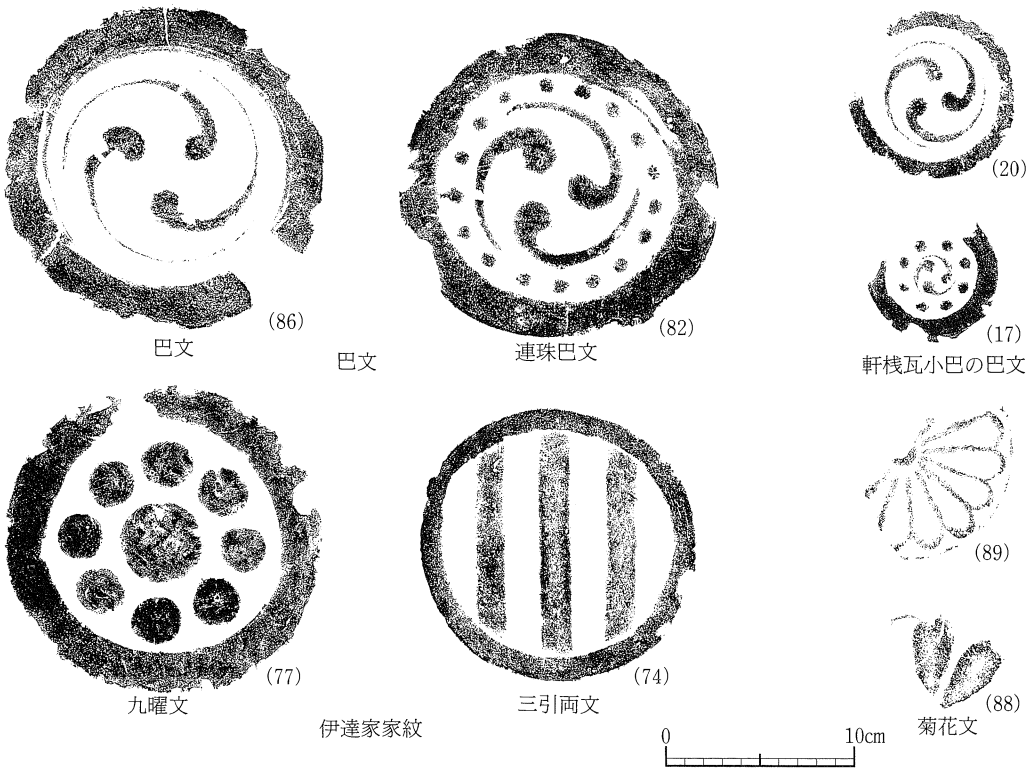


図72　二の丸跡第5地点出土軒丸瓦類・軒桟瓦小巴の瓦当文様

Fig. 72　Designs of round eaves tile end pieces from NM5

巴文系・家紋系のいずれのものも、⑧層から２ａ層まで各層から出土があり、元禄期をさかのぼるⅠ期から存在していることが確かめられるのみで、各類が排他的に入れ替わっている様相は捉えられない。

菊花文については資料自体が少ないが、元禄年間以前の層からのみ出土している。

③　文様構成と形態

文様種類の構成についてみると、いずれもこれまでの仙台城調査例で知られていたもので、二の丸跡ではこのほかに第７地点で桐文の出土がみられる（年報４、４区溝埋土１層）が１点のみでごく少量であり、二・三の丸で主体を成すのはここにあげた５種類であったとみられる。細かくみると三の丸資料のほうが巴文の細部形態に多様性がある。

丸瓦部を含めた全体が判明するのは瓦当文様が不明のものしかない。家紋系文様との対応がわかるものは第７地点の出土品にあるのでそれを参考にすると、三引両文（直径16.8cm）・九曜文（直径16.6cm）とも第５地点出土丸瓦の平均的なものよりはかなり胴長が長く、いずれも釘穴を玉縁よりに２ケ所有している。完形の丸瓦を観察する限りでは、釘穴は１個もないか１個のみであることから、軒丸瓦の場合のみ２ケ所に必要であったと考えられる（軒丸瓦の丸瓦部すべてに２ケ所の釘穴があるわけではない）。とすれば年報６の図77―12は軒丸瓦である可能性が高い。三の丸で報告されているものにも九曜文で同様のものがある。

巴文では全体をうかがい知れるものはいまのところ皆無である。三の丸跡資料では上記の家紋系とは異なって釘穴１ケ所でやや短いもののようである。

九曜文を鳥伏間に用いた例が２点確認されるが、第７地点では三引両文が鳥伏間に用いられた例がある。

瓦当直径は、九曜文に17cm前後の１種類しかなく、三引両文では15cm弱のものが圧倒的に多いといえるが、第７地点では三引両文で17cm近いものが多く、九曜文にも小さいものが確認されている（年報５）。第３地点の例（年報１図69―4）も九曜文で直径15cm程度のものである。また三の丸跡資料では、三引両文の瓦当直径は14.5～16.6cm、九曜文では13～20cmまで幅広い。瓦当直径は屋根全体のデザインおよび組み合う平・丸瓦の大きさと密接に関わり、従って個別の建物に応じてそれにふさわしいものが選ばれていると考えられる。またそれが時期差であることもありうる。遺跡ごと、地点ごとに同じ文様でも異なる大きさが認められるのは、同時期であれば建物の型式・規模の違いを表すものであろう。二の丸跡出土例では、瓦当直径で家紋両者に同様に２種類のサイズが存在することをここでは確認しておきたい。

⑵　軒平瓦類

①　文様の分類と特徴

桟瓦の垂れ部を含めた軒平瓦類の瓦当文様は、均整唐草文の範疇で捉えられるもので、中心飾りと唐草の部分にそれぞれ細かな違いがある。中心飾りはモチーフで大別すると、笹文、花文、家紋の３種類があり、唐草文には先端の形状と構成から大別して５種類が認められる。

【中心飾り】

笹文は三枚の葉が左右対称に配されるもので、雪が積もっている様を表現しているとみられる付加文様を上部にもつ雪持笹とそれのない三枚笹とがあり、前者は葉の細いものと太いものに区別される。

花文には五弁のものに梅文、桔梗文があり、後者は花弁の形態により細桔梗文、剣形桔梗文、三日月形の付加文様をもつ特殊桔梗文がある。四弁のものは特定の名称を与えられないが、先端の尖ったふくらみのある花弁のものである。これらのうち梅文については中心の蘂の表現がみられるが、その他にはない。

家紋で確認されているのは三引両文のみである。

【唐草文】

唐草１類は、３回反転するもので先端の突出がａ明確なもの、ｂ不明確なものが認められ、ａはともかくｂについてはもはや唐草文と呼ぶことを躊躇してしまうほど変形したものである。

唐草２類は２回反転するもので、ａ先端に明確なくびれがあって巴文の頭のように円形になるもの、ｂ先端が明確に区別されないもの、が認められる。

唐草３類は各葉が独立しているもので、３ａ・３ｂ・３ｄ類は２葉で中心よりが上向き、外側が下向きに巻いているもの、３ｃ類は１葉のみで上向きの巻きのものである。

唐草４類は周縁部の２葉が確認されるのみで全体は不明。

唐草５類は３回反転する唐草文が細い突線で表現されるものである。

【中心飾りと唐草文の組合せ】

本体区報告で確認した10種類がある。

Ａ　三枚笹文＋唐草１類

Ｂ　雪持笹文＋唐草２類

　Ｂ１　雪持笹文（細葉）＋唐草２類（ａ）

　Ｂ２　雪持笹文（太葉）＋唐草２類（ｂ）

Ｃ　梅文＋唐草３ａ類

Ｄ　桔梗文＋唐草３類

　Ｄ１　剣形桔梗文＋唐草３ｂ類

　Ｄ２　細桔梗文＋唐草３ｂ類

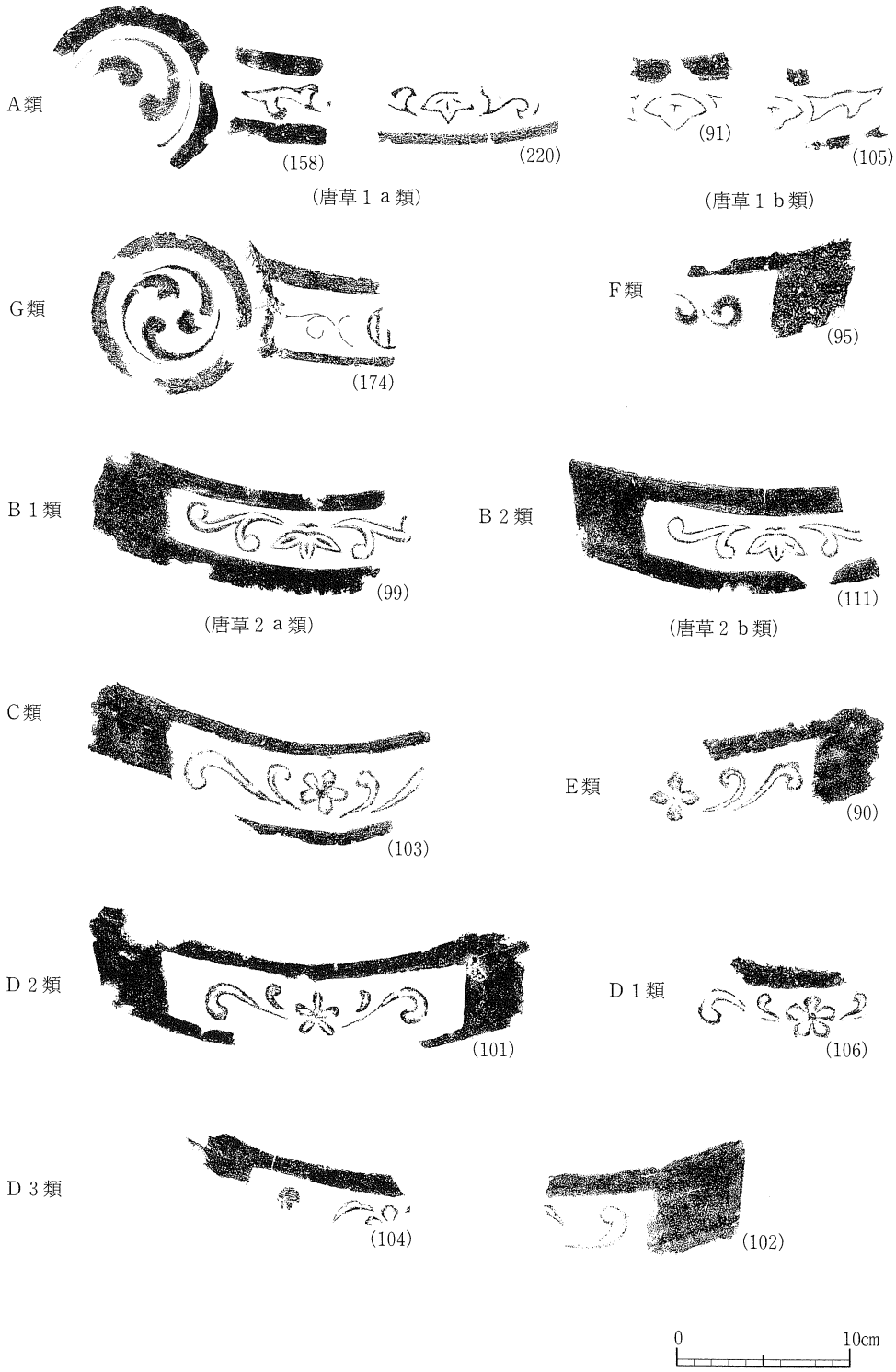


図73　二の丸跡第５地点出土軒平瓦類・軒桟瓦垂れの瓦当文様
Fig. 73　Designs of flat eaves tile end pieces from NM5

Ｄ３　特殊桔梗文＋唐草３ｃ類

Ｅ　四弁花＋唐草３ｄ類

Ｆ　？＋唐草４類

Ｇ　三引両文＋唐草５類

これらのうち、中心飾りが不明であったＧ類は、三引両文＋唐草５類という組み合せであることが今回報告の資料により明らかになった。

Ｂ類では唐草２ａと２ｂが雪持笹の細葉と太葉に対応する。

②　形態と文様の相関

瓦当はいずれも下辺を垂下させたりしない一般的な形態のもので、計測できるものは垂れ長5.3～6.2cmのものである。

Ａ・Ｇ類は桟瓦の垂れ部分に用いられていたことが確実である。また、二の丸跡第４地点42区ピット10では、Ａ類とＢ１類が、細長い板状の桟のつく塀桟瓦の一種とみられるものに用いられている。

③　層位別出土状況

Ａ～Ｇ各類の層位別出土状況では、Ａ・Ｇ類が二の丸廃絶後（Ⅳ期）の層からのみ出土している。Ｂ～Ｆ類では、Ｅ類が帰属層不明な他は、いずれも元禄盛土以下からの出土が確認されるが、これらがどのように変遷するのか出土層位からは明らかにできない。

④　文様の系譜と変遷

Ａ類に用いられる唐草１類と組み合う中心飾りとしては、二の丸跡第４地点（三引両文・星文？）（年報５）（註１）、志田郡松山町上野館跡（剣花菱）（佐久間ほか1993）の出土例から、必ずしも三枚笹文ばかりではないことが明らかである。

唐草文としては変形の著しい１類は、３回の反転とその方向からみて５類を祖型とすると考えられる。５類の外側を包むように輪郭をたどれば１類を描くことができるのである。

ともにⅣ期の遺構と堆積層からのみ出土することから近い時期の存在が想定され、桟瓦の垂れ部文様に採用されていて、他類では組み合うことのない三引両と組み合うことなど共通点が多いことから、５類をもとに１類が考案されたというような経緯を想定することが可能である。

Ａ・Ｂ類に共通する笹文についてみると、細葉雪持笹、太葉雪持笹、三枚笹の順に笹の形が実物とはかけ離れたものになり、三枚笹では雪の表現もなくなる。また、雪持笹に組み合う唐草文の２ａと２ｂでは後者のほうがやや退化したものとみなすこともできる。Ｂ類は元禄以前の層から出土があるので18世紀初頭以前に出現していることが明らかである。またＢ１類は茂庭氏の居館である松山町上野館跡から明和四年（1767年）銘刻印をもつものが出土しており、18世紀中葉にも製作されていたことが確認できる。三枚笹は唐草１類とのみ組み合い、二の丸

では最も新しい部類のものである。

上記の点から、A・B・G類については、唐草文からG→Aの変遷、笹文からB１→B２→Aという変遷をたどることができる。唐草２類および５類の祖型についてはいまのところ特定のものを指摘できないが、他類のいずれとも関連が薄いと考えられ、独立して導入されたものかもしれない。

中心飾りに花文をもつC・D・E類は、D３類をのぞけば花の種類や細部が異なるだけでよく似たものである。D１類が陸奥国分寺跡で１点出土しており薬師堂に用いられた可能性も考えられている。(青沼ほか1984)この類が薬師堂創建の17世紀初頭に存在していたとすれば、二の丸地区に用いられたもののなかでは最も古く位置づけることが可能な例となる。変化した文様がみあたらないことや、桟瓦に用いられたものが確認されていないことも、これらが比較的古い時代を中心として用いられ、その後の造瓦の際の瓦当文様として採用されにくい状況にあったことを示していると考えられる。F類は文様全体が明確でないため検討できない。

以上検討してきたなかで、A・B・G類とC・D・E類とではそのあり方に種々の面で差が認められる。このうち層位的に江戸時代中の製作使用が確実なのはB・C・D類で、いずれも元禄年間以前に出現している。B類とC・D類の間に型式的連続は認め難く、異なる系譜のもとに各々生み出された可能性がある。

以上、文様の系譜と桟瓦での使用の有無、層位的知見から、C・D（・E）類→B類→G類→A類というおおまかな変遷が想定される。

（註１）第４地点出土の星文？（年報５　図73―４）としたものは、報告では星であって鎮台との関連が想定されるものとしていたが、輪郭に丸みをもっている点から陸軍関係に用いられた星とはやや異なっているともいえ、五弁の花文を簡略に描いたものの可能性も捨てきれない。したがってここでは星文と断定しないでおきたい。

≪引用・参考文献≫

青沼一民ほか　1984　『史跡陸奥国分寺跡昭和58年度環境整備予備調査概報』
仙台市文化財調査報告書第63集

佐久間光平ほか　1993　『上野館跡』宮城県文化財調査報告書第156集

佐藤洋ほか　1985　『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報』１

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報』３

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報』４・５

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報』６

5. まとめ

最後に、二の丸跡第5地点の調査成果について、簡単にまとめておきたい。

(1) 検出遺構

① 第5地点の検出遺構は、層位的な検討から、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期に大別される。Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期は、それぞれａ・ｂの、新古2段階に細別され、合計7段階に分けられた。

② Ⅰａ期は、仙台藩初代藩主伊達政宗の長女五郎八姫が、元和6年（1620年）に帰仙した際に造営された西屋敷にあたる。五郎八姫の死去する寛文元年（1661年）まではⅠａ期が続くと考えられる。西屋敷の範囲を推定復元した結果、調査地点は、西屋敷の中でも奥よりの部分に相当し、礎石建物と池を配した庭園が検出されている。

③ Ⅰｂ期は、五郎八姫の死去した寛文元年（1661年）以降、二の丸の改造が行われる元禄年間までの間に限定できる。Ⅰａ期と同様に、池を造成している他、礎石建物と掘立柱建物などが検出されている。

④ Ⅱ期は、二の丸が改造され、中奥が北側に拡張される、元禄年間に相当する。Ⅰｂ期の遺構は、廃棄物層や整地層によって埋められ、この廃棄物層からは元禄4年の紀年のある、荷札木簡が出土している。これらの層の上面にあたるⅡａ期は、遺構密度が低く、存続期間は短かったものと考えられる。

⑤ Ⅱｂ期は、Ⅱａ期の遺構面に盛り土を行い形成され、畑の畝状遺構が展開する。このⅡｂ期の遺構面に、さらに大規模な整地を行い、Ⅲ期の二の丸期の地表面が形成される。

⑥ Ⅲ期は整地層をはさんで、Ⅲａ期とⅢｂ期に細分されるが、両期を通じて、ほぼ同じ場所に、同様の遺構が検出されており、調査区全体で造り替えが行われている。その時期は、出土遺物から見て、18世紀後葉以降であるが、細かな年代は確定できなかった。

⑦ Ⅲ期の遺構は、絵図との対比から、中奥の北辺とそれに伴う門の周辺から、北側の中奥馬場・屏風蔵などを経て、二の丸北側の堀にいたる部分に相当すると考えられる。門の東側で検出された多数の掘立柱柱穴は、絵図との対比から「腰掛」に相当すると考えられ、北辺の塀とともに、何回も建て替えられていることが判明した。また、これまでに検出されていた二の丸期の建物跡の、絵図との対比を再検討し、新たな対比案を示した。

⑧ Ⅳ期は、明治以降の層位で検出された遺構と、検出層位が不明でも出土遺物から明治以降に下る遺構を一括したため、さらに細かく時期が分かれる可能性がある。二の丸期とは、土地利用のあり方が大きく変化している。

(2) 出土遺物

① 元禄年間の整地層を中心に、多種・多量の遺物が出土したが、元禄年間より前の時期の遺

物は少ない。

② 陶磁器は、元禄年間の整地層・遺構、18世紀前葉の３号土坑、19世紀前～中葉の１・２号土坑から、良好な一括資料が出土している。これらをもとに、大堀相馬と周辺の産地の陶器を検討し、大堀相馬の生産が17世紀末にさかのぼることを指摘した。また、消費地遺跡出土資料をもとに、大堀相馬製品の編年案を呈示した。

③ 土師質土器は、皿が圧倒的多数を占める。瓦質土器は出土量が少ない。一括資料を中心に検討したところ、土師質土器皿には大・中・小の作り分けがあると考えられた。焼塩壷については、地元産と考えられる、コップ状格子タタキ目を施すものがその多数を占める。

④ 瓦は、各時期の資料が多量に出土している。以前の調査で出土した資料も含めて、軒丸瓦・軒平瓦の瓦当文様を中心に文様の変遷の整理を試みた。

⑤ 木製品・漆塗製品は、元禄年間の層を中心に多く出土している。二の丸跡の調査では、まとまった資料としては、初めての例である。木簡も出土しており、元禄年間の紀年銘を持つものもある。木製品には、櫛、箸、下駄などがあり、漆塗製品としては漆椀などがある。

⑥ 金属製品には、古銭・煙管などがある。

⑦ その他の遺物としては、石器、温石、火打ち石、鼈甲製の簪などがある。ガラス製品・革製品は全て明治以降のものであった。

第Ⅳ章　二の丸北方武家屋敷跡第５地点（ＢＫ５）の調査

１．調査経緯

東北大学の旧教養部構内（川内北地区）は、仙台城二の丸の北側にあたり、堀・沢をはさんで、武家屋敷が置かれていた区域にあたる。仙台城下では、比較的上級の藩士の屋敷が置かれていた。この地域では、これまでに２次の試掘調査（ＢＫ１・ＢＫ４）を行っており、江戸時代の遺構が遺存していることが確認されている（図３）。なお、２次・３次調査（ＢＫ２・ＢＫ３）は立会調査のため、欠番としている。

今回の調査は、既設の学生実験棟に昇降機（エレベーター）を取り設けるのに伴う調査である。1986年度に調査を行い、二の丸北側の堀が検出された、二の丸跡第８次調査地点の約100m北側にあたる（図３・74）。工事に先だって重機を用いて試掘を行ったところ、遺構の存在が確認されたため、調査区内の電話線の移設工事後、調査を実施した。

２．層序（図75）

調査区の北端には、実験棟建設に伴うと考えられる撹乱があり、南端にも大きな撹乱があるが、地山より上で３枚の層が確認された。３層上面から、コンクリートなどを含む、米軍によるものと考えられる撹乱が掘り込まれており、１・２層は米軍もしくは大学による盛土である。３層は、調査区の全面には分布しないが、小礫を多く含む層の状況は、明治以降の第二師団期のものに類例が認められることから、第二師団期である可能性が考えられる。

３．検出遺構（図75）

【１号溝】

東西方向にのびる溝で、地山に掘り込まれている。北側の肩が検出されているが、南側は調査区から外れる。そのため、幅は不明であるが、上端で3.3m以上、深さ0.7mである。北岸は弧状にカーブし、上端は半円に近い平面形を呈する。北岸の斜面は、２～４段の小さな段が付く。埋土は砂礫を主体とし、細かい葉理が観察されることから、埋没過程で水流があったものと判断される。礫は、大きいもので10cmを越えるものも含まれており、水流はかなり速かったものと考えられる。底面のレベルは、東端が西端より約30cm低く、水流の方向は西から東の方向と推定される。遺物は、全く出土しなかった。

【２号溝】

調査区の東壁で確認された、１号溝に切られる溝である。調査区南側の撹乱を重機で掘り上げた際に、東南隅のこの溝が残存していた部分も破壊してしまったため、壁面のみでの確認で

あり、のびる方向などは不明である。一部にオーバーハングする部分がある。埋土は、１号溝と同様に砂礫を主体とする。埋土２層から、平瓦の小片が１点出土したが、作業中に紛失し、その特徴などは不明である。

4. まとめ

今回検出された１号・２号溝からは、時期を推定できる遺物が出土していないが、第二師団期の可能性がある３層より下にあること、地山に掘り込まれていること、特に新しい遺物が見られないことから、積極的な根拠は無いが、江戸時代の遺構と考えられる。調査範囲が狭いため、遺構の性格は特定できない。今回の調査では、旧教養部構内の建物にごく近接した地域においても、江戸時代の遺構が良好に残っている可能性が高いことが確認された。今後、旧教養部構内についても、慎重に調査を進め、絵図との対比や、武家屋敷の様相を明らかにしていくことが求められる。

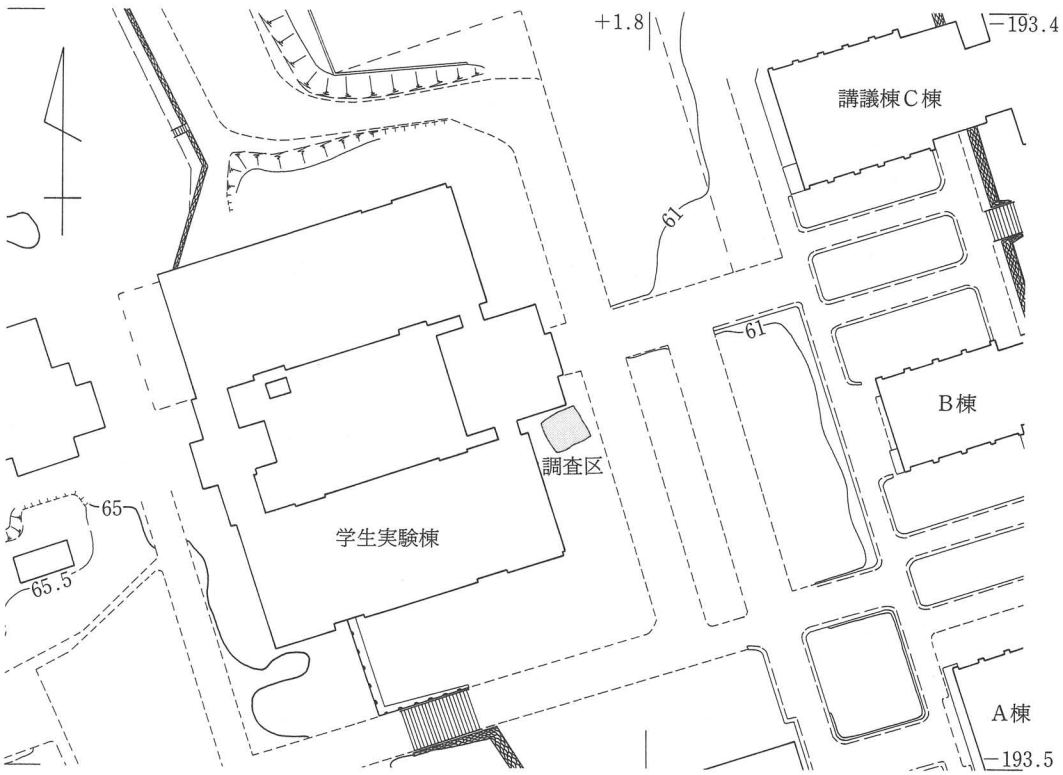
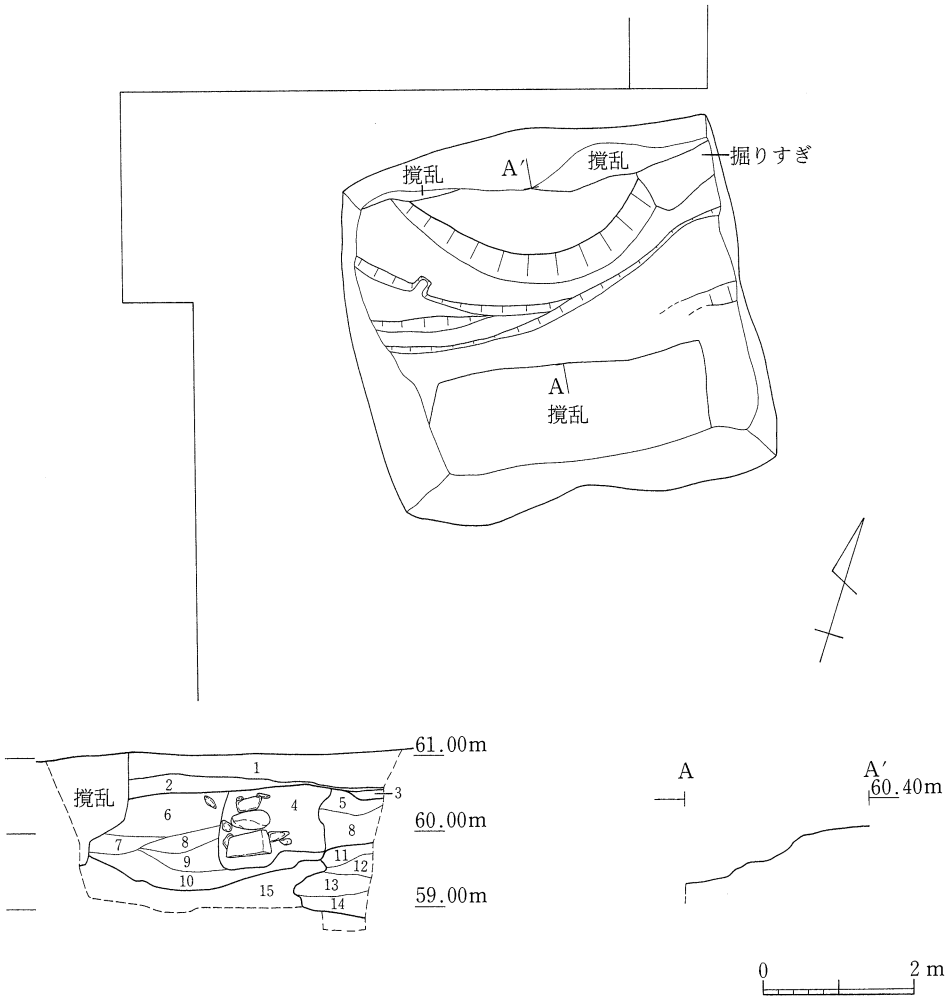


図74　武家屋敷跡第５地点調査区の位置
Fig. 74　Location of BK5
BK5 i. e. Location 5 of *samurai* residence



1　基本層１層　10YR6/5　にぶい黄橙色シルト　砂利を多量含む盛土
2　基本層２層　10YR2/1　黒色シルト　砂利・瓦を多量含む盛土
3　基本層３層　10YR4/6　褐色シルト　小礫多量含む
4　米軍？溝埋土　石とコンクリートを多量に含み粘土・黒色土が乱雑に入る
5　１号溝埋１層　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト
6　１号溝埋２層　10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂　砂と小礫・酸化鉄が細かい縞状に入る
7　１号溝埋３層　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土と砂・礫が乱雑に堆積
8　１号溝埋４層　7.5YR5/6明褐色粗砂　小礫を少量含み細かい葉理が見られる
9　１号溝埋５層　7.5YR5/6明褐色粗砂　礫を多量含む
10　１号溝埋６層　10YR5/4　にぶい黄橙色粗砂　礫を多量含む　底面にマンガン斑沈着
11　２号溝埋１層　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土　粗砂のブロック・礫を少量含む
12　２号溝埋２層　10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂　礫を含む
13　２号溝埋３層　10YR6/1　褐灰色砂と10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルトが混じる　礫を含む
14　２号溝埋４層　10YR5/1　褐灰色粗砂　礫を多量含む
15　地　山　10YR6/4　にぶい黄橙色粘土　酸化鉄斑・マンガン斑がしもふり状に入る

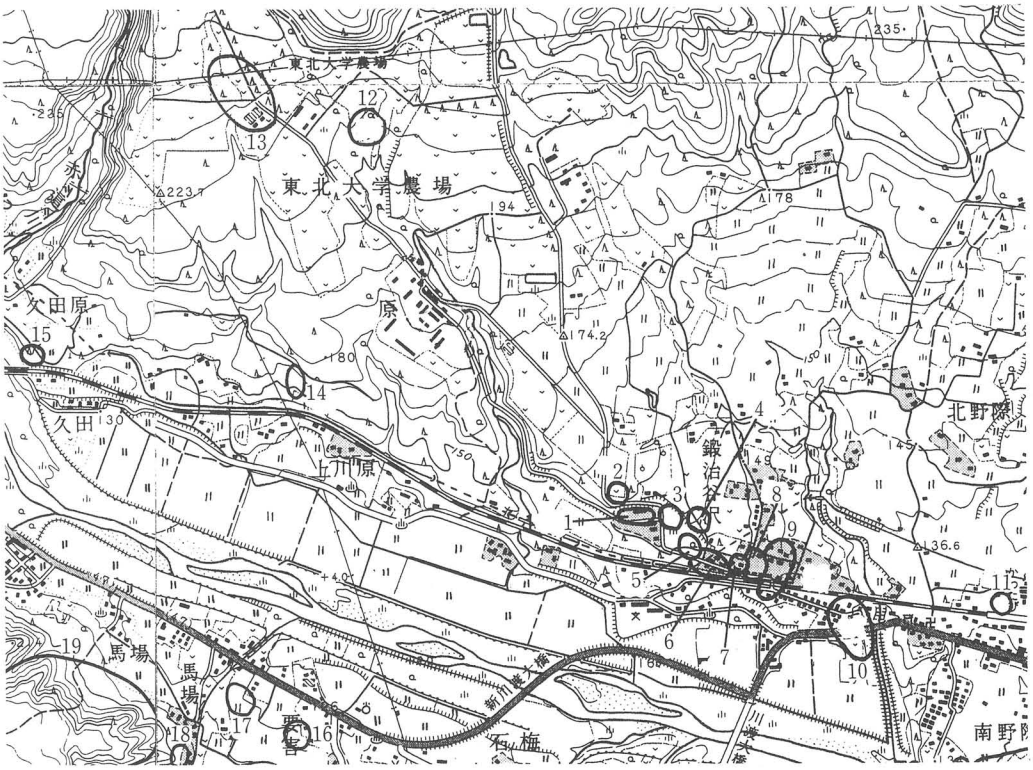
図75　武家屋敷跡第５地点平面図・断面図

Fig. 75　Plan and cross section at BK5

第Ⅴ章　川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）の調査

1.　調査経緯

東北大学農学部附属農場は、ＪＲ陸羽東線川渡駅の西北、荒尾川の北岸の高地一帯に所在し（北山地区）、一部は荒尾川の南岸の丘陵地帯にも所在している（向山地区）。北山地区1,639ha、向山地区576haの、合計2,215haという広大な面積を占めている。農場本館などの各種施設や耕作地域は、北山地区の南端に所在し、北側の高地には各種自然林・人工林、自然・人工草地、放牧地区などがある。この北山地区の南端の、農場入口を入った所には、職員宿舎や宿泊施設



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	町西遺跡	包含地	弥生	11	中女寺跡	寺院跡	近世
2	東北大農場 ２、３号畑遺跡	包含地	縄文	12	丸森遺跡	包含地	縄文
				13	上川原遺跡	包含地	縄文晩、弥生
3	町Ａ遺跡	包含地	縄文後、古代	14	大室院跡	寺院跡	近世
4	町Ｂ遺跡	包含地	縄文後	15	久田遺跡	包含地	縄文
5	修験院善教坊跡	寺院跡	近世	16	石の梅古墳	前方後円墳？	古墳
6	鍛冶谷沢町宿駅跡	宿駅跡	近世				
7	鍛冶谷沢町験断跡	験断跡	近世	17	住吉神社跡	神社跡	中世
8・9	町Ｃ遺跡	包含地	縄文、古代	18	行蔵院跡	寺院跡	近世
10	観音館跡	城館	中世	19	大西館跡	城館	中世

図76　町西遺跡の位置と周辺の遺跡

Fig. 76　Machi-nishi site (KW1) and other archaeological sites around KW1

が置かれている。この内の宿泊施設が老朽化したため、既存施設の隣に、新たに施設を建築することとなった。町A遺跡などに隣接する場所であり、遺跡の範囲がここまでのびてくる可能性も考えられたため、試掘調査を実施し、遺構・遺物の有無を確認することとなった（図76・77)。1988年の6月17･18日に試掘調査を行ったところ、クロボク土中から、弥生土器が出土したため、本調査を行うことが必要となった。当初、1988年度中に本調査を行う予定であったが、図書館増築に伴う調査が終了せず、年度中の本調査が不可能な事態となってしまった。そのため施設部と協議し、削平もしくは盛土の厚い区域に建設位置を移動することになり、10月27日に重機を用いて、当初の予定地の周辺3ケ所で、地層の状況を確認するための試掘を行った。しかし、いずれの場所においても、クロボク土が残っており、調査が必要な状況であった。結局、建設位置は当初予定されていた場所になり、本調査は翌1989年度に延期することとなった。

本調査は1989年の5月8日から23日に行った。予定された建物範囲と排水施設の位置に調査区を設け、4mグリッドを設定した。1・2層は重機で排除し、3層から手掘りで精査した。H－10区の一部を除いて、ローム層（6層）の上面まで精査を行い、さらに旧石器の有無を確認するために8ケ所で深掘り調査区を設けて、礫層（8層）まで調査したが、旧石器は発見されなかった（図78)。

2. 層序

調査地は荒尾川北側の河岸段丘上に立地し、基底の礫層を含めて、8枚の層序を確認した(図78)。1層･2層は表土層および、近代以降の盛り土層である。3層も、近代以降の陶磁器を含むことから、1・2層の盛り土以前の旧表土層の可能性が考えられる。4層が、プライマリーな状態を保った、クロボク土層である。5層がクロボク土からローム層への漸移層、6・7層がローム層、8層が礫層である。

3. 検出遺構

溝跡1条、ピット10基が検出された。

【1号溝】(図79)

H－10区で確認された。4層上面で確認したが、壁面の検討では3層上面から掘り込まれていることから、近代以降のものである。ほぼ東西方向で、東で3°ほど南へふれている。北側が調査区外にかかるが、幅85cm、深さ35cm程である。堆積土は自然堆積と考えられ、黒褐色土と砂が互層をなしている。近世以降と考えられる、磁器碗の口縁部小破片が1点出土している。

【ピット1】(図79)

F－12区で検出されたもので、5層上面から掘り込まれている。西側が調査区外へのびるが、

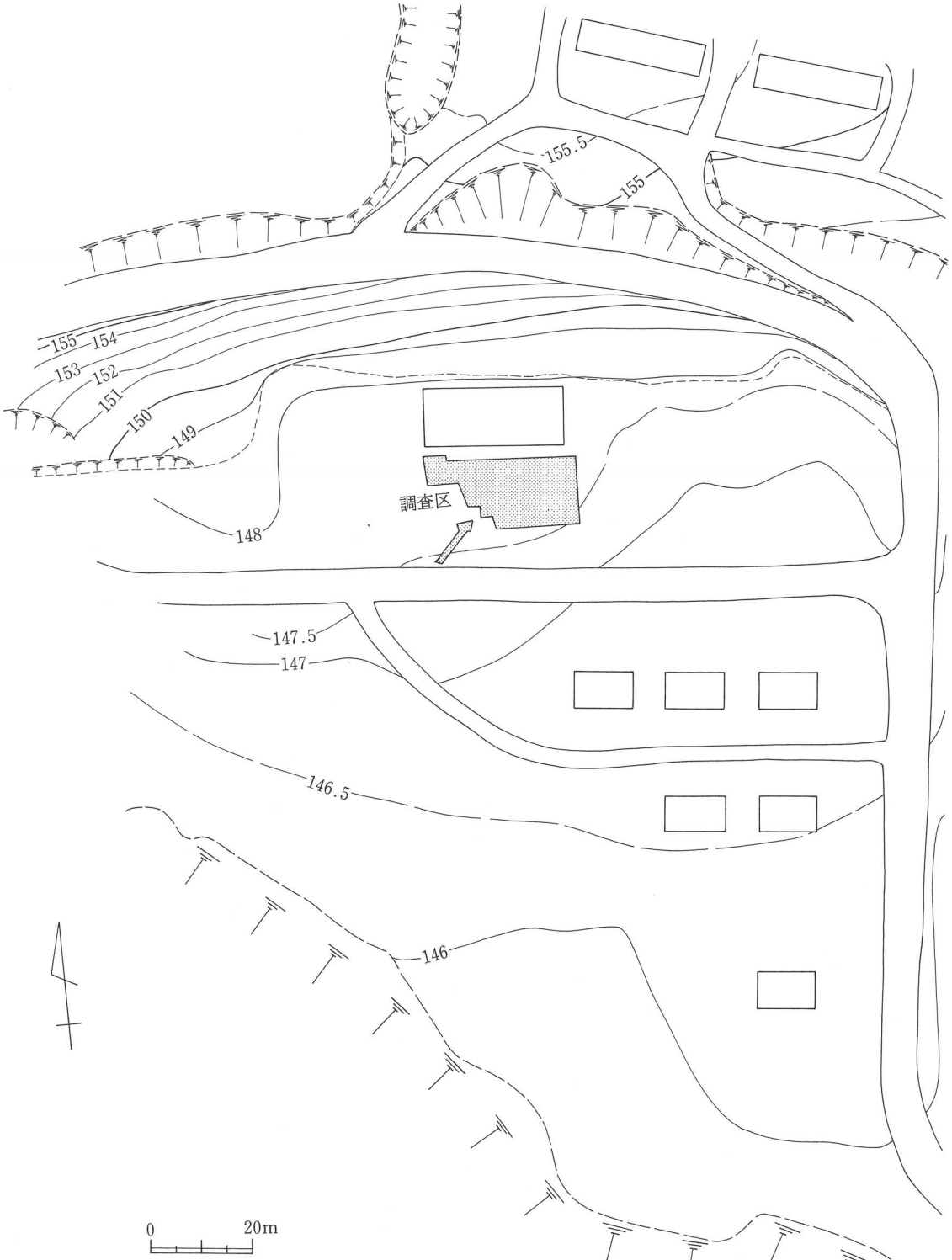
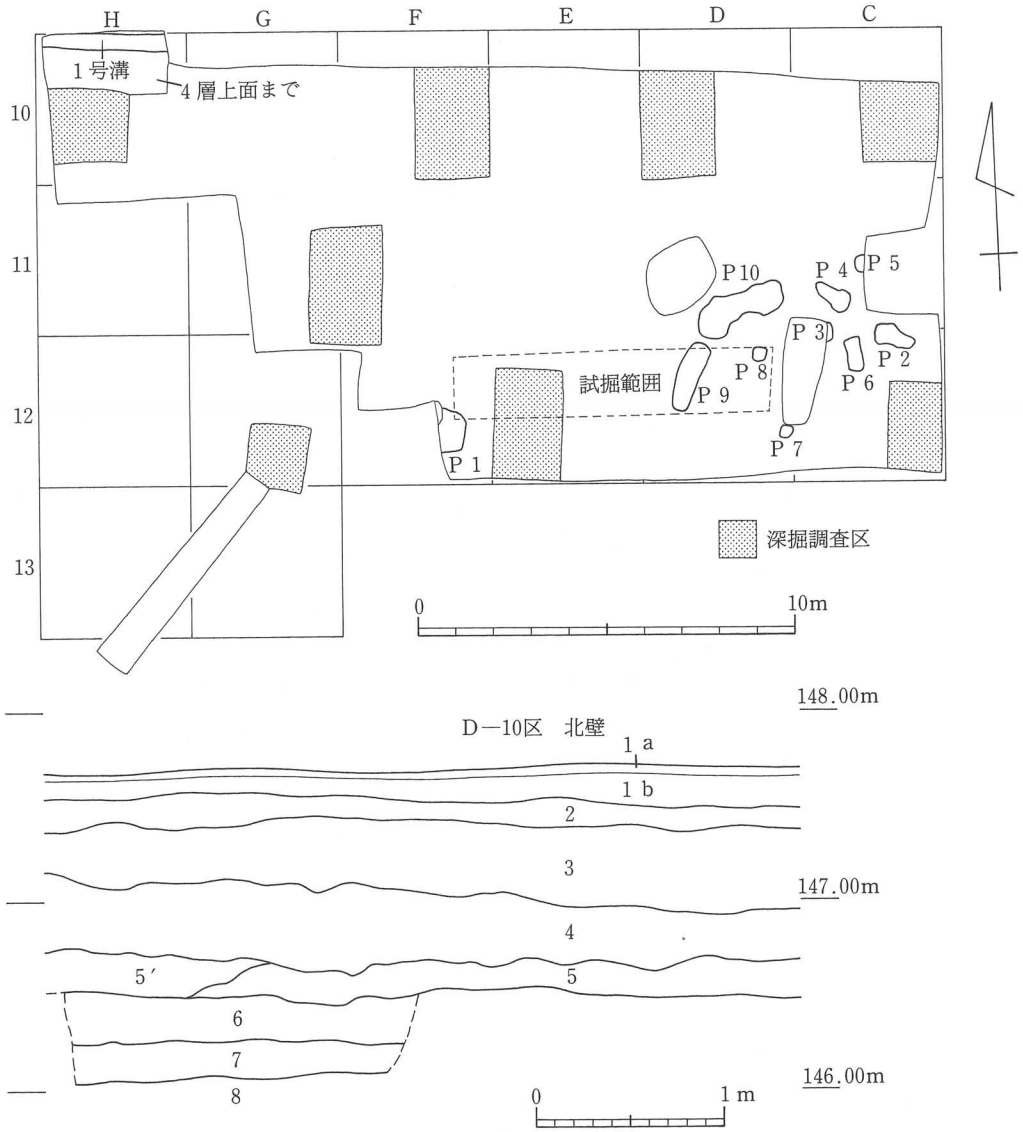


図77　町西遺跡第１地点調査区の位置

Fig. 77　Location of KW1



1 a 層　10YR3/2　黒褐色シルト　砂礫を多量に含む現表土
1 b 層　10YR4/3　にぶい黄褐色砂礫と黒褐色シルトの盛土
2 層　10YR2/3　黒褐色シルト　礫含む
3 層　7.5YR3/1黒褐色シルト　近代以降の陶磁器を含む
4 層　7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト　しまりのないクロボク土
5′層　砂礫（1～5㎝）層　上部は暗褐色シルト下部は黄褐色シルトが混ざる
5 層　10YR3/3　暗褐色シルト　漸移層
6 層　10YR5/6　黄褐色砂質シルト
7 層　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　部分的に砂質
8 層　礫層　円礫（5～10㎝）とにぶい黄褐色砂質シルトが混ざる

図78　町西遺跡第1地点調査区全体図・基本層序断面図

Fig. 78　Plan and cross section of KW1

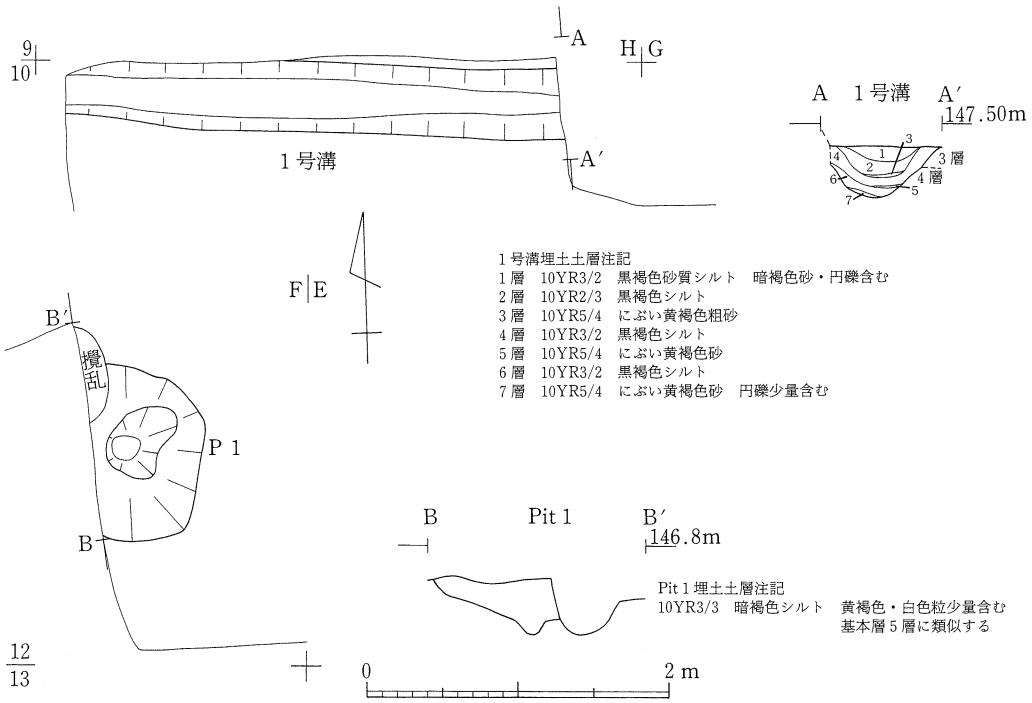


図79 町西遺跡第1地点1号溝・ピット1実測図

Fig. 79 Plans and cross sections of ditch no. 1 and pit no. 1 at KW1

南北1.2mの隅丸方形で、深さは40cmである。遺物は出土していない。

【ピット2～10】(図80)

C・D—12・13区において、ピットが9基かたまって発見された。確認は6層上面で、ピット4・6・9・10が弧状に並んでいることから、竪穴住居の周溝でないかとも考えられたが、その後の検討で、可能性は少ないと判断される。

試掘調査区の北壁の断面では、ちょうどピット9のところで、4層上面から掘り込まれた遺構が確認されており、これがピット9に対応するものと考えられる。その場合ピット9の深さは50cm以上になり、これが竪穴住居の周溝の一部になる可能性は考えられない。同様に、ピット8も試掘の北壁にかかる位置にあるが、これは断面には現れていない。試掘では5層上面まで調査しており、ピット8は5層あるいは6層上面から掘り込まれていることになるが、試掘区北壁との位置関係が微妙なところなので、断面にかかっていなかったのかもしれず、確実ではない。したがって、この区域でかたまって検出された、9基のピットについては、それぞれの時間的関係は不明とせざるを得なく、その性格も不明である。また、4層出土として試掘調査時に取り上げられた遺物についても、その時点では4層上面から掘り込まれたピットを確認できていないので、このようなピットの埋土から出土した可能性が否定しきれない。そのため、

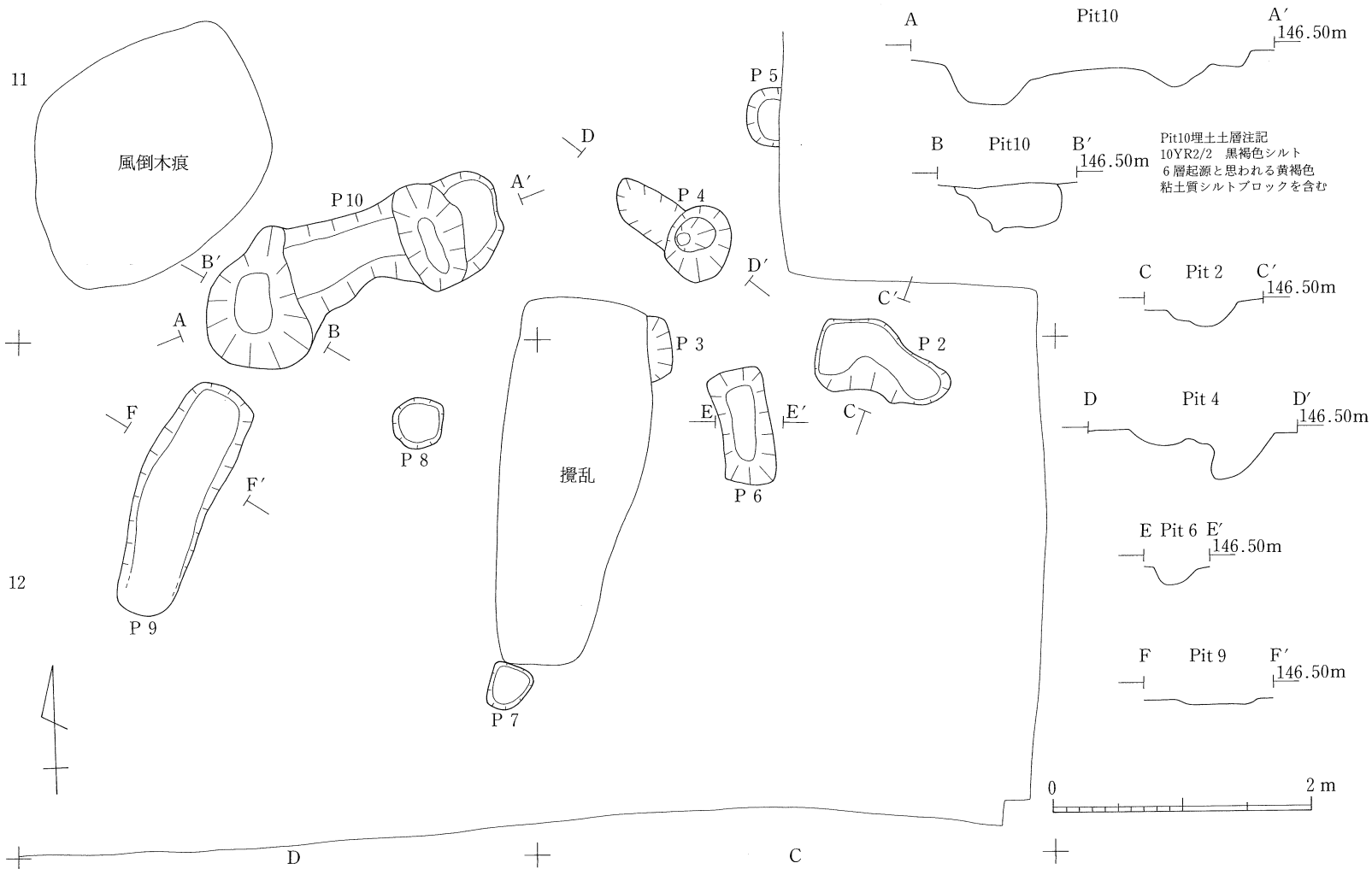


図80　町西遺跡第１地点ピット２～10実測図

Fig. 80　Plans and cross sections of pit no. 2-10 at KW1

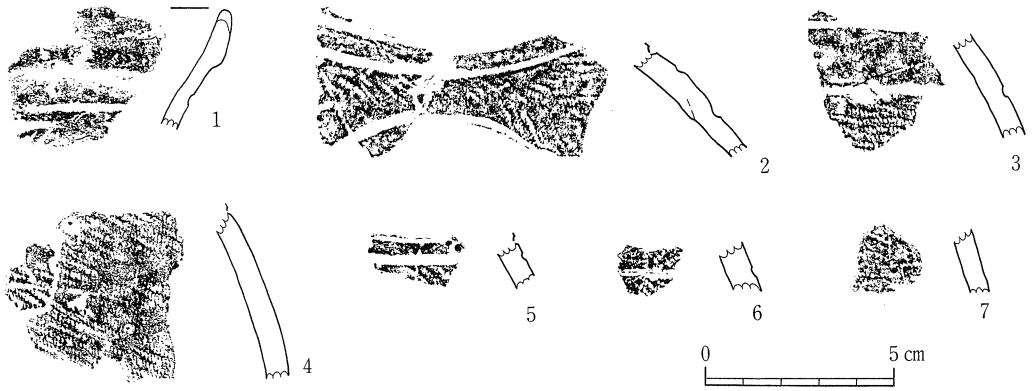


図81　町西遺跡第１地点出土遺物
Fig. 81 Artifacts from KW1

遺物とこれらの遺構についても、直接的な関係はとらえられない。

4.　出土遺物

出土遺物としては、弥生土器と近世以降の陶磁器がある。陶磁器のうちで、特徴が判明するものは全て近代以降で、その他は細片である。そのため、陶磁器については資料化せず、弥生土器のみを呈示した。

【弥生土器】（図81）

図示したのは全て試掘区４層出土のものである。これ以外には、D―12区４層から１点、G―11区５層から１点、土器片が出土しているが、細片のため、特徴などは不明である。

試掘区４層からは、合計で14点出土しているが、胎土・色調・地文などから、いずれも同一個体とみなしてよいもので、壷形土器と考えられる。図示した７点以外は細片である。縄文は、撚糸文（L）である。

１は口縁部の破片で、口縁端部の残りが良くないが、端部付近がわずかに内弯し、小さな突起が付く。外面は無文で、複合口縁状となり、その下側に沈線が認められる。２は体部上半の頸部に近い部分と考えられる。頸部に近い側に、２本の沈線が平行してひかれ、その間は無文となっている。下側には、下向きの弧状の沈線が引かれている。右下側にも沈線の縁がわずかに残っていることから、下向きの連弧文状の文様になると思われる。平行する沈線と、弧状の沈線の間には、縄文が充塡される。３～７は体部破片で、３・５には平行する沈線が認められ、沈線間は無文となっている。４は、上端に沈線の縁が残っている。６にも沈線が認められ、沈線の上側は無文となっている。３・４は、体部上半の文様帯の、最も下側の部分にあたると考えられ、その下側では、撚糸文が横走する。

本資料は遺存状態が悪く、文様構成など全体の特徴が十分明らかでなく、細かな検討は困難

であるが、上記の特徴から、弥生時代後期の土器と考えられる。

5. まとめ

今回の調査では、従来遺跡の知られていなかった区域において、弥生時代後期の遺物が出土し、遺跡の存在が確認された。川渡農場内には、なお多くの遺跡が分布しており、今回同様に未発見のものも存在することが予想されるため、今後、遺跡の分布・広がりを把握していく必要がある。

≪引用・参考文献≫

興野義一・遠藤智一　1970　「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』pp.1～40

興野義一　1976　「一迫町の考古学」『一迫町史』pp.45～100

須藤　隆　1990　「東北地方における弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』　pp.243～322

宮城県教育委員会　1993　『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第152集

弥生時代研究会編　1990　『「天王山式期をめぐって」の検討会　記録集』

第VI章　研究編

塩引・御子篭考―仙台城二の丸跡出土木簡の検討―

関根　達人

1.　はじめに

北上川や阿武隈川など、鮭の遡上する大河川を有する仙台藩は、良質な鮭の産地として知られていた。江戸中期の享保4(1719)年に編纂された『奥羽観蹟聞老志』のなかで、佐久間洞巖は、仙台藩内で獲れる鮭を指して「其佳品大異于他邦」として絶賛している（註1）。なかでも北上川で獲れる鮭は、質、量ともに県内の他の河川を圧倒していた。そのため戦前まで県内には、地曳網、流網、無双網、魚堰（ウライ）、四ツ手魚堰（ウオセキ）、カマス、滝、アンデエ網、荷網、さで網、つなぎ、伏せ鈎、ヤス漁など、内陸の河川に遡上する鮭を対象とした多様な漁法が残っていた(註2)。伝統的な漁法がほとんど失われた現在でも、秋から冬の伝統的な郷土食、特に正月料理には鮭が多く用いられている。

東北地方における近世鮭漁に関しては、岩本由輝氏による古典的名著『南部鼻曲り鮭』がある(註3)。岩本氏は、津軽石川の鮭漁の歴史を通して、鮭と人との交流のなかで生じた人間どうしの葛藤を鮮明に描き出し、近世漁村共同体の変遷過程を明らかにした。

北上川の鮭漁に関しては、文献史料と民俗資料を用いた小野寺正人氏の研究がある（註4）。小野寺氏は、北上川の鮭漁に関する史料を丹念に集めると同時に、古老などからの聞き取り調査を進め、鮭漁の実態とそれにまつわる習俗を明らかにした。

今回、仙台城二の丸跡第5地点から出土した木簡のなかに、鮭に関する資料が3点確認できた(註5)。これらの木簡は、仙台藩における鮭の捕獲、流通を考える上で大変重要である。本論では、木簡の考古学的な検討に加え、文献史料、民俗資料を用いて、江戸時代中期の仙台藩における鮭製品の流通とその意義について論じる。

2.　仙台城二の丸跡出土の木簡の概要

第5地点には、上層の二の丸中奥建物群（III期）と下層のⅠ期遺構群との間に、大規模な盛土、整地層が存在しており、調査区北側ではIV～VII層が、この盛土、整地層に相当する。このうちⅤ層上面では畑の跡（IIｂ期）が、VI層上面では東西方向の溝（IIａ期）が検出されているが、VII層上面には遺構は存在していない。VII層は木製品、木羽、加工木等からなる有機物層と、宴会に用いられたと考えられるカワラケを多量に含む土層の互層で、Ⅰ期の池跡の窪地を埋める形で堆積している。

第5地点からは26点の木簡が発見されているが、享保11（1726）年の紀年銘木簡を除いて、

表36　仙台城二の丸跡第５地点出土の木簡（判読不明な資料を除く）

Tab. 36　Notes on wooden tablets from NM5

人　　名	出土区・層位	年 月 日	地　名	品　　目
	K18区VII－８層		増田村	米四斗五（升）
高橋□兵衛	基礎９区VII－７層		横川	塩引
高橋	基礎９区VII－７層			塩引
清左・・ 吉・・	K18区VII－７層			
忠□郎	K18区VII－７層	２月20日？	郡山町	小豆？
	K18区VII－７層	元（禄）		
文右衛門	K18区VII－６層	11月11日	□船村	米四斗五升
松木安兵衛	K18区VII－６層		平泉	御子籠
高橋喜衛門	K18区VII－５層	元禄４年閏８月24日		みそ細大こん百三拾本
小塚沢徳四□ 執市	K18区VII－５層			
	K18区VII－５層			氷こんにやくかんひやう
	K18区VII－４′層			たたみいわし
	K18区VII－４′層			五嶋するめ
	基礎９区VII－３層			熊野久う［かつら？］
勘九郎	K19区VI層	元禄４年11月３日	名取柳生村	米四斗五升
吉助 吉内様	K19区VI層			□のり みつ
市郎左衛門	K20区⑥層			
喜助	２号柱列柱２	享保11年	鶴ケ谷村	五拾文

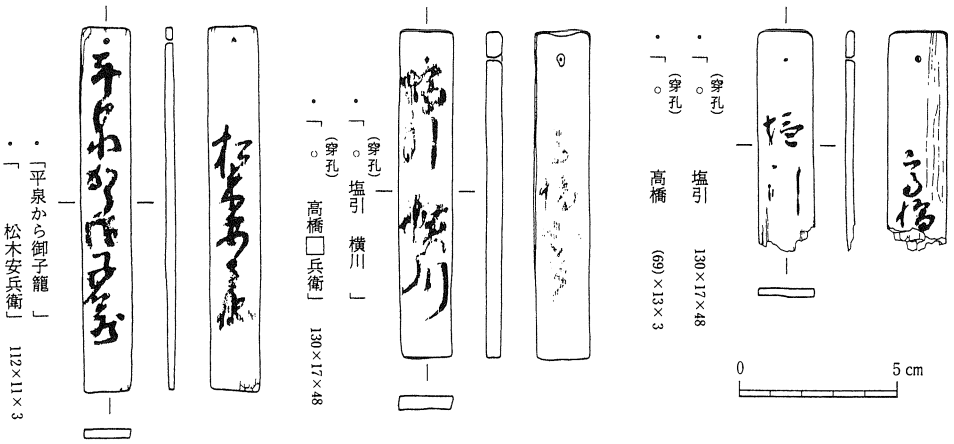


図82　仙台城二の丸跡第５地点出土の鮭に関する木簡（原図は註５文献）

Fig. 82　Wooden tablets with inscriptions referring to salmons from NM5

他は全て整地層（VI・VII層）から出土している（表36）。本論に直接係わる鮭に関する木簡を図82に示した。

図82―1は完形品で、長さ11.2cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmの短冊型である。上部に1カ所穿孔が認められる。表面に「平泉から御子篭」、裏面に「松木安兵衛」の墨書がある。VII―6層出土。2は完形品で、長さ13cm、幅1.7cm、厚さ0.48cmの短冊型である。上部に1カ所穿孔が認められる。表面に「塩引　横川」、裏面に「高橋□兵衛」の墨書がある。VII―7層出土。3は途中で折れ、下半部が失われている。上部に1カ所穿孔が認められる。現存長6.9cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。表面に「塩引」、裏面に「高橋」の墨書がある。VII―7層出土。

以上3点の木簡の年代は、次の理由により、17世紀末の元禄年間前半と考えられる。

①　木簡に共伴してVII層から出土した肥前産の磁器は、大橋編年のIII期を主体とし、II期やIV期初頭のものを若干含む。これは、陶器の年代観とも一致する。より下層のVIII層からは、17世紀中葉の資料が出土している。VII層を覆っているVI層からV層、VI層上面掘り込みの遺構では、17世紀末から18世紀初頭の陶磁器が主体を占める。

②　VII―5層とVI層から、元禄4（1691）年の紀年銘のある木簡が出土している。

③　後に詳述するように、木簡1に記された松木安兵衛は、元禄4年に長年鮭子篭等ノ役を勤めた功績で表彰されており、木簡もその前後の時期、特にその直前の可能性が高い。

3.　仙台城二の丸跡出土の木簡の検討

(1)　木簡の記載事項の構成

木簡1と2は、いずれも表面に「物品名」と、その物品を発送したと考えられる「地名」が、裏面には差出人とおぼしき「人名」が表記されている。3は下半部を欠損しているが、失われた部分、すなわち「塩引」の下には「横川」の文字があり、本来、2の木簡と同様の構成であった可能性が高い。したがって、以上3点の鮭に関連する木簡は、形態や大きさだけでなく、記載事項の構成までもが極めて類似しており、全て荷札であったと考えられる。

仙台城二の丸跡第5地点出土の木簡のなかで、荷札と考えられる資料には、これ以外に、米、小豆など農産物に関する木簡がある（表36参照）。しかしこれらの木簡には「物品名」、「地名」、「人名」以外に「年月日」が必ず記載されるほか、「数量」が併記される場合もあり、鮭製品に関する木簡とは記載事項が異なる。鮭製品に関する木簡に、日付や数量が書かれない理由については後ほど考察することとし、「物品名」、「地名」、「人名」の順に検討する。

(2)　木簡に記載された物品

木簡2と3にある「塩引」は、広い意味で、塩漬された魚介類の総称として用いられる場合

もあるが、一般的には、そのなかで圧倒的な比重を占める、塩漬した鮭を指す。東北地方では、現在でも塩漬けした鮭が「塩引」と呼び慣らされている。「塩引」には、「鹽引」の他に、「乾鹽鮭(シオビキ)」の文字が当てられる場合もある。仙台藩の領内では、鮭以外に鯛、鱈、鱒、鮎、キス、スズキ、ムツ、サヨリ、ブリ、イワシ、イカ、タコ、フグ、白魚、エビ、アワビ、サザエ、アサリ、ナマコなどの魚介類や、雁、鴨、雉子、鶴、オットセイなどの鳥獣肉が貯蔵の目的で塩漬けされたという（註6）。

木簡1の「御子篭」は、子篭鮭の略であり、卵が腹に入ったまま塩漬けにされた鮭を指す。小野やすによれば、仙台藩領内では、鮭以外に、小鯛などの魚も子篭漬にされる場合があったという（註7）。「子篭鮭」は、「鮭子篭」や「鮭子籠」、あるいは単に「子籠（篭）」、「腹鮞（こごもり）」と表記される場合がある。子篭鮭は、各種の鮭の製品の中では「最モ高尚佳良ノ品」（註8）とされ、身を切った際、断面に腹の中の筋子が紅く見える点が喜ばれた。

10世紀に成立した『延喜式』の「主計察中男作物条」には、既に鮭以外に、楚割鮭、鮭脊腸（さけせわた）、鮭鮓、鮭氷頭合作（さけひずのあいつくり）、内子鮭（ここもりのさけ）等の様々な鮭製品が登場する。『奥羽観蹟聞老志』には、鮭の製品として腹鮞（コゴモリ）鮭、乾塩（シオヒキ）鮭、漬涵（ツケヒタシ）鮭、割塩（ヒラキ）鮭、鰲（スシ）鮭が紹介されている。腹鮞鮭、乾塩鮭、漬涵鮭、割塩鮭は、全て塩漬の鮭製品であり、なれ鮓の一種である鰲鮭もまた、一度塩で処理する必要があった。

塩引の製法については、鰹の例ではあるが、小野が江戸時代中期の仙台藩士橘川房常の記録を紹介している(註9)。それによれば、生鰹の内臓を取り出した後、水で洗わずに拭いて腹の中に塩を三杯、表面にも少量の塩を施す。次にまわりを粟殻で包み、縄でしっかりと巻く。それを吊すことなく横にして、10日目くらいに塩が全体に均質にまわるようにひっくり返す。その後、表面の塩を払いさらに塩を水で洗い流し、水気が完全になくなるまで十分に乾燥させる。さらに少量の塩と糀を腹の中によく擦り込み、再度粟殻で包む。塩と糀が溶けた頃から食べ始めるとしている。

子篭鮭の製法に関しても、橘川房常は「鮭当座子篭の仕様の事」という記録を残している。鮭当座子篭とは鮭子篭の一種で、即席のため生に近いが、長期間の保存には向かない製品であろう。これには2種類の製法が紹介されている。ひとつは、塩3升水5升の割合で塩水を作り、一旦沸騰させた後よく冷まし、これに3日間程度漬ける方法である。これとは別に、塩水を使わず、表面や腹の中へ塩をすりこんだ鮭を、1週間程度菰に包んでねかせた後、水でよく洗って、吊しながら乾燥させる方法もあった。どちらの方法でも内臓は取り除かれるが、卵は腹の中に入れたままであり、もし内臓を取り出す際に卵まで外に出てしまった場合にも、直ちに腹の中へ戻すように指示されている。

『仙台物産沿革』では、塩をすりこむ方法が紹介されているが、鮭と筋子を別々に塩漬けし、後から筋子を腹の中に戻して形を整える点で、橘川の説くところと異なる(註10)。この書物によれば、これが書かれた大正中頃には、交通機関の発達にともない、生鮭の遠距離輸送が可能になったために、保存食の一種である子篭鮭は、特別の注文が無い限り作られなくなっていたという。

旧中津山村は現在桃生郡桃生町に属するが、この地域では、鮭のコゴモリ漬けは正月のハレの食物として珍重された（註11)。『中津山村誌』によれば、塩引と子篭では内臓の取り出し方に違いがあるという。すなわち、塩引は腹を裂いて中の臓物を取り出し、子篭は筋子を傷つけないよう腹を裂かずに、エラのところから臓物が取り出された。鮭の貯蔵には、「半切」と呼ばれる楕円形の特別な漬桶が用いられた。

(3) 木簡に記載された地名

木簡1の「平泉」、木簡2の「横川」は共に地名であり、それぞれ、現在の岩手県西磐井郡平泉町、宮城県桃生郡河北町大字福地字横川を指すと考えられる。いずれも北上川（追波川）の流域にあたる。

北上川における鮭漁に関する資料では、伊達政宗鮭魚役申付黒印状が有名である(註12)。この文書は仙台藩における漁業関係の記録としては、現存するなかで最も古い資料である。

鮭のうを役之次第

一、横川　一、石の巻かミは金ケ崎をきりて引あミながしの役可為如前々候但ひと川引、従当年被相止、舟一艘に付而、さけのうを五本宛可申付事

一、所々請切之義、従当年相やぶり、五人之者共、鮭之役直ニ可申付事

一、新舟之林木、古舟つくろいの材木、其所於近所、雑木入次第にきらせ候而、其ところ　ところの庄屋肝煎ニ数をとめ、切手を可相渡事

一、横川肝煎之から屋敷十八間四方請取、うを蔵可相立事

一、平泉高館之内畑十八間四方請取、うを蔵可相立事　右條々うたかいなく可申付者也

寛永五年二月廿八日　　政宗（黒印）

この文書から、寛永5（1628）年以前に、横川、石巻から岩手県金ケ崎にいたる北上川、追波川で「引きあミながし」、即ち地曳網や流網などの方法で鮭漁が行われていたことがわかる。政宗は川役について、従来の「ひと川引」毎に課税する方法から、舟一艘につき鮭5本を徴収する方法に改めた。さらに桑折豊後、犬飼隼人、犬飼清蔵、島貫正右衛門、矢内清九郎の5名が「鮭之役」に任命されている。仙台城二の丸跡第5地点出土の木簡との関係で最も注目されるのは、横川と平泉の2カ所に「魚蔵」の建造が命じられている点である。この文書の性格や

魚蔵が立てられた場所からみて、魚蔵には、産卵のために北上川・追波川を遡上する鮭が納められていたと考えられる。

桃生郡旧福地村横川は、上品山の北東麓、追波川の南岸に位置する。北上川本支流、阿武隈川流域の舟数が書き留められている、慶長5（1600）年8月10日の「かさい大さきとめの日記」に横川の地名が初めて登場する(註13)。この文書は、新たに伊達の所領となった旧葛西、大崎領と御本領内において、川舟役、あるいは鮭・鱒漁業に対する川役を賦課するための調査記録と考えられている。横川は旧葛西領に属し、「よこ川の内舟十仁そう」と記載されている。旧葛西領では、屋わた（水沢市八幡）の30艘が最も多く、いしのまき（石巻）、みなと（石巻市湊）の15艘がこれに次ぎ、横川は32箇所あるうちの4番目に舟数が多い。八幡は北上川と胆沢川の合流点、石巻と湊は北上川の河口、横川は追波川の河口に位置し、それぞれ河川交通の要所に当たる。横川は、北上川を用いた内陸の河川航路と気仙地方への沿岸航路とを結ぶ、中継基地として近世以前より発達していたと考えられ、川舟の多さはその証左でもある。寛永13(1636)年1月に雄勝方面で鹿猟が行われた際には、横川に御假屋が置かれ、政宗もこの地に滞在している。安永の福地村風土記御用書出には次のような記載があり、寛永5（1628）年に伊達政宗の命によって設置された「魚蔵」が、18世紀後葉の安永年間に到るまで機能していたことが判る。

町裏

一、御肴御仕込御蔵

年々**鮭子篭塩引**御仕込仕方罷成、御献上、御膳ニ御用立申候

其外塩煮貝、丸干鮑並小肴等仕込罷成候

安永風土記の記載から、横川の「御肴御仕込御蔵」は、仙台藩御用の鮭子篭、塩引の製造と貯蔵を主体とし、他の海産物の製造も行っていたことが判る。寛永5年に設置された「魚蔵」は「御肴御仕込御蔵」の前身であり、当初鮭の加工、貯蔵専用の施設であった「魚蔵」が鮭以外の肴をも付加的に取り扱うようになり、「御肴御仕込御蔵」に発展したと考えられる。江戸時代の横川宿は本町、荒町、新町から成るが、荒町は寛永18年、新町は元禄7年の成立であり、肝入役人の屋敷の一部を割いて建てられた魚蔵は、本町の町裏に置かれていた可能性が高い。

西磐井郡平泉は北上川の中流域に位置し、仙台藩と盛岡藩との藩境にも近い。藩境を越えた盛岡藩側では、北上川と和賀川の合流する黒沢尻（現北上市）が鮭漁の拠点であった。岩手県埋蔵文化財センターによる柳之御所遺跡の発掘調査で、12世紀奥州藤原氏時代の遺構、遺物に混じって近世の遺構、遺物も少なからず検出されている。それらの中には規模の大きな建物跡や明末の青花、17世紀前半の初期伊万里が認められ、単なる近世農村の枠組みでは理解しきれない面がある(註14)。柳之御所遺跡は、高館の南側、北上川に臨む舌状の台地上にあり、検出

された近世初頭の遺構の中に、寛永5年の伊達政宗鮭魚役申付黒印状に登場する平泉の「魚蔵」が含まれている可能性があろう。

先述の『奥羽観蹟聞老志』では、コゴモリ、シオヒキは石巻、横川のものが、ヒラキは衣川で作られたものが上品であるとされ、木簡の記載内容との関係で注目される。諸国の物産について、寺島良安が正徳3（1713）年に著した『和漢三才圖曾』でも、奥州の項に鮭鹽引、子篭があり、「衣川より出づ」との記述がある。産卵のために河川を遡上する鮭の生態を考えれば、奥羽観蹟聞老志の指摘が理にかなっていることが判る。

沿岸にやってくる初期のサケは、うろこが銀白色で美しく、肉は赤みを帯びている。しかしこの段階のサケは筋子が未熟で肉も最高とは言えない。河口付近で真水を飲んだサケの魚体には次第に婚姻色が現れ、ウロコには斑点模様が見られるようになる。この段階のサケは絶食状態で遡上の準備をするため脂肪が減り、タンパク質がアミノ酸に分解されるために味がよい。北上川では例年9月初めからサケが上がり始める。早い時期に上がるサケは、かなり上流の盛岡周辺まで遡上するため脂肪分が多い。この時期に河口付近の石巻や横川周辺で捕獲されるサケは「ギン」と呼ばれ（註15）、脂がのっているため塩引を作るには最適と考えられる。遡上距離が長くなり十分に真水を飲んだサケは全身が黒く変化する。北上川流域ではサケの体色が黒く変化することを「カタが付く」という（註16）。この段階のサケの肉は、赤身がなく白っぽくなり、体に蓄えられていた脂肪分も減りすぎて味が落ちる。衣川で捕れるサケは「カタ」が付き始めた程度、いわゆる「ソコガタ」のサケと考えられる。河口部で捕れるサケに比べ商品価値は低いが、筋子は発達しているため、子篭としては十分利用できたであろう。また、脂肪分が少なくなっているために長期の保存には向いており、割塩（ヒラキ）鮭や鰲（スシ）鮭などを作るには好都合であったと考えられる。

(4) 木簡に記載された人名

1の「松木安兵衛」については、肯山公治家記録の元禄4（1691）年6月18日の項に、「松木安兵衛年久鮭子篭等ノ役勤労如格俸金給米ヲ賜ヒ番所広間ヲ命セラル」との記載が認められる（註17）。治家記録の一文と木簡1の内容はみごとに一致し、注目される。この2つの資料から、仙台藩では「鮭子篭等ノ役」が実在し、その役を長年勤めあげることは表彰に値する、換言すれば藩のなかでは比較的重要な仕事であったことがわかる。「鮭子篭等ノ役」と広間番士が兼務されるか否かは判然としないが、木簡1の年代は、松木安兵衛が広間番士に任命される以前、すなわち元禄4年以前の可能性が高い。

2の「高橋□兵衛」と3の「高橋」は、同一人物と考えられる。どちらも塩引の調達に従事しており、松木安兵衛と同様の役職の人物であろう。

4. 伊達治家記録の検討

仙台藩における鮭の利用状況を知る手がかりとして、藩の公的な記録である伊達治家記録を参考にした。治家記録には、その性格上、贈答品、献上品の詳細な記録が残されており、何時、誰との間で、いかなる理由から、どの様な品物がどれだけの量やり取りされたのか知ることができる。治家記録を用いるに際しては、記録自体が膨大であることから、ある特定の年を選択し、贈答品、献上品としての鮭の年間を通した利用状況を調べた。

先に述べたように、今回とりあげた2点の木簡は、共伴遺物、出土層位から17世紀末（元禄年間前半）に位置づけられる。繰り返しになるが、木簡に記載された松木安兵衛という人物は、長年にわたり「鮭子篭ノ役」を勤めた功績により、元禄4（1691）年に俸金給米を受けたうえ、広間番士を命ぜられている。さらに、この木簡の出土した直上層からは、元禄4年の紀年銘木簡が出土している（表36）。以上の理由から、今回は元禄4年を検討の対象に選んだ。

元禄4年の肯山公治家記録に残された鮭に関する記述を一覧表に示した（表37）。鮭の大部分は仙台藩内で捕獲されており、藩領以外の土地で獲られたことが明らかなのは、3月10日に松前八之介から献上された松前の披鮭と、7月6日に栗橋の名主池田与右衛門から献上された生鮭だけである。仙台藩準一家の松前家は松前藩主の分流を出自としており、松前の披鮭が北海道産であることは疑いない。栗橋の名主池田与右衛門の献上した鮭は、栗橋を流れる利根川で捕獲された初鮭の可能性が高い。一般に「サケは銚子限り」と言われるように、太平洋側では利根川が鮭の遡上する南限の河川である（註18）。市川健夫によれば、江戸では、利根川の初鮭が、伊豆沖で獲れる初鰹にも比せられるほどに貴重であったということである。

肯山公治家記録に残された鮭に関する記述は、その内容から、藩主への献上の記録と他家への贈答の記録に大別できる。陰暦7月に初鮭があがり、将軍家や大御所に贈られる。将軍家へ献上は、広儀の使者を介して行われており、対外的に定型化していた行為であったことがわかる。8月には2番鮭、3番鮭の記述がみられる。当時領内で捕獲された鳥や魚は初物が尊ばれ、しばしば藩主に献上されているが、元禄4年の記載を見る限り、鮭を除いて初物、二番物までしか記載されていない。治家記録にたびたび登場する鶴、菱喰（ヒシクイ）、鱈などの記述も2番物までにとどまっている。3番物まで特別視されている鮭が、仙台藩にあっては特別な意味あいを持っていたことがうかがえる。陰暦8月から閏8月にかけて、伊達安芸（涌谷）、片倉小十郎（白石）、田村右京大夫（一関）、柴田内蔵（船岡）など一門、一家クラスの上級家臣層から、在所で獲れた初鮭が相次いで献上されている。一方で江戸においては、老中や幕閣に対して初鮭が贈られている。この際にも広儀の使者が遣わされているうえ、「如例」と書かれていることから、初鮭は恒例化した進物であったことがわかる。

表37　『伊達治家記録』にみられる鮭に関する記述［元禄4（1691）年］

Tab. 37　Discription about salmon in the official record of Sendai-han(1691)

2月26日	類姫御方旅館喜連川驛へ、以飛脚香ノ物**鮭子籠**三尺贈セラル
3月10日	松前八之介**松前ノ披鮭**献上
27日	戸沢能登ノ守殿参勤、来ル廿九日刈田関驛一宿ニ就テ、忍冬**酒粕漬鮭子籠**以使者餽送
28日	（阿部）豊後守殿へ披根魚十枚**粕漬鮭子篭**一桶餽送
6月18日	松木安兵衛年久**鮭子篭**等ノ役勤労如格俸金給米ヲ賜ヒ番所廣間ヲ命セラル
7月6日	栗橋ノ名主池田与右衛門**鮭魚**二尾献上
28日	**初鮭**仙台ヨリ上着
29日	**初鮭**一尺御献上使者広義使
	父君へ使者山家喜兵衛、**初鮭**進上
8月1日	**二番鮭**御献上ニ就テ使者坂本勘之丞ニ命セラル
	父君へ使者命セラレ、当日ノ賀儀肴一折且**鮭子**進上セラル
2日	**二番鮭**御献上ニ就テ、大久保加賀守殿奉書到来
6日	父君へ重一折肴一種且三番ノ**鮭**一尾御進上使者山口権八郎
10日	晩於御座間**初鮭**ヲ御餞ニ差ム
13日	北御方へ**初鮭**贈セラル使者小姓組
16日	伊達安芸殿片倉小十郎、**於在処漁ル鮭**各一尺献上
18日	老中及ヒ牧野備後守殿柳沢出羽守殿へ各**初鮭**一尺餽送使者公義使
26日	松平因幡守殿松平美作守殿曽我周防守殿松平隼人正殿松平右京亮殿酒井甲斐守殿滝川越前守殿及ヒ向井兵庫殿桑島孫六殿へ、如例各**鮭**一尺贈遣
閏8月1日	田村右京大夫殿ヨリ、以使者在所ノ**初鮭**進上
3日	柴田内蔵在所ノ**初鮭**献上
9月13日	類姫御方今日品河第ニ皈ラルニ就テ、帯五筋**鮭魚**二尺遣サル
	立花主膳殿ヨリ、室産後平安ノ賀儀肴一折、室ヨリ**鮭魚**二尺各以使者進上
25日	父君ヨリ以御使者**鮭子篭**二尺贈セラル
10月10日	御献上ノ茶并**子籠鮭**添肴目録御覧使者坂本勘之丞（**鮭子籠**十尺）
	父君へ御茶一袋**鮭子籠**十尺鶴一隻御進上使者芳賀典膳
	老中及牧野備後守殿小笠原佐渡守殿柳沢出羽守殿へ、如例各**鮭子籠**五尺餽送使者広義使
15日	泰応公正通朝臣本庄因幡守殿へ、**鮭子籠**各十尺以使者贈遣
16日	井伊掃部頭殿へ、以使者**鮭子籠**十尺餽送
	柴田越前守殿中川伊勢守殿諏訪五郎左衛門殿大嶋雲四郎殿へ、**鮭子篭**各五尺以使者贈送
18日	公義奉行衆勘定奉行衆作事奉行衆普請奉行衆へ如例**鮭子籠**各五尺以使者餽送
	伊達宗利朝臣蒔田八郎左衛門殿天野弥五右衛門殿水野藤右衛門殿神尾五郎大夫殿中野傳右衛門殿向井兵庫殿塙方啓院細川桃庵老小栗長左衛門殿桑山可斎桑嶋孫六殿及鈴木長兵衛方へ、以使者**鮭子籠**各五尺餽送
	六角越前守殿林大学頭殿へ、初テ**鮭子籠**各五尺餽送
22日	井伊掃部頭殿塔ノ澤温泉ニ湯治セラルニ就テ、**塩鮭**鯖各一桶餽送
29日	京極近江守殿へ**鮭子籠**五尺以使者餽送
	蜂屋半之丞殿角南主馬殿松前八兵衛殿有馬宮内殿桑山猪兵衛殿本多三左衛門殿中山平右衛門殿井上左太夫殿伊奈半十郎殿坂上池院阿部主膳殿伊東刑部左衛門殿中山勘解由殿高木権左衛門殿小野吉兵衛殿諏訪邊文九郎殿門奈助右衛門殿永倉珠阿弥鈴木安休中川立甫へ以使者如例**子籠**贈遣
11月12日	松平美作守殿へ**鮭子籠**餽送
18日	阿部豊後守殿へ**鮭鮓**一桶
	泰応公ヨリ、**高田ノ鮭魚**二尾以書礼進覧
19日	松平右京亮殿へ、以使者**鮭子籠**五尺餽送
21日	稲葉正通朝臣へ以使者**鮭鮓**一桶餽送
23日	北図書**鮭子篭**三尺献上、参府ノ御礼
25日	本庄稲葉守殿へ以使者御書并**鮭鮓**贈遣
	御勘定役野田惣左衛門殿能勢権兵衛殿、日光御勘定主立勤仕ニ就テ謝礼ト為テ以使者紋絹郡内嶋各六疋并**塩引**三尺贈遣
	内対面所ノ絵ヲ命セラルニ就テ、狩野養朴ニ縮緬三巻**鮭子籠**二尺、狩野洞雲ニ銀子十枚紗綾三巻**鮭塩引**二尺、狩野随川ニ銀子二枚肴一折賜之
26日	糸屋良斎ニ、**鮭子籠**ヲ賜フ
27日	近衛基熙公へ**鮭子籠**五尺乾金海鼠
	櫛苟宰相隆慶卿武田杏仙老へ**鮭子籠**各五尺、於京都以使者贈進
	宇治ノ薬師一二人其餘阿形大文字屋等九人ニ、如例**鮭子籠**三尺ヲ賜フ
12月7日	松原幽知ニ新舞台ノ畫ヲ命セラル賞、銀子五枚**鮭塩引**二尺賜之
	古内新十郎**子籠鮭**三尺献上
15日	伊達宗昭朝臣へ、壺口剪ノ茶一袋并**鮭子籠**五尺餽送御書副ラル
16日	於御座間天童修理**鮭子籠**三尺献上参府ノ拝謁
	伊達宗昭朝臣ヨリ、茶一袋并**鮭子籠**五尺進上書礼ヲ副ラル
21日	大嶋雲四郎殿近日駿府へ発足ニ就テ、**鮭鮓**一桶餞送
30日	仙台ヨリ清姫御方各**鮭子籠**二尺進上
	但木主馬今日参府ニ就テ拝謁**鮭子籠**二尺献上

治家記録には、生鮭（鮭子）以外に、鮭塩引、鮭子篭、鮭鮓、粕漬鮭子篭などの鮭製品がみられる。治家記録（表37）に基づいて、鮭製品の月別の献上、贈答件数の推移を検討する（図83)。贈収頻度は、献上、贈答の件数とし、1回にやりとりされる鮭製品の数量は問題にしていない。例えば9月18日の場合、「老中及ヒ牧野備後守殿柳沢出羽守殿へ各初鮭一尺餽送使者公義使」の記事から鮭3件と数えた。

生鮭の贈答、献上は、陰暦7月の初鮭にはじまって、9月中旬まで行われている。9月下旬には鮭子篭が登場し、生鮭と置き換わる。鮭子篭と塩引は、秋から冬にかけ比較的長期間やりとりされている。陰暦10、11月に集中する鮭子篭の大部分は、毎年恒例の老中、幕閣、諸大名等への贈答品である。鮭製品としては、他に鮭鮓と粕漬鮭子篭がある。比較的保存が利くと考えられる鮭鮓は、陰暦11、12月に、最も長期の保存が可能な粕漬鮭子篭は、陰暦3月に登場する。このことから、鮭製品はおおまかに、生鮭（7～9月）→塩引・鮭子篭（10～12月）→鮭鮓（11～12月）→粕漬鮭子篭（3月）と季節的に推移していることがわかる。鮭鮓は、先に紹介した奥羽観蹟聞老志にある鰲（スシ）魚と同じものを指すと考えられる。

次に、献上・贈答に用いられた水産加工物全体で、鮭製品がどの程度の比重を占めていたかを月毎に検討した（図84)。検討の対象としたのは、同じく元禄4年の肯山公治家記録であり、利用頻度の算定方法は統一されている。その結果、陰暦8月から12月にかけて仙台藩では、鮭とその加工品が最も頻繁に贈答・献上された水産物であったことが明らかとなった。鮭の利用は、閏8月と11月にピークが認められるが、先の検討で、前者は生鮭、後者は鮭子篭・塩引であったことが判っている。

鮭に次いで利用頻度が高いのが鮑（鰒）である。鮑の加工品には、熨斗鰒、長鰒、粕漬鰒、串鰒の4種類が認められる。加工された鮑は容易に保存が効くためであろうか、鮭とは異なり、

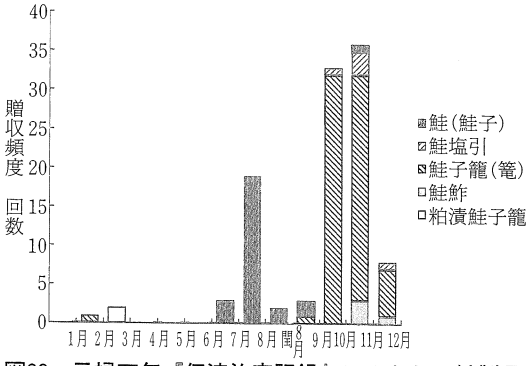


図83　元禄四年『伊達治家記録』にみられる鮭製品の贈収頻度

Fig. 83　Frequency of gift giving and taking of salmon products in 1691, according to the official record of Sendai-han

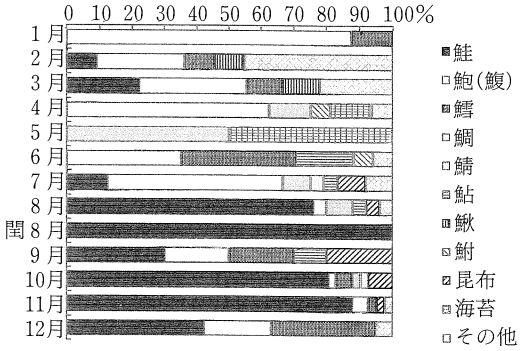


図84　元禄四年『伊達治家記録』にみられる贈収水産物の種類別割合

Fig. 84　Histogram of marine products given and taken in 1691, according to the official record of Sendai-han

特定の季節に偏ることなく、年間を通じて比較的安定した利用状況にある。ただし比率の上では、鮭の比率が低い1月から4月、6、7月に高い比率を占めるため、一見すると鮭と補完関係にあるかのように見えてしまう。鯛（初夏～夏）、鯖（夏）、鮎（夏～秋）、鰍（冬）、鮒（春～初夏）、昆布（夏～秋）、海苔（春）は、各々比較的明瞭に季節性を反映した利用状況にある。鱈は鮭に次いで多く用いられている魚であり、鮭とはある程度補完関係にあると考えられる。初鱈は、仙台藩から幕府へ献上されたの国産品であり、藩の御留物にもなっていることから、鮭に次いで重要な魚種であったと考えられる。元禄4年の肯山公治家記録によれば、陰暦9月26日に将軍家と大御所に初鱈が献上されている。領内でとれる新鮮な鱈は、当時から高い評価を受けていたらしく、奥羽観蹟聞老志では、「其ノ風味他邦ノ及ブ所ニ非ズ」と絶賛されている。鱈製品の季節があまり限定されていないのは、簀巻(註19)、乾燥、塩蔵等の加工により長期の保存が可能であったためと考えられる。その他としたものには、カツオ（学鰹）、ブリ（乾鰤）、マス（味噌漬鱒）、アイナメ（披根魚）、カレイ（乾鰈）、白魚（鱠残魚）やナマコ（海鼠）、キンコ（金海鼠：註20）等が含まれている。

5. 仙台藩における鮭製品の製造・流通とその意義

仙台藩で用いられる鮭、およびそれを素材とした加工品は、当初は平泉と横川に設置された魚蔵で、貯蔵、加工が行われていたと考えられる。先述した通り、横川の魚蔵は、安永風土記の記述から、18世紀の後葉に到るまで御肴御仕込御蔵として存続していたことが推測されるが、今回とりあげた木簡から、少なくとも17世紀末葉迄は、横川同様平泉の魚蔵も機能していたことが明かとなった。ところで、魚蔵や御肴御仕込御蔵とはどの様な施設であったのであろうか。宮城県立図書館所蔵の「桃生郡深谷和淵村武田伊右衛門居屋敷絵図」には、「子籠仕方御役人衆居所」の建物が描かれており、魚蔵を考える上で参考となる（図85）。

伊達家旧蔵のこの絵図は、「御領内要害屋舗」の吟味のため、天和元（1681）年、諸士に命じて藩に提出させた在郷屋敷絵図のひとつである（註21）。桃生郡和淵村の武田氏は、「慶長五年八月拾日かさい大さきとめの日記」にもその名がみられ、安永5年の桃生郡深谷和淵村風土記御用書出には、「川御役当村御地頭武田安之助様御受川ニ付壱ケ年鮭拾五本宛御上納御自由罷成申候事」との記述がある。絵図には、武田伊右衛門の屋敷だけでなく、同氏の知行下にある町場が描かれており、屋敷の構え以外に、町場を含む在郷屋敷周辺の地理的状況にも重点が置かれていることが判る。町場は北上川の西岸沿いにあり、和淵本町とその南に接する足軽町で構成される。町のまん中を南北に「仙台より気仙江之海道」がはしり、町の北端にある渡しを経て対岸の神取村へと通じる。問題の「子籠仕方御役人衆居所」は和淵本町の西のはずれ、涌谷へ通じる街道近くにある。和淵本町の東のはずれ、北上川に近い所には「穀改御役人衆居所」

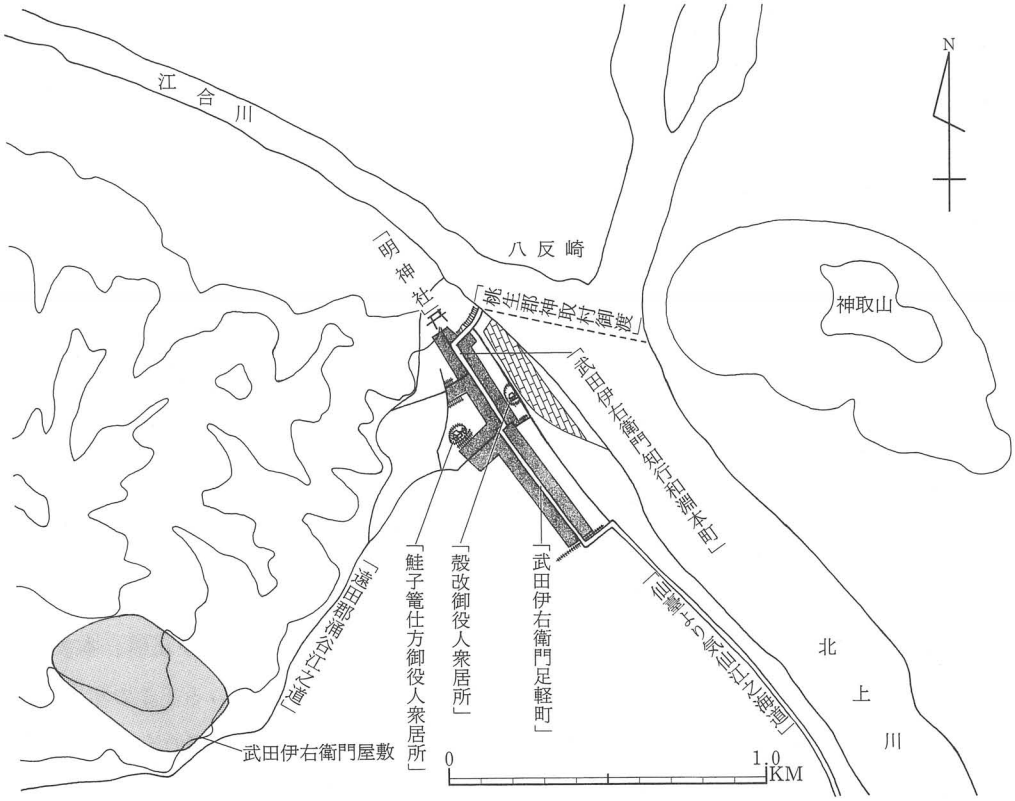


図85　桃生郡和淵の鮭子籠仕方御役人衆居所（「桃生郡和淵村之内武田伊右衛門居屋敷絵図」をもとに作成）

Fig. 85　The facility for controling capture and processing of salmon from the River Kitakami at Wabuchi town, in Sendai domain

が置かれている。絵図では、「子籠仕方御役人衆居所」と「穀改御役人衆居所」は同じように表現されており、柵で囲まれた中に母屋とおもわれる建物と、それに伴う小屋が各１棟描かれている。絵図に註付きで示されている施設は、他に町外れの明神社だけであり、これらの建物が和淵村では重要な施設であったことが推測される(註22)。神取の渡しの上流には、八反崎と呼ばれる北上川と江合川の合流点があり、そこは「八反鮭」と呼ばれる鮭の名産地であった（註23)。安永風土記では、和淵村に鮭鱒漁専門の川舟である「さつは舟」が５艘あり、１艘につき御役本代50文上納していることが記されている。和淵の「子籠仕方御役人衆居所」は、「八反鮭」をはじめ、周辺の北上川から揚がる鮭を対象として設けられたと考えられ、横川と平泉への魚蔵設置以後、藩の方針で領内の各所に同様の施設が作られた可能性がある。仙台藩では、領内の鮭漁業に対して舟役、川役を課し、鮭の現物を納入させる方法が広く一般的に行われており、実際に徴収された鮭は、恐らく平泉、横川、和淵といった場所に藩が設けた貯蔵・加工施設に

集められ、そこから必要に応じて発送されたと考えられる。その任に当たるのが、治家記録が伝えるところの「鮭子篭等ノ役」であり、木簡に名前を残した「松木安兵衛」や「高橋□兵衛」であったと考えられる。

第5地点出土の木簡は、鮭製品が、それらの藩直営の貯蔵・加工施設を経て仙台城へと搬入されたことを物語っている。仙台城に運ばれた鮭製品には、城内で消費するもの以外に、将軍家をはじめ、他家への贈答分が多く含まれていたと考えられる。平重道氏によれば、城内で使う肴は、御肴役人を通じて領内の浜から塩釜に集められ、そこから陸路城下の肴蔵へ運ばれたとされる(註24)。第5地点出土の木簡とともに仙台城へ運ばれた鮭子篭や塩引が、御肴役人を通じて塩釜経由で運ばれた物でないことは、木簡の記載内容から明確である。また、先に述べたように鮭関係の木簡は、明らかに城内で消費されたと考えられる米、小豆など農産物に関する木簡とは記載事項の構成が異なる。第5地点出土の木簡とともに仙台城へ運ばれた鮭子篭や塩引は、城内消費用ではなく他家への贈答用であったのであろうか。

伊達家から他家への鮭製品の贈答記録で最も古い例は、慶長5（1600）年12月16日付の「歳暮進物注文」である（註25)。この時には徳川家康をはじめ、徳川秀忠、本多正信、本多正純、村越直吉、大久保忠鄰、今井宗薫へ子篭、塩引あわせて105匹が贈られている。この年以降、仙台藩には毎年おびただしい数の鮭製品の贈答記録が残されている。元禄4年の治家記録を例に検討したように、一族、家臣から藩主への献上や、伊達家から他家への贈答は、鮭製品に関するかぎり毎年恒例の事であり、何時、誰に(誰から)、どの様な鮭製品を、どれだけの数贈るか（贈られるか）は、ある程度定まっていた。このことが、同じ仙台城二の丸跡第5地点から出土した同時代の資料にも関わらず、米に関する木簡には日付、数量が記載され、鮭製品に関する木簡にはそれらが書かれない、言い換えれば書く必要がない理由であったと考えられる。

伊達家から他家への鮭製品の贈答のなかで最も重要視されたのは、毎年7月に行われる将軍家への初鮭の献上である。仙台藩から朝廷へ初鮭が献上されたことを示す記録も残されているが、水戸藩の場合のように毎年贈ることが確立してはいなかったようである。仙台藩から将軍家に献上された初物には、鮭以外にも、初鶴、初菱喰（以上8月)、初鱈（11月）があった（註26)。治家記録によれば、慶長18（1613）年7月30日に「御献上トシテ、初鮭一尺、江戸へ差登セラル」との記述が残されていることから、将軍家への初鮭の献上は少なくともこの年以前に遡ることが判る(註27)。将軍家への初鮭の献上は、仙台藩以外にも水戸藩、盛岡藩(以上7月)、鶴岡藩（8月)、金沢藩（10月）が行っていた（註28)。北洋から次第に南下する鮭の生態を考えれば、初鮭の献上は盛岡藩か仙台藩が最も早く行えたわけであり、初鮭の献上月日は、両藩にとって藩の体面に関わる重要な問題であったと考えられる。仙台藩は鮭、特に初鮭に関しては一貫して「御留物」すなわち領外移出禁止品としており、その背景には以上のような問題が

あった可能性が高い。次に「御留物」という視点から仙台藩の鮭を見てみたい。

仙台藩の国産（領内特産物）統制政策については、これまでに平重道氏（註29）、難波信雄氏（註30）、鯨井千佐登氏（註31）によりすぐれた考察がなされている。これら先学の研究によれば、仙台藩の国産統制政策に関する主な資料としては、寛永13（1636）年の「御とまり物之事」（註32）、正保4（1647）年の「伊達氏奉行境目留物等定書控」（註33）、承応4（1655）年の「御境目御仕置」（註34）、寛文2（1662）年の「御境目他領へ不被相出物」（註35）、寛文9（1669）年の「御境目他領へ不被相通物之分」（註36）、天和3（1683）年の「御境目定」（註37）が残されている。寛永13年の規定では、鮭のなかで初鮭のみが他国移出禁止対象物であった。続く正保4年の規定では、初鮭の他に子篭が加わる。承応4年の規定になると、初鮭と鮭の子篭が留物の対象である点に変わりはないが、「割付以後」は郡奉行の許可があれば移出が可能になっている。寛文2年の規定では、初鮭と鮭子篭の順序が逆転し、鮭子篭は、御割奉行書付をもって、初鮭は、境目番所の禁制が解かれる際に出入司の書付があれば、特別に移出可能とされた。寛文9年の規定からは初鮭の文字が消え、鮭、鮭子篭、塩引、塩鮭が御割奉行の書付がある場合にのみ移出可能な留物として挙げられている。天和3年の規定は、基本的に寛文9年のものを踏襲しており、「鮭之分塩物共」が留物の対象となっている。全体を通してみると、初期の頃は初鮭に重点が置かれ、厳しい移出禁止措置が取られていたのに対して、時代が下るにつれ初鮭重視の色彩が薄れ、鮭一般に一部条件付きの移出制限が加わるようになったことが判る。このことは、江戸初期には、外交手段の一つとして重要視された将軍家への初鮭献上も、17世紀の後半には政治的意味合いを失い、単なる贈答儀礼に変化したことを示していると考えられる。なお、仙台藩は水戸藩同様、初鮭に対して報奨金を出しており、仙台藩民政全般に関する申渡を集成した、『四冊留』の「鶴白鳥并初魚狼討納候御褒美金被下御定之事」の条に、初鮭御褒美金の金額が記載されている（註38）。この規定は享保12（1727）年に出されており、一番鮭に対しては二両二歩、二番鮭には二両、三番鮭には一両二歩、四番・五番鮭には二切、六番から拾番鮭迄には一切が支払われることが定められている。この条文には、鮭の他に、鶴、菱喰といった鳥類についても褒美金の金額が示されている。鶴は三番迄が一両一歩、四番以下は三切とされ、菱喰は同じく三番迄が一歩と決められている。褒美金の金額を比較した場合、鶴、菱喰に比べ、鮭の初物の価値がいかに高かったかが判る。

初鮭の献上記録や御留物の史料以外にも、仙台藩において鮭が特別な意味あいをもつ魚であることを示す資料は多い。例えば、将軍家をはじめ、近世初頭の諸大名の多くが、鷹狩り等の狩猟を頻繁に行っていたことはよく知られているが、仙台藩の場合にはこれに川猟が加わる。川猟の対象は主に鮭である。治家記録には、歴代の藩主が、城下の広瀬川や近郊の名取川、七北田川、さらに遠くは白石川まで出かけ、川猟を行ったとの記事が多く残されている（註39）。

仙台藩に伝わる小笠原流の古式正月飾りでも、塩鮭は重要な役割を果たしている。この正月飾りは、昭和17年頃、「仙台藩迎春の行事」をもとに復元され、現在塩竈神社で行われている。この正月飾りでは、横に渡された青竹の中央に塩引鮭、向かって左にキジ、右に麻で編んだ48枚のスルメが吊される。サケとキジは藩政時代に幕府への献上品であったことから飾りに用いられるようになったという。国学者の保田光則によって万延元（1860）年に著された『新撰陸奥風土記』には、旧藩より幕府へ献上された国産物として、サケ、キジをはじめ17品目が挙げられている。17品目中3品目はサケが占めており、鮭（初・二番）、子篭鮭、披鮭が登場する。

江戸後期、寛政元（1789）年の『大成武鑑』によれば、鮭を名品としている藩は11あり、うち6藩が奥州に属する(註40)。奥州以外では、那珂川、久慈川等の河川を有する水戸藩や、日本海側の金沢藩、鳥取藩、蝦夷地の松前藩が含まれる。松尾芭蕉の句に「から鮭も空也の痩せも寒の内」とあるように、江戸では元禄の頃には、蝦夷地産の干鮭（からざけ）が普及するようになっていた(註41)。干鮭とは、頭を付けたまま腹を裂き、内臓を取って干しただけの鮭であり、松前、秋田、越前、越後に多く産した。生鮭の手に入りにくい江戸では、鮭製品のなかで最も安価な干鮭が、冬場の食品として庶民に受け入れられており、「御歳暮にもらう肴の首くくり」など、干鮭を詠んだ江戸川柳が残されている。ここで注目されるのは、干鮭の名産地が蝦夷地と日本海側に限られている点である。仙台藩では、鮭の加工には、ほとんどの場合、塩が用いられている。このことは、仙台藩では鮭の貯蔵、加工に地元産の豊富な塩が使用可能であったことと関係があると思われる。鮭と塩との密接な関係を示す史料として、『四冊留』の「鶴白鳥并初魚狼討納候御褒美金被下御定之事」の条に記された規定は興味深い（註42)。この史料は、文化6（1809）年に桃生郡新田町の利八という者が初鮭一本を献上しようとして塩漬にしたところ、塩が十分でなかったために腐らせてしまったこと、そのために御褒美金が半分にされたこと、この事件を契機として、郡奉行衆から、御用立できない品については返品するよう通達が出されたことを伝えている。

以上、仙台城二の丸跡出土の木簡を契機として、考古資料、文献史料、民俗資料を用いて仙台藩における鮭製品の生産、流通の一端を論じてきた。取り上げたのはいわゆる「献上鮭」、「御用鮭」に限られ、大多数を占めるであろうその他の鮭については、資料不足から触れることができなかった。また、特に江戸中期以前の資料を多く用いたため、幕末の状況については触れられなかった。仙台藩の場合、単に多くの鮭が捕獲されたという以上に、「御用鮭」、「献上鮭」に、多分に象徴的かつ儀礼的な意味合いが付加され、そのための法令、施設、役職等のシステムが長期間に亘って存続されていた。このことは、先史時代以来、東北地方に保持され続けてきた伝統的な「鮭文化」がある意味で大きく変容し、幕藩体制を支える一手段として「贈答儀礼」のなかに組み込まれていったことを意味している。

（註１）仙臺叢書第15巻所収

（註２）宮城県水産試験場　1992　『宮城県の伝統的漁具漁法』Ｖ（内水面）

（註３）岩本由輝　1979　『南部鼻曲り鮭』　日本経済評論社

（註４）小野寺正人　1991　『陸前の漁撈文化と民間信仰』　ヤマト屋書店

（註５）東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報』６

（註６）小野やす　1956　「藩政時代の食習」　『宮城縣史』19（民俗Ｉ）　195～256頁

（註７）前掲（註７）参照

（註８）山田揆一　1917　「仙臺物産沿革」　『仙臺叢書』別集第２巻所収

（註９）前掲（註６）参照　出典は、現在宮城県立図書館小西文庫所蔵の、享保18（1734）年成立の『料理集』の写本と考えられる。橘房常の父は、仙台藩主伊達綱村のお抱え料理人を務めた大江房常であり、後序によれば、本書はその包丁の奥義を伝えるべく書かれたという。

（註10）前掲（註８）参照

（註11）伊東善兵衛編　1955　『中津山村誌』

（註12）『大日本古文書・家わけ第三・伊達家文書之二』　575～577頁所収　九一〇号文書

（註13）『大日本古文書・家わけ第三・伊達家文書之二』　187～197頁所収　六七八号文書

（註14）岩手県埋蔵文化財センターの松本建速、羽柴直人氏の御厚意により、出土遺物を実見する機会を得、遺跡について御教示を頂いた。羽柴氏によれば、平泉町内の伽羅楽地区に現在でも「ようぐら」と呼ばれる屋号を持つ家があり、地元には奥州藤原氏時代の魚蔵に関する伝説が残されているという。

（註15）三陸河北新報社編　1989　『北上川物語』

（註16）前掲（註４）参照

（註17）平重道編　1979　『伊達治家記録』十五　301頁上段　宝文堂

（註18）市川健夫　1977　『日本のサケ　その文化誌と漁』　ＮＨＫブックス294

（註19）『奥羽観蹟聞老志』によれば、塩水に涵した鱈を乾燥後、葦で巻いたものを指す。

（註20）ナマコに似た棘皮動物で、別名をフジコという。『奥羽観蹟聞老志』によれば金華山付近の海底に産するものが良いとされる。干物は慶事の贈答にも用いられ、『新撰陸奥風土記』に記載された仙台藩から幕府への献上品にも登場する。

（註21）小林清治　1982　「仙台領における城と要害」　『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第２巻　13～44頁

（註22）絵図にある「穀改御役人衆居所」は、密石・脱石の取締りを目的として郡奉行の支配下に設置された御石改所であり、その配置場所を示した「御石改所并脱石方」（『仙台藩租税要略』巻五）により、深谷和淵に御石改所が置かれていたことが判る。御石改所は仙台藩の

税制上不可欠な施設であり、絵図の表現上それと同等の扱いを受けている「子籠仕方御役人衆居所」の重要性が推察される。

(註23) 前掲（註５）参照

(註24)『伊達治家記録』五の「解説」56頁参照。木簡の推定年代である元禄年間前半には、御肴役人は家老職に次ぐ財政方の総司である出入司の支配下にあった。

(註25)『大日本古文書・家わけ第三・伊達家文書之二』　207、208頁所収　六八一号文書

(註26) 寛政元（1789）年の『大成武鑑』による。

(註27) 平重道編　19　『伊達治家記録』二　592頁　宝文堂

(註28) 寛政元（1789）年の『大成武鑑』による。

(註29) 平重道　1955　「近世（伊達藩政時代）の塩竈」　『塩竈市史』本編Ⅰ　193～511頁
平重道　1958　「仙台藩農政史上の問題」　『仙台藩農政の研究』　109～201頁
近世村落研究会

(註30) 難波信雄　1983　「仙台藩国産統制機構の成立と機能」　『宮城の研究』第４巻
近世篇　309～353頁

(註31) 鯨井千佐登　1990　「交流と藩境」　『交流の日本史』　雄山閣　42～65頁

(註32) 宇野脩平編　1955　『陸前唐桑の史料―日本漁村史料―』　常民文化研究第72
62～63頁所収　（陸前唐桑古館屋敷鈴木家文書第八二号文書）

(註33)『大日本古文書・家わけ第三・伊達家文書十』　105～107頁所収　三三〇四号文書

(註34) 近世村落研究会編　1958　『仙台藩農政の研究』所収「仙国御郡方式目」　264,265頁

(註35) 前掲（註34）文献所収「仙国御郡方式目」　267頁

(註36) 前掲（註34）文献所収「仙国御郡方式目」　273頁

(註37) 前掲（註34）文献所収「公儀御触御国制禁」　323,324頁

(註38)『宮城縣史』31　史料集Ⅱ　312,313頁所収　（岩沼市南長谷玉崎渡辺家文書）

(註39) 例えば、初代藩主政宗は元和４年９月７日、城下の花壇へ赴き広瀬川で鮭５尺を捕獲している（『伊達治家記録』四　356頁下段）。

(註40) 笹川臨風・足立勇　1942　『近世日本食物史』　雄山閣

東北地方では、会津藩（正月：鮭子篭）、仙台藩（７月：初鮭・二番鮭、11月：子篭鮭、寒中：鮭筋子）、秋田藩（二月：子篭鮭、十月：粕漬鮭、寒中：塩引鮭）、盛岡藩（七月より：初鮭・二番鮭、冬中：鮭披・鮭塩引）、鶴岡藩（正月：子篭鮭、三月：披鮭、八月初鮭、十月：筋子・子篭鮭）、白河藩（四月：塩鮭）が挙げられている。

(註41) 前掲（註18）参照

(註42) 前掲（註38）参照

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

vol. 7 March 1994

The Commission of Buried Cultural Properties on Campus, Tohoku University

Katahiracho, Sendai 980 JAPAN

Summary

This is a report of three sites (i. e., NM5, BK5 and KW1) on the campus of Tohoku University, excavated by the Commission of Buried Cultural Properties on Campus in 1989. The study of archaeological structures and materials found at NM5 site excavated in 1985-89 is also reported in this book.

NM5 site (Loc. 5 of *Ninomaru*, i. e. the secondary citadel of Sendai Castle)

The main citadel of Sendai Castle was built in A.D.1600 by *Masamune DATE*, the first *daimyo* of *Sendai-han* (feudal clan comprising a governmental organization in *Edo* period) appointed by the *TOKUGAWA* shogunate. The secondary citadel of Sendai Castle was built in A.D.1638 by *Tadamune DATE*, the second *daimyo* of *Sendai-han* on a lower terrace which had been used as the house of *Muneyasu DATE* (the 4th son of *MasamuneDATE*). The *Ninomaru* had practically been the center of the government of *Sendai-han* for some 250 years until the *Meiji* Restoration. The site area became the Tohoku University campus in 1957 and organized excavations began in 1983.

So far, 5 locations have been excavated. The excavations at NM5 produced excellent results as follows.

① Largely six phases, I a-IIIb, belonging to *Edo* period(1615-1868) and one phase, IV, belonging to *Meiji* period(1868-1912) are recognized in the archaeological structures found at Loc. 5.

② The ruins of buildings constructed on foundation stones and garden of the I a phase are probably related to the *Nishi-yashiki*, residence of *Iroha-hime* (the eldest daughter of

Masamune DATE). The *Nishi-yashiki* seems to hava been built in 1620, when *Iroha-hime* divorced *Tadateru Matsudaira* (the seventh son of *Ieyasu Tokugawa*, the first *shogun* of *Edo* period) and came back to the *DATE* family. Probably, the I a phase came to an end in 1661, when *Iroha-hime* died. As the result, we could know that NM5 was located at the inner part of the residence, where the space was used for a private zone. We could estimate the extension and position of the *Nishi-yashiki* by superimposing the historical illustrated map of Sendai Castle over the archaeological structures found by the excavations at the secondary citadel of Sendai Castle.

③ The I b phase is inferred to date from 1661 to a point during the *Genroku* era (1688-1704) when the secondary citadel was reconstructed on a large scale and enlarged on the north side of it. The structures of the I a phase had been rebuilt more than once. East part of the ponds had been filled up, and a house was constructed on foundation stones there. The ponds were widened to the south part of this residence, and a well was dug on the east shore of the pond area.

④ The II phase corresponds to the time period from 1688 to 1700. Most of the archaeological structures belonging to the I b phase exclusive of ponds on the south part of this site were filled up by the landfill which contained many artifacts such as roof tiles, wooden implements, and ecofacts. One of the wooden tablets described "the fourth year of *Genroku* (1692)" in black ink was excavated from the landfill deposited during the *Genroku* era. At the II a phase, a pit and two ditches running from west to east existed at the north part of this site. At the II b phase, north and east parts of this site were used as kitchen gardens for a short span of time. The pond on the south part of this site seems to have been left as desolated low ground.

⑤ The III phase can be subdivided into two sub-phases. The III phase corresponds to the time period from the beginning of the 18th century to the middle 19th century. This site was used as *Oku*, which was the private place of *Ninomaru* for *daimyo* and his wives. By comparing archaeological structures belonging to this phase with the historical illustrations of Sendai Castle, it was revealed that Loc .5 corresponds to the area sandwiched in between the north line of *Oku* and the moat delimiting the north side of *Ninomaru*. Many post-holes and ditches were detected, superimposed in plan, at the center of this site. Features located at the east side of a gate seem to have been the benches used by attendants. Probably, a road existed between the ditches running from west to east. The

area north of the road was used as *Baba* (a riding ground). We could know that structures such as ditches, fences, benches and so on had been rebuilt more than once.

⑥ At the IV Phase, this site was used by the Imperial Army. We could discover several features such as structural remains of buildings, lavatories with laid wooden boxes, the well of brick construction, ditches lined with stones, covered conduits and garbage pits.

⑦ Though many and various remains were found from the landfill deposited during the*Genroku* era, finds dating back to the pre-*Genroku* era were few.

⑧ As for porcelains and glazed ceramics, Assemblages of good quality were excavated from the landfill deposited during the *Genroku* era. Pit 3 belongs to the IIIa phase, pit 1 and 2 belong to the IV phase. The investigation of glazed ceramics from NM5 and the sites of kilns at Namie town (Fukushima prefecture), indicate that Ohbori-souma ware had been initiated during the *Genroku* era (1688-1704), as the tradition handed down locally. Furthermore, studies of Ohbori-souma ware from other consumption siter indicate that Ohbori-souma ware began to penetrate the market in Sendai domain as well as in Souma domain in the first half of the 18th century.

⑨ Most of unglazed ceramics from NM5 are dish shaped. The investigation of good assemblages of unglazed ceramics shows that dishes had three types in size. Salt baking pots (called *Yakishio-tsubo*) of glass shape and stamped oblique grids were probably made in Sendai domain.

⑩ Many roof tiles from NM5 belong to various periods (the begining of the 17th century - the middle 19th century). We tried to trace the changes of designs stamped on end pieces of eaves tiles excavated from Sendai castle.

⑪ Most of wooden artifacts and lacquerwares were found from the landfill used to fill up ponds during the *Genroku* era. They were preserved in relatively good condition due to the near-constant saturation of the soil. Most of the plain chopsticks seem to be used at social dinners. Among the wooden artifacts, wooden tablets are the most interesting. Three wooden tablets concerning salmons had referred the names of persons and places in addition to kinds of foods made of salmons. In Sendai domain, salmons were one of the most important gifts and foodstuffs controlled by goverment of feudal clan. Through the study of the wooden tablets from NM5 and the official records of *Sendai-han*, it was revealed that laws, facilities and government services to supply early salmons and food-stuffs made of them continued for a long time in *Sendai-han*.

⑫ Metal implements from NM5 consist of copper and iron coins, smoking pipes, nails and so on. Miscellaneous utensils from NM5 such as stone body warmers, a fire stone and so on give us clues to reconstructing life at Sendai castle concretely. All of glass and leather products belong to the *Meiji* period and after.

BK5 site (i. e., Loc. 5 of *samurai* residence area at north part of *Ninomaru*)

The research point is located at the area where residences of *samurai* had been built. There found one ditch running from east to west, and another one was destroyed by the other. No artifacts were found from the ditches, but they are considered to belong to *Edo* period according to stratigraphic evidence.

KW1 site (i. e., Loc. 1 of Machi-nishi site at Kawatabi, Naruko town, Miyagi prefecture)

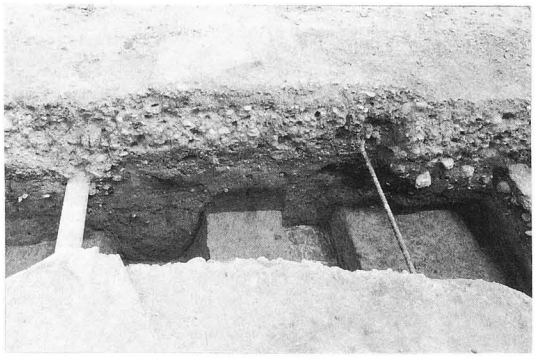
The research point is located near the entrance to the Tohoku University farm,on a river terrace. There found one ditch belonging to or after modern times and 10 pits whose dates are uncertain. Some pottery shards found at this site belong to the latter part of *Yayoi* period.

写　真　図　版

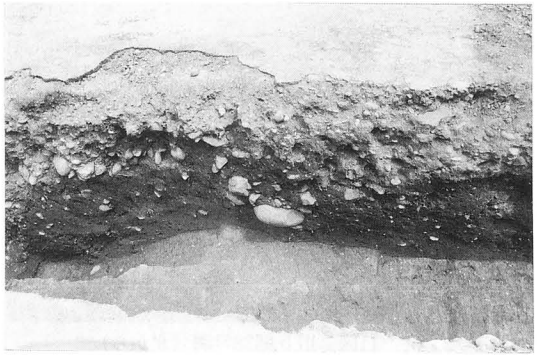
1. 全景（北から）

2. L—12～14区　III期相当（南から）

3. L—12区　III期33・34号溝（西から）



4. L—9・10区東壁セクション　段差（I期）と35号溝（IIIa期）（西から）



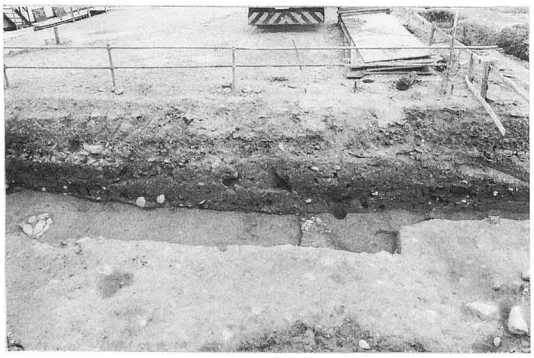
5. L—6区東壁セクション　堀の南岸（西から）

6. L—9区　I期段差（西から）

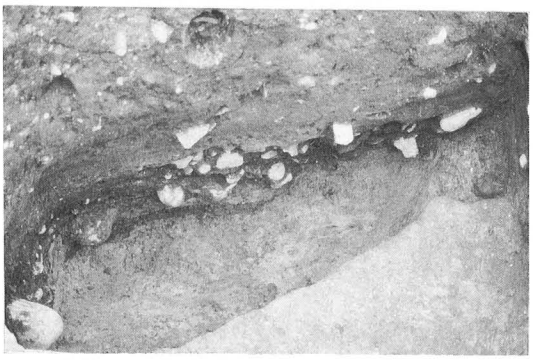
図版1　二の丸跡第5地点10区遺構

Pl. 1 Features of Loc. 10 at NM5

1. 10区　L－15～17区IIｂ期畑跡（北から）



2. 10区　L－15～17区東壁セクション（西から）



3. 12区　西壁セクション　12・13号池（東から）

4. 12区全景　Ⅰ期相当（北から）

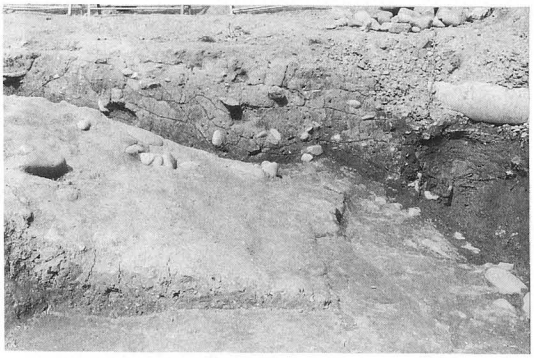
5. 11区　IIIｂ期38号溝（北から）

図版２　二の丸跡第５地点10区・12区・11区遺構

Pl. 2　Features of Loc. 10, 11 and 12 at NM5

1.　1区　III期8・9号建物跡（南から）

2.　1区　III期9号建物跡と37号溝（南から）



3.　1区　西壁セクション北半（東から）

4.　1区　III期37・39号溝セクション（北東から）

5.　2区全景　IV期相当（東から）

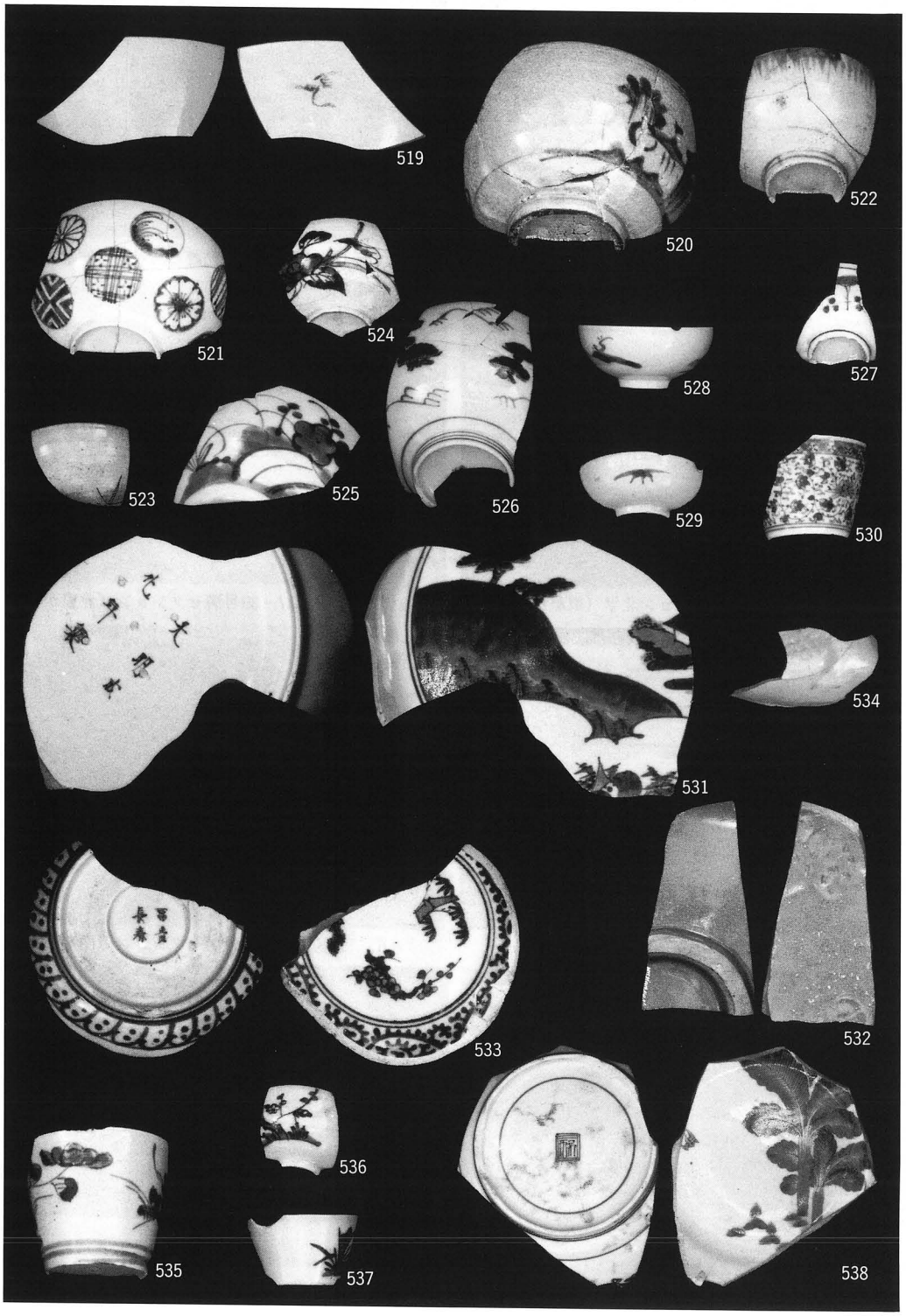
6.　2区　IV期36号溝セクション（南から）

7.　5区　西壁セクション（東から）

8.　5区東半　撹乱北壁セクション（南から）

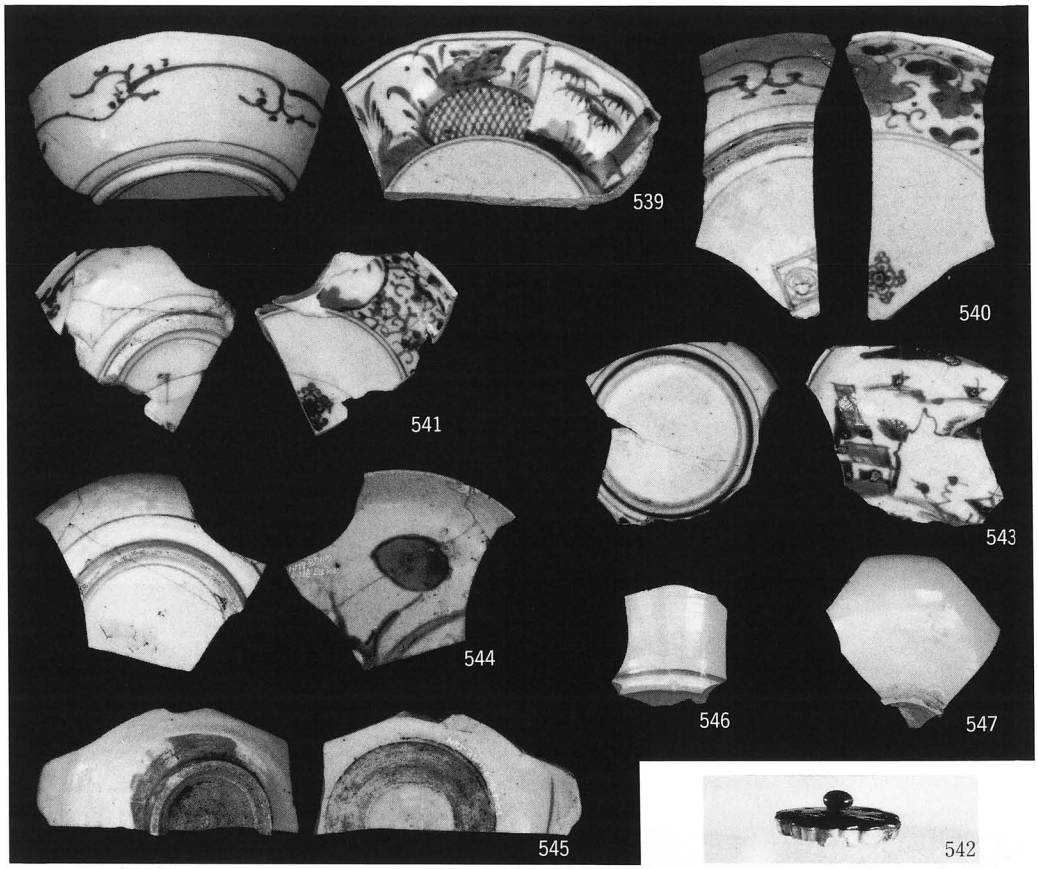
図版3　二の丸跡第5地点1区・2区・5区遺構

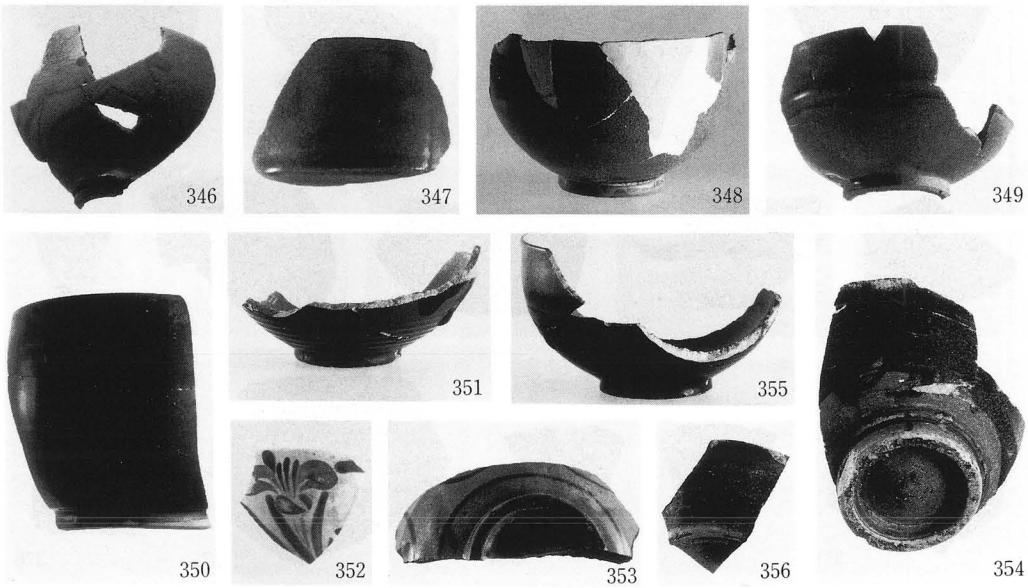
Pl. 3　Features of Loc. 1, 2 and 5 at NM5



図版 4　二の丸跡第 5 地点出土磁器(1)　　S＝1：3

Pl. 4　Porcelains from NM5

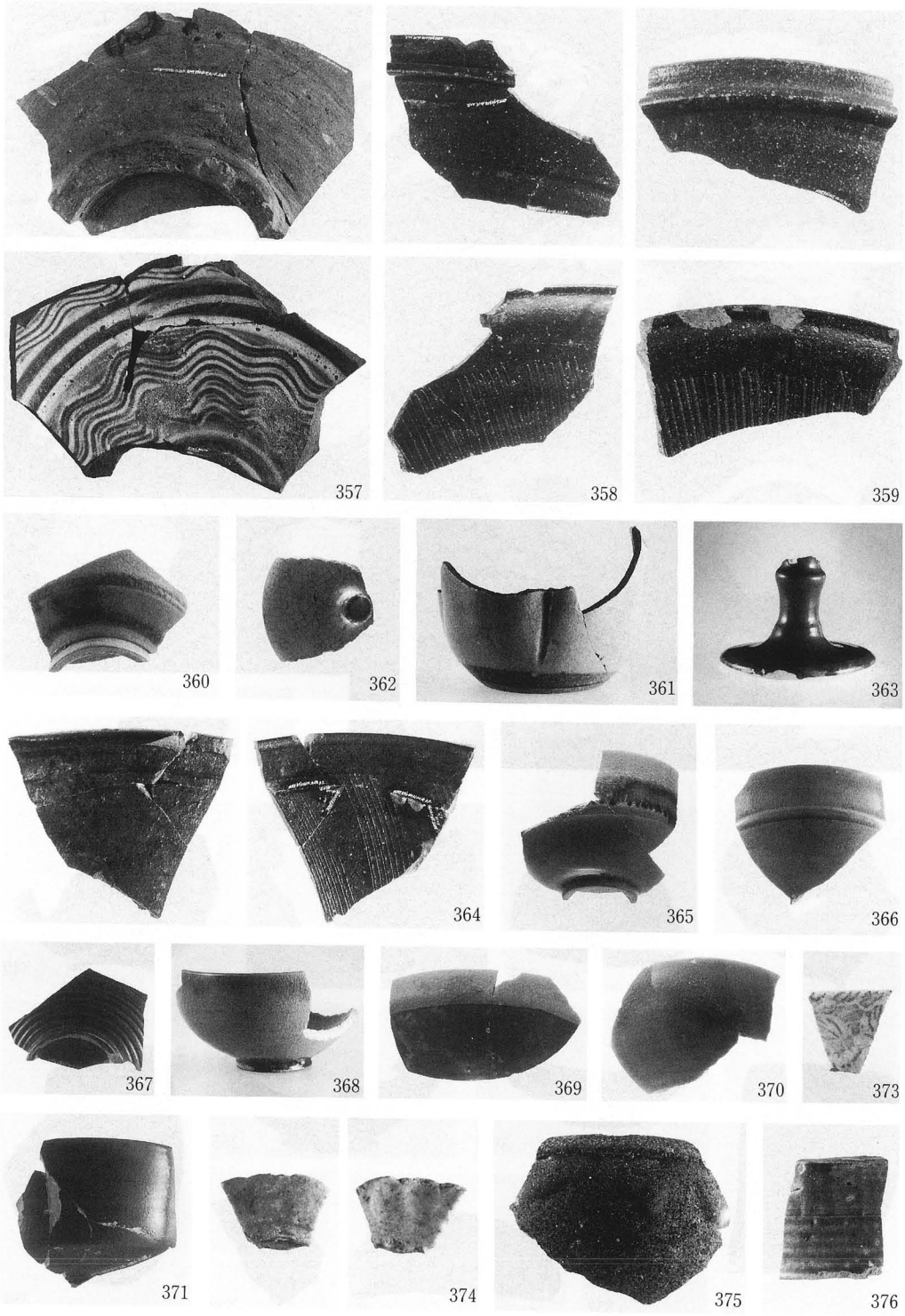




S＝1：3

図版 5　二の丸跡第 5 地点出土磁器(2)・陶器(1)

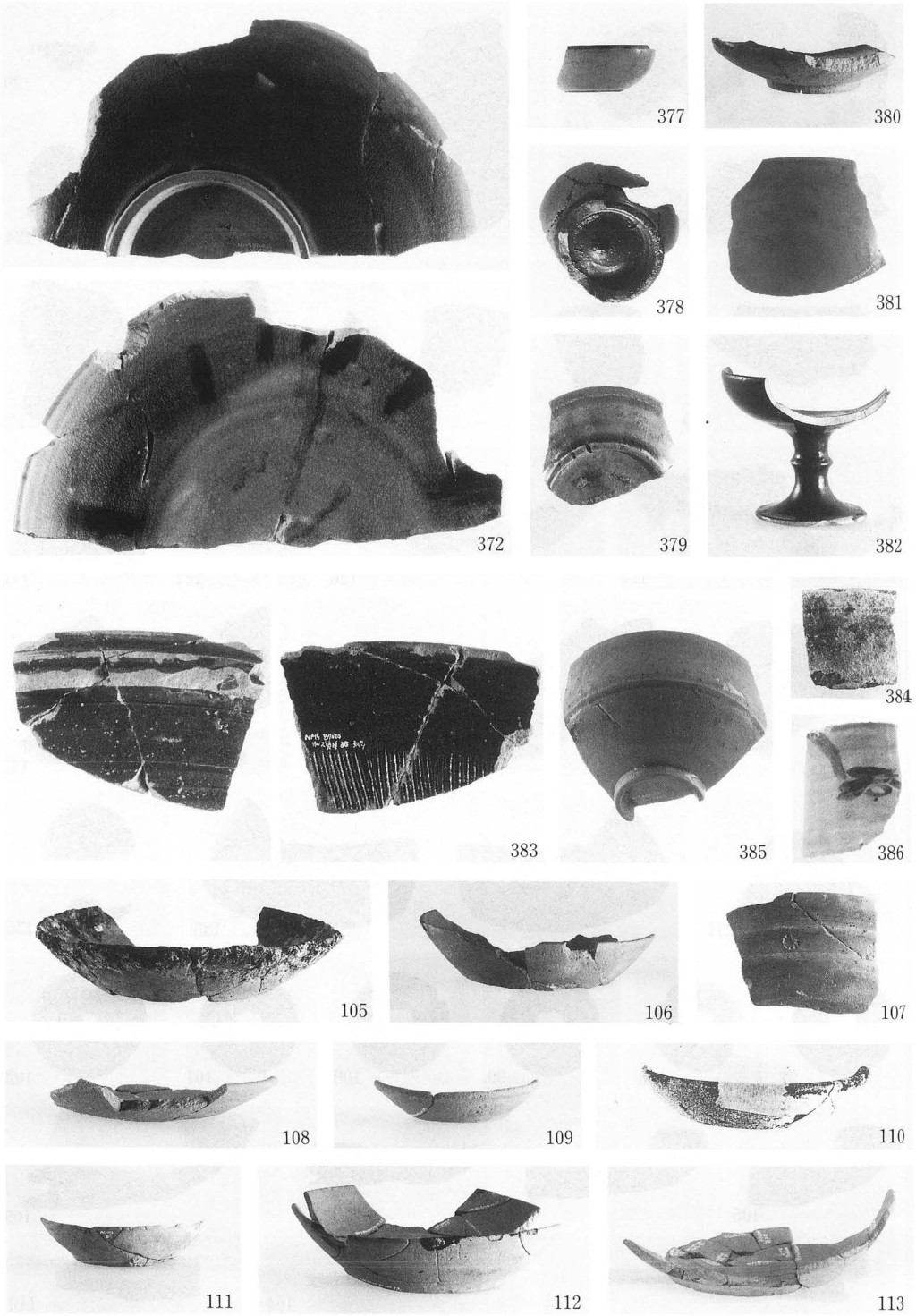
Pl. 5　Porcelains and glazed ceramics from NM5



S＝1：3

図版 6　二の丸跡第 5 地点出土陶器(2)

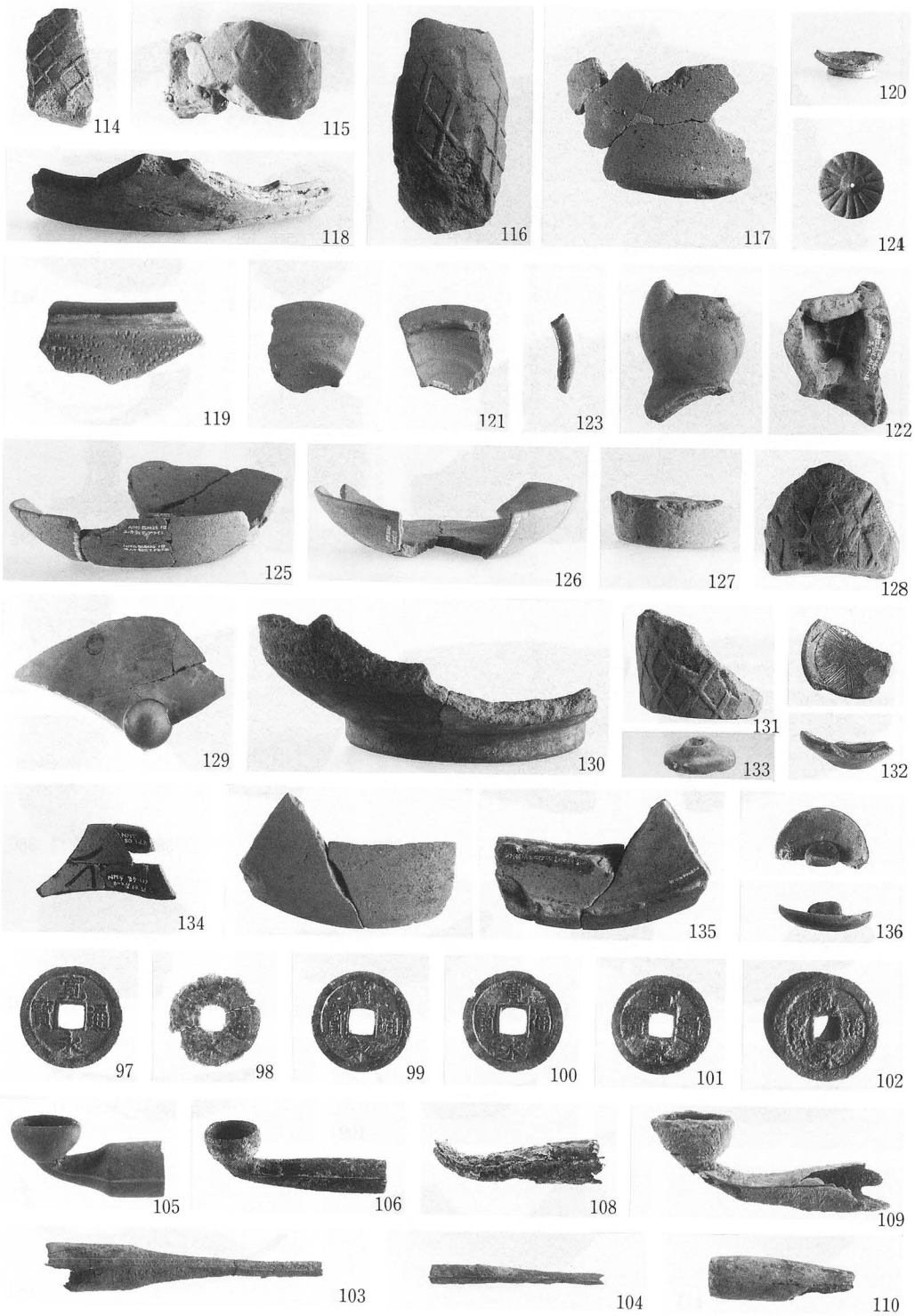
Pl. 6　Glazed ceramics from NM5



S＝1：3

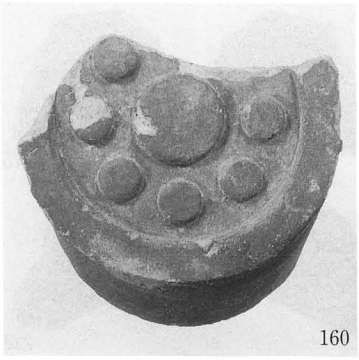
図版７　二の丸跡第５地点出土陶器(3)・土器(1)

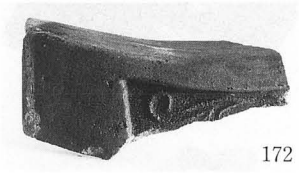
Pl. 7　Glazed ceramics and ceramics from NM5

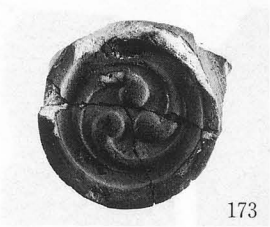


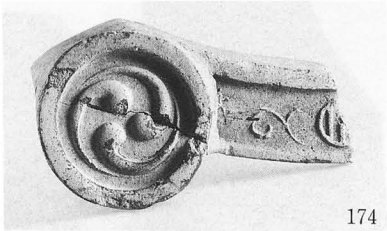
図版 8　二の丸跡第 5 地点出土土器(2)・金属製品
Pl. 8　Ceramics, coins and pipes from NM5

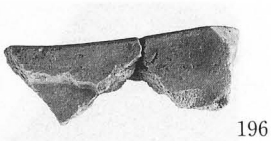
土器・土製品 S＝1：3
古銭・煙管　S＝2：3

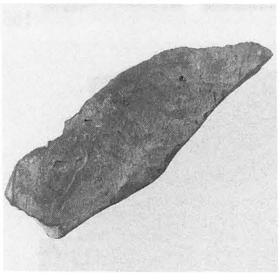


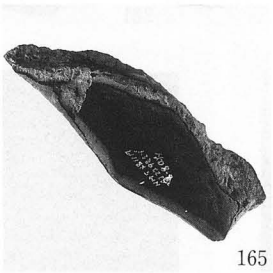


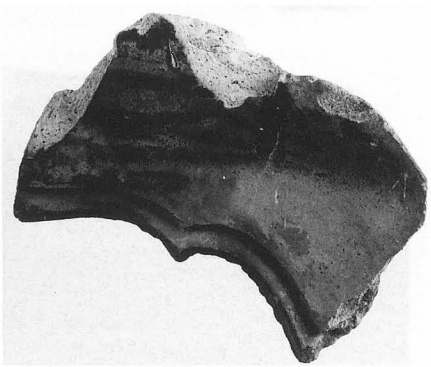


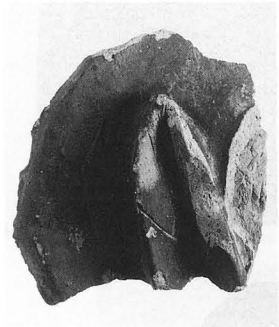


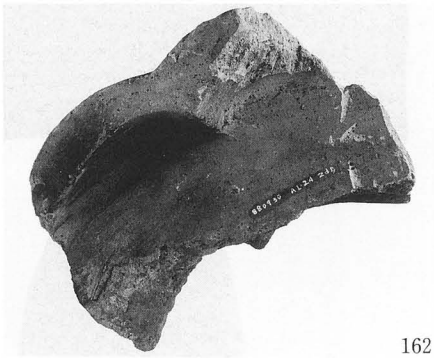


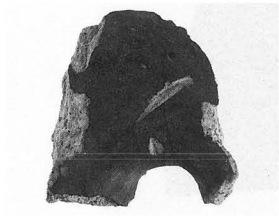


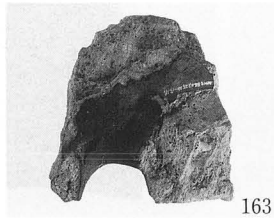








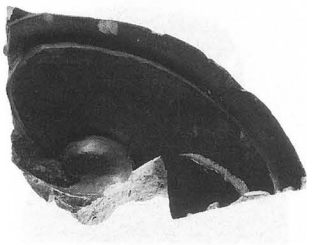




S＝1：4

図版 9　二の丸跡第 5 地点出土瓦(1)

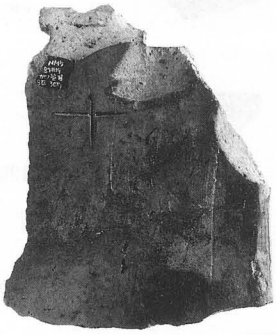
Pl. 9　Roof tiles from NM5(1)



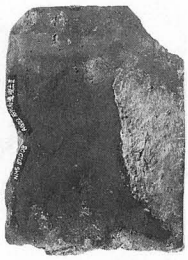
176

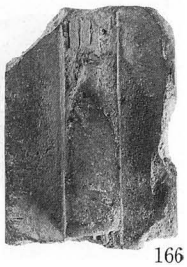
175

228

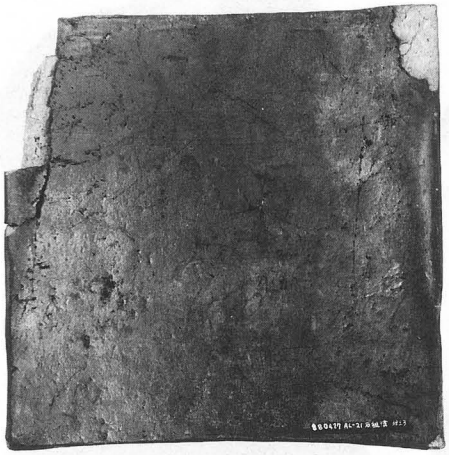


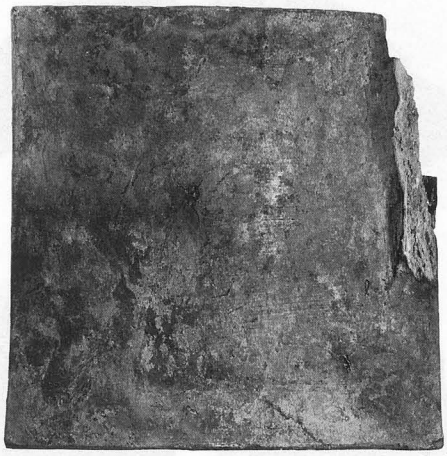
221



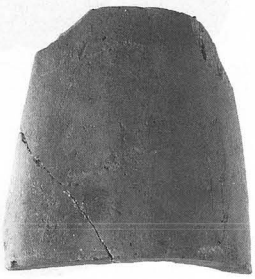


166





168

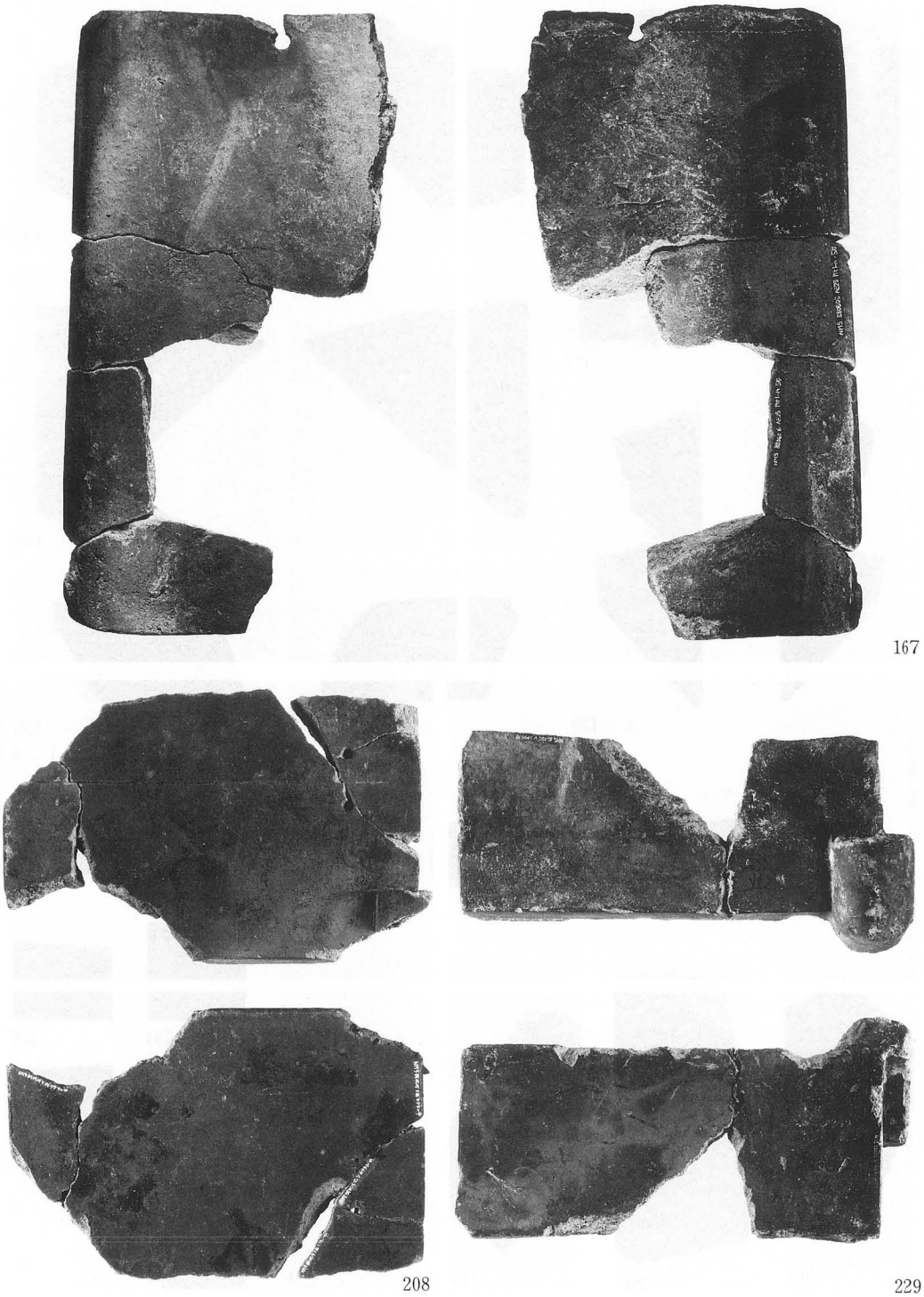


178

S＝1：4

図版10　二の丸跡第５地点出土瓦(2)

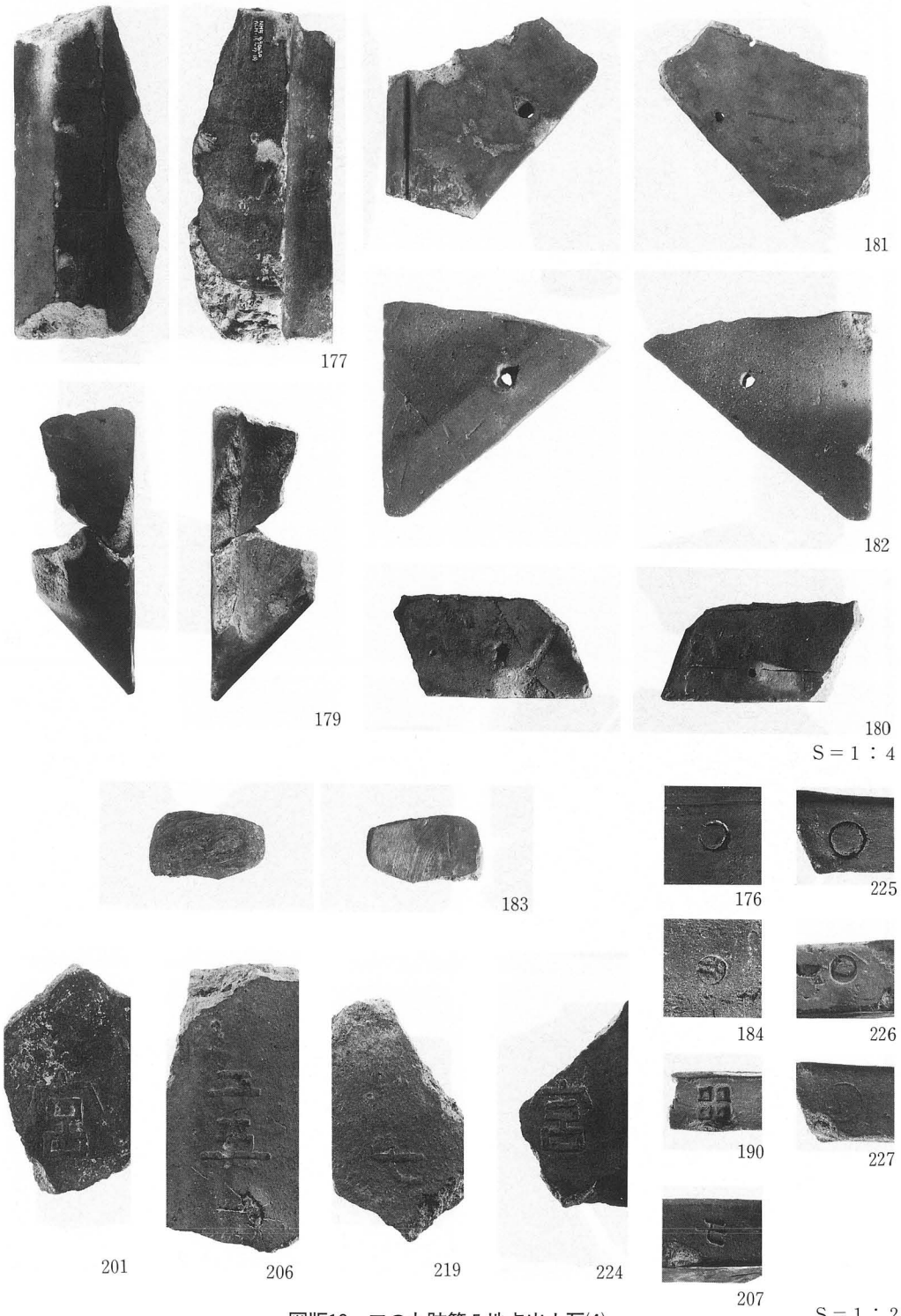
Pl. 10　Roof tiles from NM5(2)



S＝1：4

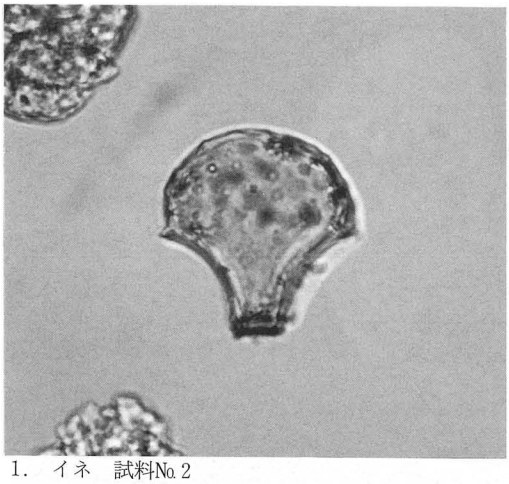
図版11　二の丸跡第５地点出土瓦(3)

Pl. 11　Roof tiles from NM5(3)

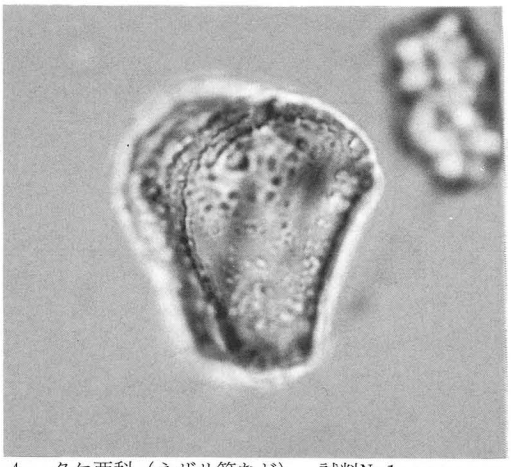


図版12　二の丸跡第５地点出土瓦(4)

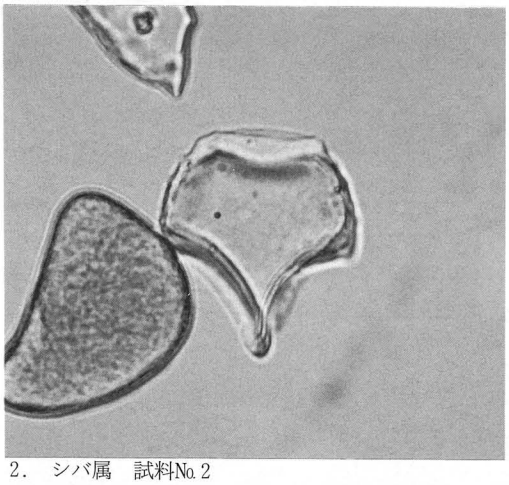
Pl. 12　Roof tiles from NM5(4)



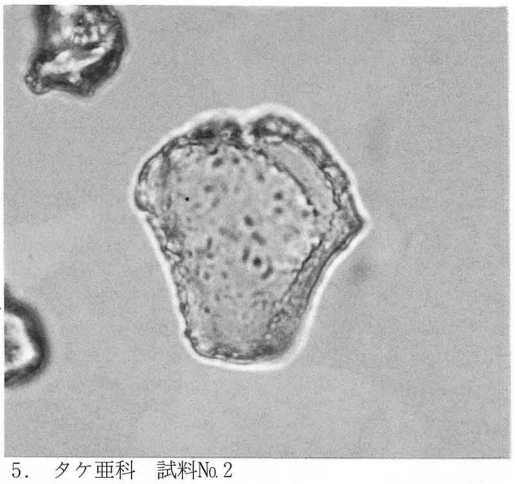
1. イネ　試料No. 2



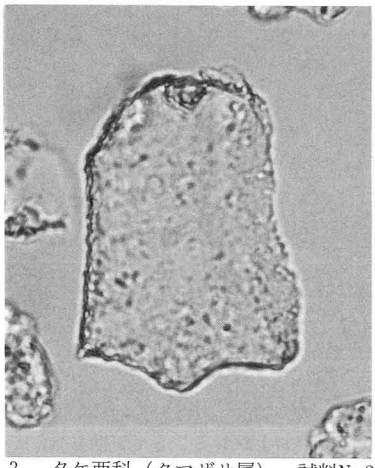
4. タケ亜科（ネザサ節など）　試料No. 1



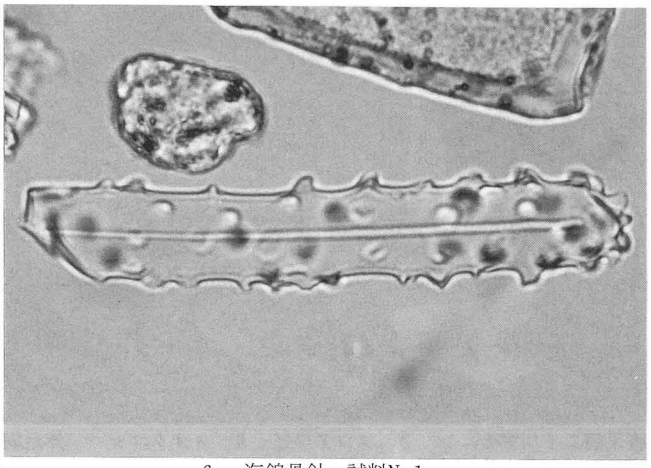
2. シバ属　試料No. 2



5. タケ亜科　試料No. 2



3. タケ亜科（クマザサ属）　試料No. 2

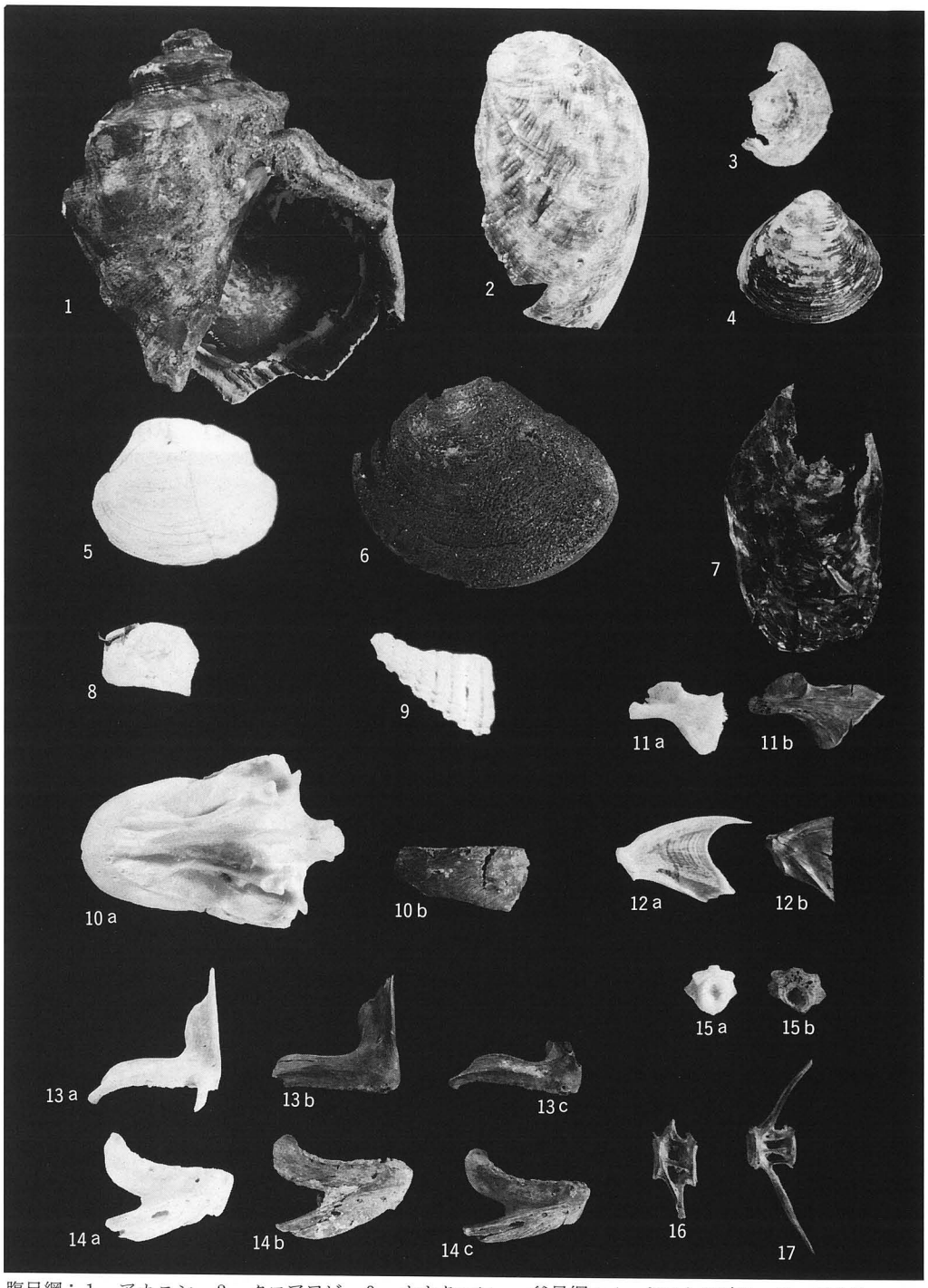


6. 海錦骨針　試料No. 1

400倍

図版13　二の丸跡第5地点V層検出プラント・オパール

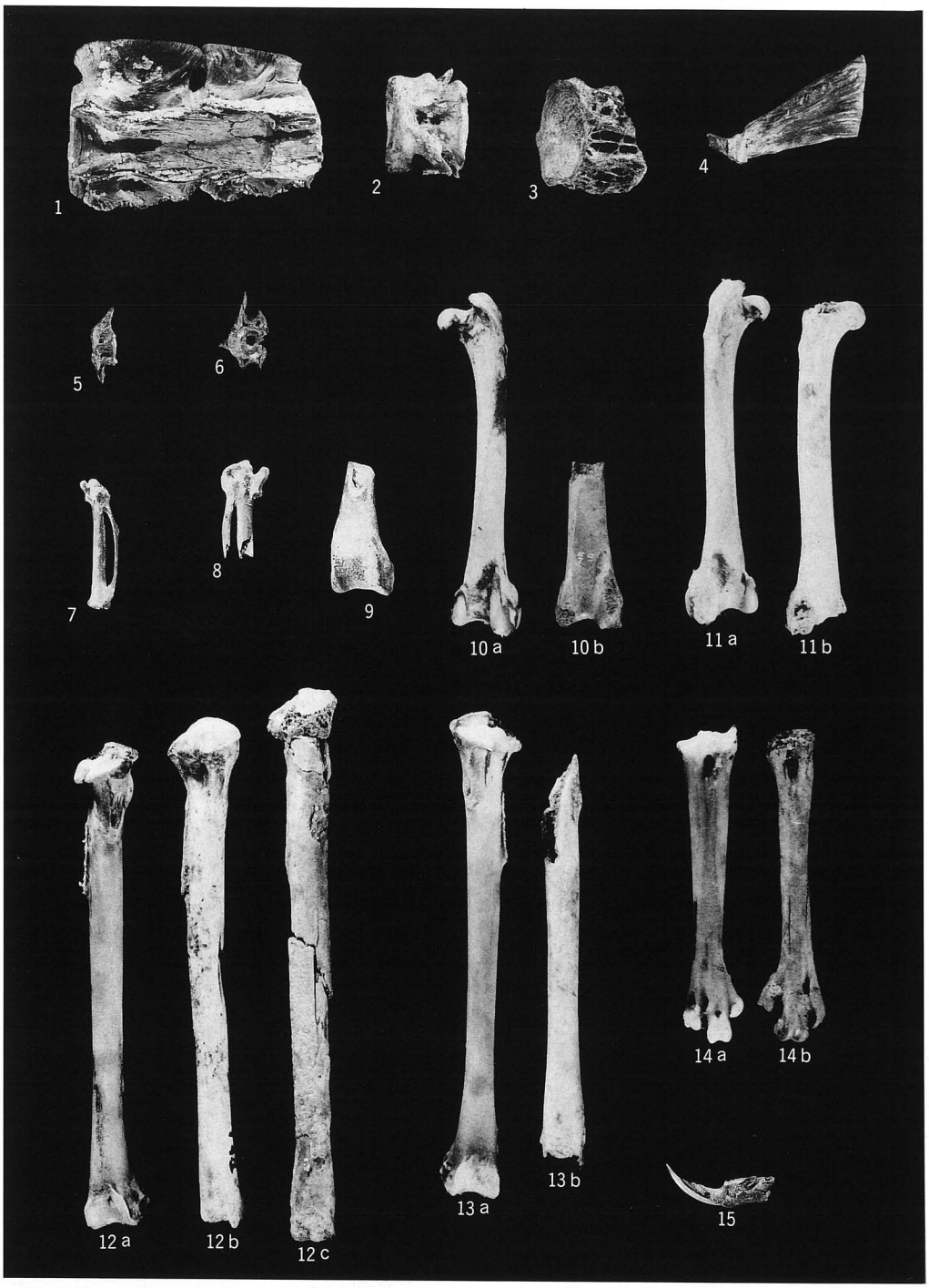
Pl. 13　Plant opal from layer V at NM5



腹足綱：1　アカニシ　2　クロアワビ　3　オオタニシ　　斧足綱：4　ヤマトシジミ　5　アサリ
6　ハマグリ　7　イガイ　8　ニッコウガイ科　9　フネガイ科
硬骨魚綱：10～17　マダイ［10 a　現生前頭骨　10 b　前頭骨(L)　11 a　現生角舌骨(R)
11 b　角舌骨・上舌骨(R)　12 a　現生尾舌骨　12 b　尾舌骨　13 a　現生前上顎骨(R)
13 b・c　前上顎骨(R)　14 a　現生歯骨(R)　14 b・c　歯骨(R)　15 a　現生第一椎骨　15 b　第一椎骨
16　腹椎　17　尾椎］

図版14　二の丸跡第5地点出土貝類・魚類（1～9　S＝2：3、10～17　S＝1：2）

Pl. 14　Mollusca and Pisces from NM5



硬骨魚綱：1・2　マグロ属(尾椎)　3・4　スズキ［3　腹椎　4　下尾軸骨］
5　アイナメ（腹椎）　6　カレイ科（尾椎）
鳥類：7　キジ科［中手骨（R　完形)］　8　チドリ科［中手骨（L　近位端)］
9　カモBタイプ［脛骨（L　遠位端)］
10～14　ニワトリ［10a　現生大腿骨(L)　10b　大腿骨（L　遠位端）　11a　現生大腿骨(R)
11b　大腿骨（R　完形）　12a　現生脛骨(L)　12b・c　脛骨（L　近位端）　13a　現生脛骨(R)
13b　脛骨（R　骨幹部）　14a　現生中足骨(R)　14b　中足骨（R　完形)］
哺乳類：15　クマネズミ属　下顎骨(L)

図版15　二の丸跡第5地点出土魚類・鳥類・哺乳類（1～9　S＝1：1、10～15　S＝2：3）

Pl. 15　Pisces, Aves and Mammalia from NM5

1.　全景（南から）

2.　東壁セクション（西から）

図版16　武家屋敷跡第５地点遺構

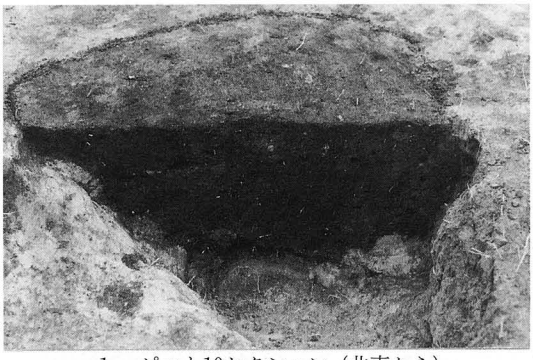
Pl. 16　Features of BK5

1.　全景（東から）

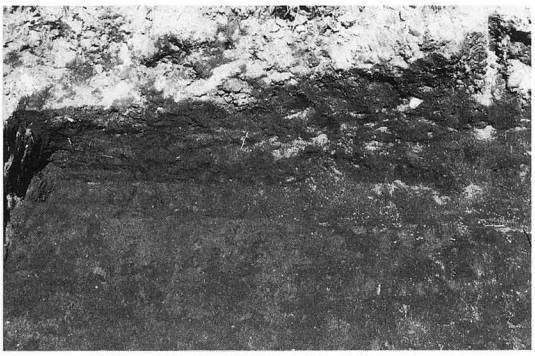
2.　ピット３・４・６～10（南から）

図版17　町西遺跡第１地点全景・遺構

Pl. 17　View and features of KW1

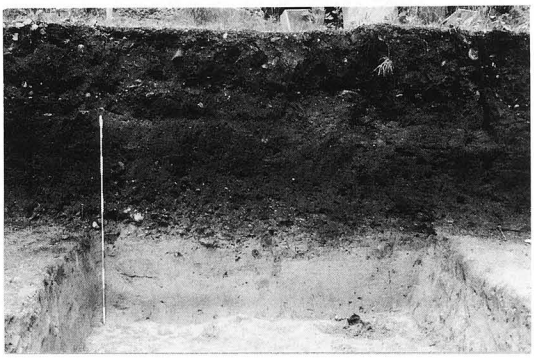


1. ピット10セクション（北東から）

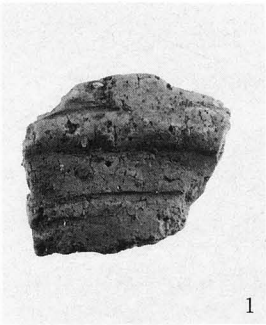


2. 1号溝（南から）

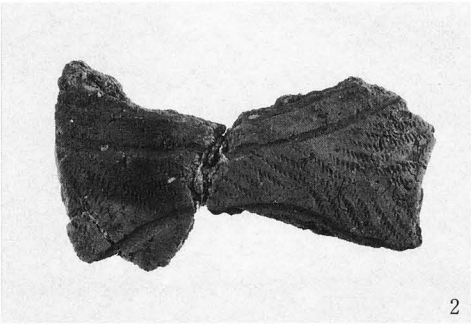
3. ピット1（東から）



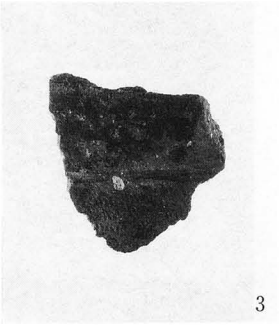
4. D—10区北壁セクション（南から）



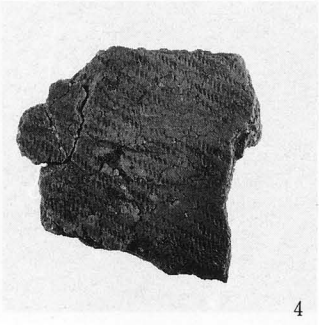
1



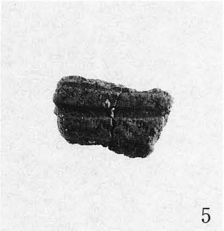
2



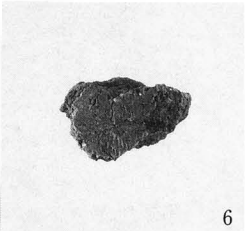
3



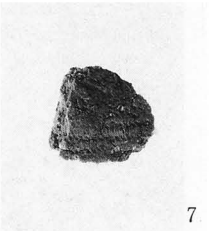
4



5



6



7

S＝1：2

図版18　町西遺跡第1地点遺構・遺物

Pl. 18　Features of KW1 and artifacts from KW1

東北大学埋蔵文化財調査年報 7

平成 6 年 3 月25日

発行　東北大学埋蔵文化財調査委員会
委員長　西　澤　潤　一
〒980 仙台市青葉区片平 2 丁目 1 － 1
東北大学遺伝生態研究センター内
ＴＥＬ　022(227)6200(内)3311
印刷　今　野　印　刷　株　式　会　社
ＴＥＬ　022(288)6123